

**調査2 虐待ケースに関する児童相談所
への悉皆調査によるケース分析**

本調査の概要

【目的】

児童虐待を疑われて全国児童相談所から通告された事例について調査し、最近の事例の虐待状況の特徴や親子の個体要因および環境要因を明らかにする。

【方法】

全国 211 の児童相談所における通告事例について調査によりケース分析を行った。調査期間は平成 30 年 11 月 1 日～平成 31 年 1 月 25 日に行った。平成 30 年 5 月 14 日から 5 月 31 日の 2 週間で児童虐待を疑われて全国児童相談所通告された事例（再受理を含む）に関する記録を参考に、通告時と同年秋（9 ないし 10 月）における事例の状態や推移について回答を依頼した。具体的な質問項目は「アンケート調査票（p.25）」に示す通りである。

【主な結果と考察】

全国 211 児童相談所のうち 202 児童相談所から回答を得た調査票からほぼ無回答なものを除いた合計 7636 件を分析対象とした。主要な所見と考察を以下に記した。

- ① **通告される虐待事例の変化、特に DV 目撃による心理的虐待事例について：** 今回の事例の虐待種別での「心理的虐待（DV 目撃）」は 33.5% で、H25 年の 16.7% と比べると倍増していた。また、通告した者（機関）では、H25 年度に比べ「警察」の通告等が 2.5 倍以上に増加していた。主たる虐待者は、実母 46.1%、実父 40.8% であったが、平成 25 年調査のデータ（実母 51.1%、実父 34.4%）と比較すると、実母の割合が 1 割低下し、実父の割合が 1 割増加していた。これは、DV 法施行や児童虐待防止法の改正に伴い、警察が配偶者からの暴力が疑われるなどの通報を受けた場合に必要な措置を講じるようになったことを反映した結果と推察される。さらに心理的虐待（DV 目撃）虐待の事例に関して今回のデータをもとに詳しく分析したところ、心理的虐待（DV 目撃）は、他の虐待種に比べて虐待通算期間が 1 か月未満と評価される事例が多く、「援助方針を決定し終結」の報告頻度が多くなっていた。その一方で、虐待重症度では「虐待の危惧あり」という軽いレベルと「中度虐待」という重いレベルの両方が他の虐待種より多い傾向がみられた。これは、DV 加害者の暴力傾向は深刻な場合もあるが、被害者と児童が別居や離婚などで家をできれば虐待事例としての対応は終結するケースが多いためであると思われる。しかし DV 問題では、加害者と母子が一旦分離しても、離婚調停や面会交流などで関係が継続したり、付きまといや再同居が深刻な結果につながる場合があり、理想的には長期的な視点でのリスク評価が必要である。しかし、今回のデータによれば、心理的虐待（DV 目撃）への対応をみると、他の虐待に比べて、主たる虐待者への面接が行われる場合が少なく、保護者や児童への援助や一時保護がなされない事例の割合が高いことが示されており、児童相談所みの対応では限界があると考えられる。その分、DV 被害者支援機関や区市町村、警察などとの連携が重要になると思われ、今回のデータでも DV 被害者支援機関への紹介が全体の 1 割程度行われていた。しかし、虐待通告として最多になった DV 事例に対しては、関連機関（警察や DV 被害者支援機関や区市町村など）との連携など、DV と児童虐待の両方の問題への包括的な支援の体制を構築することが必要になっていると思われる。

- ② **189の使用の状況と効果:** 児童相談所へ通告された虐待事例の中で、189 が用いられていた事例は、515 件 (6.7%) であり、まだ使用率は高いとは言えないものの、「近隣知人」「児童本人」「その他の家族、親族」では比較的高い割合で用いられており、加害者や子ども自身が訴えられるという点では 189 ならではの有効性が発揮され始めていると思われた。
- ③ **虐待者のリスク要因:** 虐待者のもつリスク要因として、乳幼児健診の受診が確認されないこと、精神的問題 (精神障害や知的障害や発達障害など) やその疑いがあること、経済的困難、不安定な就労、夫婦間不和、育児疲れ、ひとり親家庭、DV、養育者の別居、孤立、劣悪な住環境、頻繁な転居、アルコール等の乱用者、親自身の被虐待体験などが存在し、虐待重症度や虐待の種別とも関係していた。精神的な問題への治療を行っているかどうかや虐待の重症度と関係していることが確かめられ、こうしたリスク要因へ対応することで虐待の重症化や再発を予防できる可能性がある。
- ④ **被虐待児童の状態やリスク要因:** 被虐待児の心身の問題は、全体としては評価が難しいこともあり「不明」「ない」とされる場合が多い。しかし心身の問題は同時に虐待の重症度・種別やその他生育期の問題と関係しており、子どもの心身の状態をもとに虐待の発見や支援計画を立てることが重要であることが改めて確認された。
- ⑤ **対応・援助とその効果:** 今回の事例における新規受理ケースは 61.1%であった。また以前虐待受理経験があり今回も虐待で受理されたケースは 31.8%に及び、前回は別の相談で虐待としては今回が初受理という事例も 6.4%であった。9 割以上のケースで 48 時間以内の安全確認が行われていた。児童や主な虐待者への面接は半数以上で行われ、保護者や子どもに対して、医療機関、生活保護、DV 被害者支援機関、保育所などへつなぐサービスが 24.8%に行われていたが、要保護対策協議会のケース検討会は 15.0%にとどまった。虐待者は調査時点では 6 割が援助側の働きかけに応じ、最初は抵抗していても次第に受け入れ、虐待の停止に至る事例も 7~8 割に及んだ。一方で、一旦虐待が止まっても再発の恐れがある事例は 4 割、虐待の自覚なく、介入や支援を受け入れない一群も 1 割程度存在した。安全な状況が確保されない場合や調査を更に必要とする場合は一時保護 13%が行われていた。2 割は継続指導や施設入所という形での支援を継続していた。もともと虐待重症度が中度あるいは重度の事例の場合は介入しても虐待が止まらないままである場合が 2.4%、8.5%存在していた。働きかけを受け入れない事例等困難な事例への介入方法の開発が必要であるが、改善が難しく、再発の可能性がある事例を的確に評価し、虐待的な行動の継続や再発から子どもを保護する体制を組めるようになることが重要であると考えられた。

【まとめ】

H30 年度のケース分析では、警察などによる心理的虐待 (DV 目撃) の通告が増え、主な虐待者が実父である事例が増えるなどの変化があることがわかった。また、189 が始まったことで、虐待者や児童本人などからの通告も増えて、より多様なケースが事例として顕在化していることが確かめられた。さらに調査では、虐待者のリスク要因 (乳幼児健診の受診が確認されないこと、精神的問題、経済的困難、不安定な就労、夫婦間不和、育児疲れ、ひとり親家庭、DV、養育者の別居、孤立、劣悪な住環境、頻繁な転居など) や子どものリスク要因 (発達障害疑い、問題行動あり、精神発達の遅れ、分離体験予期しない妊娠など) が虐待の重症度や種別などと関係することが改めて確かめられ、これらを的確に評価、支援していくことで虐待の停止や再発防止の可能性が高められると考えられた。現時点での児童相談所での働

きかけにより、虐待者の 6 割はある程度これに応じており、虐待の停止に到っているいると判断される事例が 7 割以上であった。しかし一方で、一旦は虐待が止まっても再発の恐れがある事例が 4 割あり、虐待の自覚がなく、介入や支援を受け入れない事例も 1 割程度存在していた。DV 加害者や男性事例の増加は、育児ストレスで抑うつ的になる母親の虐待に対する働きかけの手法とは異なる手法が必要になってくると思われる。こうした困難な事例への行動変容をはかる介入方法の開発の開発とともに、改善が難しかったり再発の可能性がある事例を的確に評価し、虐待的な行動の継続や再発から子どもを保護する体制を組めるようになることが重要であると考えられた。

調査 2

1. 調査の目的

児童虐待を疑われて全国児童相談所に通告された事例について調査し、事例の通告時および調査時における特徴および親子の個体要因・環境要因を明らかにする。

2. 調査実施機関

本調査は、平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業の国庫補助協議の助成を受け、筑波大学医学医療系社会精神保健学准教授森田展彰が実施する。なお、調査内容の検討、調査結果の分析、まとめについては、調査検討委員会を設置して対応した。(調査概要 (3 ページ) 及び「研究者一覧」(巻末) を参照)

3. 調査対象

全国 211 の児童相談所および全国 69 の児童相談所設置自治体の主管課および児童相談所内の人材育成部門

4. 調査期間

平成 30 年 11 月～平成 31 年 3 月 31 日

5. 調査内容

虐待ケースについて児童相談所への悉皆調査によりケース分析

6. 調査項目

「アンケート調査票」(25 ページ) に記載の通り。

7. 調査方法

平成 30 年 5 月 14 日から 5 月 31 日の 2 週間で児童虐待を疑われて全国児童相談所に通告された事例の記録に関する調査を施行し、事例の通告時および調査時における事例の持つ親子の個体要因および環境要因に関するデータを収集した。

8. 調査結果

報告する調査項目は、平成 30 年 5 月 14 日～5 月 31 日までの 2 週間に全国 202 の児童相談所が「児童虐待相談」として受理(再受理を含む)された全事例について、記録調査を基に集計したデータに基づく。

8.1. 解析対象ケース数

- 基本的には調査の有効回答数 7636 を全ケース数として扱ったが、設問によって異なる。
- Q1 から Q6（虐待の有無を尋ねる設問）までは 7636 ケースを全数として解析対象とした。
- Q7 以降は、Q6 で「虐待あり」「不明（調査中含む）」と回答した 6300 ケースを全数として解析対象とした。
- 途中で前の設問の回答に回答条件が限定される設問がいくつか存在するが、その場合はその設問に該当するケースを全数とし、ケース数を項目冒頭に記した。

8.2. 実施した解析について

- 度数分布表とグラフの作成
 - 全設問において回答分布を示す度数分布表とグラフ（8.1 で記述した各設問において扱ったケース数を 100 としたときの％）を掲載した。
- 基本統計量（平均値・標準偏差）の掲載
 - 数値解答を求めるもの（例：年齢）については、平均値・標準偏差を本文中に記載した。
- クロス表の作成
 - 設問によっては、他の重要な要因（例：主たる虐待種別、虐待重症度等）との関連を検討するためにクロス表を作成した。
 - クロス表を作成する際、取り扱った 2 つの要因の関連を検討するために、統計学的解析手法として χ^2 検定（カイ 2 乗検定）もしくは Fisher の直接確率計算および残差分析を行った。統計的有意水準は 5% ($p < .05$) を用いた。
 - ◇ χ^2 検定や残差分析の考え方：「もし 2 つの要因に全く関係がない場合、クロス表への回答はどうか（期待度数）」を計算したうえで、実際に回答された度数と期待度数のズレの大きさを評価する手法。ズレが大きければ大きいほど、そのクロス表の各セル（クロス表で数値を表記するマス目の単位）の度数は偏って分布し、2 つの要因をクロスさせることでどこかに偏りが生まれた（つまり何らかの関連が見られる）と考える。
 - ◇ χ^2 検定が有意で、かつ各セルについて実施した残差分析の結果が有意（統計学的に判断して 2 つの要因のどこかにズレがある可能性が高い）だった場合、基本的にはクロス表上の表記でそれを明示した。
 - 太字の場合、そのセルが期待度数に比べ統計的に多い度数であることを示す。
 - イタリックの場合、そのセルが期待度数に比べ統計的に少ない度数であることを示す。
- 分散分析
 - 数値回答を求める設問（例：一時保護日数）において、他の要因との関連（例：主たる虐待種別）を検討するために、数値回答を求める設問を従属変数と設定し一要因配置の分散分析を実施し、多重比較法として Tukey の b 法を使用した。統計的有意水準は 5% ($p < .05$) を用いた。

■クロス表について

1. 通常クロス表

一時保護の有無と児童共通ダイヤルのクロス表

Q40 一時保護の有無と児童共通ダイヤル（189）の使用のクロス集計表

		189使用	189不使用	不明	合計
一時保護を行った	頻度	<u>17</u>	696	13	726
	カテゴリ別の%	17.9%	30.6%	41.9%	30.3%
一時保護中である	頻度	1	39	0	40
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	0.0%	1.7%
一時保護は行っていない	頻度	<u>77</u>	1539	18	1634
	カテゴリ別の%	81.1%	67.7%	58.1%	68.1%
総数		95	2285	31	2411

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

- ① 「頻度」はクロス表の特定の箇所（セル）に該当する人数を示す
（例：「189 使用」で「一時保護を行った」人数は 17 名）
- ② 「カテゴリ別の%」は基本的には列（タテ）を合計すると 100%になるように配置。
（いくつか表記上の理由で行（ヨコ）を合計すると 100%になるよう記載する部分もある）。
- ③ **太字**で表されているところは（残差分析の結果）統計的に頻度が高く、イタリックで表されているところは統計的に頻度が低いと出た部分。

2. 複数回答の設問を含むクロス表（タイトルに「複数回答」と明記）

援助機関（複数回答）と年齢カテゴリのクロス表

Q44-4 援助機関と年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
児童相談所	頻度	<u>37</u>	190	307	204	88	826
	カテゴリ別の%	79.7%	84.1%	90.9%	89.4%	91.3%	88.1%
児童相談所以外	頻度	26	<u>91</u>	<u>92</u>	61	29	299
	カテゴリ別の%	56.8%	38.4%	25.3%	25.1%	37.7%	31.9%
総数		47	224	342	227	98	938

***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは低い頻度を示したものの。

- ① 回答選択肢ごとに「あてはまる（○をつけた場合）= 1」「あてはまらない（○をつけない場合）= 0」の 2 値としてコード化。各回答選択肢ごとに χ^2 検定を行う。
- ② クロス表に掲載したのは各回答選択肢の「あてはまる」回答数値のみ。「児相」選択肢に「あてはまる」と答えた人数、「児相以外」選択肢に「あてはまる」と答えた人数…のように並べる。総数から各回答の「頻度」を引いた数が「あてはまらない」数。
（「1 歳未満」で「児童相談所」で援助を受けた者 37 名、受けない者 10 名（総数 47-受けた者 37））
- ③ したがって「カテゴリ別の%」は各回答において「総数を全体として、その設問に「あてはまる」と答えた人」の%。
- ④ 複数回答なので、各設問の度数の合計は総数（一番下の行）とは一致しない。

I. 被虐待児について

Q1～Q6 までの回答は基本的に総ケース数 7636 を全数として計算した。

Q1. 被虐待児の性別

- 総ケース数 7,636 件のうち、被虐待児の性別は「男児」4,007 人 (52.5%)、「女児」3,561 人 (46.6%) で男児の方が 5.9%多くなっていた。

Q1 性別			
	度数	%	%グラフ
男性	4007	52.5	
女性	3561	46.6	
無回答	69	0.9	
合計	7636	100	

*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、全ケース 11,257 人のうち、無回答を除いた 7,434 人のうち、男児 3,779 人 (50.8%)、女児 3,602 人 (48.5%) で、男児が 2.3%多くなっていた。

Q2. 受理時の被虐待児年齢 (実数回答)

- 総ケース数 7,636 件のうち、平均年齢は 7.25 歳 (標準偏差は 4.83)、最小値は 0 歳 1 ヶ月未満、最大値は 18 歳であった。年齢を「1 歳未満」「1-5 歳」「6-11 歳」「12-14 歳」「15 歳以上」の 5 つのカテゴリに分類し、度数分布表を作成した。「1 歳未満」が 6.8%、「1～5 歳」が 36.0%、「6～11 歳」が 33.4%、「12～14 歳」が 14.3%、「15 歳以上」が 8.2%で、1～5 歳が最も多く、中学就学前にあたる 12 歳までが 7 割以上を占める結果となった。

Q2 年齢カテゴリ			
	度数	%	%グラフ
1歳未満	518	6.8	
1～5歳	2751	36.0	
6～11歳	2554	33.4	
12～14歳	1092	14.3	
15歳以上	624	8.2	
無回答	97	1.3	
合計	7636	100	

*平成 25 年調査との比較

平成 25 年度調査においても、11 歳までの低年齢が 7 割を占めており今回と同様の傾向であった。

Q3. 被虐待児の在学状況等

- 総ケース数 7,636 件のうち「小学校」が 33.5%と最も多く、「保育所その他の保育施設」が 20.8%、「家庭にいる乳幼児」15.1%と続いている。就学前の乳幼児（「家庭にいる乳幼児」「保育所その他の保育施設」「幼稚園」）があわせて約 4 割を占めていた。

Q3 在学状況			
	度数	%	%グラフ
家庭にいる乳幼児	1150	15.1	
保育所その他の保育施設	1592	20.8	
幼稚園	485	6.4	
小学校	2561	33.5	
中学校	1030	13.5	
高校	521	6.8	
その他	122	1.6	
不明	85	1.1	
無回答	90	1.2	
合計	7636	100	

*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査でも、「小学校」が 36.5%と最も多く、「保育所その他の保育施設」が 18.6%、「家庭にいる乳幼児」15.7%であり、同様の傾向が続いている。

Q4. 本ケースを児童相談所へ通告・送致・相談した者（機関）

- 設問：「虐待の疑いも含めて児相に通告・送致・相談した者（機関）は誰でしたか」
- 総ケース数 7,636 件のうち、児童相談所へ通告等した者（機関）については、「警察」が 46.4% とほぼ半数を占め、ついで「近隣知人」18.5%、「学校」8.2%、「その他家族・親族」7.3%の順であった。

Q4 通告者

	度数	%	%グラフ
虐待者本人	185	2.4	■
その他の家族・親族	554	7.3	■
児童本人	48	0.6	
近隣知人	1413	18.5	■
福祉事務所	94	1.2	■
民生・児童委員・主任児童委員	8	0.1	
保健所	25	0.3	
区市町村の児童相談部門	417	5.5	■
保育所・保健センター	77	1.0	
幼稚園	13	0.2	
学校	626	8.2	■
放課後児童クラブ	4	0.1	
放課後等デイサービス	19	0.2	
学習塾等の学校外の教育機関	7	0.1	
児童発達支援センター	2	0.0	
医療機関	155	2.0	■
警察	3547	46.4	■
その他の児童福祉施設	14	0.2	
子ども食堂などの民間の居場所	4	0.1	
NPO等民間団体が開設する電話相談	1	0.0	
当該の児童相談所職員	69	0.9	
その他	302	4.0	■
無回答	52	0.7	
合計	7636	100	

*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、「近隣知人」が 25.1% と最も多く、「警察」は 17.1% であり、5 年間で「警察」の通告等が 2.5 倍以上に増加している。これは、DV 法施行や児童虐待防止法の改正に伴い、警察が配偶者からの暴力が疑われるなどの通報を受けた場合に必要な措置を講じるようになったことを反映した結果と推察される。

通告者と虐待の有無のクロス表

総ケース数 7,636 件を対象に、通告者と虐待の有無についての関連を検討した。

結果、「警察」「学校」「虐待者本人」経由で通告があった場合は他と比して実際に虐待があるケースが多く、「近隣知人」「その他の親族」経由での通告は虐待ではないケースの頻度が高くなっていた。「保育所」「医療機関」からの通告は虐待であるかどうか判断に時間を要する「不明」の頻度が高くなっていた。

通告者と主たる虐待種別のクロス表

Q6（虐待の有無）に「虐待あり」「不明（調査中）」と回答した 6,300 件を対象に、通告者と虐待種別についての関連を検討した。

結果、身体的虐待は「虐待者本人」「学校」「幼稚園」「保育所」「医療機関」「児童本人」「その他の家族」「区市町村の児相」からの通告が多かった。ネグレクトは「区市町村の児相」「医療機関」「保育所」「福祉事務所」「近隣知人」からの通告が多かった。性的虐待は「医療機関」「学校」「区市町村の児相」からの通告が、心理的虐待は「近隣知人」「児童本人」「その他の家族・親族」からの通告が多くなっていた。DV 目撃については、特に「警察」からの通告ケースが多かった。

通告者と虐待重症度のクロス表

Q6（虐待の有無）に「虐待あり」「不明（調査中）」と回答した 6300 件を対象に、通告者と虐待重症度についての関連を検討した。

結果、「近隣知人」「警察」からの通告は虐待の危惧あり・軽度虐待などの軽度例の頻度が高かった。一方「児童本人」「区市町村の児童相談部門」「学校」「福祉事務所」からの通告は中度から重度レベルの虐待である頻度が高かった。また、「医療機関」経由で通告があった場合は重度虐待・生命の危機がある頻度が高くなっていた。

通告者と虐待の有無のクロス表

Q4 通告者と虐待の有無のクロス集計表

		虐待あり	不明	虐待なし	合計
虐待者本人	頻度	160	6	18	184
	カテゴリ別の%	87.0%	3.3%	9.8%	100.0%
その他の家族・親族	頻度	374	46	130	550
	カテゴリ別の%	68.0%	8.4%	23.6%	100.0%
児童本人	頻度	42	3	2	47
	カテゴリ別の%	89.4%	6.4%	4.3%	100.0%
近隣知人	頻度	675	121	608	1404
	カテゴリ別の%	48.1%	8.6%	43.3%	100.0%
福祉事務所	頻度	77	8	9	94
	カテゴリ別の%	81.9%	8.5%	9.6%	100.0%
民生・児童委員・主任児童委員	頻度	7	0	0	7
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
保健所	頻度	17	2	5	24
	カテゴリ別の%	70.8%	8.3%	20.8%	100.0%
区市町村の児童相談部門	頻度	340	31	46	417
	カテゴリ別の%	81.5%	7.4%	11.0%	100.0%
保育所・保健センター	頻度	57	15	5	77
	カテゴリ別の%	74.0%	19.5%	6.5%	100.0%
幼稚園	頻度	9	1	3	13
	カテゴリ別の%	69.2%	7.7%	23.1%	100.0%
学校	頻度	517	27	76	620
	カテゴリ別の%	83.4%	4.4%	12.3%	100.0%
放課後児童クラブ	頻度	3	1	0	4
	カテゴリ別の%	75.0%	25.0%	0.0%	100.0%
放課後等デイサービス	頻度	15	0	4	19
	カテゴリ別の%	78.9%	0.0%	21.1%	100.0%
学習塾等の学校外の教育機関	頻度	7	0	0	7
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
児童発達支援センター	頻度	1	0	0	1
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
医療機関	頻度	112	14	28	154
	カテゴリ別の%	72.7%	9.1%	18.2%	100.0%
警察	頻度	3171	110	244	3525
	カテゴリ別の%	90.0%	3.1%	6.9%	100.0%
その他の児童福祉施設	頻度	11	0	3	14
	カテゴリ別の%	78.6%	0.0%	21.4%	100.0%
子ども食堂などの民間の居場所	頻度	4	0	0	4
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
NPO等民間団体が開設する電話相談	頻度	1	0	0	1
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
当該の児童相談所職員	頻度	56	2	10	68
	カテゴリ別の%	82.4%	2.9%	14.7%	100.0%
その他	頻度	212	23	61	296
	カテゴリ別の%	71.6%	7.8%	20.6%	100.0%
全体	頻度	5868	410	1252	7530
	カテゴリ別の%	77.9%	5.4%	16.6%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

通告者と主たる虐待種別のクロス表

Q4 通告者と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
虐待者本人	頻度	79	23	2	1	43	18	166
	カテゴリ別の%	47.6%	13.9%	1.2%	0.6%	25.9%	10.8%	100.0%
その他の家族・親族	頻度	132	64	6	5	136	77	420
	カテゴリ別の%	31.4%	15.2%	1.4%	1.2%	32.4%	18.3%	100.0%
児童本人	頻度	19	4	1	1	19	0	44
	カテゴリ別の%	43.2%	9.1%	2.3%	2.3%	43.2%	0.0%	100.0%
近隣知人	頻度	126	194	13	6	411	35	785
	カテゴリ別の%	16.1%	24.7%	1.7%	0.8%	52.4%	4.5%	100.0%
福祉事務所	頻度	27	30	2	4	16	6	85
	カテゴリ別の%	31.8%	35.3%	2.4%	4.7%	18.8%	7.1%	100.0%
民生・児童委員・主任児童委員	頻度	1	3	0	0	3	0	7
	カテゴリ別の%	14.3%	42.9%	0.0%	0.0%	42.9%	0.0%	100.0%
保健所	頻度	5	7	0	0	5	2	19
	カテゴリ別の%	26.3%	36.8%	0.0%	0.0%	26.3%	10.5%	100.0%
区市町村の児童相談部門	頻度	127	124	24	9	70	17	371
	カテゴリ別の%	34.2%	33.4%	6.5%	2.4%	18.9%	4.6%	100.0%
保育所・保健センター	頻度	33	20	4	0	11	4	72
	カテゴリ別の%	45.8%	27.8%	5.6%	0.0%	15.3%	5.6%	100.0%
幼稚園	頻度	7	2	0	0	1	0	10
	カテゴリ別の%	70.0%	20.0%	0.0%	0.0%	10.0%	0.0%	100.0%
学校	頻度	248	94	22	15	126	37	542
	カテゴリ別の%	45.8%	17.3%	4.1%	2.8%	23.2%	6.8%	100.0%
放課後児童クラブ	頻度	2	2	0	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
放課後等デイサービス	頻度	6	3	3	0	3	0	15
	カテゴリ別の%	40.0%	20.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	100.0%
学習塾等の学校外の教育機関	頻度	2	0	0	0	3	2	7
	カテゴリ別の%	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%	42.9%	28.6%	100.0%
児童発達支援センター	頻度	0	1	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
医療機関	頻度	45	38	3	4	26	7	123
	カテゴリ別の%	36.6%	30.9%	2.4%	3.3%	21.1%	5.7%	100.0%
警察	頻度	499	340	37	8	550	1833	3267
	カテゴリ別の%	15.3%	10.4%	1.1%	0.2%	16.8%	56.1%	100.0%
その他の児童福祉施設	頻度	1	4	3	0	2	1	11
	カテゴリ別の%	9.1%	36.4%	27.3%	0.0%	18.2%	9.1%	100.0%
子ども食堂などの民間の居場所	頻度	1	1	0	0	0	2	4
	カテゴリ別の%	25.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	100.0%
NPO等民間団体が開設する電話相談	頻度	0	0	0	1	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
当該の児童相談所職員	頻度	15	15	5	0	9	14	58
	カテゴリ別の%	25.9%	25.9%	8.6%	0.0%	15.5%	24.1%	100.0%
その他	頻度	49	70	1	6	54	53	233
	カテゴリ別の%	21.0%	30.0%	0.4%	2.6%	23.2%	22.7%	100.0%
全体	頻度	1424	1039	126	60	1488	2108	6245
	カテゴリ別の%	22.8%	16.6%	2.0%	1.0%	23.8%	33.8%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したもの。全体に期待度数が5未満のセルが20%を超えるため、有意性の判断は参考程度に見ておく必要がある。

通告者と虐待重症度のクロス表

Q4 通告者と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
虐待者本人	頻度	25	91	38	7	2	3	166
	カテゴリ別の%	15.1%	54.8%	22.9%	4.2%	1.2%	1.8%	100.0%
その他の家族・親族	頻度	<u>59</u>	216	96	20	2	<u>24</u>	417
	カテゴリ別の%	14.1%	51.8%	23.0%	4.8%	0.5%	5.8%	100.0%
児童本人	頻度	<u>0</u>	20	<u>18</u>	3	0	4	45
	カテゴリ別の%	0.0%	44.4%	40.0%	6.7%	0.0%	8.9%	100.0%
近隣知人	頻度	<u>185</u>	<u>432</u>	86	<u>5</u>	1	69	778
	カテゴリ別の%	23.8%	55.5%	11.1%	0.6%	0.1%	8.9%	100.0%
福祉事務所	頻度	12	34	<u>30</u>	<u>9</u>	0	0	85
	カテゴリ別の%	14.1%	40.0%	35.3%	10.6%	0.0%	0.0%	100.0%
民生・児童委員・ 主任児童委員	頻度	0	<u>6</u>	0	1	0	0	7
	カテゴリ別の%	0.0%	85.7%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	100.0%
保健所	頻度	6	<u>4</u>	6	2	0	1	19
	カテゴリ別の%	31.6%	21.1%	31.6%	10.5%	0.0%	5.3%	100.0%
区市町村の児童相談部門	頻度	<u>45</u>	<u>130</u>	<u>134</u>	<u>40</u>	3	11	363
	カテゴリ別の%	12.4%	35.8%	36.9%	11.0%	0.8%	3.0%	100.0%
保育所・保健センター	頻度	11	39	19	2	0	1	72
	カテゴリ別の%	15.3%	54.2%	26.4%	2.8%	0.0%	1.4%	100.0%
幼稚園	頻度	1	4	3	1	0	1	10
	カテゴリ別の%	10.0%	40.0%	30.0%	10.0%	0.0%	10.0%	100.0%
学校	頻度	<u>49</u>	263	<u>175</u>	<u>42</u>	1	<u>9</u>	539
	カテゴリ別の%	9.1%	48.8%	32.5%	7.8%	0.2%	1.7%	100.0%
放課後児童クラブ	頻度	0	3	1	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	0.0%	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
放課後等デイサービス	頻度	2	4	7	2	0	0	15
	カテゴリ別の%	13.3%	26.7%	46.7%	13.3%	0.0%	0.0%	100.0%
学習塾等の学校外の 教育機関	頻度	2	1	<u>4</u>	0	0	0	7
	カテゴリ別の%	28.6%	14.3%	57.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
児童発達支援センター	頻度	0	1	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
医療機関	頻度	19	<u>36</u>	36	<u>14</u>	<u>13</u>	4	122
	カテゴリ別の%	15.6%	29.5%	29.5%	11.5%	10.7%	3.3%	100.0%
警察	頻度	<u>681</u>	1552	846	<u>82</u>	<u>4</u>	<u>81</u>	3246
	カテゴリ別の%	21.0%	47.8%	26.1%	2.5%	0.1%	2.5%	100.0%
その他の児童福祉施設	頻度	1	4	<u>6</u>	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	9.1%	36.4%	54.5%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
子ども食堂などの 民間の居場所	頻度	2	0	2	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
NPO等民間団体が 開設する電話相談	頻度	0	0	1	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
当該の児童相談所職員	頻度	14	26	10	<u>6</u>	1	1	58
	カテゴリ別の%	24.1%	44.8%	17.2%	10.3%	1.7%	1.7%	100.0%
その他	頻度	<u>65</u>	<u>95</u>	48	10	0	<u>15</u>	233
	カテゴリ別の%	27.9%	40.8%	20.6%	4.3%	0.0%	6.4%	100.0%
全体	頻度	1179	2961	1566	246	27	224	6203
	カテゴリ別の%	19.0%	47.7%	25.2%	4.0%	0.4%	3.6%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの、全体に期待度数が5未満のセルが20%を超えるため、有意性の判断は参考程度に見ておく必要がある。

Q4-1. 区市町村の児童相談部門における送致・援助要請・通知

(Q4「区市町村の児童相談部門担当」回答 417 ケース限定)

- 設問：「Q4 で区市町村の児童相談部門を選択した方にお聞きします。このケースは送致・援助要請・通知のどの取り扱いでしたか」
- 区市町村の児童相談部門において取り扱ったケース 417 件のうち、「援助要請」が 50.8%と最も多く、「送致」28.8%、「通知」15.8%と続いていた。

Q4-1 ケースの取り扱い (Q4「市町村の児相部門」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
送致	120	28.8	
援助要請	212	50.8	
通知	66	15.8	
無回答	19	4.6	
合計	417	100	

Q5. 児童相談所全国共通ダイヤル（189）の使用

- 設問：「Q4 の通告は、児童相談所全国ダイヤル（189）を用いたものでしたか」
- 全ケース 7,636 件のうち、児童相談所全国共通ダイヤル（189）を使用したのは 515 件（6.7%）であり、8 割以上が他の手段での通告となっている。189 がある程度機能し始めていることを示すが、まだその使用は限られているといえる。

Q5 児童共通ダイヤル（189）の使用

	度数	%	%グラフ
はい	515	6.7	
いいえ	6433	84.2	
不明	124	1.6	
無回答	564	7.4	
合計	7636	100	

通告者と児童共通ダイヤル（189）使用のクロス表

通告者と 189 使用についての関連を検討した結果、「近隣知人」「児童本人」「その他家族・親族」が 189 を使用する頻度が全体に比して高く、189 が新たな虐待窓口として一定の機能を果たしていることが示唆された。

Q5 通告者と児童共通ダイヤル（189）の使用のクロス集計表

		189使用	189不使用	不明	合計
虐待者本人	頻度	32	141	6	179
	カテゴリ別の%	17.9%	78.8%	3.4%	100.0%
その他の家族・親族	頻度	61	449	12	522
	カテゴリ別の%	11.7%	86.0%	2.3%	100.0%
児童本人	頻度	9	30	2	41
	カテゴリ別の%	22.0%	73.2%	4.9%	100.0%
近隣知人	頻度	376	903	76	1355
	カテゴリ別の%	27.7%	66.6%	5.6%	100.0%
福祉事務所	頻度	0	87	0	87
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
民生・児童委員・主任児童委員	頻度	1	6	0	7
	カテゴリ別の%	14.3%	85.7%	0.0%	100.0%
保健所	頻度	0	22	0	22
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
区市町村の児童相談部門	頻度	0	401	7	408
	カテゴリ別の%	0.0%	98.3%	1.7%	100.0%
保育所・保健センター	頻度	1	75	0	76
	カテゴリ別の%	1.3%	98.7%	0.0%	100.0%
幼稚園	頻度	0	12	0	12
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
学校	頻度	2	587	3	592
	カテゴリ別の%	0.3%	99.2%	0.5%	100.0%
放課後児童クラブ	頻度	0	4	0	4
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
放課後等デイサービス	頻度	0	19	0	19
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
学習塾等の学校外の教育機関	頻度	0	3	0	3
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
児童発達支援センター	頻度	0	1	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
医療機関	頻度	3	143	0	146
	カテゴリ別の%	2.1%	97.9%	0.0%	100.0%
警察	頻度	12	3187	14	3213
	カテゴリ別の%	0.4%	99.2%	0.4%	100.0%
その他の児童福祉施設	頻度	2	10	0	12
	カテゴリ別の%	16.7%	83.3%	0.0%	100.0%
子ども食堂などの民間の居場所	頻度	0	3	0	3
NPO等民間団体が開設する電話相談	頻度	0	1	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
当該の児童相談所職員	頻度	0	63	0	63
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
その他	頻度	11	258	2	271
	カテゴリ別の%	4.1%	95.2%	0.7%	100.0%
全体	頻度	510	6405	122	7037
	カテゴリ別の%	7.2%	91.0%	1.7%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q6. 虐待の有無

➤ 設問：「実際このケースに虐待はありましたか」

- 全ケース 7,636 件のうち、実際に虐待があったのは 5,886 件（77.1%）であり、「虐待なし」の 16.6%の約 4.8 倍となっていた。

	度数	%	%グラフ
虐待あり	5886	77.1	
不明（調査中含む）	414	5.4	
虐待なし	1266	16.6	
無回答	70	0.9	
合計	7636	100	

*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、総サンプル 11,257 人のうち、「虐待あり」が 7,418 件（65.8%）、「虐待なし」が 2,971 件（26.7%）であり、今回の調査の方が「虐待あり」の比率が高くなっている。後に述べるように平成 25 年と比べ、DV の目撃を心理的虐待として警察が通報するケースが急激に増えており、通告事例について「虐待あり」と判断されるケースが増えていると推測される。

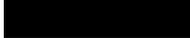
これ以降の全設問への回答は Q6 に「虐待あり」「不明（調査中）」と回答したケースに限定される。

したがって基本的には全数=6300 として計算を行った。

Q7. 虐待の種別

- Q6 で「虐待あり」「不明（調査中）」と回答のあった 6,300 ケースの虐待種別の内訳は、「心理的虐待（DV 目撃）」が 2,111 人（33.5%）と最も多く、「心理的虐待」が 1,493 人（23.7%）、「身体的虐待」が 1,433 人（22.7%）、「ネグレクト（同居人等による虐待の放置以外）」が 1,043 人（16.6%）であった。

Q7 主たる虐待種別

	度数	%	% グラフ
身体的	1433	22.7	
ネグレクト	1043	16.6	
ネグレクト（同居人の虐待放置）	126	2.0	
性的虐待	61	1.0	
心理的虐待	1493	23.7	
心理的虐待（DV目撃）	2111	33.5	
無回答	33	0.5	
合計	6300	100	

*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、「虐待あり・不明」7,434 件のうち、「身体的虐待」が 2,434 件（32.7%）と最も多く、「ネグレクト（虐待放置以外）」が 1,921 件（25.8%）、「心理的虐待（DV 目撃除く）」が 1,363 件（18.3%）、「心理的虐待（DV 目撃）」が 1,245 件（16.7%）であった。今回の調査では、心理的虐待の占める割合が高くなっていることが分かる。警察が DV が生じている／疑われる家庭において、子どもがいる場合に虐待として児童相談所へ通告する方針になったことが、大きく心理的虐待の通告件数増加につながっていると思われる。

虐待種別と性別のクロス表

主たる虐待種別と性別の関連について検討した。結果、「身体的虐待」は男児のほうが報告頻度が高く、「ネグレクト」「性的虐待」については女児の方が報告頻度が高いことが明らかとなった。

Q7 主たる虐待種別と性別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
男児	頻度	851	509	62	<u>9</u>	776	1090	3297
	カテゴリ別の%	25.8%	15.4%	1.9%	0.3%	23.5%	33.1%	100.0%
女児	頻度	577	531	64	52	708	1014	2946
	カテゴリ別の%	19.6%	18.0%	2.2%	1.8%	24.0%	34.4%	100.0%
全体	頻度	1428	1040	126	61	1484	2104	6243
	カテゴリ別の%	22.9%	16.7%	2.0%	1.0%	23.8%	33.7%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待種別と被虐待児の年齢のクロス表

主たる虐待種別と年齢の関連について検討した。結果、「身体的虐待」は12~14歳、15歳以上、6~11歳で報告が多く、「ネグレクト」は1歳~5歳の報告が多かった。また「性的虐待」は15歳以上および12~14歳で報告が多かった。「心理的虐待」は各年代カテゴリでほぼまんべんなく報告され、「DV目撃」は1歳未満、もしくは1~5歳のケースでの報告が多かった。

Q7 主たる虐待種別と年齢カテゴリのクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
1歳未満	頻度	<u>49</u>	69	4	<u>0</u>	80	195	397
	カテゴリ別の%	12.3%	17.4%	1.0%	0.0%	20.2%	49.1%	100.0%
1~5歳	頻度	344	411	<u>36</u>	<u>3</u>	539	861	2194
	カテゴリ別の%	15.7%	18.7%	1.6%	0.1%	24.6%	39.2%	100.0%
6~11歳	頻度	539	346	52	18	538	<u>679</u>	2172
	カテゴリ別の%	24.8%	15.9%	2.4%	0.8%	24.8%	31.3%	100.0%
12~14歳	頻度	316	142	20	22	<u>200</u>	<u>231</u>	931
	カテゴリ別の%	33.9%	15.3%	2.1%	2.4%	21.5%	24.8%	100.0%
15歳以上	頻度	174	<u>66</u>	13	18	124	<u>137</u>	532
	カテゴリ別の%	32.7%	12.4%	2.4%	3.4%	23.3%	25.8%	100.0%
全体	頻度	1422	1034	125	61	1481	2103	6226
	カテゴリ別の%	22.8%	16.6%	2.0%	1.0%	23.8%	33.8%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待種別と在学状況のクロス表

主たる虐待種別と在学状況との関連について検討した。結果、「身体的虐待」は中学校・高校・小学校で多く報告されていた。「ネグレクト」は乳幼児の報告が多かった。「性的虐待」は高校・中学校の報告が多かった。「DV 目撃」は乳幼児・保育所・幼稚園の報告ケースが多かった。

Q7 主たる虐待種別と在学状況のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
家庭にいる	頻度	<u>88</u>	<u>180</u>	<u>10</u>	<u>1</u>	200	<u>404</u>	883
乳幼児	カテゴリ別の%	10.0%	20.4%	1.1%	0.1%	22.7%	45.8%	100.0%
保育所その他の	頻度	<u>249</u>	231	24	<u>2</u>	304	<u>489</u>	1299
保育施設	カテゴリ別の%	19.2%	17.8%	1.8%	0.2%	23.4%	37.6%	100.0%
幼稚園	頻度	<u>58</u>	<u>49</u>	5	<u>0</u>	<u>108</u>	<u>164</u>	384
	カテゴリ別の%	15.1%	12.8%	1.3%	0.0%	28.1%	42.7%	100.0%
小学校	頻度	<u>546</u>	346	50	19	542	<u>675</u>	2178
	カテゴリ別の%	25.1%	15.9%	2.3%	0.9%	24.9%	31.0%	100.0%
中学校	頻度	<u>303</u>	134	<u>25</u>	<u>21</u>	<u>185</u>	<u>215</u>	883
	カテゴリ別の%	34.3%	15.2%	2.8%	2.4%	21.0%	24.3%	100.0%
高校	頻度	<u>157</u>	<u>50</u>	7	<u>14</u>	99	<u>123</u>	450
	カテゴリ別の%	34.9%	11.1%	1.6%	3.1%	22.0%	27.3%	100.0%
その他	頻度	23	<u>37</u>	1	<u>3</u>	17	<u>13</u>	94
	カテゴリ別の%	24.5%	39.4%	1.1%	3.2%	18.1%	13.8%	100.0%
不明	頻度	<u>2</u>	8	0	0	<u>24</u>	<u>8</u>	42
	カテゴリ別の%	4.8%	19.0%	0.0%	0.0%	57.1%	19.0%	100.0%
全体	頻度	1426	1035	122	60	1479	2091	6213
	カテゴリ別の%	23.0%	16.7%	2.0%	1.0%	23.8%	33.7%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待種別と児童共通ダイヤル (189) 使用のクロス表

主たる虐待種別と児童共通ダイヤル (189) 使用との関連について検討した。結果、「身体的虐待」と「心理的虐待」は 189 を使用したケースが多く、「ネグレクト」「DV 目撃」は 189 を使用しないケースの頻度が多くなっていた。

Q7 主たる虐待種別と児童共通ダイヤル (189) 使用のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
189使用	頻度	<u>96</u>	<u>35</u>	4	4	<u>163</u>	<u>31</u>	333
	カテゴリ別の%	28.8%	10.5%	1.2%	1.2%	48.9%	9.3%	100.0%
189不使用	頻度	<u>1220</u>	<u>936</u>	97	51	1207	<u>1908</u>	5419
	カテゴリ別の%	22.5%	17.3%	1.8%	0.9%	22.3%	35.2%	100.0%
不明	頻度	21	11	<u>7</u>	0	<u>38</u>	<u>4</u>	81
	カテゴリ別の%	25.9%	13.6%	8.6%	0.0%	46.9%	4.9%	100.0%
全体	頻度	1337	982	108	55	1408	1943	5833
	カテゴリ別の%	22.9%	16.8%	1.9%	0.9%	24.1%	33.3%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q8. 虐待の重症度

- 虐待の重症度について回答のあった 6,300 ケースのうち、「軽度虐待」が 2,972 件（47.2%）、「中度虐待」1,570 件（24.9%）、「虐待の危惧あり」1,184 件（18.8%）であり、「重度の虐待」も 247 件（3.9%）あった。

	度数	%	%グラフ
虐待の危惧あり	1184	18.8	
軽度虐待	2972	47.2	
中度虐待	1570	24.9	
重度虐待	247	3.9	
生命の危機あり	27	0.4	
不明	225	3.6	
無回答	75	1.2	
合計	6300	100	

*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、「虐待あり・不明」7,434 件のうち、「軽度虐待」が 3,078 件（41.1%）と最も多く、「中度虐待」が 1,745 件（23.5%）、「虐待の危惧あり」が 1,560 件（21.0%）であった。「生命の危機あり」も 1.5%であったが、今回の調査では 0.4%へ減少していた。これは決して深刻な事例が減っているわけではなく、DV に関する通告による心理的虐待の急激な増加が増えて、「軽度虐待」とされる事例が増えたことで相対的に「重度虐待」や「生命の危険あり」の割合が減少したと考えられる。

虐待重症度と被虐待児年齢のクロス表

虐待重症度と年齢カテゴリとの関連について検討した。結果、1 歳未満は「虐待の危惧」「生命の危機あり」の双方の報告頻度が高かった。1-5 歳では「虐待の危惧」の報告頻度が相対的に高かった。6-11 歳では、「軽度虐待」の報告頻度が高かった。また 15 歳以上において、中度虐待の報告頻度が高くなっていた。

Q8 虐待重症度と年齢カテゴリーのクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
1歳未満	頻度	91	<u>155</u>	103	20	14	12	395
	カテゴリ別の%	23.0%	39.2%	26.1%	5.1%	3.5%	3.0%	100.0%
1~5歳	頻度	458	1018	526	79	7	83	2171
	カテゴリ別の%	21.1%	46.9%	24.2%	3.6%	0.3%	3.8%	100.0%
6~11歳	頻度	401	1080	539	75	<u>1</u>	<u>65</u>	2161
	カテゴリ別の%	18.6%	50.0%	24.9%	3.5%	0.0%	3.0%	100.0%
12~14歳	頻度	<u>141</u>	461	240	47	4	32	925
	カテゴリ別の%	15.2%	49.8%	25.9%	5.1%	0.4%	3.5%	100.0%
15歳以上	頻度	85	240	158	24	1	18	526
	カテゴリ別の%	16.2%	45.6%	30.0%	4.6%	0.2%	3.4%	100.0%
全体	頻度	1176	2954	1566	245	27	210	6178
	カテゴリ別の%	19.0%	47.8%	25.3%	4.0%	0.4%	3.4%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待重症度と在学状況のクロス表

虐待重症度と在学状況との関連について検討した。結果、乳幼児は「虐待の危惧」と「生命の危機」の双方の報告頻度が高かった。また小学校では「軽度虐待」が、高校では「中度虐待」の報告頻度が高くなっていった。

Q8 虐待重症度と在学状況のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
家庭にいる	頻度	198	<u>365</u>	235	42	10	25	875
	カテゴリ別の%	22.6%	41.7%	26.9%	4.8%	1.1%	2.9%	100.0%
乳幼児	頻度	257	640	302	43	3	41	1286
	カテゴリ別の%	20.0%	49.8%	23.5%	3.3%	0.2%	3.2%	100.0%
保育所その他の 保育施設	頻度	85	185	<u>76</u>	12	1	18	377
	カテゴリ別の%	22.5%	49.1%	20.2%	3.2%	0.3%	4.8%	100.0%
小学校	頻度	399	1078	545	76	<u>1</u>	68	2167
	カテゴリ別の%	18.4%	49.7%	25.1%	3.5%	0.0%	3.1%	100.0%
中学校	頻度	<u>131</u>	439	235	44	4	27	880
	カテゴリ別の%	14.9%	49.9%	26.7%	5.0%	0.5%	3.1%	100.0%
高校	頻度	75	203	132	16	1	17	444
	カテゴリ別の%	16.9%	45.7%	29.7%	3.6%	0.2%	3.8%	100.0%
その他	頻度	20	<u>32</u>	26	11	5	0	94
	カテゴリ別の%	21.3%	34.0%	27.7%	11.7%	5.3%	0.0%	100.0%
不明	頻度	4	<u>7</u>	10	0	1	24	46
	カテゴリ別の%	8.7%	15.2%	21.7%	0.0%	2.2%	52.2%	100.0%
全体	頻度	1169	2949	1561	244	26	220	6169
	カテゴリ別の%	18.9%	47.8%	25.3%	4.0%	0.4%	3.6%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待重症度と児童共通ダイヤル（189）使用のクロス表

虐待重症度と児童共通ダイヤル（189）使用の関連について検討した。結果、「虐待の危惧」では189使用頻度が高く、「中度虐待」「重度虐待」では189使用頻度が低くなっていた。

Q8 虐待重症度と児童共通ダイヤル（189）使用のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
189使用	頻度	84	173	<u>51</u>	<u>2</u>	1	19	330
	カテゴリ別の%	25.5%	52.4%	15.5%	0.6%	0.3%	5.8%	100.0%
189不使用	頻度	<u>973</u>	<u>2562</u>	1409	226	25	<u>188</u>	5383
	カテゴリ別の%	18.1%	47.6%	26.2%	4.2%	0.5%	3.5%	100.0%
不明	頻度	18	49	<u>7</u>	2	0	5	81
	カテゴリ別の%	22.2%	60.5%	8.6%	2.5%	0.0%	6.2%	100.0%
全体	頻度	1075	2784	1467	230	26	212	5794
	カテゴリ別の%	18.6%	48.0%	25.3%	4.0%	0.4%	3.7%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待重症度と主たる虐待種別のクロス表

虐待重症度と主たる虐待種別との関連について検討した。結果、身体的虐待は「軽度虐待」「重度虐待」「生命の危機あり」の報告頻度が高くなっていた。ネグレクトは「重度虐待」の報告頻度が高かった。性的虐待も「中度虐待」「重度虐待」の報告頻度が高くなっていた。心理的虐待は「虐待の危惧あり」「軽度虐待」の報告頻度が、DV目撃は「虐待の危惧あり」「中度虐待」の頻度が高くなっていた。

Q8 虐待重症度と主たる虐待種別のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
身体的虐待	頻度	<u>121</u>	808	356	74	18	44	1421
	カテゴリ別の%	8.5%	56.9%	25.1%	5.2%	1.3%	3.1%	100.0%
ネグレクト	頻度	194	503	239	56	7	40	1039
	カテゴリ別の%	18.7%	48.4%	23.0%	5.4%	0.7%	3.8%	100.0%
ネグレクト (同居人の虐待放置)	頻度	25	<u>41</u>	41	14	1	3	125
	カテゴリ別の%	20.0%	32.8%	32.8%	11.2%	0.8%	2.4%	100.0%
性的虐待	頻度	7	<u>7</u>	26	18	0	3	61
	カテゴリ別の%	11.5%	11.5%	42.6%	29.5%	0.0%	4.9%	100.0%
心理的虐待	頻度	355	793	227	<u>26</u>	<u>1</u>	68	1470
	カテゴリ別の%	24.1%	53.9%	15.4%	1.8%	0.1%	4.6%	100.0%
心理的虐待 (DV目撃)	頻度	479	<u>812</u>	681	<u>58</u>	<u>0</u>	<u>60</u>	2090
	カテゴリ別の%	22.9%	38.9%	32.6%	2.8%	0.0%	2.9%	100.0%
全体	頻度	1181	2964	1570	246	27	218	6206
	カテゴリ別の%	19.0%	47.8%	25.3%	4.0%	0.4%	3.5%	100.0%

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q9. 虐待の通算期間

- 虐待の通算期間については、「不明」が1,957件（31.1%）と最も多く、「1か月未満」1,644件（26.1%）、「1～3年未満」759件（12.0%）、「1～3か月未満」471件（7.5%）となっていた。

Q9 虐待の通算期間

	度数	%	%グラフ
1か月未満	1644	26.1	
1～3か月未満	471	7.5	
3～6か月未満	305	4.8	
6か月～1年未満	437	6.9	
1～3年未満	759	12.0	
3年以上	649	10.3	
不明	1957	31.1	
無回答	78	1.2	
合計	6300	100	

*平成25年度調査との比較

平成25年度調査では、「1か月未満」が18.5%、「3年以上」が15.1%、「1～3年未満」が14.9%であった。今回、「1か月未満」が31.4%と高くなっているのは、早期発見の割合が上がった可能性がある。

虐待の通算期間と年齢カテゴリのクロス表

年齢1歳未満では通算期間が「1年未満（特に1ヶ月未満）」が多く、5歳までは「1-3年未満」、6歳以上は「3年以上」の期間報告が多くなっていた。年齢以上の期間の虐待は生じ得ないため自然な結果である。注目されるのは「不明」の割合が各年代とも3割前後にのぼっていることである。特に1-5歳において「不明」が他の年代よりも相対的に割合が高く、この年代の虐待の把握の難しさを示している。

Q9 虐待の通算期間と年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
1か月未満	頻度	144	621	512	211	143	1631
	カテゴリ別の%	36.1%	28.6%	23.8%	22.8%	27.1%	26.4%
1～3か月未満	頻度	52	160	150	72	32	466
	カテゴリ別の%	13.0%	7.4%	7.0%	7.8%	6.1%	7.5%
3～6か月未満	頻度	50	102	110	23	17	302
	カテゴリ別の%	12.5%	4.7%	5.1%	2.5%	3.2%	4.9%
6か月～1年未満	頻度	36	170	137	60	34	437
	カテゴリ別の%	9.0%	7.8%	6.4%	6.5%	6.4%	7.1%
1～3年未満	頻度	8	298	269	127	55	757
	カテゴリ別の%	2.0%	13.7%	12.5%	13.7%	10.4%	12.3%
3年以上	頻度	0	113	277	158	100	648
	カテゴリ別の%	0.0%	5.2%	12.9%	17.1%	18.9%	10.5%
不明	頻度	109	711	696	275	147	1938
	カテゴリ別の%	27.3%	32.7%	32.4%	29.7%	27.8%	31.4%
総数		729	2127	2122	822	379	6179

***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは有意に低い頻度を示したものの。

虐待の通算期間と主たる虐待種別のクロス表

虐待の種類と期間では、「身体的虐待」「性的虐待」が他の虐待種に比べ通算期間「3年以上」という報告が多かった。「心理的虐待」では「不明」が最も多いことと比べると、「身体的虐待」「性的虐待」は「心理的虐待」よりも行為の評価が明確であり期間が比較的定めやすいためと思われた。一方「ネグレクト」は、他の虐待種よりも「6ヶ月～1年未満」「1～3年未満」という報告が有意に高かった。これは世話をされていないという認定が、低い年代の児童の方が明確になりやすく、期間として1か月以下や3年以上にあてはまりにくいことが影響していると思われる。

Q9 虐待の通算期間と主たる虐待種別クロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計	
1か月未満	頻度	397	251	27	<u>1</u>	<u>340</u>	<u>625</u>	1641
	カテゴリ別の%	28.0%	24.4%	21.4%	1.8%	23.0%	29.9%	26.5%
1～3か月未満	頻度	116	70	<u>22</u>	1	99	162	470
	カテゴリ別の%	8.2%	6.8%	17.5%	1.8%	6.7%	7.8%	7.6%
3～6か月未満	頻度	63	61	<u>13</u>	3	62	103	305
	カテゴリ別の%	4.4%	5.9%	10.3%	5.3%	4.2%	4.9%	4.9%
6か月～1年未満	頻度	91	<u>99</u>	14	<u>8</u>	110	<u>114</u>	436
	カテゴリ別の%	6.4%	9.6%	11.1%	14.0%	7.4%	5.5%	7.0%
1～3年未満	頻度	157	<u>148</u>	13	<u>19</u>	169	251	757
	カテゴリ別の%	11.1%	14.4%	10.3%	33.3%	11.4%	12.0%	12.2%
3年以上	頻度	<u>187</u>	98	13	<u>12</u>	162	<u>176</u>	648
	カテゴリ別の%	13.2%	9.5%	10.3%	21.1%	10.9%	8.4%	10.5%
不明	頻度	<u>408</u>	303	<u>24</u>	13	<u>538</u>	657	1943
	カテゴリ別の%	28.8%	29.4%	19.0%	22.8%	36.4%	31.5%	31.3%
	総数	1419	1030	126	57	1480	2088	6200

虐待の通算期間と主たる虐待重症度のクロス表

虐待の重症度と通算期間の関係では、「1か月未満」では「生命の危機あり」と「虐待の危惧あり」という最重度と最軽度の双方で最も高い割合を占めた。「生命の危機」については、通算期間の短い乳幼児において緊急の対応をすべき最重度の事例が集中していることを意味している。一方「虐待の危惧」は、虐待の期間も重症度でも低いレベルにとどまる1群が存在することを意味している。「3年以上」という最も通算期間の長い群は、「中度」「重度」虐待の頻度が多く報告されていた。

Q9 虐待の通算期間と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
1か月未満	頻度	<u>421</u>	788	<u>313</u>	<u>40</u>	<u>13</u>	46	1621
	カテゴリ別の%	35.9%	26.8%	20.2%	16.3%	48.1%	20.7%	26.3%
1～3か月未満	頻度	<u>111</u>	226	113	12	1	<u>6</u>	469
	カテゴリ別の%	9.5%	7.7%	7.3%	4.9%	3.7%	2.7%	7.6%
3～6か月未満	頻度	50	<u>125</u>	<u>106</u>	17	3	<u>4</u>	305
	カテゴリ別の%	4.3%	4.2%	6.8%	6.9%	11.1%	1.8%	5.0%
6か月～1年未満	頻度	76	202	122	21	2	11	434
	カテゴリ別の%	6.5%	6.9%	7.9%	8.6%	7.4%	5.0%	7.0%
1～3年未満	頻度	<u>105</u>	385	210	<u>46</u>	1	<u>8</u>	755
	カテゴリ別の%	9.0%	13.1%	13.5%	18.8%	3.7%	3.6%	12.3%
3年以上	頻度	<u>78</u>	<u>266</u>	<u>229</u>	<u>63</u>	0	<u>11</u>	647
	カテゴリ別の%	6.7%	9.0%	14.8%	25.7%	0.0%	5.0%	10.5%
不明	頻度	<u>331</u>	952	458	<u>46</u>	7	<u>136</u>	1930
	カテゴリ別の%	28.2%	32.3%	29.5%	18.8%	25.9%	61.3%	31.3%
	総数	1172	2944	1551	245	27	222	6161

Q10. 受理時点の子どもの虐待の認知

- 子どもの虐待認知について回答のあった 6,212 人のうち、「不明」2,165 人 (34.4%)、「意思が確認できない」1,709 人 (27.1%)、「ひどいことをされたと感じていない」1,160 人 (18.4%) であり、「不当にひどいことをされた」と認知しているのは 795 人 (12.6%) に過ぎなかった。虐待を受けたことを子どもが認識することの困難さの表れと言えよう。子どもにとっては、あくまで「親が行っていることが正しい」と考えがちであり、「ひどいことをされた」と感じなかったり、「子どもの方が悪い」と考えてしまうことがある。これは虐待の発見の難しさを意味するとともに、子どもの自己否定的な認知が自尊心などの発達に悪影響を与える可能性を示すものといえる。

Q10 受理時の子どもの虐待認知

	度数	%	% グラフ
不当にひどいことをされたと思っている	795	12.6	
ひどいことをされたが自分が悪いから仕方がないと思っている	383	6.1	
ひどいことをされたと感じていない	1160	18.4	
意思が確認できない	1709	27.1	
不明	2165	34.4	
無回答	88	1.4	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査でも、「不明」30.3%、「意思が確認できない」26.9%とほぼ同様であった。「不当にひどいことをされた」と回答したのは 16.8%であり、今回の結果の方が低い。

子どもの虐待認知と主たる性別のクロス表

回答されたものの中では、女兒は自分が被害を受けたことを明確に意識できているケースが多く、一方男児は自分にも責任があると考えるケースが多かった。

Q10 受理時子どもの虐待認知と性別のクロス集計表

		男児	女兒	合計
不当にひどいことを されたと思っている	頻度	<u>364</u>	<u>429</u>	793
	カテゴリ別の%	11.1%	14.7%	12.8%
ひどいことをされたが自分が 悪いから仕方がないと思っている	頻度	<u>222</u>	<u>161</u>	383
	カテゴリ別の%	6.8%	5.5%	6.2%
ひどいことをされた と感じていない	頻度	619	536	1155
	カテゴリ別の%	19.0%	18.3%	18.7%
意思が確認できない	頻度	<u>936</u>	<u>765</u>	1701
	カテゴリ別の%	28.7%	26.2%	27.5%
不明	頻度	1124	1030	2154
	カテゴリ別の%	34.4%	35.3%	34.8%
	総数	3265	2921	6186

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

子どもの虐待認知と年齢カテゴリーのクロス表

「ひどいことをされたと思っている」という正しい認識は、「12-14歳」「15歳以上」において3分の1くらいに達しており最も多い割合になっている。「6-11歳」では「ひどいことをされたと思っている」は13.0%にとどまり、「ひどいことをされたと思っていない」が24.5%を占め、他の年齢層よりも多い。「6-11歳」では「不明」が最も多く、「1歳未満」および「1-5歳」では「意志が確認できない」が最多であった。年齢が低いほど、虐待を受けたという認識を持ってないことが示されている。

Q10 受理時子どもの虐待認知と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
不当にひどいことをされたと思っている	頻度	<u>2</u>	<u>56</u>	279	274	180	791
	カテゴリ別の%	0.5%	2.6%	13.0%	29.8%	34.2%	12.8%
ひどいことをされたが自分が悪いから仕方がないと思っている	頻度	<u>2</u>	<u>39</u>	205	89	46	381
	カテゴリ別の%	0.5%	1.8%	9.5%	9.7%	8.7%	6.2%
ひどいことをされたと思っていない	頻度	<u>15</u>	<u>358</u>	528	175	<u>79</u>	1155
	カテゴリ別の%	3.8%	16.5%	24.5%	19.0%	15.0%	18.7%
意志が確認できない	頻度	298	884	<u>346</u>	<u>111</u>	<u>61</u>	1700
	カテゴリ別の%	74.9%	40.8%	16.1%	12.1%	11.6%	27.6%
不明	頻度	<u>81</u>	832	796	<u>271</u>	161	2141
	カテゴリ別の%	20.4%	38.4%	37.0%	29.5%	30.6%	34.7%
総数		398	2169	2154	920	527	6168

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

子どもの虐待認知と主たる虐待種別のクロス表

「身体的虐待」、「性的虐待」、「ネグレクト（同居人による虐待）」は、「不当にひどいことをされた」という認識率が他の種類よりも高く、被害を被害として認識しやすいといえる。しかし、「身体的虐待」「性的虐待」では、「ひどいことをされたが自分が悪いので仕方がない」も他の種類よりも高く、「被害を受けた」と認識しながらも「その原因を自分にもある」と考えがちであるといえる。一方「心理的虐待」は「不当にひどいことをされた」と感じにくい。「ネグレクト」は、「不当にひどいことをされた」は6.6%であるのに対して、「ひどいことをされたと思っていない」が33.3%で他の種類よりも高い。以上より心理的虐待やネグレクトは子どもがそれを虐待と認識しにくいといえる。

Q10 受理時子どもの虐待認知と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計	
不当にひどいことをされたと思っている	頻度	386	<u>68</u>	35	40	<u>149</u>	<u>116</u>	794
	カテゴリ別の%	27.3%	6.6%	28.2%	66.7%	10.1%	5.6%	12.8%
ひどいことをされたが自分が悪いから仕方がないと思っている	頻度	238	<u>31</u>	14	2	78	<u>18</u>	381
	カテゴリ別の%	16.8%	3.0%	11.3%	3.3%	5.3%	0.9%	6.2%
ひどいことをされたと思っていない	頻度	<u>150</u>	320	17	5	267	401	1160
	カテゴリ別の%	10.6%	31.0%	13.7%	8.3%	18.1%	19.2%	18.7%
意志が確認できない	頻度	<u>282</u>	315	32	<u>5</u>	388	680	1702
	カテゴリ別の%	20.0%	30.5%	25.8%	8.3%	26.3%	32.6%	27.5%
不明	頻度	<u>357</u>	<u>299</u>	<u>26</u>	<u>8</u>	593	870	2153
	カテゴリ別の%	25.3%	28.9%	21.0%	13.3%	40.2%	41.7%	34.8%
総数		1413	1033	124	60	1475	2085	6190

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

子どもの虐待認知と虐待重症度のクロス表

虐待の重症度と子どもの虐待認知の関係を見ると、「中度虐待」「重度虐待」では「不当にひどいことをされた」という報告が多く、一方「虐待の危惧あり」ではそのような報告は少ない。これは虐待の重症度が高い方が、「被害を受けた」という認識が明確になることを示している。しかし、重度の虐待でも「自分が悪い」という認識を持つ者が10%おり、また「ひどいことをされたと思っていない」の回答も15%程度認められ、重度であっても必ずしも正確な認識を持っているとは限らないといえる。

Q10 受理事子どもの虐待認知と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
不当にひどいことを されたと思っている	頻度	<u>67</u>	367	273	77	1	7	792
	カテゴリ別の%	5.7%	12.5%	17.6%	31.3%	3.7%	3.2%	12.9%
ひどいことをされたが自分が 悪いから仕方がないと思っている	頻度	<u>35</u>	207	110	25	2	<u>0</u>	379
	カテゴリ別の%	3.0%	7.1%	7.1%	10.2%	7.4%	0.0%	6.2%
ひどいことをされたと思 っていない	頻度	293	567	<u>231</u>	37	<u>1</u>	<u>25</u>	1154
	カテゴリ別の%	25.0%	19.3%	14.9%	15.0%	3.7%	11.3%	18.8%
意思が確認できない	頻度	388	791	<u>392</u>	69	19	<u>32</u>	1691
	カテゴリ別の%	33.2%	27.0%	25.2%	28.0%	70.4%	14.4%	27.5%
不明	頻度	387	1000	548	<u>38</u>	<u>4</u>	158	2135
	カテゴリ別の%	33.1%	34.1%	35.3%	15.4%	14.8%	71.2%	34.7%
	総数	1170	2932	1554	246	27	222	6151

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q11. 被虐待児の家族構成（複数回答）

- 設問：「被虐待児の家族構成（受理時点で同居している人）。判明している家族構成員すべてをご回答ください」
- 「実母」のいる家庭は 90.6%（5,708 件）で、「実父」61.0%（3,840 件）を大きく上回っていた。
- 「実の兄弟」がいる家庭は、62.6%（3,942 件）と半数以上を占めた。
- 「実母」「実父」以外の家族では、「祖母」7.7%、「普通養子縁組の養父」5.5%の順に報告が多かった。

Q11 被虐待児の家族構成（複数回答項目）

	度数	%	%グラフ
実父	3840	61.0	
継父	193	3.1	
普通養子縁組の養父	343	5.4	
里父	3	0.0	
内縁の夫	283	4.5	
実母	5708	90.6	
継母	31	0.5	
普通養子縁組の養母	24	0.4	
里母	3	0.0	
内縁の妻	14	0.2	
実の兄弟	3942	62.6	
義理の兄弟	915	14.5	
祖父	282	4.5	
祖母	480	7.6	
おじ	81	1.3	
おば	81	1.3	
その他の同居家族	68	1.1	
その他	100	1.6	
不明	45	0.7	
該当ケース数	6300		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査では、「実母」86.9%であったのに比較して、今回の調査では 75.5%と 10%程度下回っている。DV の目撃などの心理的虐待が大きく増えたことにより、母親の養育が問題である事例のみでなく、父親の問題を中心とした事例が事例化するようになったことがこの変化につながっていると思われる。

家族構成（複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

「母親」「父親」「実のきょうだい」がどの虐待種でも多く回答された。各虐待種別の特徴を見ていくと、身体的虐待は「養父」「継父」「おじ」と同居しているとの報告が多く、「実母」との同居が他虐待種に比べてやや少なかった。心理的虐待は「実父」「実のきょうだい」と同居しているとの報告が多かった。また DV 目撃は、「実母」「実父」「実のきょうだい」と同居しているという報告が多かった。ネグレクトは、「祖母」「叔

父」「叔母」と同居しているとの報告が多く、ネグレクト（同居人の虐待放置）は「内縁の夫」と同居しているとの報告が多かった。全体としては、父親的な立場の男性が中心となって、身体的虐待・DV等において子どもにダメージを与えていることが伺える内容である。

Q11 家族構成と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
			ネグレクト	(同居人の虐待放置)				
実父	頻度	857	<u>419</u>	<u>45</u>	32	956	1519	3828
	カテゴリ別の%	59.8%	40.2%	35.7%	52.5%	64.0%	72.0%	61.1%
継父	頻度	66	28	<u>0</u>	2	44	53	193
	カテゴリ別の%	4.6%	2.7%	0.0%	3.3%	2.9%	2.5%	3.1%
普通養子縁組の養父	頻度	99	<u>41</u>	<u>0</u>	15	72	116	343
	カテゴリ別の%	6.9%	3.9%	0.0%	24.6%	4.8%	5.5%	5.5%
里父	頻度	1	1	0	0	1	0	3
	カテゴリ別の%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%
内縁の夫	頻度	65	42	21	4	<u>46</u>	105	283
	カテゴリ別の%	4.5%	4.0%	16.7%	6.6%	3.1%	5.0%	4.5%
実母	頻度	<u>1262</u>	<u>926</u>	117	53	1336	1996	5690
	カテゴリ別の%	88.1%	88.8%	92.9%	86.9%	89.5%	94.6%	90.8%
継母	頻度	12	6	1	0	5	7	31
	カテゴリ別の%	0.8%	0.6%	0.8%	0.0%	0.3%	0.3%	0.5%
普通養子縁組の養母	頻度	11	5	0	0	5	3	24
	カテゴリ別の%	0.8%	0.5%	0.0%	0.0%	0.3%	0.1%	0.4%
里母	頻度	2	0	0	0	1	0	3
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%
内縁の妻	頻度	2	1	1	0	5	5	14
	カテゴリ別の%	0.1%	0.1%	0.8%	0.0%	0.3%	0.2%	0.2%
実の兄弟	頻度	<u>853</u>	<u>624</u>	77	32	985	1361	3932
	カテゴリ別の%	59.5%	59.8%	61.1%	52.5%	66.0%	64.5%	62.7%
義理の兄弟	頻度	184	163	16	13	215	324	915
	カテゴリ別の%	12.8%	15.6%	12.7%	21.3%	14.4%	15.3%	14.6%
祖父	頻度	68	42	7	4	80	78	279
	カテゴリ別の%	4.7%	4.0%	5.6%	6.6%	5.4%	3.7%	4.5%
祖母	頻度	118	98	14	7	96	144	477
	カテゴリ別の%	8.2%	9.4%	11.1%	11.5%	6.4%	6.8%	7.6%
おじ	頻度	26	22	2	1	<u>6</u>	24	81
	カテゴリ別の%	1.8%	2.1%	1.6%	1.6%	0.4%	1.1%	1.3%
おば	頻度	20	24	1	1	12	22	80
	カテゴリ別の%	1.4%	2.3%	0.8%	1.6%	0.8%	1.0%	1.3%
その他の同居家族	頻度	19	17	3	0	8	21	68
	カテゴリ別の%	1.3%	1.6%	2.4%	0.0%	0.5%	1.0%	1.1%
その他	頻度	<u>14</u>	20	12	3	19	32	100
	カテゴリ別の%	1.0%	1.9%	9.5%	4.9%	1.3%	1.5%	1.6%
不明	頻度	5	5	0	0	27	<u>3</u>	40
	カテゴリ別の%	0.3%	0.5%	0.0%	0.0%	1.8%	0.1%	0.6%
	全体	1433	1043	126	61	1493	2111	6267

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q12①. 3~6 ヶ月健診の受診状況

- 可能性を含め「受診した」が50.1%で、「受診していない（可能性がある）」1.9%を大きく上回る。

Q12① 3~6ヶ月健診の受診状況

	度数	%	%グラフ
受診した（可能性が高い）	3158	50.1	
受診していない（可能性が高い）	121	1.9	
年齢未到達	102	1.6	
不明	2815	44.7	
無回答	104	1.7	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査では、「受診した（可能性がある）」が 37.9%であり、今回の調査結果の方がやや上回っている。また、平成 25 年調査では、「不明」が 57%と半数以上を占めたが今回は 37.3%と受診の有無を確認するようになってきたことがうかがわれる。

「不明」がそのまま未受診を意味しないにしても、半分以下の事例でしか 3-6 か月健診の施行が確かめられていないというのは、一般に乳幼児健診の受診率が 80%を超えていることと比較すると、虐待事例では極端に低い受診率であるといえる。

3~6 か月健診の受診状況と虐待種別のクロス表

身体的虐待は、受診状況が「不明」であるという報告が多く、ネグレクトは「受診していない」という報告が多かった。これは、健診に行けていないことが虐待的な状況のサインであることを示していると考えられる。ネグレクトが未受診と関係しているのは、ネグレクトが他の虐待よりも乳幼児年代に集中しているので健診状況の情報が得られているケースが多いためであると思われる。また心理的虐待（DV 目撃）は「受診した」報告は高く、「受診していない」「不明」報告は低かったが、DV 事例が乳幼児の段階ではそれなりに家族が機能していることを示した結果だと思われる。

Q12① 3~6か月健診の受診状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
受診した（可能性が高い）	頻度	695	502	59	35	736	1121	3148
	カテゴリ別の%	49.3%	48.8%	46.8%	58.3%	50.3%	53.8%	51.0%
受診していない（可能性が高い）	頻度	22	44	6	0	23	<u>26</u>	121
	カテゴリ別の%	1.6%	4.3%	4.8%	0.0%	1.6%	1.2%	2.0%
年齢未到達	頻度	17	32	1	0	<u>12</u>	40	102
	カテゴリ別の%	1.2%	3.1%	0.8%	0.0%	0.8%	1.9%	1.7%
不明	頻度	676	450	60	25	693	<u>898</u>	2802
	カテゴリ別の%	47.9%	43.8%	47.6%	41.7%	47.3%	43.1%	45.4%
	総数	1410	1028	126	60	1464	2085	6173

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

3～6 か月検診の受診状況と虐待重症度のクロス表

虐待重症度の一番低い「虐待の危惧あり」は「受診した」報告が多く、中度虐待では「受診していない」報告が多かった。これは3～6 か月健診の受診状況が、虐待の重症度の指標になり得ることを示す所見といえる。また、重度虐待と生命の危険ありは「年齢未到達」との報告が多く、特に生命に危険のある事例においては、3～6 か月健診のチェックより早期のチェックが必要となることを意味する結果であると言えよう。

Q12① 3～6か月健診の受診状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
受診した（可能性が高い）	頻度	649	1504	758	124	11	83	3129
	カテゴリ別の%	55.7%	51.3%	48.9%	52.1%	40.7%	37.9%	51.0%
受診していない（可能性が高い）	頻度	17	53	42	5	1	1	119
	カテゴリ別の%	1.5%	1.8%	2.7%	2.1%	3.7%	0.5%	1.9%
年齢未到達	頻度	20	37	25	9	9	1	101
	カテゴリ別の%	1.7%	1.3%	1.6%	3.8%	33.3%	0.5%	1.6%
不明	頻度	479	1337	726	100	6	134	2782
	カテゴリ別の%	41.1%	45.6%	46.8%	42.0%	22.2%	61.2%	45.4%
	総数	1165	2931	1551	238	27	219	6131

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q12②. 1歳6か月検診の受診状況

- 「受診した（可能性が高い）」が44.9%で、「受診していない（可能性がある）」2.7%を大きく上回った。

Q12② 1歳6ヶ月健診の受診状況

	度数	%	%グラフ
受診した（可能性が高い）	2830	44.9	
受診していない（可能性が高い）	168	2.7	
年齢未到達	424	6.7	
不明	2647	42.0	
無回答	231	3.7	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「受診した（可能性がある）」が34.1%であり、今回の調査結果の方がやや上回っている。また、平成 25 年度調査では、「不明」が54.1%と半数以上を占めたが今回は35.0%と受診の有無を確認するようになってきたことがうかがわれる。

虐待事例で半数程度しか受診が確認できないことは、1歳6か月健診は一般の受診率は9割を超えていることを考えれば、非常に低いといえる。1歳6か月健診に来ないことが虐待リスクの指標になる可能性があらためて示唆される。

1 歳 6 か月健診の受診状況と虐待種別のクロス表

3~6 か月健診と同様に、身体的虐待では「不明」、ネグレクトでは「受診していない」報告が多かった。3~6 か月健診と異なる所見としては、性的虐待で「受診した」報告が多いことである。これは性的虐待が、家庭機能や養育機能全体の低下とは別の要因で起きる虐待であることを示していると思われる。

Q12② 1歳6か月健診の受診状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
受診した (可能性が高い)	頻度	665	449	57	36	687	929	2823
	カテゴリ別の%	47.7%	44.4%	47.1%	60.0%	47.7%	45.9%	46.7%
受診していない (可能性が高い)	頻度	29	60	8	0	31	40	168
	カテゴリ別の%	2.1%	5.9%	6.6%	0.0%	2.2%	2.0%	2.8%
年齢未到達	頻度	48	79	4	0	77	213	421
	カテゴリ別の%	3.4%	7.8%	3.3%	0.0%	5.3%	10.5%	7.0%
不明	頻度	651	424	52	24	645	840	2636
	カテゴリ別の%	46.7%	41.9%	43.0%	40.0%	44.8%	41.5%	43.6%
	総数	1393	1012	121	60	1440	2022	6048

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

1 歳 6 か月健診の受診状況と虐待重症度のクロス表

虐待重症度の一番低い「虐待の危惧あり」で「受診した」「年齢未到達」との報告が多く、中度虐待では「受診していない」との報告がやや多い。これは3~6 か月健診と同様、1 歳 6 か月健診の受診状況が、虐待の重症度の指標になり得ることを示している所見といえる。また生命の危機ありは「年齢未到達」との報告も多い。生命の危機が生じる事例が0 歳代で頻出することの反映でもあり、このような事例のチェックには1 歳 6 か月時の健診では遅い面があるといえる。

Q12② 1歳6か月健診の受診状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
受診した (可能性が高い)	頻度	569	1372	661	122	6	72	2802
	カテゴリ別の%	50.3%	47.6%	43.4%	52.1%	25.0%	34.6%	46.7%
受診していない (可能性が高い)	頻度	19	85	55	6	0	2	167
	カテゴリ別の%	1.7%	2.9%	3.6%	2.6%	0.0%	1.0%	2.8%
年齢未到達	頻度	95	162	117	22	14	9	419
	カテゴリ別の%	8.4%	5.6%	7.7%	9.4%	58.3%	4.3%	7.0%
不明	頻度	448	1266	690	84	4	125	2617
	カテゴリ別の%	39.6%	43.9%	45.3%	35.9%	16.7%	60.1%	43.6%
	総数	1131	2885	1523	234	24	208	6005

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q12③. 3歳児検診の受診状況

- 「受診した（可能性が高い）」が38.2%で、「受診していない（可能性が高い）」2.5%を大きく上回った。

Q12③ 3歳児健診の受診状況

	度数	%	%グラフ
受診した（可能性が高い）	2405	38.2	
受診していない（可能性が高い）	157	2.5	
年齢未到達	823	13.1	
不明	2585	41.0	
無回答	330	5.2	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査では、「受診した（可能性がある）」が 28.9%であり、今回の調査結果の方がやや上回っている。また、平成 25 年調査では「不明」が 52.5%と半数以上を占めたが、今回は 34.2%と受診の有無を確認するようになってきたことがうかがわれる。

3歳児健診の受診状況と虐待種別のクロス表

1歳6か月健診と同様に、身体的虐待では「不明」の報告が、ネグレクトでは「受診していない」報告が、性的虐待は「受診した」報告がそれぞれ多くなっていた。

Q12③ 3歳児健診の受診状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
		頻度	601	387	45	33	578	
受診した（可能性が高い）	カテゴリ別の%	43.8%	39.0%	38.5%	55.0%	40.8%	37.9%	40.3%
受診していない（可能性が高い）	頻度	27	45	7	2	41	<u>35</u>	157
	カテゴリ別の%	2.0%	4.5%	6.0%	3.3%	2.9%	1.8%	2.6%
年齢未到達	頻度	<u>96</u>	149	10	<u>1</u>	174	390	820
	カテゴリ別の%	7.0%	15.0%	8.5%	1.7%	12.3%	19.6%	13.8%
不明	頻度	648	412	55	24	622	<u>813</u>	2574
	カテゴリ別の%	47.2%	41.5%	47.0%	40.0%	44.0%	40.8%	43.3%
	総数	1372	993	117	60	1415	1992	5949

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

3 歳児検診の受診状況と虐待重症度のクロス表

虐待の危惧あり・重度虐待・生命の危機ありでは、「年齢未到達」という報告が多かった。また生命の危機ありでは「受診した」報告が低かった。1歳6ヶ月健診と同様、生命の危機が生じる事例は0歳代で頻出することの反映であり、3歳児健診では、深刻な事例を見出す上では時期的に遅い場合が多いことを示していると思われる。

Q12③ 3歳児健診の受診状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
受診した（可能性が高い）	頻度	467	1173	574	98	<u>4</u>	<u>63</u>	2379
	カテゴリ別の%	42.1%	41.4%	38.2%	42.4%	16.7%	30.7%	40.3%
受診していない（可能性が高い）	頻度	29	79	42	5	0	2	157
	カテゴリ別の%	2.6%	2.8%	2.8%	2.2%	0.0%	1.0%	2.7%
年齢未到達	頻度	<u>179</u>	<u>349</u>	209	<u>43</u>	<u>16</u>	21	817
	カテゴリ別の%	16.1%	12.3%	13.9%	18.6%	66.7%	10.2%	13.8%
不明	頻度	<u>435</u>	1234	678	<u>85</u>	<u>4</u>	<u>119</u>	2555
	カテゴリ別の%	39.2%	43.5%	45.1%	36.8%	16.7%	58.0%	43.2%
	総数	1110	2835	1503	231	24	205	5908

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q13. 母子手帳の交付

- 「不明」が半数近く（48.4%）を占めていた。「不明」3,050件を除いた3,250件のうち、母子手帳交付「あり」は約98%と高い割合を示していた。

Q13 母子手帳の交付

	度数	%	% グラフ
あり	3046	48.3	
なし	69	1.1	
不明	3050	48.4	
無回答	135	2.1	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度も、「不明」「無回答」3,895 件を除いた 3,539 件のうち、母子手帳交付「あり」が 99% と今回と同様高い割合であった。

不明が半数程度であり、母子手帳の交付を受けていないことやそれが確認できないことが、虐待事例のサインとなり得る可能性を示唆する。

母子手帳の交付と虐待種別のクロス表

ネグレクトは母子手帳「交付あり」の報告が多かった。一方心理的虐待・DV目撃は「交付あり」という報告が相対的に少なく、「不明」報告が多かった。ネグレクトで母子手帳の交付が多いのは、一見矛盾するようだが、ネグレクトでは子どもが低年齢時に頻発するケースが多いため、調査として母子手帳の確認が取られやすいことと関係していると考えられる。一方心理的虐待は、比較的高年齢の子どもが対象になることが多く、母子手帳の確認が難しい事例がふえることがこの所見に結び付いていると思われる。

Q13 母子手帳の交付と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)		心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
				性的虐待				
あり	頻度	708	557	69	37	681	986	3038
	カテゴリ別の%	50.4%	54.4%	56.1%	60.7%	46.8%	47.5%	49.5%
なし	頻度	20	11	5	1	9	23	69
	カテゴリ別の%	1.4%	1.1%	4.1%	1.6%	0.6%	1.1%	1.1%
不明	頻度	677	455	49	23	765	1067	3036
	カテゴリ別の%	48.2%	44.5%	39.8%	37.7%	52.6%	51.4%	49.4%
総数		1405	1023	123	61	1455	2076	6143

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q14. 子供が属する家庭の経済状況

- 全体的には「課税世帯 (49.4%)」が最も高い値を示し、「不明 (33.4%)」「生活保護世帯 (10.0%)」「非課税世帯 (6.5%)」と続いていた。

Q14 子どもが属する世帯の経済状況

	度数	%	%グラフ
生活保護世帯	630	10.0	
非課税世帯	410	6.5	
課税世帯	3115	49.4	
不明	2103	33.4	
無回答	42	0.7	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

「課税世帯」が 40.7% で最も高く、次いで「生活保護世帯」16.5%、「特別区民税または市町村民税の非課税世帯」8.9%であった。前回と比して今回の調査では「課税世帯」の割合が増え、「生活保護世帯」の割合が減っている。一版と比べると生活保護の率はかなり高く、経済的問題が虐待の背景の 1 つであることが示唆される。

子どもが属する世帯の経済状況と虐待種別のクロス表

ネグレクト・同居人の虐待放置は「生活保護世帯」「非課税世帯」が多く報告された。一方身体的虐待・性的虐待・心理的虐待（DV目撃）は「課税世帯」が多く報告されていた。各虐待種別特有の主たる虐待者（身体的虐待は父親等男性が、ネグレクトは母親等女性が多い）の経済状況が反映された可能性がある。

Q14 子どもの世帯の経済状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
生活保護世帯	頻度	<u>120</u>	<u>241</u>	<u>37</u>	3	<u>108</u>	<u>119</u>	628
	カテゴリ別の%	8.4%	23.2%	29.6%	5.0%	7.3%	5.7%	10.1%
非課税世帯	頻度	<u>73</u>	<u>148</u>	<u>14</u>	2	<u>73</u>	<u>100</u>	410
	カテゴリ別の%	5.1%	14.2%	11.2%	3.3%	4.9%	4.8%	6.6%
課税世帯	頻度	<u>790</u>	<u>310</u>	<u>44</u>	<u>42</u>	762	<u>1155</u>	3103
	カテゴリ別の%	55.5%	29.8%	35.2%	70.0%	51.4%	54.9%	49.8%
不明	頻度	<u>440</u>	340	<u>30</u>	<u>13</u>	<u>540</u>	729	2092
	カテゴリ別の%	30.9%	32.7%	24.0%	21.7%	36.4%	34.7%	33.6%
	総数	1423	1039	125	60	1483	2103	6233

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

子どもが属する世帯の経済状況と虐待重症度のクロス表

虐待の危惧あり・軽度虐待では「課税世帯」が多く、中度虐待・重度虐待では「生活保護世帯」「非課税世帯」が多い傾向がはっきりと見て取れた。経済的な問題が虐待をより重症にせしめることを反映した結果である。

Q14 子どもの世帯の経済状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
生活保護世帯	頻度	<u>84</u>	293	<u>183</u>	<u>54</u>	1	<u>10</u>	625
	カテゴリ別の%	7.2%	9.9%	11.7%	22.1%	3.8%	4.5%	10.1%
非課税世帯	頻度	<u>61</u>	<u>173</u>	<u>132</u>	<u>33</u>	3	<u>5</u>	407
	カテゴリ別の%	5.2%	5.8%	8.4%	13.5%	11.5%	2.2%	6.6%
課税世帯	頻度	<u>646</u>	<u>1532</u>	<u>731</u>	<u>101</u>	11	<u>66</u>	3087
	カテゴリ別の%	55.1%	51.7%	46.7%	41.4%	42.3%	29.6%	49.9%
不明	頻度	382	963	518	<u>56</u>	11	<u>142</u>	2072
	カテゴリ別の%	32.6%	32.5%	33.1%	23.0%	42.3%	63.7%	33.5%
	総数	1173	2961	1564	244	26	223	6191

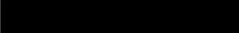
***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

II. 虐待者について

Q15. 虐待者の続柄等

- 設問：「虐待者が複数いる場合は、主な2人について「主たる者」「従たる者」として記入してください。虐待によって子どもに一番深刻な影響を与えている者を「主たる者」と判断してください」
- 主たる虐待者は、「実母」が2,904件（46.1%）と最も多く、次いで「実父」2,569件（40.8%）であり、実父母による虐待が9割近くを占めていた。複数の虐待者を報告したケースは2,085件に及んだ。
 - 従たる虐待者では、「実母」1,299件（20.6%）「実父」507件（8.0%）という順になっており、複数の虐待者の少なくともどちらかに一方に実父母がかかわる割合が高いことが伺える。

Q15 虐待者

	主たる虐待者			従たる虐待者		
	度数	%	%グラフ	度数	%	%グラフ
実父	2569	40.8		507	8.0	
継父	132	2.1		32	0.5	
普通養子縁組の養父	216	3.4		53	0.8	
里親	1	0.0		0	0.0	
母の内縁の夫	188	3.0		76	1.2	
実母	2904	46.1		1299	20.6	
継母	15	0.2		7	0.1	
普通養子縁組の養母	12	0.2		8	0.1	
父の内縁の妻	6	0.1		4	0.1	
実の兄弟	3	0.0		5	0.1	
義理の兄弟	1	0.0		2	0.0	
祖父	28	0.4		21	0.3	
祖母	33	0.5		36	0.6	
おじ	15	0.2		4	0.1	
おば	5	0.1		5	0.1	
その他の同居の家族	12	0.2		3	0.0	
その他	35	0.6		12	0.2	
不明	49	0.8		11	0.2	
無回答	76	1.2		4215	66.9	
合計	6300	100		6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、7,434 件のうち「実母」が 3,828 件（51.1%）と最も多く、次いで「実父」2,556 件（34.4%）であった。平成 25 年調査と今回の調査を比較すると、実母の割合が 1 割低下し、実父が 1 割増加していた。心理的虐待（DV の目撃）で主たる虐待者として実父が特に多いことを踏まえると、実父の割合増加は主として心理的虐待（DV 目撃）の増加によるものと考えられる。

主たる虐待者と虐待種別のクロス表

主たる虐待者と虐待種別の関係を見ると、身体的虐待については、「実母」が最多であったが他の虐待種と比較すると有意ではなく、「継父」「普通養子縁組の養父」「継母」「祖父」「おじ」の割合が、他の種類の虐待と比べると多かった。さらに「実父」が主な虐待者であることが約 4 割で 2 番目に多いが、他の虐待種との比較では低い傾向である。「実父」が特に多いのは心理的虐待（DV）の場合（65.3%）であり、他の虐待種では相対的に低くなったと思われる。

ネグレクト・心理的虐待では、「実母」が最多であり、他の虐待種と比べても有意に多かった。性的虐待は、最多が「実父（48.4%）」で、次が「養父（24.2%）」であり、養父の割合が他の虐待に比べて高かった。心理的虐待（DV）では多い順に、「実父（65.3%）」、「実母（21.1%）」、「母の内縁の夫（4.7%）」、「養父（4.3%）」であり、他の虐待との比較では「実父」「養父」「母の内縁の夫」が高かった。

主たる虐待者と虐待重症度のクロス表

重症度で最も高い「生命の危機あり」では「実母（55.6%）」、「実父（25.9%）」が割合として多かった。重度・中度虐待では「実父」「実母」の順に多く、軽度虐待・虐待の危惧ありでは「実母」「実父」の順となる。1 歳未満が約 7 割を占める「生命の危機あり」以外においては、「実父」の方が重度の虐待を生じさせている傾向がうかがわれた。

主たる虐待者と虐待種別のクロス表

Q15 主たる虐待者と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
実父	頻度	<u>537</u>	<u>151</u>	<u>19</u>	29	<u>465</u>	<u>1359</u>	2560
	カテゴリ別の%	37.8%	14.7%	15.1%	47.5%	31.4%	65.2%	41.3%
継父	頻度	<u>50</u>	<u>5</u>	0	<u>4</u>	25	48	132
	カテゴリ別の%	3.5%	0.5%	0.0%	6.6%	1.7%	2.3%	2.1%
普通養子 縁組の養父	頻度	<u>65</u>	<u>9</u>	<u>0</u>	<u>15</u>	<u>36</u>	<u>91</u>	216
	カテゴリ別の%	4.6%	0.9%	0.0%	24.6%	2.4%	4.4%	3.5%
里親	頻度	0	0	0	0	1	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%
母の内縁の夫	頻度	43	<u>2</u>	<u>14</u>	4	<u>26</u>	<u>99</u>	188
	カテゴリ別の%	3.0%	0.2%	11.1%	6.6%	1.8%	4.7%	3.0%
実母	頻度	658	<u>840</u>	<u>77</u>	<u>5</u>	<u>872</u>	<u>444</u>	2896
	カテゴリ別の%	46.4%	81.7%	61.1%	8.2%	58.8%	21.3%	46.7%
継母	頻度	<u>7</u>	3	1	0	2	2	15
	カテゴリ別の%	0.5%	0.3%	0.8%	0.0%	0.1%	0.1%	0.2%
普通養子 縁組の養母	頻度	3	4	0	0	4	1	12
	カテゴリ別の%	0.2%	0.4%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	0.2%
父の内縁の妻	頻度	0	0	1	0	<u>4</u>	1	6
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.8%	0.0%	0.3%	0.0%	0.1%
実の兄弟	頻度	0	<u>2</u>	0	0	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
義理の兄弟	頻度	0	<u>1</u>	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
祖父	頻度	<u>13</u>	1	1	1	4	8	28
	カテゴリ別の%	0.9%	0.1%	0.8%	1.6%	0.3%	0.4%	0.5%
祖母	頻度	9	5	2	0	12	<u>5</u>	33
	カテゴリ別の%	0.6%	0.5%	1.6%	0.0%	0.8%	0.2%	0.5%
おじ	頻度	<u>7</u>	0	1	<u>2</u>	4	<u>1</u>	15
	カテゴリ別の%	0.5%	0.0%	0.8%	3.3%	0.3%	0.0%	0.2%
おば	頻度	1	2	0	0	0	2	5
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%
その他の同居家族	頻度	4	0	<u>3</u>	0	4	1	12
	カテゴリ別の%	0.3%	0.0%	2.4%	0.0%	0.3%	0.0%	0.2%
その他	頻度	7	<u>1</u>	<u>7</u>	1	<u>2</u>	17	35
	カテゴリ別の%	0.5%	0.1%	5.6%	1.6%	0.1%	0.8%	0.6%
不明	頻度	15	<u>2</u>	0	0	<u>21</u>	<u>6</u>	44
	カテゴリ別の%	1.1%	0.2%	0.0%	0.0%	1.4%	0.3%	0.7%
	総数	1419	1028	126	61	1482	2085	6201

主たる虐待者と虐待重症度のクロス表

Q15 主たる虐待者と主たる虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危機 あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機 あり	不明	合計
実父	頻度	485	<u>1178</u>	<u>710</u>	102	7	<u>70</u>	2552
	カテゴリ別の%	41.3%	40.0%	45.8%	41.5%	25.9%	32.4%	41.4%
継父	頻度	29	58	36	6	0	2	131
	カテゴリ別の%	2.5%	2.0%	2.3%	2.4%	0.0%	0.9%	2.1%
普通養子 縁組の養父	頻度	33	<u>80</u>	<u>73</u>	<u>21</u>	2	6	215
	カテゴリ別の%	2.8%	2.7%	4.7%	8.5%	7.4%	2.8%	3.5%
里親	頻度	<u>1</u>	0	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
母の内縁の夫	頻度	27	91	46	<u>18</u>	1	<u>1</u>	184
	カテゴリ別の%	2.3%	3.1%	3.0%	7.3%	3.7%	0.5%	3.0%
実母	頻度	566	<u>1453</u>	<u>641</u>	<u>91</u>	15	99	2865
	カテゴリ別の%	48.3%	49.3%	41.3%	37.0%	55.6%	45.8%	46.5%
継母	頻度	1	7	4	1	<u>1</u>	1	15
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.3%	0.4%	3.7%	0.5%	0.2%
普通養子 縁組の養母	頻度	1	7	3	1	0	0	12
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.2%	0.4%	0.0%	0.0%	0.2%
父の内縁の妻	頻度	2	4	0	0	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
実の兄弟	頻度	0	2	0	0	0	<u>1</u>	3
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%
義理の兄弟	頻度	0	0	1	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
祖父	頻度	6	13	7	0	0	2	28
	カテゴリ別の%	0.5%	0.4%	0.5%	0.0%	0.0%	0.9%	0.5%
祖母	頻度	6	21	3	1	0	1	32
	カテゴリ別の%	0.5%	0.7%	0.2%	0.4%	0.0%	0.5%	0.5%
おじ	頻度	1	10	4	0	0	0	15
	カテゴリ別の%	0.1%	0.3%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
おば	頻度	2	3	0	0	0	0	5
	カテゴリ別の%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
その他の 同居家族	頻度	3	3	3	0	0	<u>3</u>	12
	カテゴリ別の%	0.3%	0.1%	0.2%	0.0%	0.0%	1.4%	0.2%
その他	頻度	7	<u>10</u>	12	<u>4</u>	0	2	35
	カテゴリ別の%	0.6%	0.3%	0.8%	1.6%	0.0%	0.9%	0.6%
不明	頻度	<u>3</u>	<u>6</u>	8	1	1	<u>28</u>	47
	カテゴリ別の%	0.3%	0.2%	0.5%	0.4%	3.7%	13.0%	0.8%
総数		1173	2946	1551	246	27	216	6159

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q15-2. 妊産婦検診の受診 (Q15 主たる虐待者「実母」2904 ケース限定)

- 無回答を除いた 800 件のうち「不明」が 518 件 (64.7%) を占めていた。不明を除いた 282 件では、97%が妊産婦健診を受診していた。特に年齢の高い児童の事例では十分な情報が得られていない面があると思われる。

Q15-2 妊産婦健診の受診状況 (Q15主たる虐待者が実母のケースのみ)

	度数	%	%グラフ
受けた	274	9.4	
受けていない	8	0.3	
不明	518	17.8	
無回答	2104	72.5	
合計	2904	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、不明が 64.4%と高く、それを除いた件数では 95.4%の母親が妊産婦検診を受診していた。

Q15-3. 出産時の状況 (Q15 主たる虐待者「実母」2904 ケース限定)

- 無回答を除いた 842 件のうち、不明が 510 件 (60.5%) と最も多く、「通常に病院等で出産」が 300 件 (35.6%) であった。不明を除いた 332 件では、「通常」は 90.3%と大半を占めた。

Q15-3 出産時の状況 (Q15主たる虐待者が実母のケースのみ)

	度数	%	%グラフ
通常に病院等で出産	300	10.3	
病院等への飛び込み出産	6	0.2	
自宅分娩	24	0.8	
その他	2	0.1	
不明	510	17.6	
無回答	2062	71.0	
合計	2904	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査でも、「不明」「無回答」を除いた 1,621 件のうち、「通常に病院等で出産」が 1,544 件 (95.2%) と最も多く、今回の調査結果と同様であった。

これ以降出てくる「虐待者」は「主たる虐待者」についての回答となる。

Q16. 虐待者の年齢（受理時）

- 主たる虐待者の平均年齢は 37.4 歳（標準偏差 8.9）であった。
- 30 代が 2,427 件（38.5%）と最も多く、次いで 40 代 1,810 件（28.7%）、20 代 1,228 件（19.5%）と続いており、20～40 代がほぼ 9 割を占めていた。

Q16 虐待者の年齢カテゴリ

	度数	%	% グラフ
10代	78	1.2	
20代	1228	19.5	
30代	2427	38.5	
40代	1810	28.7	
50代以上	361	5.7	
無回答	396	6.3	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、30 代が 40.5%と最も高く、次いで 40 代 28.8%、20 代 20.3%と続いており、20～40 代が過半数を占めており、今回の調査結果でも同様の傾向が示された。

Q17. 虐待者の就労状況

- 主たる虐待者では、「正規就労」が 45.2%と最も多かった。

Q17 虐待者の就労状況

	度数	%	% グラフ
正規就労	2848	45.2	
非正規雇用	1078	17.1	
内職	19	0.3	
家事専念	627	10.0	
無職	686	10.9	
学生	6	0.1	
その他	59	0.9	
不明	870	13.8	
無回答	107	1.7	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査でも、「正規就労」が 35.1%と最も多く、無回答が含まれているため単純比較できないが、今回の調査結果の方が 10%ほど高くなっている。主たる虐待者として父親が増加した反映かもしれない。

虐待者の就労状況と虐待種別のクロス表

身体的虐待・DV 目撃・性的虐待では「正規就労」が、ネグレクトでは「無職」「非正規雇用」「家事専念」が多かった。心理的虐待でも「家事専念」が多く報告されていた。

Q17 虐待者の就労状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
正規就労	頻度	690	188	34	40	563	1327	2842
	カテゴリ別の%	48.6%	18.3%	27.2%	66.7%	38.4%	64.1%	46.0%
非正規雇用	頻度	267	329	34	4	273	170	1077
	カテゴリ別の%	18.8%	31.9%	27.2%	6.7%	18.6%	8.2%	17.4%
内職	頻度	7	5	0	0	7	<u>0</u>	19
	カテゴリ別の%	0.5%	0.5%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.3%
家事専念	頻度	148	124	10	<u>1</u>	206	134	623
	カテゴリ別の%	10.4%	12.0%	8.0%	1.7%	14.1%	6.5%	10.1%
無職	頻度	122	257	33	6	152	114	684
	カテゴリ別の%	<u>8.6%</u>	25.0%	26.4%	10.0%	10.4%	5.5%	11.1%
学生	頻度	2	2	0	0	0	2	6
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%
その他	頻度	11	18	1	1	15	13	59
	カテゴリ別の%	0.8%	1.7%	0.8%	1.7%	1.0%	0.6%	1.0%
不明	頻度	174	107	13	8	250	310	862
	カテゴリ別の%	12.2%	10.4%	10.4%	13.3%	17.1%	15.0%	14.0%
	総数	1421	1030	125	60	1466	2070	6172

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待者の就労状況と虐待種別のクロス表

「虐待の危惧あり」は「正規就労」が多く、「軽度虐待」は「家事専念」、「中度虐待」は「正規就労」と「無職」が多い。「無職」は中度虐待以上のいずれでも報告頻度が高くなっていた。

Q17 虐待者の就労状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
正規就労	頻度	572	1324	750	113	<u>6</u>	<u>61</u>	2826
	カテゴリ別の%	49.3%	45.1%	48.4%	46.1%	23.1%	29.0%	46.1%
非正規雇用	頻度	185	541	265	50	5	<u>23</u>	1069
	カテゴリ別の%	15.9%	18.4%	17.1%	20.4%	19.2%	11.0%	17.5%
内職	頻度	4	7	8	0	0	0	19
	カテゴリ別の%	0.3%	0.2%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%
家事専念	頻度	134	342	114	<u>12</u>	1	16	619
	カテゴリ別の%	11.5%	11.7%	7.4%	4.9%	3.8%	7.6%	10.1%
無職	頻度	121	281	201	55	7	<u>13</u>	678
	カテゴリ別の%	10.4%	9.6%	13.0%	22.4%	26.9%	6.2%	11.1%
学生	頻度	1	3	2	0	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
その他	頻度	14	33	<u>8</u>	0	0	4	59
	カテゴリ別の%	1.2%	1.1%	0.5%	0.0%	0.0%	1.9%	1.0%
不明	頻度	130	404	201	15	7	93	850
	カテゴリ別の%	11.2%	13.8%	13.0%	6.1%	26.9%	44.3%	13.9%
	総数	1161	2935	1549	245	26	210	6126

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q18. 虐待者の最終学歴

- 学歴が明らかな中では、「高校等卒業」が最も多い。「不明」が約 8 割と大半を占めている。

Q18 虐待者の最終学歴

	度数	%	% グラフ
中学校卒業	231	3.7	
高校等中退	227	3.6	
高校等卒業	388	6.2	
短大・高等専門学校卒業	154	2.4	
大学校卒業	234	3.7	
その他	24	0.4	
不明	5005	79.4	
無回答	37	0.6	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「不明」が 70.2%と最も多く、「高校等卒業」が 11.5%と今回よりも多かった。

虐待者の最終学歴と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」は高卒・専門・大卒が多く、「ネグレクト」「同居人の虐待放置」は中卒・高卒・高校中退が多く報告されていた。

Q18 虐待者の最終学歴と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
			ネグレクト					
中学校卒業	頻度	50	89	<u>9</u>	2	46	<u>35</u>	231
	カテゴリ別の%	3.5%	8.6%	7.1%	3.3%	3.1%	1.7%	3.7%
高校等中退	頻度	50	81	13	1	43	<u>39</u>	227
	カテゴリ別の%	3.5%	7.8%	10.3%	1.6%	2.9%	1.9%	3.6%
高校等卒業	頻度	106	108	15	4	84	<u>68</u>	385
	カテゴリ別の%	7.4%	10.4%	11.9%	6.6%	5.7%	3.2%	6.2%
短大・専門学校	頻度	51	23	1	2	50	<u>27</u>	154
	カテゴリ別の%	3.6%	2.2%	0.8%	3.3%	3.4%	1.3%	2.5%
大学校卒業	頻度	74	<u>21</u>	4	5	56	74	234
	カテゴリ別の%	5.2%	2.0%	3.2%	8.2%	3.8%	3.5%	3.8%
その他	頻度	6	10	0	1	2	5	24
	カテゴリ別の%	0.4%	1.0%	0.0%	1.6%	0.1%	0.2%	0.4%
不明	頻度	1088	<u>705</u>	<u>84</u>	46	1204	1856	4983
	カテゴリ別の%	76.4%	68.0%	66.7%	75.4%	81.1%	88.2%	79.9%
総数		1425	1037	126	61	1485	2104	6238

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q19. 虐待者の精神障害の有無

- 調査時（受理時から約6ヶ月後）における精神障害の有無を尋ねる設問である。
- 約半数（53.9%）が「精神障害はないと思われる」であったが、18.9%で「精神障害又はその疑いがある」と報告されていた。
- 平成25年度調査では、心身の状態についての設問であり、精神状況については「精神障害又はその疑い」が16.4%と最も多かった。

Q19 虐待者の精神障害の有無

	度数	%	%グラフ
精神障害又はその疑いがある	1193	18.9	
精神障害はないと思われる	3394	53.9	
不明	1531	24.3	
無回答	182	2.9	
合計	6300	100	

虐待者の精神障害の有無と虐待種別のクロス表

精神障害が報告される頻度が多い虐待種として「ネグレクト」、精神障害はないと報告される虐待種としては「身体的虐待」がそれぞれ該当していた。「DV目撃」は精神障害かどうか不明という報告が多かった。

Q19 虐待者の精神障害の有無と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)			心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
			ネグレクト	性的虐待				
精神障害又はその疑いがある	頻度	264	295	33	8	305	280	1185
	カテゴリ別の%	18.8%	28.9%	26.6%	13.1%	21.2%	13.6%	19.4%
精神障害はないと思われる	頻度	820	556	63	34	815	1100	3388
	カテゴリ別の%	58.5%	54.4%	50.8%	55.7%	56.7%	53.6%	55.6%
不明	頻度	317	171	28	19	318	672	1525
	カテゴリ別の%	22.6%	16.7%	22.6%	31.1%	22.1%	32.7%	25.0%
	総数	1401	1022	124	61	1438	2052	6098

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待者の精神障害の有無と虐待重症度のクロス表

虐待重症度が高くなるほど（中度虐待以上）精神障害が報告される頻度が高く、比較的重症度が軽度であるほど（危惧あり・軽度虐待）精神障害はないと報告される頻度が高くなっていった。

Q19 虐待者の精神障害の有無と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
精神障害又はその疑いがある	頻度	185	507	382	81	11	19	1185
	カテゴリ別の%	16.1%	17.4%	24.9%	33.1%	40.7%	10.0%	19.5%
精神障害はないと思われる	頻度	717	1727	750	109	12	52	3367
	カテゴリ別の%	62.5%	59.2%	48.8%	44.5%	44.4%	27.4%	55.5%
不明	頻度	246	684	404	55	4	119	1512
	カテゴリ別の%	21.4%	23.4%	26.3%	22.4%	14.8%	62.6%	24.9%
	総数	1148	2918	1536	245	27	190	6064

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q19-1. 虐待者の精神障害の治療・相談

(Q19「精神障害又はその疑い」回答 1193 ケース限定)

- 精神障害に対する治療・相談について回答のあった 1,193 件のうち、496 件 (41.6%) が治療・相談に行っていた。しかし、「不明」を含む「治療不十分」「治療していない」ケースも半数以上を占めていた。

Q19-1 虐待者の治療相談 (Q19「精神障害がある」と回答ケース限定)

	度数	%	% グラフ
治療・相談に行っている	496	41.6	
治療・相談に行ったが不十分なもの	229	19.2	
治療していないと思われる	325	27.2	
不明	82	6.9	
無回答	61	5.1	
合計	1193	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、心身の状況に対する治療・相談について「定期的受診」「不定期の受診」は 2 割未満であり、過去 5 年間で「治療・相談」の割合が高くなっていると考えられる。

虐待者の精神障害の治療相談と虐待重症度のクロス表

精神障害またはその疑いがあるとされた 1193 名を対象として、治療相談の有無と虐待重症度の関連を検討したところ、中度虐待において「治療していない」との報告が多く見られた。また重度虐待においては「治療に行ったが不十分」との報告が多かった。

治療相談の有無と虐待種別の関連も同様に検討したが、明確な関連は認められなかった。

19-1 虐待者の精神障害の治療相談と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危 惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危 機あり	不明	合計
治療・相談に 行っている	頻度	83	213	155	29	4	8	492
	カテゴリ別の%	46.4%	45.2%	42.0%	37.7%	44.4%	42.1%	43.8%
治療・相談に行ったが 不十分なもの	頻度	36	84	71	25	2	9	227
	カテゴリ別の%	20.1%	17.8%	19.2%	32.5%	22.2%	47.4%	20.2%
治療していないと 思われる	頻度	<u>37</u>	136	123	23	2	<u>2</u>	323
	カテゴリ別の%	20.7%	28.9%	33.3%	29.9%	22.2%	10.5%	28.7%
不明	頻度	23	38	<u>20</u>	<u>0</u>	1	0	82
	カテゴリ別の%	12.8%	8.1%	5.4%	0.0%	11.1%	0.0%	7.3%
総数		179	471	369	77	9	19	1124

***太字**はカイ2乗検定 (もしくは Fisher の直接確率計算) および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q19-2. 虐待者の精神障害の種類

(Q19「精神障害又はその疑い」回答 1193 ケース限定：複数回答)

- 報告が多い順に、「感情障害・うつ症状」が39.6%、「パーソナリティ障害」13.2%、「発達障害」13.2%、「アルコール使用障害」11.1%、「知的障害」10.5%、「不安障害・強迫性障害」10.6%、「統合失調症」7.5%であった。また「不明」が7.2%あり、診断の確認できないケースも少なくなかった。
- 平成25年度調査の「精神病又はその疑い」を今回は細かく診断名を尋ねたところ、「感情障害・うつ症状」が4割以上を占めていることが明らかになった。さらに「感情障害・うつ症状」はすべての虐待種別で4～5割を占め、特に実母に多いことが示された。

Q19-2 精神障害の種類 (Q19に「精神障害がある」と回答したケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
統合失調症やその類縁疾患	89	7.5	
感情障害・うつ症状	472	39.6	
不安障害・強迫性障害	126	10.6	
身体表現性障害・心身症	11	0.9	
PTSD・適応障害	35	2.9	
摂食障害	14	1.2	
パーソナリティ障害	158	13.2	
知的障害	125	10.5	
発達障害	158	13.2	
アルコール使用障害	132	11.1	
薬物使用障害	39	3.3	
ギャンブル障害	11	0.9	
インターネット依存症	2	0.2	
その他	50	4.2	
不明	86	7.2	
該当ケース数	1193		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成25年度調査との比較

障害の категория が異なるため、単純に比較できないが、精神障害を持つケースが多いことについては同様の傾向を確認したといえる。「感情障害・うつ症状」が4割存在することが確かめられ、それに対する治療が必要であることが明示された。

虐待者の精神障害（複数回答）と虐待種別のクロス表

全体としては、「感情障害・うつ症状」がまんべんなく全ての虐待種で4-5割を占めている。また「ネグレクト」において「知的障害」「発達障害」「アルコール使用障害」が多いこと、「DV目撃」において、「アルコール使用障害」が多いことが示された。

Q19-2 虐待者の精神疾患と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
統合失調症	頻度	14	22	2	0	27	20	85
	カテゴリ別の%	5.3%	7.5%	6.1%	0.0%	8.9%	7.1%	7.2%
感情障害・うつ症状	頻度	116	120	14	4	127	<u>88</u>	469
	カテゴリ別の%	43.9%	40.7%	42.4%	50.0%	41.6%	31.4%	39.6%
不安障害・強迫性障害	頻度	34	32	1	0	35	23	125
	カテゴリ別の%	12.9%	10.8%	3.0%	0.0%	11.5%	8.2%	10.5%
身体表現性障害・心身症	頻度	3	5	2	0	0	0	10
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	6.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%
PTSD・適応障害	頻度	7	7	3	0	8	10	35
	カテゴリ別の%	2.7%	2.4%	9.1%	0.0%	2.6%	3.6%	3.0%
摂食障害	頻度	7	3	0	0	3	1	14
	カテゴリ別の%	2.7%	1.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.4%	1.2%
パーソナリティ障害	頻度	30	35	4	0	41	48	158
	カテゴリ別の%	11.4%	11.9%	12.1%	0.0%	13.4%	17.1%	13.3%
知的障害	頻度	22	<u>57</u>	6	2	29	<u>9</u>	125
	カテゴリ別の%	8.3%	19.3%	18.2%	25.0%	9.5%	3.2%	10.5%
発達障害	頻度	44	<u>25</u>	2	0	45	42	158
	カテゴリ別の%	16.7%	8.5%	6.1%	0.0%	14.8%	15.0%	13.3%
アルコール使用障害	頻度	34	<u>25</u>	2	0	<u>23</u>	<u>48</u>	132
	カテゴリ別の%	12.9%	8.5%	6.1%	0.0%	7.5%	17.1%	11.1%
薬物使用障害	頻度	7	8	3	0	7	14	39
	カテゴリ別の%	2.7%	2.7%	9.1%	0.0%	2.3%	5.0%	3.3%
ギャンブル障害	頻度	1	6	0	0	4	0	11
	カテゴリ別の%	0.4%	2.0%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	0.9%
インターネット依存症	頻度	0	2	0	0	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
その他	頻度	6	10	1	<u>2</u>	<u>20</u>	11	50
	カテゴリ別の%	2.3%	3.4%	3.0%	25.0%	6.6%	3.9%	4.2%
不明	頻度	15	14	1	1	<u>30</u>	25	86
	カテゴリ別の%	5.7%	4.7%	3.0%	12.5%	9.8%	8.9%	7.3%
	全体	264	295	33	8	305	280	1185

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待者の精神障害（複数回答）と虐待重症度のクロス表

精神疾患の種類と虐待の重症度との間には、特にはっきりとした関連は見いだせなかった。「虐待の危惧」は「疾患不明」との報告頻度が高かった。

Q19-2 虐待者の精神疾患と主たる重症度のクロス集計表

		虐待の危 惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危 機あり	不明	合計
統合失調症	頻度	15	35	30	4	1	1	86
	カテゴリ別の%	8.1%	6.9%	7.9%	4.9%	9.1%	5.3%	7.3%
感情障害・うつ症状	頻度	77	185	165	29	5	9	470
	カテゴリ別の%	41.6%	36.5%	43.2%	35.8%	45.5%	47.4%	39.7%
不安障害・強迫性障害	頻度	16	53	36	16	0	3	124
	カテゴリ別の%	8.6%	10.5%	9.4%	19.8%	0.0%	15.8%	10.5%
身体表現性障害・ 心身症	頻度	3	2	6	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	1.6%	0.4%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%
PTSD・適応障害	頻度	9	<u>9</u>	8	5	1	<u>2</u>	34
	カテゴリ別の%	4.9%	1.8%	2.1%	6.2%	9.1%	10.5%	2.9%
摂食障害	頻度	2	5	3	1	0	<u>2</u>	13
	カテゴリ別の%	1.1%	1.0%	0.8%	1.2%	0.0%	10.5%	1.1%
パーソナリティ障害	頻度	19	64	54	17	2	2	158
	カテゴリ別の%	10.3%	12.6%	14.1%	21.0%	18.2%	10.5%	13.3%
知的障害	頻度	11	52	46	10	3	2	124
	カテゴリ別の%	5.9%	10.3%	12.0%	12.3%	27.3%	10.5%	10.5%
発達障害	頻度	27	61	53	12	1	1	155
	カテゴリ別の%	14.6%	12.0%	13.9%	14.8%	9.1%	5.3%	13.1%
アルコール使用障害	頻度	16	62	47	6	1	0	132
	カテゴリ別の%	8.6%	12.2%	12.3%	7.4%	9.1%	0.0%	11.1%
薬物使用障害	頻度	3	18	14	4	0	0	39
	カテゴリ別の%	1.6%	3.6%	3.7%	4.9%	0.0%	0.0%	3.3%
ギャンブル障害	頻度	0	6	5	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	0.0%	1.2%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%
インターネット依存症	頻度	0	0	2	0	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
その他	頻度	9	18	13	<u>10</u>	0	0	50
	カテゴリ別の%	4.9%	3.6%	3.4%	12.3%	0.0%	0.0%	4.2%
不明	頻度	<u>21</u>	49	<u>12</u>	2	0	<u>2</u>	86
	カテゴリ別の%	11.4%	9.7%	3.1%	2.5%	0.0%	10.5%	7.3%
	全体	185	507	382	81	11	19	1185

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待者の精神障害（複数回答）と主たる虐待者のクロス表

Q19-2 虐待者の精神疾患と主たる虐待者のクロス集計表（前半）

		実父	継父	普通養子縁組 の養父	母の内縁の夫	実母	継母	普通養子縁組 の養母	父の内縁の妻
統合失調症	頻度	11	0	0	0	73	0	1	0
	カテゴリ別の%	3.9%	0.0%	0.0%	0.0%	8.8%	0.0%	20.0%	0.0%
感情障害・うつ症状	頻度	<u>82</u>	6	6	2	<u>360</u>	1	<u>4</u>	0
	カテゴリ別の%	28.9%	46.2%	26.1%	25.0%	43.6%	50.0%	80.0%	0.0%
不安障害・強迫性障害	頻度	19	2	0	0	102	0	0	0
	カテゴリ別の%	6.7%	15.4%	0.0%	0.0%	12.4%	0.0%	0.0%	0.0%
身体表現性障害・ 心身症	頻度	2	0	0	0	9	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
PTSD・適応障害	頻度	5	0	1	0	27	<u>1</u>	0	<u>1</u>
	カテゴリ別の%	1.8%	0.0%	4.3%	0.0%	3.3%	50.0%	0.0%	100.0%
摂食障害	頻度	0	0	0	0	14	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.7%	0.0%	0.0%	0.0%
パーソナリティ障害	頻度	28	1	4	0	121	2	1	0
	カテゴリ別の%	9.9%	7.7%	17.4%	0.0%	14.7%	100.0%	20.0%	0.0%
知的障害	頻度	28	0	0	0	92	0	0	0
	カテゴリ別の%	9.9%	0.0%	0.0%	0.0%	11.2%	0.0%	0.0%	0.0%
発達障害	頻度	<u>67</u>	1	<u>7</u>	0	<u>75</u>	0	0	0
	カテゴリ別の%	23.6%	7.7%	30.4%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%
アルコール使用障害	頻度	<u>64</u>	0	5	<u>4</u>	<u>56</u>	0	0	0
	カテゴリ別の%	22.5%	0.0%	21.7%	50.0%	6.8%	0.0%	0.0%	0.0%
薬物使用障害	頻度	9	0	0	2	26	0	0	0
	カテゴリ別の%	3.2%	0.0%	0.0%	25.0%	3.2%	0.0%	0.0%	0.0%
ギャンブル障害	頻度	5	<u>2</u>	0	0	<u>4</u>	0	0	0
	カテゴリ別の%	1.8%	15.4%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%
インターネット依存症	頻度	0	0	0	0	2	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%
その他	頻度	14	1	1	0	33	0	1	0
	カテゴリ別の%	4.9%	7.7%	4.3%	0.0%	4.0%	0.0%	20.0%	0.0%
不明	頻度	24	1	1	<u>2</u>	<u>57</u>	0	0	0
	カテゴリ別の%	8.5%	7.7%	4.3%	25.0%	6.9%	0.0%	0.0%	0.0%
	全体	284	13	23	8	825	2	5	1

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもののだが、期待度数が少ないセルが多すぎ、いずれも χ^2 検定の適応外になっていることに留意する。

虐待者の精神疾患と主たる虐待者の関連については、まず主たる虐待者の該当項目が多岐に渡る関係で各項目の頻度が少ないものが多く、 χ^2 検定と残差分析の適応外であることに留意する必要がある。

その上で数値上の傾向を見ていくと、虐待者が「実父」である場合は「発達障害」「アルコール使用障害」が報告される頻度が高い。一方虐待者が実母である場合は、「感情障害」が報告される頻度が高くなっていた。それ以外の虐待者の傾向については頻度が少なすぎて判断が難しい。

Q19-2 虐待者の精神疾患と主たる虐待者のクロス集計表（後半）

		実の兄弟	祖父	祖母	おじ	その他の同居 の家族	その他	不明	合計
統合失調症	頻度	0	0	0	1	0	1	0	87
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	25.0%	0.0%	7.4%
感情障害・うつ症状	頻度	0	2	3	2	0	0	1	469
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	75.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	39.8%
不安障害・強迫性障害	頻度	0	0	0	1	0	0	0	124
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.5%
身体表現性障害・ 心身症	頻度	0	0	0	0	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%
PTSD・適応障害	頻度	0	0	0	0	0	0	0	35
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%
摂食障害	頻度	0	0	0	0	0	0	0	14
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%
パーソナリティ障害	頻度	0	0	0	0	0	0	0	157
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	13.3%
知的障害	頻度	0	0	1	1	0	3	0	125
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	25.0%	50.0%	0.0%	75.0%	0.0%	10.6%
発達障害	頻度	2	0	0	0	1	0	1	154
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	13.1%
アルコール使用障害	頻度	0	0	0	0	0	0	0	129
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	11.0%
薬物使用障害	頻度	0	0	0	0	0	1	0	38
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	3.2%
ギャンブル障害	頻度	0	0	0	0	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%
インターネット依存症	頻度	0	0	0	0	0	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
その他	頻度	0	0	0	0	0	0	0	50
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.2%
不明	頻度	0	0	0	0	0	0	0	85
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.2%
	全体	2	2	4	2	1	4	1	1177

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものだが、期待度数が少ないセルが多すぎ、いずれも χ^2 検定の適応外になっていることに留意する。

Q20. 虐待者の身体障害やその疑い

- 調査時（受理時から約 6 ヶ月後）の状態を尋ねる設問である。
- 「身体障害又は疑いがある」ケースの報告は 1.5%と低かった。
- 「身体障害の有無」と「虐待種別」や「重症度」との関連もあわせて検討したが、明確な傾向は見いだせなかった。

	度数	%	%グラフ
身体障害又はその疑いがある	93	1.5	
ないと思われる	5097	80.9	
不明	969	15.4	
無回答	141	2.2	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「身体的問題がある」ケースは 4%であり、今回よりも多かった。設問表現の変化（「身体的問題がある」→「身体障害又は疑いがある」）によるものである可能性が高い。

Q21. 虐待者の生育時の状況（複数回答）

- 設問：「主な虐待者自身の生育時（18歳未満）の状況や体験（のうち当てはまるもの全てを選択）」
- 虐待者の生育時の状況は、「不明」が67.1%「ないと思われる」が12.5%を占めた。
- 具体的回答が得られた中では「ひとり親家族」6.9%が最も多く、「親からの身体的虐待」が5.4%、「両親の別居・離婚」が4.3%。「親からの心理的虐待」が4.2%であった。

Q21 虐待者の生育時の状況（複数回答）

	度数	%	%グラフ
両親とも死亡	12	0.2	
ひとり親家族	434	6.9	■
継親子関係	108	1.7	■
施設体験	92	1.5	■
養子・里親体験	22	0.3	
生活保護受給者	64	1.0	■
親からの心理的虐待	263	4.2	■
親からの身体的虐待	342	5.4	■
親からの性的虐待	17	0.3	
親からの情緒的虐待	125	2.0	■
親からの物理的虐待	61	1.0	■
両親の別居・離婚	268	4.3	■
生育家庭におけるDV	75	1.2	■
生育家庭でのアルコール乱用者の有無	60	1.0	■
生育家庭内の精神障害者の有無	73	1.2	■
生育家庭内に自殺既遂者の有無	24	0.4	
生育家庭に刑務所入所者	11	0.2	
ないと思われる	786	12.5	■
不明	4230	67.1	■
該当ケース数	6300		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

調査 2

虐待者の生育時状況（複数回答）と虐待種別のクロス表

ネグレクトの虐待者は「ひとり親家庭」「両親の別居・離婚」「生活保護受給」「親からの物理的・心理的ネグレクト」の報告頻度が高くなっていった。また身体的虐待の虐待者は「親からの身体的虐待」「ひとり親家庭」の報告頻度が高かった。心理的虐待の虐待者は「親からの心理的虐待」の報告頻度が高く、虐待の親子関連鎖を色濃く物語る結果となった。

Q21 虐待者の生育時の状況と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
両親とも死亡	頻度	0	4	0	0	4	4	12
	カテゴリ別の%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.3%	0.2%	0.2%
ひとり親家庭	頻度	118	146	9	<u>0</u>	92	<u>69</u>	434
	カテゴリ別の%	8.2%	14.0%	7.1%	0.0%	6.2%	3.3%	6.9%
継親子関係	頻度	21	51	5	2	<u>10</u>	<u>19</u>	108
	カテゴリ別の%	1.5%	4.9%	4.0%	3.3%	0.7%	0.9%	1.7%
施設体験	頻度	16	45	3	0	<u>13</u>	<u>15</u>	92
	カテゴリ別の%	1.1%	4.3%	2.4%	0.0%	0.9%	0.7%	1.5%
養子・里親体験	頻度	4	4	2	0	4	8	22
	カテゴリ別の%	0.3%	0.4%	1.6%	0.0%	0.3%	0.4%	0.4%
生活保護受給家庭	頻度	7	44	2	0	<u>2</u>	<u>9</u>	64
	カテゴリ別の%	0.5%	4.2%	1.6%	0.0%	0.1%	0.4%	1.0%
虐待者の親からの 心理的虐待	頻度	70	54	3	1	90	<u>45</u>	263
	カテゴリ別の%	4.9%	5.2%	2.4%	1.6%	6.0%	2.1%	4.2%
虐待者の親からの 身体的虐待	頻度	122	44	8	2	94	<u>72</u>	342
	カテゴリ別の%	8.5%	4.2%	6.3%	3.3%	6.3%	3.4%	5.5%
虐待者の親からの 性的虐待	頻度	6	2	3	0	5	1	17
	カテゴリ別の%	0.4%	0.2%	2.4%	0.0%	0.3%	0.0%	0.3%
虐待者の親からの 情緒的ネグレクト	頻度	28	47	4	0	24	<u>22</u>	125
	カテゴリ別の%	2.0%	4.5%	3.2%	0.0%	1.6%	1.0%	2.0%
虐待者の親からの 物理的ネグレクト	頻度	14	33	0	2	<u>6</u>	<u>6</u>	61
	カテゴリ別の%	1.0%	3.2%	0.0%	3.3%	0.4%	0.3%	1.0%
虐待者の両親の 別居又は離婚	頻度	63	107	6	1	<u>40</u>	<u>50</u>	267
	カテゴリ別の%	4.4%	10.3%	4.8%	1.6%	2.7%	2.4%	4.3%
虐待者の生育家庭に おけるDV	頻度	18	9	2	2	15	29	75
	カテゴリ別の%	1.3%	0.9%	1.6%	3.3%	1.0%	1.4%	1.2%
虐待者の生育家庭に アルコール・薬物乱用者	頻度	15	14	0	0	18	13	60
	カテゴリ別の%	1.0%	1.3%	0.0%	0.0%	1.2%	0.6%	1.0%
虐待者の生育家庭に 精神障害のある者	頻度	14	30	1	0	12	<u>16</u>	73
	カテゴリ別の%	1.0%	2.9%	0.8%	0.0%	0.8%	0.8%	1.2%
虐待者の生育家庭に 自殺既遂又は未遂をした者	頻度	2	12	0	0	3	7	24
	カテゴリ別の%	0.1%	1.2%	0.0%	0.0%	0.2%	0.3%	0.4%
虐待者の生育家庭に 刑務所に行った者	頻度	3	4	0	0	1	3	11
	カテゴリ別の%	0.2%	0.4%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.2%
ないと思われる	頻度	200	123	21	8	199	235	786
	カテゴリ別の%	14.0%	11.8%	16.7%	13.1%	13.3%	11.1%	12.5%
不明	頻度	899	574	<u>71</u>	46	1011	1608	4209
	カテゴリ別の%	62.7%	55.0%	56.3%	75.4%	67.7%	76.2%	67.2%
	総数	1433	1043	126	61	1493	2111	6267

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待者の生育時状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表

虐待者の生育時の様々な問題が、現ケースでの虐待の重症度、特に中度虐待以上の深刻な虐待と関連する結果となった。「ひとり親家庭」「親からの虐待（身体的・ネグレクト・心理的）」「両親の別居や離婚」「生育環境でのDV」等が該当する。特に「親からの身体的虐待」「ひとり親家庭」「親からの情緒的ネグレクト」は重度虐待や生命の危機のような重篤例での報告頻度が高くなっていた。

Q21 虐待者の生育時の状況と主たる虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危機 あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機 あり	不明	合計
両親とも死亡	頻度	1	4	3	4	0	0	12
	カテゴリ別の%	0.1%	0.1%	0.2%	1.6%	0.0%	0.0%	0.2%
ひとり親家庭	頻度	<u>64</u>	187	<u>143</u>	<u>26</u>	<u>5</u>	<u>3</u>	428
	カテゴリ別の%	5.4%	6.3%	9.1%	10.5%	18.5%	1.3%	6.9%
継親子関係	頻度	19	<u>41</u>	<u>40</u>	6	1	1	108
	カテゴリ別の%	1.6%	1.4%	2.5%	2.4%	3.7%	0.4%	1.7%
施設体験	頻度	4	52	29	5	<u>2</u>	0	92
	カテゴリ別の%	0.3%	1.7%	1.8%	2.0%	7.4%	0.0%	1.5%
養子・里親体験	頻度	5	11	5	0	0	1	22
	カテゴリ別の%	0.4%	0.4%	0.3%	0.0%	0.0%	0.4%	0.4%
生活保護受給家庭	頻度	<u>2</u>	35	<u>23</u>	3	0	1	64
	カテゴリ別の%	0.2%	1.2%	1.5%	1.2%	0.0%	0.4%	1.0%
虐待者の親からの 心理的虐待	頻度	<u>36</u>	111	<u>99</u>	16	0	<u>0</u>	262
	カテゴリ別の%	3.0%	3.7%	6.3%	6.5%	0.0%	0.0%	4.2%
虐待者の親からの 身体的虐待	頻度	<u>33</u>	<u>140</u>	<u>121</u>	<u>39</u>	<u>4</u>	<u>2</u>	339
	カテゴリ別の%	2.8%	4.7%	7.7%	15.8%	14.8%	0.9%	5.4%
虐待者の親からの 性的虐待	頻度	1	9	3	4	0	0	17
	カテゴリ別の%	0.1%	0.3%	0.2%	1.6%	0.0%	0.0%	0.3%
虐待者の親からの 情緒的ネグレクト	頻度	<u>13</u>	58	39	<u>11</u>	<u>2</u>	1	124
	カテゴリ別の%	1.1%	2.0%	2.5%	4.5%	7.4%	0.4%	2.0%
虐待者の親からの 物理的ネグレクト	頻度	6	26	<u>25</u>	3	1	0	61
	カテゴリ別の%	0.5%	0.9%	1.6%	1.2%	3.7%	0.0%	1.0%
虐待者の両親の 別居又は離婚	頻度	<u>22</u>	124	<u>92</u>	<u>25</u>	2	<u>2</u>	267
	カテゴリ別の%	1.9%	4.2%	5.9%	10.1%	7.4%	0.9%	4.3%
虐待者の生育家庭に おけるDV	頻度	<u>5</u>	29	20	<u>18</u>	1	0	73
	カテゴリ別の%	0.4%	1.0%	1.3%	7.3%	3.7%	0.0%	1.2%
虐待者の生育家庭に アルコール・薬物乱用者	頻度	8	29	14	8	1	0	60
	カテゴリ別の%	0.7%	1.0%	0.9%	3.2%	3.7%	0.0%	1.0%
虐待者の生育家庭に 精神障害のある者	頻度	8	26	30	7	0	2	73
	カテゴリ別の%	0.7%	0.9%	1.9%	2.8%	0.0%	0.9%	1.2%
虐待者の生育家庭に 自殺既遂又は未遂をした者	頻度	5	5	12	1	0	1	24
	カテゴリ別の%	0.4%	0.2%	0.8%	0.4%	0.0%	0.4%	0.4%
虐待者の生育家庭に 刑務所に行った者	頻度	0	3	5	3	0	0	11
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.3%	1.2%	0.0%	0.0%	0.2%
ないと思われる	頻度	<u>185</u>	348	182	30	6	22	773
	カテゴリ別の%	15.6%	11.7%	11.6%	12.1%	22.2%	9.8%	12.4%
不明	頻度	<u>826</u>	<u>2071</u>	<u>991</u>	<u>113</u>	<u>12</u>	<u>179</u>	4192
	カテゴリ別の%	69.8%	69.7%	63.1%	45.7%	44.4%	79.6%	67.3%
	総数	1195	2993	1577	249	27	228	6269

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q22. 虐待者の虐待に対する考え方

▶ 設問：「受理時点の虐待者の虐待についての考え方」

- 「虐待を認め、援助を求める」ケースは 1,179 件（18.7%）であり、「不明」を含め多くのケースでは「虐待を認めない」もしくは「支援を求めない」ケースが大半を占めていた。虐待を認めない虐待者も合計 21.4%に上り、その対応の難しさを伺わせる。

Q22 虐待者の虐待に対する考え方

	度数	%	%グラフ
行為も虐待も認めない	423	6.7	
行為は認めるが虐待は認めない	925	14.7	
虐待を認めるが、援助は求めない	2137	33.9	
虐待を認め、援助を求める	1179	18.7	
不明	1517	24.1	
無回答	119	1.9	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「虐待を認め、支援を求める」が 21%にとどまり、虐待を認めず、支援も求めないケースが大半を占めていた。虐待を認めていない虐待者は 30.8%で、今回の調査（21.8%）の方が低い割合である。

虐待者の虐待に対する考え方と被虐待児年齢カテゴリのクロス表

被虐待児が 1 歳未満のときは、虐待者が「行為も虐待も認めない」頻度が高くなり、被虐待児が 12-14 歳のときは、虐待者が「行為は認めるが虐待は認めない」頻度が高くなっていた。

Q22 虐待者の虐待についての考え方と被虐待児年齢カテゴリのクロス集計表

		1歳未満	1～5歳	6～11歳	12～14歳	15歳以上	合計
行為も虐待も認めない	頻度	41	160	130	61	29	421
	カテゴリ別の%	10.5%	7.4%	6.1%	6.6%	5.5%	6.9%
行為は認めるが虐待は認めない	頻度	50	311	318	161	78	918
	カテゴリ別の%	12.8%	14.4%	14.9%	17.5%	14.9%	15.0%
虐待は認めるが援助は求めない	頻度	133	759	751	296	185	2124
	カテゴリ別の%	33.9%	35.2%	35.1%	32.2%	35.2%	34.6%
虐待を認め援助を求める	頻度	74	388	435	185	89	1171
	カテゴリ別の%	18.9%	18.0%	20.3%	20.1%	17.0%	19.1%
不明	頻度	94	540	507	216	144	1501
	カテゴリ別の%	24.0%	25.0%	23.7%	23.5%	27.4%	24.5%
総数		392	2158	2141	919	525	6135

***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待者の虐待に対する考え方と虐待種別のクロス表

ネグレクトは行為を認めるかどうかにかかわらず、「虐待を認めない」割合が高い（ただし同居人の虐待放置については援助を求める傾向）。性的虐待は「行為も虐待も認めない」割合が高い。身体的虐待では虐待を認めない者と認める者の双方が存在するが、「虐待を認め援助を求める」割合が高いのも特徴である。心理的虐待は「行為は認めるものの虐待を認めない」割合が高い。

Q22 虐待者の虐待についての考え方と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
行為も虐待も認めない	頻度	119	135	13	16	92	46	421
	カテゴリ別の%	8.4%	13.1%	10.7%	27.6%	6.3%	2.2%	6.8%
行為は認めるが虐待は認めない	頻度	241	205	21	13	253	189	922
	カテゴリ別の%	17.1%	19.9%	17.2%	22.4%	17.3%	9.1%	15.0%
虐待は認めるが援助は求めない	頻度	413	298	30	11	478	904	2134
	カテゴリ別の%	29.3%	29.0%	24.6%	19.0%	32.6%	43.6%	34.7%
虐待を認め援助を求める	頻度	393	212	37	2	305	230	1179
	カテゴリ別の%	27.9%	20.6%	30.3%	3.4%	20.8%	11.1%	19.2%
不明	頻度	243	178	21	16	337	704	1499
	カテゴリ別の%	17.2%	17.3%	17.2%	27.6%	23.0%	34.0%	24.4%
	総数	1409	1028	122	58	1465	2073	6155

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待者の虐待に対する考え方と虐待種別のクロス表

全体に、虐待が軽度であるほど「虐待を認める」、もしくは「認めて援助を求める」報告が多く、虐待が重度であるほど「虐待を認めない」報告が多くなる傾向が見られる。特に虐待を認めないケースは重度虐待以上に多い。

Q22 虐待者の虐待についての考え方と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危険あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危険あり	不明	合計
行為も虐待も認めない	頻度	63	172	118	37	7	25	422
	カテゴリ別の%	5.5%	5.9%	7.6%	15.2%	26.9%	11.5%	6.9%
行為は認めるが虐待は認めない	頻度	166	418	245	62	4	26	921
	カテゴリ別の%	14.4%	14.3%	15.9%	25.4%	15.4%	12.0%	15.1%
虐待は認めるが援助は求めない	頻度	398	1115	529	54	1	24	2121
	カテゴリ別の%	34.5%	38.0%	34.3%	22.1%	3.8%	11.1%	34.7%
虐待を認め援助を求める	頻度	210	589	292	53	7	8	1159
	カテゴリ別の%	18.2%	20.1%	18.9%	21.7%	26.9%	3.7%	19.0%
不明	頻度	315	638	360	38	7	134	1492
	カテゴリ別の%	27.3%	21.8%	23.3%	15.6%	26.9%	61.8%	24.4%
	総数	1152	2932	1544	244	26	217	6115

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

調査 2

虐待者の虐待に対する考え方と主たる虐待者のクロス表

まず主たる虐待者の該当項目が多岐に渡る関係で各項目の頻度が少ないものが多く、 χ^2 検定と残差分析の適応外であることに留意する必要がある。

その上で数値上の傾向を見ていくと、虐待者が「実父」である場合は「虐待は認めるが援助は求めない」報告頻度が高く、「実母」の場合は「行為も虐待も認めない」「行為認めるが虐待認めない」と「虐待を認め援助を求める」の双方が高くなっていることが読み取れる。

Q22 虐待者の虐待についての考え方と主たる虐待者のクロス集計表（前半）

		実父	継父	養子縁組 の養父	里親	母の内縁 の夫	実母	継母	養子縁組 の養母	父の内縁 の妻
行為も虐待も認めない	頻度	<u>117</u>	8	12	0	<u>20</u>	<u>236</u>	2	1	0
	カテゴリ別の%	4.6%	6.2%	5.7%	0.0%	10.8%	8.3%	13.3%	8.3%	0.0%
行為は認めるが 虐待は認めない	頻度	<u>332</u>	18	28	0	32	<u>460</u>	3	<u>5</u>	<u>4</u>
	カテゴリ別の%	13.2%	13.8%	13.2%	0.0%	17.2%	16.1%	20.0%	41.7%	66.7%
虐待は認めるが 援助は求めない	頻度	<u>967</u>	41	<u>89</u>	0	56	<u>920</u>	6	2	0
	カテゴリ別の%	38.4%	31.5%	42.0%	0.0%	30.1%	32.2%	40.0%	16.7%	0.0%
虐待を認め 援助を求める	頻度	<u>330</u>	23	<u>23</u>	<u>1</u>	<u>14</u>	<u>754</u>	3	<u>3</u>	2
	カテゴリ別の%	13.1%	17.7%	10.8%	100.0%	7.5%	26.4%	20.0%	25.0%	33.3%
不明	頻度	<u>771</u>	40	60	0	<u>64</u>	<u>488</u>	1	1	0
	カテゴリ別の%	30.6%	30.8%	28.3%	0.0%	34.4%	17.1%	6.7%	8.3%	0.0%
	総数	2517	130	212	1	186	2858	15	12	6

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもののだが、期待度数が少ないセルが多すぎ、いずれも χ^2 検定の適応外になっていることに留意する。

Q22 虐待者の虐待についての考え方と主たる虐待者のクロス集計表（後半）

		実の兄弟	義理の兄 弟	祖父	祖母	叔父	叔母	その他の 同居家族	その他	不明	合計
行為も虐待も認めない	頻度	0	0	2	1	2	0	0	2	<u>11</u>	414
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	7.1%	3.1%	13.3%	0.0%	0.0%	5.7%	23.4%	6.8%
行為は認めるが 虐待は認めない	頻度	<u>2</u>	0	<u>12</u>	<u>9</u>	1	2	2	3	3	916
	カテゴリ別の%	66.7%	0.0%	42.9%	28.1%	6.7%	40.0%	16.7%	8.6%	6.4%	15.0%
虐待は認めるが 援助は求めない	頻度	0	0	6	14	6	0	1	12	<u>0</u>	2120
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	21.4%	43.8%	40.0%	0.0%	8.3%	34.3%	0.0%	34.7%
虐待を認め 援助を求める	頻度	0	1	1	2	2	1	1	3	<u>1</u>	1165
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	3.6%	6.3%	13.3%	20.0%	8.3%	8.6%	2.1%	19.1%
不明	頻度	1	0	7	6	4	2	<u>8</u>	<u>15</u>	<u>32</u>	1500
	カテゴリ別の%	33.3%	0.0%	25.0%	18.8%	26.7%	40.0%	66.7%	42.9%	68.1%	24.5%
	総数	3	1	28	32	15	5	12	35	47	6115

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもののだが、期待度数が少ないセルが多すぎ、いずれも χ^2 検定の適応外になっていることに留意する。

Ⅲ. 虐待の要因、結果について

Q23. 被虐待児の生育歴等の状況（複数回答）

- 「ないと思われる」「不明」以外では、「発達障害疑い」が 11.4%と最も多く、「精神発達の遅れ等」6.6%、「問題行動あり」6.9%、「分離体験」5.1%が続いていた。
- 「ないと思われる」は 43.7%で、半数近くの子どもに生育歴等の状況上の問題はないという報告となった。

Q23 被虐待児の生育歴等の状況（複数回答）

	度数	%	%グラフ
予期しない妊娠	262	4.2	■
未熟児	71	1.1	■
双子児	65	1.0	■
長期入院	17	0.3	■
分離体験	320	5.1	■
身体発達の遅れ	87	1.4	■
病弱・慢性疾患	61	1.0	■
精神発達の遅れ等	414	6.6	■
発達障害疑い	718	11.4	■
問題行動あり	435	6.9	■
その他	122	1.9	■
ないと思われる	2736	43.4	■
不明	1607	25.5	■
該当ケース数	6300		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「特になし」「不明」を除いた「問題あり」35.7%のうち、「問題行動あり」（15.6%）が最も多く、「精神発達の遅れや知的障害」7.5%、「発達障害」6.9%などが続き、該当する問題の傾向は似通っているが、今回の調査では「発達障害疑い」の占める割合が高くなっていた。

生育状況（複数回答）と性別のクロス表

被虐待児の生育歴と被虐待児の性別においては、「精神発達の遅れ」、「発達障害疑い」、「問題行動」については男児がより報告される頻度が高く、「(両親との) 分離体験」「(生育歴の) 問題がない」については女児の方が報告される頻度が高い結果となった。

Q23 生育歴と被虐待児の性別のクロス集計表

		男児	女児	合計
予期しない妊娠	頻度	130	131	261
	カテゴリ別の%	3.9%	4.4%	4.2%
未熟児	頻度	37	34	71
	カテゴリ別の%	1.1%	1.2%	1.1%
双子児	頻度	38	27	65
	カテゴリ別の%	1.1%	0.9%	1.0%
長期入院	頻度	8	9	17
	カテゴリ別の%	0.2%	0.3%	0.3%
分離体験	頻度	149	170	319
	カテゴリ別の%	4.5%	5.8%	5.1%
身体発達の遅れ	頻度	51	36	87
	カテゴリ別の%	1.5%	1.2%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	30	31	61
	カテゴリ別の%	0.9%	1.0%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	259	153	412
	カテゴリ別の%	7.8%	5.2%	6.6%
発達障害疑い	頻度	503	214	717
	カテゴリ別の%	15.2%	7.2%	11.4%
問題行動あり	頻度	267	168	435
	カテゴリ別の%	8.0%	5.7%	6.9%
その他	頻度	66	56	122
	カテゴリ別の%	2.0%	1.9%	1.9%
ないと思われる	頻度	1351	1375	2726
	カテゴリ別の%	40.7%	46.6%	43.5%
不明	頻度	820	775	1595
	カテゴリ別の%	24.7%	26.2%	25.4%
	総数	3317	2953	6269

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

生育状況（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

年齢カテゴリー別の生育状況の特徴を見たところ、1歳未満では「予期しない妊娠」「未熟児」「病弱・慢性疾患」「問題はない」の頻度が高かった。1-5歳は「予期しない妊娠」「双子児」「問題ない」の頻度が高かった。6-11歳は「発達障害疑い」「問題行動あり」の報告が相対的に多く、12-14歳は「双生児」「分離体験」「精神発達の遅れ等」「発達障害疑い」「問題行動あり」の報告が多かった。15歳以上は「分離体験」「精神発達の遅れ等」「問題行動」の報告が多くなっていった。

Q23 生育歴と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
予期しない妊娠	頻度	54	107	67	24	8	260
	カテゴリー別の%	13.5%	4.9%	3.1%	2.6%	1.5%	4.2%
未熟児	頻度	16	29	18	8	<u>0</u>	71
	カテゴリー別の%	4.0%	1.3%	0.8%	0.9%	0.0%	1.1%
双子児	頻度	6	31	13	15	<u>0</u>	65
	カテゴリー別の%	1.5%	1.4%	0.6%	1.6%	0.0%	1.0%
長期入院	頻度	7	7	3	0	0	17
	カテゴリー別の%	1.7%	0.3%	0.1%	0.0%	0.0%	0.3%
分離体験	頻度	8	77	123	64	44	316
	カテゴリー別の%	2.0%	3.5%	5.6%	6.9%	8.3%	5.1%
身体発達の遅れ	頻度	6	26	34	15	5	86
	カテゴリー別の%	1.5%	1.2%	1.6%	1.6%	0.9%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	9	21	16	11	4	61
	カテゴリー別の%	2.2%	1.0%	0.7%	1.2%	0.8%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	4	121	151	80	54	410
	カテゴリー別の%	1.0%	5.5%	6.9%	8.6%	10.2%	6.6%
発達障害疑い	頻度	3	139	368	151	53	714
	カテゴリー別の%	0.7%	6.3%	16.9%	16.2%	10.0%	11.4%
問題行動あり	頻度	3	59	185	116	67	430
	カテゴリー別の%	0.7%	2.7%	8.5%	12.4%	12.6%	6.9%
その他	頻度	9	38	34	24	17	122
	カテゴリー別の%	2.2%	1.7%	1.6%	2.6%	3.2%	2.0%
ないと思われる	頻度	199	1087	889	368	180	2723
	カテゴリー別の%	49.6%	49.3%	40.8%	39.4%	33.8%	43.6%
不明	頻度	98	594	540	204	154	1590
	カテゴリー別の%	24.4%	27.0%	24.8%	21.9%	28.9%	25.4%
	全体	401	2203	2179	933	532	6248

***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは有意に低い頻度を示したものの。

生育状況（複数回答）と在学状況のクロス表

在学状況別の生育状況の特徴は、乳幼児としては「予期しない妊娠」の報告が多かった。また小学校・中学校を中心とする学童期に「問題行動」「発達障害疑い」「精神発達の遅れ」「(両親との)分離体験」が高頻度で報告されていた。学童期の児童の問題行動は家庭外で感知しやすいことの反映とも考えられる。

Q23 生育歴と在学状況のクロス集計表

		保育所							不明	合計
		家庭にいる乳幼児	その他の保育施設	幼稚園	小学校	中学校	高校	その他		
予期しない妊娠	頻度	66	65	12	68	23	6	20	0	260
	カテゴリ別の%	7.4%	5.0%	3.1%	3.1%	2.6%	1.3%	21.3%	0.0%	4.2%
未熟児	頻度	21	12	6	19	7	0	4	0	69
	カテゴリ別の%	2.4%	0.9%	1.6%	0.9%	0.8%	0.0%	4.3%	0.0%	1.1%
双子児	頻度	14	12	6	14	15	0	2	0	63
	カテゴリ別の%	1.6%	0.9%	1.6%	0.6%	1.7%	0.0%	2.1%	0.0%	1.0%
長期入院	頻度	6	2	1	3	0	0	3	0	15
	カテゴリ別の%	0.7%	0.2%	0.3%	0.1%	0.0%	0.0%	3.2%	0.0%	0.2%
分離体験	頻度	22	51	6	123	68	37	8	0	315
	カテゴリ別の%	2.5%	3.9%	1.6%	5.6%	7.7%	8.2%	8.5%	0.0%	5.0%
身体発達の遅れ	頻度	13	17	2	31	14	3	6	0	86
	カテゴリ別の%	1.5%	1.3%	0.5%	1.4%	1.6%	0.7%	6.4%	0.0%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	15	9	4	17	10	3	3	0	61
	カテゴリ別の%	1.7%	0.7%	1.0%	0.8%	1.1%	0.7%	3.2%	0.0%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	44	66	17	152	75	39	17	1	411
	カテゴリ別の%	4.9%	5.1%	4.4%	7.0%	8.5%	8.7%	18.1%	2.0%	6.6%
発達障害疑い	頻度	30	97	23	370	143	44	7	0	714
	カテゴリ別の%	3.4%	7.4%	6.0%	16.9%	16.1%	9.8%	7.4%	0.0%	11.4%
問題行動あり	頻度	11	37	12	194	111	57	10	1	433
	カテゴリ別の%	1.2%	2.8%	3.1%	8.9%	12.5%	12.7%	10.6%	2.0%	6.9%
その他	頻度	17	19	10	34	22	14	6	0	122
	カテゴリ別の%	1.9%	1.5%	2.6%	1.6%	2.5%	3.1%	6.4%	0.0%	2.0%
ないと思われる	頻度	451	638	205	890	345	150	20	11	2710
	カテゴリ別の%	50.7%	49.0%	53.4%	40.7%	38.9%	33.3%	21.3%	22.0%	43.4%
不明	頻度	228	354	95	537	191	138	19	32	1594
	カテゴリ別の%	25.6%	27.2%	24.7%	24.6%	21.6%	30.7%	20.2%	64.0%	25.5%
	全体	890	1303	384	2186	886	450	94	50	6243

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

生育状況（複数回答）と虐待種別のクロス表

虐待種別の生育状況の特徴は、身体的虐待には「発達障害疑い」「問題行動あり」「精神発達の遅れ」の頻度が多い。ネグレクトは「予期しない妊娠」「分離体験」「精神発達の遅れ」「未熟児」が多かった。性的虐待は頻度そのものが少ないが、「発達障害の疑い」「精神発達の遅れ」が多かった。心理的虐待はDV目撃も含め、生育状況での問題が報告される頻度が全般に低い傾向が認められた。

Q23 生育歴と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
			ネグレクト	(同居人の虐待放置)				
予期しない妊娠	頻度	65	95	6	1	<u>43</u>	<u>51</u>	261
	カテゴリ別の%	4.5%	9.1%	4.8%	1.6%	2.9%	2.4%	4.2%
未熟児	頻度	17	26	3	0	15	<u>10</u>	71
	カテゴリ別の%	1.2%	2.5%	2.4%	0.0%	1.0%	0.5%	1.1%
双子児	頻度	12	11	6	1	29	<u>6</u>	65
	カテゴリ別の%	0.8%	1.1%	4.8%	1.6%	1.9%	0.3%	1.0%
長期入院	頻度	3	9	2	0	2	1	17
	カテゴリ別の%	0.2%	0.9%	1.6%	0.0%	0.1%	0.0%	0.3%
分離体験	頻度	99	84	13	6	69	<u>49</u>	320
	カテゴリ別の%	6.9%	8.1%	10.3%	9.8%	4.6%	2.3%	5.1%
身体発達の遅れ	頻度	21	27	7	2	21	<u>9</u>	87
	カテゴリ別の%	1.5%	2.6%	5.6%	3.3%	1.4%	0.4%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	12	17	1	0	17	14	61
	カテゴリ別の%	0.8%	1.6%	0.8%	0.0%	1.1%	0.7%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	114	116	12	10	89	<u>72</u>	413
	カテゴリ別の%	8.0%	11.1%	9.5%	16.4%	6.0%	3.4%	6.6%
発達障害疑い	頻度	308	104	30	12	153	<u>111</u>	718
	カテゴリ別の%	21.5%	10.0%	23.8%	19.7%	10.2%	5.3%	11.5%
問題行動あり	頻度	225	70	11	8	<u>76</u>	<u>45</u>	435
	カテゴリ別の%	15.7%	6.7%	8.7%	13.1%	5.1%	2.1%	6.9%
その他	頻度	29	19	5	3	28	38	122
	カテゴリ別の%	2.0%	1.8%	4.0%	4.9%	1.9%	1.8%	1.9%
ないと思われる	頻度	<u>484</u>	<u>423</u>	<u>43</u>	<u>16</u>	678	1081	2725
	カテゴリ別の%	33.8%	40.6%	34.1%	26.2%	45.4%	51.2%	43.5%
不明	頻度	<u>280</u>	<u>215</u>	<u>19</u>	17	407	656	1594
	カテゴリ別の%	19.5%	20.6%	15.1%	27.9%	27.3%	31.1%	25.4%
	総数	1433	1043	126	61	1493	2111	6267

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

生育状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表

虐待重症度別の生育状況の特徴は、虐待の危惧ありと軽度虐待は「問題がない」と報告される頻度が高い。中度虐待は「発達障害疑い」「問題行動あり」「精神発達の遅れ」「分離体験」などの問題が報告される頻度が高かった。重度虐待も同様の傾向であった。また重度虐待と生命の危機ありにおいて、「予期しない妊娠」の報告頻度が高くなっていた。一方「予期しない妊娠」は虐待危惧ありにおいても頻度が高いことから、複数のリスクの一つとして機能していると考えられた。

Q23 生育歴と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
予期しない妊娠	頻度	36	<u>104</u>	74	34	10	<u>3</u>	261
	カテゴリ別の%	3.0%	3.5%	4.7%	13.8%	37.0%	1.3%	4.2%
未熟児	頻度	11	17	23	12	2	5	70
	カテゴリ別の%	0.9%	0.6%	1.5%	4.9%	7.4%	2.2%	1.1%
双子児	頻度	19	18	19	9	0	0	65
	カテゴリ別の%	1.6%	0.6%	1.2%	3.6%	0.0%	0.0%	1.0%
長期入院	頻度	3	8	2	3	1	0	17
	カテゴリ別の%	0.3%	0.3%	0.1%	1.2%	3.7%	0.0%	0.3%
分離体験	頻度	46	142	99	28	2	<u>2</u>	319
	カテゴリ別の%	3.9%	4.8%	6.3%	11.3%	7.4%	0.9%	5.1%
身体発達の遅れ	頻度	13	35	27	10	0	1	86
	カテゴリ別の%	1.1%	1.2%	1.7%	4.0%	0.0%	0.4%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	7	25	22	3	1	2	60
	カテゴリ別の%	0.6%	0.8%	1.4%	1.2%	3.7%	0.9%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	63	<u>168</u>	127	43	2	11	414
	カテゴリ別の%	5.3%	5.7%	8.1%	17.4%	7.4%	4.9%	6.7%
発達障害疑い	頻度	90	353	212	40	5	<u>12</u>	712
	カテゴリ別の%	7.6%	11.9%	13.5%	16.2%	18.5%	5.3%	11.4%
問題行動あり	頻度	39	210	148	26	3	<u>6</u>	432
	カテゴリ別の%	3.3%	7.1%	9.4%	10.5%	11.1%	2.7%	6.9%
その他	頻度	28	46	34	7	1	4	120
	カテゴリ別の%	2.4%	1.5%	2.2%	2.8%	3.7%	1.8%	1.9%
ないと思われる	頻度	583	1341	656	<u>72</u>	<u>4</u>	<u>52</u>	2708
	カテゴリ別の%	49.2%	45.1%	41.8%	29.1%	14.8%	23.1%	43.5%
不明	頻度	314	749	<u>346</u>	<u>34</u>	6	133	1582
	カテゴリ別の%	26.5%	25.2%	22.0%	13.8%	22.2%	59.1%	25.4%
全体		1184	2972	1570	247	27	225	6225

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したもの。

Q24. 被虐待児が生育期に経験した家庭・家族状況（複数回答）

- 「夫婦間不和」が33.0%と最も多く、次いで「ひとり親家庭」26.0%、「DV」24.0%、「養育者の別居または離婚」19.9%、「経済的な困難」16.8%などが高い割合を示していた。

Q24 被虐待児が生育期に経験した家族・家庭の状況（複数回答）

	度数	%	%グラフ
経済的な困難	1060	16.8	
不安定な就労	544	8.6	
ひとり親家庭	1639	26.0	
ステップファミリー	721	11.4	
DV	1513	24.0	
夫婦間不和	2079	33.0	
夫婦間以外の家族観の不和	436	6.9	
養育者の別居または離婚	1256	19.9	
親族・近隣・友人等からの孤立	231	3.7	
若年出産	332	5.3	
育児疲れ	387	6.1	
育児に嫌悪感、拒否感情	204	3.2	
狭い又は劣悪な住環境	314	5.0	
ひんぱんな転居	239	3.8	
病気や障害を持つ家族の世話	142	2.3	
きょうだいが今回の虐待者から虐待を受けた	780	12.4	
アルコール等を乱用する者がいた	260	4.1	
精神障害・知的障害等のある者がいた	706	11.2	
自殺（未遂者含む）者がいた	74	1.2	
家族で刑務所に入った者がいた	90	1.4	
その他	103	1.6	
ないと思われる	796	12.6	
不明	803	12.7	
該当ケース数	6300		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、今回の調査での選択肢にはなかった「虐待者の心身の状態」32.2%と最も高い割合を示していた。次いで「経済的な困難」26.0%、「ひとり親家庭」24.2%、「夫婦間不和」21.0%などが高い割合を示していた。

調査 2

※家庭状況と性別については関連が認められなかったのでクロス表の掲載はしていない

家庭状況（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

家庭状況と年齢カテゴリーの特徴として、1歳未満の場合「若年出産」「ないと思われる」の報告頻度が他年齢に比べて高く、1-5歳では「育児疲れ」「若年出産」「ないと思われる」の報告頻度が高い。6-11歳では「ひとり親家庭」「養育者の別居または離婚」の報告頻度が高くなる。12-14歳では6-11歳と同様の傾向だが、それに加えて「ステップファミリー」「親族・近隣・友人等からの孤立」の報告頻度も高い。12歳以上の年齢層の「アルコール等の乱用者がいた」「病気や障害を持つ家族の世話」の報告の高さも特徴的であった。

家庭状況（複数回答）と虐待種別のクロス表

家庭状況と虐待種別の特徴として、身体的虐待は「ひとり親家庭」「育児疲れ」「育児嫌悪・拒否感情」の頻度が高い。ネグレクトは全般に家庭状況の問題が多く、「ひとり親家庭」「経済的な困難」「養育者の別居または離婚」「不安定な就労」「劣悪な住環境」「若年出産」「頻繁な転居」「親族・近隣・友人等からの孤立」「育児疲れ」などが並ぶ。性的虐待は「きょうだい虐待を受けた」「精神障害・知的障害等のある家族がいた」の報告頻度が高い。心理的虐待は「きょうだい虐待を受けた」「育児疲れ」が特徴だが「ないと思われる」との報告も多い。DV目撃はそのまま「DV」「夫婦間不和」が高くなっている。

家庭状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表

家庭状況と虐待重症度の特徴としては、全般的に虐待の危惧ありと軽度虐待は問題の報告が少ないのに対し、中度虐待・重度虐待以上になると「夫婦間不和」「DV」「養育者の別居または離婚」「経済的困難」「精神障害・知的障害のある者がいた」「ステップファミリー」「不安定な就労」などを代表とする様々な問題の報告頻度が高くなることである。生命の危機は報告事例そのものが少ないが、「不明」「頻繁な転居」「若年出産」など、なかなか問題を把握しづらい項目の報告頻度が高いのが特徴的である。

家庭状況（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

Q24 家庭状況と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
経済的な困難	頻度	57	357	388	157	94	1053
	カテゴリ別の%	14.2%	16.2%	17.8%	16.8%	17.7%	16.9%
不安定な就労	頻度	31	188	195	76	51	541
	カテゴリ別の%	7.7%	8.5%	8.9%	8.1%	9.6%	8.7%
ひとり親家庭	頻度	<u>54</u>	<u>463</u>	<u>666</u>	<u>301</u>	144	1628
	カテゴリ別の%	13.5%	21.0%	30.6%	32.3%	27.1%	26.1%
ステップファミリー	頻度	36	<u>210</u>	271	<u>134</u>	69	720
	カテゴリ別の%	9.0%	9.5%	12.4%	14.4%	13.0%	11.5%
DV	頻度	99	563	517	216	<u>110</u>	1505
	カテゴリ別の%	24.7%	25.6%	23.7%	23.2%	20.7%	24.1%
夫婦間不和	頻度	119	744	745	301	156	2065
	カテゴリ別の%	29.7%	33.8%	34.2%	32.3%	29.3%	33.1%
夫婦以外の 家族間不和	頻度	21	157	166	56	32	432
	カテゴリ別の%	5.2%	7.1%	7.6%	6.0%	6.0%	6.9%
養育者の別居または離婚	頻度	<u>33</u>	<u>355</u>	<u>502</u>	<u>238</u>	120	1248
	カテゴリ別の%	8.2%	16.1%	23.0%	25.5%	22.6%	20.0%
親族・近隣・友人等 からの孤立	頻度	16	82	71	<u>48</u>	<u>14</u>	231
	カテゴリ別の%	4.0%	3.7%	3.3%	5.1%	2.6%	3.7%
若年出産	頻度	<u>30</u>	<u>165</u>	100	<u>24</u>	<u>13</u>	332
	カテゴリ別の%	7.5%	7.5%	4.6%	2.6%	2.4%	5.3%
育児疲れ	頻度	28	<u>182</u>	123	<u>40</u>	<u>11</u>	384
	カテゴリ別の%	7.0%	8.3%	5.6%	4.3%	2.1%	6.1%
育児に嫌悪感、拒否感情	頻度	11	84	66	35	<u>6</u>	202
	カテゴリ別の%	2.7%	3.8%	3.0%	3.8%	1.1%	3.2%
狭いまたは劣悪な住環境	頻度	16	103	116	53	26	314
	カテゴリ別の%	4.0%	4.7%	5.3%	5.7%	4.9%	5.0%
頻繁な転居	頻度	16	95	87	29	11	238
	カテゴリ別の%	4.0%	4.3%	4.0%	3.1%	2.1%	3.8%
病気や障害を持つ 家族の世話	頻度	8	<u>32</u>	41	<u>37</u>	<u>24</u>	142
	カテゴリ別の%	2.0%	1.5%	1.9%	4.0%	4.5%	2.3%
きょうだいが虐待者から 虐待を受けた	頻度	41	263	291	117	63	775
	カテゴリ別の%	10.2%	11.9%	13.4%	12.5%	11.8%	12.4%
アルコール等を 乱用する者がいた	頻度	<u>7</u>	<u>51</u>	89	<u>65</u>	<u>44</u>	256
	カテゴリ別の%	1.7%	2.3%	4.1%	7.0%	8.3%	4.1%
精神障害・知的障害等の ある者がいた	頻度	41	235	251	117	61	705
	カテゴリ別の%	10.2%	10.7%	11.5%	12.5%	11.5%	11.3%
自殺（未遂）者がいた	頻度	4	20	23	14	<u>13</u>	74
	カテゴリ別の%	1.0%	0.9%	1.1%	1.5%	2.4%	1.2%
家族で刑務所に入った 者がいた	頻度	7	28	33	10	11	89
	カテゴリ別の%	1.7%	1.3%	1.5%	1.1%	2.1%	1.4%
その他	頻度	4	<u>24</u>	39	<u>23</u>	12	102
	カテゴリ別の%	1.0%	1.1%	1.8%	2.5%	2.3%	1.6%
ないと思われる	頻度	<u>64</u>	<u>304</u>	<u>245</u>	112	65	790
	カテゴリ別の%	16.0%	13.8%	11.2%	12.0%	12.2%	12.6%
不明	頻度	44	294	265	113	73	789
	カテゴリ別の%	11.0%	13.3%	12.2%	12.1%	13.7%	12.6%
	全体	401	2203	2179	933	532	6248

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものを、イタリックは有意に低い頻度を示したものを。

家庭状況（複数回答）と虐待種別のクロス表

Q24 家庭状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
経済的な困難	頻度	<u>202</u>	382	<u>44</u>	10	<u>205</u>	<u>215</u>	1058
	カテゴリ別の%	14.1%	36.6%	34.9%	16.4%	13.7%	10.2%	16.9%
不安定な就労	頻度	<u>106</u>	195	<u>27</u>	7	112	<u>97</u>	544
	カテゴリ別の%	7.4%	18.7%	21.4%	11.5%	7.5%	4.6%	8.7%
ひとり親家庭	頻度	417	474	<u>61</u>	15	<u>355</u>	<u>315</u>	1637
	カテゴリ別の%	29.1%	45.4%	48.4%	24.6%	23.8%	14.9%	26.1%
ステップファミリー	頻度	169	118	9	12	173	240	721
	カテゴリ別の%	11.8%	11.3%	7.1%	19.7%	11.6%	11.4%	11.5%
DV	頻度	<u>250</u>	<u>140</u>	30	10	<u>193</u>	887	1510
	カテゴリ別の%	17.4%	13.4%	23.8%	16.4%	12.9%	42.0%	24.1%
夫婦間不和	頻度	<u>366</u>	<u>257</u>	42	22	<u>383</u>	1004	2074
	カテゴリ別の%	25.5%	24.6%	33.3%	36.1%	25.7%	47.6%	33.1%
夫婦以外の 家族間不和	頻度	112	79	<u>20</u>	5	95	<u>125</u>	436
	カテゴリ別の%	7.8%	7.6%	15.9%	8.2%	6.4%	5.9%	7.0%
養育者の別居または離婚	頻度	304	287	<u>43</u>	14	273	<u>333</u>	1254
	カテゴリ別の%	21.2%	27.5%	34.1%	23.0%	18.3%	15.8%	20.0%
親族・近隣・友人等 からの孤立	頻度	61	80	6	3	50	<u>31</u>	231
	カテゴリ別の%	4.3%	7.7%	4.8%	4.9%	3.3%	1.5%	3.7%
若年出産	頻度	74	117	<u>12</u>	5	<u>51</u>	<u>73</u>	332
	カテゴリ別の%	5.2%	11.2%	9.5%	8.2%	3.4%	3.5%	5.3%
育児疲れ	頻度	116	81	10	2	113	<u>65</u>	387
	カテゴリ別の%	8.1%	7.8%	7.9%	3.3%	7.6%	3.1%	6.2%
育児に嫌悪感、拒否感情	頻度	<u>71</u>	52	3	3	50	<u>25</u>	204
	カテゴリ別の%	5.0%	5.0%	2.4%	4.9%	3.3%	1.2%	3.3%
狭いまたは劣悪な住環境	頻度	<u>43</u>	149	<u>21</u>	4	63	<u>34</u>	314
	カテゴリ別の%	3.0%	14.3%	16.7%	6.6%	4.2%	1.6%	5.0%
頻繁な転居	頻度	53	86	<u>10</u>	3	<u>36</u>	<u>51</u>	239
	カテゴリ別の%	3.7%	8.2%	7.9%	4.9%	2.4%	2.4%	3.8%
病気や障害を持つ 家族の世話	頻度	31	42	4	2	43	<u>20</u>	142
	カテゴリ別の%	2.2%	4.0%	3.2%	3.3%	2.9%	0.9%	2.3%
きょうだいが虐待者から 虐待を受けた	頻度	173	144	10	13	271	<u>167</u>	778
	カテゴリ別の%	12.1%	13.8%	7.9%	21.3%	18.2%	7.9%	12.4%
アルコール等を 乱用する者がいた	頻度	58	51	6	1	62	82	260
	カテゴリ別の%	4.0%	4.9%	4.8%	1.6%	4.2%	3.9%	4.1%
精神障害・知的障害等の ある者がいた	頻度	142	170	30	12	183	<u>164</u>	701
	カテゴリ別の%	9.9%	16.3%	23.8%	19.7%	12.3%	7.8%	11.2%
自殺（未遂）者がいた	頻度	13	15	0	3	35	<u>8</u>	74
	カテゴリ別の%	0.9%	1.4%	0.0%	4.9%	2.3%	0.4%	1.2%
家族で刑務所に入った 者がいた	頻度	24	18	4	0	27	<u>17</u>	90
	カテゴリ別の%	1.7%	1.7%	3.2%	0.0%	1.8%	0.8%	1.4%
その他	頻度	29	32	2	2	20	<u>18</u>	103
	カテゴリ別の%	2.0%	3.1%	1.6%	3.3%	1.3%	0.9%	1.6%
ないと思われる	頻度	231	<u>85</u>	13	5	255	<u>205</u>	794
	カテゴリ別の%	16.1%	8.1%	10.3%	8.2%	17.1%	9.7%	12.7%
不明	頻度	184	<u>103</u>	<u>8</u>	5	250	<u>242</u>	792
	カテゴリ別の%	12.8%	9.9%	6.3%	8.2%	16.7%	11.5%	12.6%
	総数	1435	1039	126	60	1497	2112	6269

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

家庭状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表

Q24 家庭状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
経済的な困難	頻度	<u>165</u>	<u>459</u>	<u>322</u>	<u>89</u>	5	<u>15</u>	1055
	カテゴリ別の%	13.9%	15.4%	20.5%	36.0%	18.5%	6.7%	16.9%
不安定な就労	頻度	<u>71</u>	<u>224</u>	<u>179</u>	<u>55</u>	5	<u>4</u>	538
	カテゴリ別の%	6.0%	7.5%	11.4%	22.3%	18.5%	1.8%	8.6%
ひとり親家庭	頻度	<u>276</u>	787	426	<u>93</u>	7	<u>33</u>	1622
	カテゴリ別の%	23.3%	26.5%	27.1%	37.7%	25.9%	14.7%	26.1%
ステップファミリー	頻度	117	<u>305</u>	<u>221</u>	<u>52</u>	2	19	716
	カテゴリ別の%	9.9%	10.3%	14.1%	21.1%	7.4%	8.4%	11.5%
DV	頻度	<u>190</u>	<u>658</u>	<u>507</u>	<u>116</u>	6	<u>25</u>	1502
	カテゴリ別の%	16.0%	22.1%	32.3%	47.0%	22.2%	11.1%	24.1%
夫婦間不和	頻度	382	<u>897</u>	<u>620</u>	<u>109</u>	5	<u>47</u>	2060
	カテゴリ別の%	32.3%	30.2%	39.5%	44.1%	18.5%	20.9%	33.1%
夫婦以外の 家族間の不和	頻度	81	<u>173</u>	<u>128</u>	<u>40</u>	<u>6</u>	<u>3</u>	431
	カテゴリ別の%	6.8%	5.8%	8.2%	16.2%	22.2%	1.3%	6.9%
養育者の別居または離婚	頻度	<u>202</u>	<u>553</u>	<u>367</u>	<u>95</u>	2	<u>27</u>	1246
	カテゴリ別の%	17.1%	18.6%	23.4%	38.5%	7.4%	12.0%	20.0%
親族・近隣・友人等 からの孤立	頻度	38	<u>87</u>	<u>71</u>	<u>30</u>	1	<u>2</u>	229
	カテゴリ別の%	3.2%	2.9%	4.5%	12.1%	3.7%	0.9%	3.7%
若年出産	頻度	<u>45</u>	<u>129</u>	<u>124</u>	<u>24</u>	<u>4</u>	<u>3</u>	329
	カテゴリ別の%	3.8%	4.3%	7.9%	9.7%	14.8%	1.3%	5.3%
育児疲れ	頻度	62	198	100	12	2	10	384
	カテゴリ別の%	5.2%	6.7%	6.4%	4.9%	7.4%	4.4%	6.2%
育児に嫌悪感、拒否感情	頻度	<u>15</u>	96	<u>70</u>	<u>16</u>	2	3	202
	カテゴリ別の%	1.3%	3.2%	4.5%	6.5%	7.4%	1.3%	3.2%
狭いまたは劣悪な住環境	頻度	<u>38</u>	<u>118</u>	<u>111</u>	<u>39</u>	0	<u>4</u>	310
	カテゴリ別の%	3.2%	4.0%	7.1%	15.8%	0.0%	1.8%	5.0%
頻繁な転居	頻度	<u>30</u>	101	65	<u>31</u>	<u>3</u>	5	235
	カテゴリ別の%	2.5%	3.4%	4.1%	12.6%	11.1%	2.2%	3.8%
病気や障害を持つ 家族の世話	頻度	28	<u>53</u>	44	<u>12</u>	1	3	141
	カテゴリ別の%	2.4%	1.8%	2.8%	4.9%	3.7%	1.3%	2.3%
きょうだいが虐待者から 虐待を受けた	頻度	129	361	207	<u>58</u>	<u>0</u>	22	777
	カテゴリ別の%	10.9%	12.1%	13.2%	23.5%	0.0%	9.8%	12.5%
アルコール等を 乱用する者がいた	頻度	<u>25</u>	<u>108</u>	<u>98</u>	<u>21</u>	1	6	259
	カテゴリ別の%	2.1%	3.6%	6.2%	8.5%	3.7%	2.7%	4.2%
精神障害・知的障害等の ある者がいた	頻度	125	<u>269</u>	<u>235</u>	<u>59</u>	4	<u>8</u>	700
	カテゴリ別の%	10.6%	9.1%	15.0%	23.9%	14.8%	3.6%	11.2%
自殺（未遂）者がいた	頻度	10	25	28	7	2	1	73
	カテゴリ別の%	0.8%	0.8%	1.8%	2.8%	7.4%	0.4%	1.2%
家族で刑務所に入った 者がいた	頻度	6	43	32	8	1	0	90
	カテゴリ別の%	0.5%	1.4%	2.0%	3.2%	3.7%	0.0%	1.4%
その他	頻度	8	52	30	4	1	4	99
	カテゴリ別の%	0.7%	1.7%	1.9%	1.6%	3.7%	1.8%	1.6%
ないと思われる	頻度	<u>197</u>	<u>421</u>	<u>126</u>	<u>19</u>	1	<u>17</u>	781
	カテゴリ別の%	16.6%	14.2%	8.0%	7.7%	3.7%	7.6%	12.5%
不明	頻度	164	391	<u>123</u>	<u>12</u>	<u>7</u>	<u>94</u>	791
	カテゴリ別の%	13.9%	13.2%	7.8%	4.9%	25.9%	41.8%	12.7%
	全体	1184	2972	1570	247	27	225	6225

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q25. 被虐待児の虐待による身体状況（複数回答）

▶ 設問：「被虐待児における虐待による調査時の身体状況」

- 「ないと思われる」が8割以上を占めた。該当のある身体状況では、「打撲傷・あざ」が7.5%と最も高く、次いで「不衛生」3.0%となっていた。

Q25 被虐待児の調査時の身体問題（複数回答）

	度数	%	%グラフ
打撲傷・あざ	470	7.5	■
火傷	17	0.3	
刺傷	11	0.2	
骨折	13	0.2	
頭部外傷	53	0.8	
性器の外傷	2	0.0	
妊娠	0	0.0	
栄養不良	49	0.8	
身体的発達の遅れ	40	0.6	
不衛生	190	3.0	■
その他	102	1.6	
ないと思われる	5113	81.2	■
不明	337	5.3	■
該当ケース数	6300		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、今回と同様「特になし」が 71.5%と回答しており、該当のあった中では「打撲傷・あざ」15.3%が最も多く、次いで「性的虐待」1.8%、「頭部外傷」1.6%などが続いていた。今回の調査では「性的虐待」に関する項目はなかったが「性器の外傷」が 2 件報告されていた。

被虐待児の身体的問題（複数回答）と性別のクロス表

打撲傷・あざは男児で多く報告される傾向が認められたものの、おおむね男女で身体的問題に偏りは見いだせなかった。

Q25 被虐待児身体問題と被虐待児の性別のクロス集計表

		男児	女児	合計
打撲傷・あざ	頻度	291	177	468
	カテゴリ別の%	8.8%	6.0%	7.5%
火傷	頻度	10	7	17
	カテゴリ別の%	0.3%	0.2%	0.3%
刺傷	頻度	3	8	11
	カテゴリ別の%	0.1%	0.3%	0.2%
骨折	頻度	7	6	13
	カテゴリ別の%	0.2%	0.2%	0.2%
頭部外傷	頻度	30	23	53
	カテゴリ別の%	0.9%	0.8%	0.8%
性器の外傷	頻度	0	2	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.0%
妊娠	頻度	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%
栄養不良	頻度	31	18	49
	カテゴリ別の%	0.9%	0.6%	0.8%
身体的発達の遅れ	頻度	25	15	40
	カテゴリ別の%	0.8%	0.5%	0.6%
不衛生	頻度	103	87	190
	カテゴリ別の%	3.1%	2.9%	3.0%
その他	頻度	47	55	102
	カテゴリ別の%	1.4%	1.9%	1.6%
ないと思われる	頻度	2674	2422	5096
	カテゴリ別の%	80.6%	82.0%	81.3%
不明	頻度	155	175	330
	カテゴリ別の%	4.7%	5.9%	5.3%
全体		3317	2953	6270

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

被虐待児の身体的問題（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

被虐待児が 6-11 歳・12-14 歳の場合、「打撲やあざ」の報告頻度が他年齢と比べて高い。また「頭部外傷」「骨折」は 1 歳未満に特徴的であり、「刺し傷」が 12-14 歳・15 歳以上に特徴的だが、全体的な報告例が少ないため解釈には慎重になる必要がある。

Q25 被虐待児身体問題と年齢カテゴリー（5 段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
打撲傷・あざ	頻度	<u>8</u>	<u>131</u>	<u>197</u>	<u>89</u>	43	468
	カテゴリ別の%	2.0%	5.9%	9.0%	9.5%	8.1%	7.5%
火傷	頻度	0	10	4	3	0	17
	カテゴリ別の%	0.0%	0.5%	0.2%	0.3%	0.0%	0.3%
刺傷	頻度	0	2	2	<u>4</u>	<u>3</u>	11
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.1%	0.4%	0.6%	0.2%
骨折	頻度	<u>4</u>	<u>1</u>	3	3	2	13
	カテゴリ別の%	1.0%	0.0%	0.1%	0.3%	0.4%	0.2%
頭部外傷	頻度	<u>12</u>	12	14	8	7	53
	カテゴリ別の%	3.0%	0.5%	0.6%	0.9%	1.3%	0.8%
性器の外傷	頻度	0	0	0	1	1	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.2%	0.0%
妊娠	頻度	0	0	0	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
栄養不良	頻度	5	13	22	6	2	48
	カテゴリ別の%	1.2%	0.6%	1.0%	0.6%	0.4%	0.8%
身体的発達の遅れ	頻度	3	16	16	4	1	40
	カテゴリ別の%	0.7%	0.7%	0.7%	0.4%	0.2%	0.6%
不衛生	頻度	13	73	70	26	8	190
	カテゴリ別の%	3.2%	3.3%	3.2%	2.8%	1.5%	3.0%
その他	頻度	12	34	29	18	9	102
	カテゴリ別の%	3.0%	1.5%	1.3%	1.9%	1.7%	1.6%
ないと思われる	頻度	332	1812	1772	739	429	5084
	カテゴリ別の%	82.8%	82.3%	81.3%	79.2%	80.6%	81.4%
不明	頻度	18	130	92	48	34	322
	カテゴリ別の%	4.5%	5.9%	4.2%	5.1%	6.4%	5.2%
総数		401	2203	2179	933	532	6248

***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは有意に低い頻度を示したものの。

被虐待児の身体的問題（複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

当然ではあるが身体的虐待において、身体的問題の報告頻度が高い（「打撲傷・あざ」「頭部外傷」の順）。またネグレクトでは「不衛生」「栄養不良」「発達の遅れ」といった身体的な世話の不足と関連した問題の頻度が高くなっていた。DV目撃も含む心理的虐待は「ないと思われる」が9割以上を占めていた。

Q25 被虐待児身体問題と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト（同居人の虐待	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV目撃）	合計
打撲傷・あざ	頻度	394	<u>30</u>	23	<u>0</u>	<u>17</u>	<u>4</u>	468
	カテゴリ別の%	27.5%	2.9%	18.3%	0.0%	1.1%	0.2%	7.5%
火傷	頻度	11	6	0	0	<u>0</u>	<u>0</u>	17
	カテゴリ別の%	0.8%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%
刺傷	頻度	8	2	0	0	1	<u>0</u>	11
	カテゴリ別の%	0.6%	0.2%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.2%
骨折	頻度	10	1	0	0	1	<u>0</u>	12
	カテゴリ別の%	0.7%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.2%
頭部外傷	頻度	42	5	1	0	<u>3</u>	<u>2</u>	53
	カテゴリ別の%	2.9%	0.5%	0.8%	0.0%	0.2%	0.1%	0.8%
生殖器の外傷	頻度	0	0	1	1	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.8%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%
妊娠	頻度	0	0	0	0	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
栄養不良	頻度	6	36	2	0	<u>4</u>	<u>1</u>	49
	カテゴリ別の%	0.4%	3.5%	1.6%	0.0%	0.3%	0.0%	0.8%
身体的発達の遅れ	頻度	7	22	2	0	<u>2</u>	<u>7</u>	40
	カテゴリ別の%	0.5%	2.1%	1.6%	0.0%	0.1%	0.3%	0.6%
不衛生	頻度	<u>19</u>	134	9	1	<u>11</u>	<u>16</u>	190
	カテゴリ別の%	1.3%	12.8%	7.1%	1.6%	0.7%	0.8%	3.0%
その他	頻度	42	34	3	3	<u>9</u>	<u>11</u>	102
	カテゴリ別の%	2.9%	3.3%	2.4%	4.9%	0.6%	0.5%	1.6%
ないと思われる	頻度	<u>856</u>	<u>780</u>	<u>79</u>	51	1348	1984	5098
	カテゴリ別の%	59.7%	74.8%	62.7%	83.6%	90.3%	94.0%	81.3%
不明	頻度	79	48	10	5	100	<u>88</u>	330
	カテゴリ別の%	5.5%	4.6%	7.9%	8.2%	6.7%	4.2%	5.3%
	全体	1433	1043	126	61	1493	2111	6267

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

被虐待児の身体的問題（複数回答）と虐待重症度のクロス表

身体的虐待の反映と見られる「打撲傷・あざ」「頭部外傷」は重度虐待以上での報告例が多い。またネグレクトの反映と考えられる「不衛生」「栄養不良」「身体発達の遅れ」も重度虐待以上での報告が多くなる。逆に「ないと思われる」は軽度虐待や虐待の危惧ありのケースでの報告が多い。

Q25 被虐待児身体問題と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
打撲傷・あざ	頻度	<u>18</u>	<u>175</u>	<u>214</u>	<u>50</u>	4	<u>8</u>	469
	カテゴリ別の%	1.5%	5.9%	13.6%	20.2%	14.8%	3.6%	7.5%
火傷	頻度	1	6	5	<u>3</u>	<u>2</u>	0	17
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.3%	1.2%	7.4%	0.0%	0.3%
刺傷	頻度	1	<u>1</u>	5	<u>3</u>	0	1	11
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.3%	1.2%	0.0%	0.4%	0.2%
骨折	頻度	2	<u>0</u>	2	<u>7</u>	0	<u>2</u>	13
	カテゴリ別の%	0.2%	0.0%	0.1%	2.8%	0.0%	0.9%	0.2%
頭部外傷	頻度	5	<u>13</u>	13	<u>15</u>	<u>6</u>	1	53
	カテゴリ別の%	0.4%	0.4%	0.8%	6.1%	22.2%	0.4%	0.9%
性器の外傷	頻度	0	0	0	<u>2</u>	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%
妊娠	頻度	0	0	0	0	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
栄養不良	頻度	4	<u>10</u>	<u>23</u>	<u>9</u>	1	1	48
	カテゴリ別の%	0.3%	0.3%	1.5%	3.6%	3.7%	0.4%	0.8%
身体的発達の遅れ	頻度	<u>1</u>	<u>12</u>	<u>18</u>	<u>8</u>	0	0	39
	カテゴリ別の%	0.1%	0.4%	1.1%	3.2%	0.0%	0.0%	0.6%
不衛生	頻度	<u>25</u>	78	<u>61</u>	<u>25</u>	0	<u>1</u>	190
	カテゴリ別の%	2.1%	2.6%	3.9%	10.1%	0.0%	0.4%	3.1%
その他	頻度	13	40	25	<u>13</u>	<u>7</u>	2	100
	カテゴリ別の%	1.1%	1.3%	1.6%	5.3%	25.9%	0.9%	1.6%
ないと思われる	頻度	<u>1079</u>	<u>2514</u>	<u>1194</u>	<u>129</u>	<u>7</u>	<u>131</u>	5054
	カテゴリ別の%	91.1%	84.6%	76.1%	52.2%	25.9%	58.2%	81.2%
不明	頻度	<u>38</u>	<u>135</u>	<u>62</u>	12	<u>4</u>	<u>81</u>	332
	カテゴリ別の%	3.2%	4.5%	3.9%	4.9%	14.8%	36.0%	5.3%
	総数	1184	2972	1570	247	27	225	6225

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q26-1. 被虐待児の精神状況（未就学児童 2680 ケース限定：複数回答）

※ケースの児童が「未就学児童」か「就学児童」かどうかの判定には、基本的には「Q2 年齢」「Q4 在学状況」の双方を用いた。Q4 で小学生以降と評定され、Q2 で7歳以上と回答されていた場合、「就学児童」とみなした。Q4 で小学生以下と評定があり、Q2 で5歳以下と回答されていた場合、「未就学児童」とした。Q2 が6歳の場合は、Q4 の回答で判断した。

➤ 設問：「被虐待児の現在の精神症状（未就学年齢の場合）」

- 「ないと思われる」「不明」を除いたケースで最も多かったのは「遊びに集中できず落ち着かない・多動傾向」6.1%、「ぐずることやかんしゃくを起こすことが多い」5.1%、「誰にでもべたべたして、次々と別の大人を求める」1.9%、「その他」1.9%、「特定の人・物・場面におびえる・びくびくする・不安」1.8%であった。
- 「ないと思われる」は70.2%で、約7割の子どもには精神的な問題はなかった。乳幼児の精神的問題は捉えにくく、心理面接をしていないことも多いため、実際より低く出ている可能性がある。

Q26-1 被虐待児の調査時の精神的問題（未就学児限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
特定の人・物・場面におびえる・びくびく・不安	49	1.8	■
表情乏しい・笑顔少ない・突然固まる	55	2.1	■
感情の起伏激しい・急に泣き出して止まらない	46	1.7	■
ぐずる・かんしゃく・攻撃的・時に暴力	137	5.1	■
寝付けない・中途覚醒・夜泣き激しい等、睡眠の問題	24	0.9	■
集中できず落ち着かない・多動傾向	164	6.1	■
誰にでもべたべたして、次々と別の大人を求める	51	1.9	■
養育者に助けを求めない・泣かない	16	0.6	■
弱い子にいじめや暴力・強い子に服従的・友達とうまく遊べない	13	0.5	■
床や壁に自分の頭を打ち付ける	10	0.4	■
金銭の持ち出しや万引き	1	0.0	■
年齢不相応な性的関心や行動・性や身体接触を避ける	7	0.3	■
食べ物への固執・過食・拒食	23	0.9	■
その他	52	1.9	■
ないと思われる	1882	70.2	■
不明（子どもの状態が全くわからない場合に選択）	252	9.4	■
該当ケース数	2680		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

被虐待児の精神的問題（未就学児童：複数回答）と性別のクロス表

未就学児の精神的問題において、「ぐずる・かんしゃく」「集中できず落ち着かない」は男児の方に報告が多かった。その他は明確な偏りは見られなかった。

Q26-1 被虐待児の精神的問題（未就学）と被虐待児の性別のクロス集計表

	男児	女児	合計
おびえる・びくびく・不安	頻度 29	20	49
	カテゴリ別の% 2.1%	1.6%	1.8%
表情乏しい・笑顔少ない・固まる	頻度 30	25	55
	カテゴリ別の% 2.2%	2.0%	2.1%
感情の起伏激しい・泣き出して止まらない	頻度 21	25	46
	カテゴリ別の% 1.5%	2.0%	1.7%
ぐずる・かんしゃく	頻度 84	53	137
	カテゴリ別の% 6.0%	4.2%	5.1%
寝付けられない・中途覚醒・夜泣き激しい	頻度 11	13	24
	カテゴリ別の% 0.8%	1.0%	0.9%
集中できず落ち着かない・多動傾向	頻度 101	63	164
	カテゴリ別の% 7.2%	4.9%	6.1%
誰にでもべたべた・別の大人を求める	頻度 25	26	51
	カテゴリ別の% 1.8%	2.0%	1.9%
養育者に助けを求めない・泣かない	頻度 10	6	16
	カテゴリ別の% 0.7%	0.5%	0.6%
いじめや暴力・服従・友達とうまく遊べない	頻度 7	6	13
	カテゴリ別の% 0.5%	0.5%	0.5%
床や壁に自分の頭を打ち付ける	頻度 8	2	10
	カテゴリ別の% 0.6%	0.2%	0.4%
金銭の持ち出しや万引き	頻度 1	0	1
	カテゴリ別の% 0.1%	0.0%	0.0%
不相応な性的関心行動・性や身体接触避ける	頻度 4	3	7
	カテゴリ別の% 0.3%	0.2%	0.3%
食べ物への固執・過食・拒食	頻度 12	11	23
	カテゴリ別の% 0.9%	0.9%	0.9%
その他	頻度 30	22	52
	カテゴリ別の% 2.2%	1.7%	1.9%
ないと思われる	頻度 963	908	1871
	カテゴリ別の% 69.0%	71.3%	70.1%
不明	頻度 125	126	251
	カテゴリ別の% 9.0%	9.9%	9.4%
	全体 1395	1273	2668

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

被虐待児の精神的問題（未就学児童：複数回答）と年齢カテゴリのクロス表

「おびえる・不安」「感情の起伏激しい」「ぐずる・かんしゃく」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」は1-5歳児に多く報告された。1歳未満では「ないと思われる」の報告頻度が高くなっていた。

Q26-1 被虐待児の精神的問題（未就学）と年齢カテゴリ別のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	合計
おびえる・びくびく・不安	頻度	<u>2</u>	47	49
	カテゴリ別の%	0.5%	2.1%	1.9%
表情乏しい・笑顔少ない・固まる	頻度	3	48	51
	カテゴリ別の%	0.7%	2.2%	2.0%
感情の起伏激しい・泣き出して止まらない	頻度	<u>0</u>	43	43
	カテゴリ別の%	0.0%	2.0%	1.7%
ぐずる・かんしゃく	頻度	<u>2</u>	127	129
	カテゴリ別の%	0.5%	5.8%	5.0%
寝付けない・中途覚醒・夜泣き激しい	頻度	2	21	23
	カテゴリ別の%	0.5%	1.0%	0.9%
集中できず落ち着かない・多動傾向	頻度	<u>1</u>	153	154
	カテゴリ別の%	0.2%	6.9%	5.9%
誰にでもべたべた・別の大人を求める	頻度	<u>1</u>	49	50
	カテゴリ別の%	0.2%	2.2%	1.9%
養育者に助けを求めない・泣かない	頻度	0	14	14
	カテゴリ別の%	0.0%	0.6%	0.5%
いじめや暴力・服従・友達とうまく遊べない	頻度	0	13	13
	カテゴリ別の%	0.0%	0.6%	0.5%
床や壁に自分の頭を打ち付ける	頻度	0	10	10
	カテゴリ別の%	0.0%	0.5%	0.4%
金銭の持ち出しや万引き	頻度	0	1	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%
不相応な性的関心行動・性や身体接触避ける	頻度	0	6	6
	カテゴリ別の%	0.0%	0.3%	0.2%
食べ物への固執・過食・拒食	頻度	1	22	23
	カテゴリ別の%	0.2%	1.0%	0.9%
その他	頻度	8	43	51
	カテゴリ別の%	2.0%	2.0%	2.0%
ないと思われる	頻度	340	1495	1835
	カテゴリ別の%	84.8%	67.9%	70.5%
不明	頻度	36	214	250
	カテゴリ別の%	9.0%	9.7%	9.6%
全体		401	2203	2604

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

被虐待児の精神的問題（未就学児童：複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

身体的虐待とネグレクトにおいて多くの精神的問題が報告された。身体的虐待は「おびえる・不安」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」「ぐずる・かんしゃく」「感情の起伏激しい」「寝付けない・夜泣き」「表情乏しい」などの報告頻度が高かった。ネグレクトは「表情乏しい」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」の報告頻度が高かった。心理的虐待では他の虐待種に比べて高い割合を示す精神的問題はなく、心理的虐待（DV 目撃）は約 8 割の子どもに精神的問題はないとの結果であった。

Q26-1 被虐待児の精神的問題（未就学）と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト（同居人の虐待放置）	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV 目撃）	合計
おびえる・びくびく・不安	頻度	22	4	5	0	7	11	49
	カテゴリ別の%	5.4%	0.8%	12.2%	0.0%	1.1%	1.0%	1.8%
表情乏しい・笑顔少ない・固まる	頻度	15	22	0	1	9	8	55
	カテゴリ別の%	3.7%	4.5%	0.0%	33.3%	1.4%	0.7%	2.1%
感情の起伏激しい・泣き出して止まらない	頻度	15	5	1	0	11	14	46
	カテゴリ別の%	3.7%	1.0%	2.4%	0.0%	1.7%	1.3%	1.7%
ぐずる・かんしゃく	頻度	45	32	6	2	28	24	137
	カテゴリ別の%	11.0%	6.5%	14.6%	66.7%	4.4%	2.2%	5.1%
寝付けない・中途覚醒・夜泣き激しい	頻度	9	4	0	0	5	6	24
	カテゴリ別の%	2.2%	0.8%	0.0%	0.0%	0.8%	0.6%	0.9%
集中できず落ち着かない・多動傾向	頻度	58	44	4	2	28	28	164
	カテゴリ別の%	14.2%	8.9%	9.8%	66.7%	4.4%	2.6%	6.1%
誰にでもべたべた・別の大人を求める	頻度	17	21	0	0	5	8	51
	カテゴリ別の%	4.2%	4.3%	0.0%	0.0%	0.8%	0.7%	1.9%
養育者に助けを求めない・泣かない	頻度	3	6	0	0	6	1	16
	カテゴリ別の%	0.7%	1.2%	0.0%	0.0%	0.9%	0.1%	0.6%
いじめや暴力・服従・友達とうまく遊べない	頻度	8	3	0	1	0	1	13
	カテゴリ別の%	2.0%	0.6%	0.0%	33.3%	0.0%	0.1%	0.5%
床や壁に自分の頭を打ち付ける	頻度	2	3	0	0	1	4	10
	カテゴリ別の%	0.5%	0.6%	0.0%	0.0%	0.2%	0.4%	0.4%
金銭の持ち出しや万引き	頻度	0	1	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
不相应な性的関心行動・性や身体接触避ける	頻度	3	1	0	1	1	1	7
	カテゴリ別の%	0.7%	0.2%	0.0%	33.3%	0.2%	0.1%	0.3%
食べ物への固執・過食・拒食	頻度	7	11	1	0	3	1	23
	カテゴリ別の%	1.7%	2.2%	2.4%	0.0%	0.5%	0.1%	0.9%
その他	頻度	15	16	1	0	14	6	52
	カテゴリ別の%	3.7%	3.3%	2.4%	0.0%	2.2%	0.6%	1.9%
ないと思われる	頻度	228	306	26	1	447	863	1871
	カテゴリ別の%	55.9%	62.2%	63.4%	33.3%	69.8%	79.7%	70.2%
不明	頻度	27	41	3	0	89	91	251
	カテゴリ別の%	6.6%	8.3%	7.3%	0.0%	13.9%	8.4%	9.4%
	全体	408	492	41	3	640	1072	2668

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したもの。

被虐待児の精神的問題（未就学児童：複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

虐待の危惧あり・軽度虐待では「ないと思われる」が多く報告され、中度虐待では「おびえる・不安」「表情乏しい」「寝付けない・夜泣き激しい」が多く報告されていた。重度虐待は加えて「ぐずる・かんしゃく」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」「表情乏しい」が多く報告されていた。生命の危機ありは報告頻度が全体に少ないが、精神的問題については不明であるという報告が多かった。

Q26-1 被虐待児の精神的問題（未就学）と虐待種別のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
おびえる・びくびく・不安	頻度	<u>4</u>	19	<u>23</u>	3	0	0	49
	カテゴリ別の%	0.7%	1.6%	3.6%	3.0%	0.0%	0.0%	1.9%
表情乏しい・笑顔少ない・ 固まる	頻度	7	22	<u>20</u>	<u>6</u>	0	0	55
	カテゴリ別の%	1.2%	1.8%	3.1%	6.0%	0.0%	0.0%	2.1%
感情の起伏激しい・ 泣き出して止まらない	頻度	11	20	13	2	0	0	46
	カテゴリ別の%	1.9%	1.6%	2.0%	2.0%	0.0%	0.0%	1.7%
ぐずる・かんしゃく	頻度	22	63	38	<u>13</u>	0	0	136
	カテゴリ別の%	3.9%	5.2%	5.9%	13.0%	0.0%	0.0%	5.1%
寝付けない・中途覚醒・ 夜泣き激しい	頻度	<u>1</u>	9	<u>13</u>	1	0	0	24
	カテゴリ別の%	0.2%	0.7%	2.0%	1.0%	0.0%	0.0%	0.9%
集中できず落ち着かない・ 多動傾向	頻度	27	78	44	<u>12</u>	0	3	164
	カテゴリ別の%	4.8%	6.4%	6.9%	12.0%	0.0%	3.1%	6.2%
誰にでもべたべた・ 別の大人を求める	頻度	<u>3</u>	28	14	<u>6</u>	0	0	51
	カテゴリ別の%	0.5%	2.3%	2.2%	6.0%	0.0%	0.0%	1.9%
養育者に助けを求めない・ 泣かない	頻度	1	9	5	1	0	0	16
	カテゴリ別の%	0.2%	0.7%	0.8%	1.0%	0.0%	0.0%	0.6%
いじめや暴力・服従・ 友達とうまく遊べない	頻度	0	7	6	0	0	0	13
	カテゴリ別の%	0.0%	0.6%	0.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%
床や壁に自分の頭を 打ち付ける	頻度	1	2	5	1	0	1	10
	カテゴリ別の%	0.2%	0.2%	0.8%	1.0%	0.0%	1.0%	0.4%
金銭の持ち出しや万引き	頻度	1	0	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
不相応な性的関心行動・ 性や身体接触避ける	頻度	0	3	3	1	0	0	7
	カテゴリ別の%	0.0%	0.2%	0.5%	1.0%	0.0%	0.0%	0.3%
食べ物への固執・ 過食・拒食	頻度	3	7	8	3	0	0	21
	カテゴリ別の%	0.5%	0.6%	1.3%	3.0%	0.0%	0.0%	0.8%
その他	頻度	6	21	12	4	<u>5</u>	4	52
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	1.9%	4.0%	23.8%	4.1%	2.0%
ないと思われる	頻度	<u>420</u>	<u>887</u>	432	<u>59</u>	<u>9</u>	<u>46</u>	1853
	カテゴリ別の%	74.3%	72.9%	67.5%	59.0%	42.9%	46.9%	70.2%
不明	頻度	48	<u>86</u>	58	4	<u>7</u>	<u>43</u>	246
	カテゴリ別の%	8.5%	7.1%	9.1%	4.0%	33.3%	43.9%	9.3%
	全体	565	1217	640	100	21	98	2641

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したもの。

Q26-2. 被虐待児の調査時の精神状況（就学児童 3569 ケース限定：複数回答）

➤ 設問：「被虐待児の現在の精神症状（小学校年代以降の場合）」

- 就学以降の年代における被虐待児の症状としては、多い順に「落ち着きのなさ」11.3%、「虐待者や特定の状況・人に怯える」7.2%、「引きこもり・不登校」7.2%、「怒りを抑えられず、人や物にあたる」7.0%、「大人への反抗的な態度」5.8%などが多かった。

Q26-2 被虐待児の調査時の精神的問題（就学児以上限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
虐待者や特定の状況・物・状況におびえる	258	7.2	■
親の虐待を思い出させる場所・人・物を避ける	64	1.8	■
感情表現が少ない・無反応・フリーズ	134	3.8	■
些細なことで気持ちの動揺・過呼吸や動悸	57	1.6	■
怒りが抑えられず、人や物にあたる	249	7.0	■
寝付けない・中途覚醒が多い・朝起きられない・悪夢を見る	99	2.8	■
大人への反抗的な態度、他児への威圧的な態度	207	5.8	■
何事にも自信が持てない	129	3.6	■
落ち込み・意欲低下	156	4.4	■
自分を痛めつける行動・リストカット・希死念慮	81	2.3	■
落ち着きのなさ、注意が集中できない	403	11.3	■
引きこもり・不登校	257	7.2	■
年齢不相応な性的関心や行動／性や身体接触避ける	48	1.3	■
反社会的問題行動：火遊び・万引き・かつあげ	114	3.2	■
食行動上の問題：食べ物への固執・過食・拒食	34	1.0	■
飲酒・覚せい剤・大麻・市販薬・処方薬などの乱用	8	0.2	■
ゲームやインターネットへの依存	102	2.9	■
明確な身体的原因のない身体症状（吐き気・腹痛・下痢・慢性の痛みなど）	60	1.7	■
その他	116	3.3	■
ないと思われる	1951	54.7	■
不明（子どもの状態が全くわからない場合に選択）	240	6.7	■
該当ケース数		3569	

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「未就学児」と「就学児」の区分はなく、虐待に起因すると思われる精神症状は虐待を受けた子どもの 33.7%に見られた。具体的には「多動・落ち着きのなさ」が 8.9%と最も多く、次いで「対人関係の問題」8.0%、「低い自己評価」6.8%、「不安、怯え、パニック」6.6%と続いた。

被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と性別のクロス表

「怒りが抑えられない」「落ち着きがない」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」は男児のほうが報告例が多く、「虐待を思い出させる人・場所を避ける」「気持ちの動揺・過呼吸」「落ち込み・意欲低下」「自傷行動」「問題ない」については女児のほうが報告例が多くなっていった。

被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と年齢カテゴリのクロス表

6-11 歳では「精神的問題はない」割合が他年代と比べて高く(57.9%)、精神的問題としては「落ち着きがない」の出現率が高かった(14.8%)。

12-14 歳では「怒りが抑えられない」「反社会的問題行動」「大人への反抗的態度」などの攻撃的で外向型の問題行動が他の年代と比較して最も高い割合となり、一方「引きこもり・不登校」「自傷行動」「ゲーム依存」「原因のない身体症状」などの内向型の問題行動の頻度も他年代と比較して高い傾向が見られた。加えて「不相应な性的関心行動」の割合も高かった。

15 歳以上は「虐待を思い出させる人・場所を避ける」「気持ちの動揺」「寝付けられない・朝起きられない」「落ち込み・意欲低下」「自傷行動・リストカット」などトラウマ症状を思わせる症状の出現頻度が他の年代より高かった。加えて「引きこもり・不登校」「原因のない身体症状」「大人への反抗的態度」「不相应な性的関心行動」の出現率も他年代と比較して高かった。

被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

身体的虐待は 51.3%に精神的問題がみられ、「落ち着きの無さ」が最も多い問題で、「怒りが抑えられない」「大人への反抗的態度」などの攻撃的な問題行動や「虐待者等におびえる」「感情表現少ない」「自傷行動」などのトラウマ症状を思わせる問題の出現率も他虐待種と比較して高かった。さらに「何事にも自信持てない」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」の出現頻度も高かった。

ネグレクトは 47.8%に精神的問題がみられ、「引きこもり・不登校」「意欲低下」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」の出現率が他の虐待種に比較して高かった。

性的虐待は 55.1%と最も高率に精神的問題を有していて、「虐待者におびえる」「虐待を思い出させる場所を避ける」「感情表現少ない」「気持ちの動揺」「自傷行動」などトラウマ症状が推定される精神的問題が出現する割合が他虐待種より高く、加えて「自信が持てない」「落ち込み」「引きこもり」など、様々な問題の報告頻度が高かった。

心理的虐待、特に DV 目撃は精神的な「問題がないと思われる」割合が高く(56.4%、70.7%)、精神的問題の出現する割合は他虐待種と比較して低かった。

被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と虐待重症度のクロス表

「生命の危機あり」は 6 人と少人数であるため、それを除くと、ほとんどの精神的問題が虐待の重症度が増していくにつれて、出現率が増加していくことが明らかになった。

被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と性別のクロス表

Q26-2 被虐待児の精神的問題（就学）と被虐待児の性別のクロス集計表

		男児	女児	合計
虐待者や特定の状況・	頻度	128	129	257
人におびえる	カテゴリ別の%	6.7%	7.8%	7.2%
虐待を思い出させる場所・	頻度	23	41	64
人・物を避ける	カテゴリ別の%	1.2%	2.5%	1.8%
感情表現が少ない・	頻度	72	62	134
無反応・フリーズ	カテゴリ別の%	3.8%	3.7%	3.8%
気持ちの動揺・	頻度	10	47	57
過呼吸や動悸	カテゴリ別の%	0.5%	2.8%	1.6%
怒りが抑えられず、	頻度	156	93	249
人や物にあたる	カテゴリ別の%	8.2%	5.6%	7.0%
寝付けない・中途覚醒・	頻度	39	60	99
朝起きられない	カテゴリ別の%	2.0%	3.6%	2.8%
大人への反抗的態度・	頻度	109	98	207
他児への威圧的態度	カテゴリ別の%	5.7%	5.9%	5.8%
何事にも自信が持てない	頻度	70	59	129
	カテゴリ別の%	3.7%	3.6%	3.6%
落ち込み・意欲低下	頻度	65	91	156
	カテゴリ別の%	3.4%	5.5%	4.4%
自傷行動・リストカット・	頻度	19	62	81
希死念慮	カテゴリ別の%	1.0%	3.7%	2.3%
落ち着きのなさ・	頻度	283	120	403
注意が集中できない	カテゴリ別の%	14.8%	7.3%	11.3%
引きこもり・不登校	頻度	123	134	257
	カテゴリ別の%	6.4%	8.1%	7.2%
不相応な性的関心行動・	頻度	17	31	48
性や身体接触避ける	カテゴリ別の%	0.9%	1.9%	1.3%
反社会的問題行動・火遊び・	頻度	78	36	114
万引き・かつあげ	カテゴリ別の%	4.1%	2.2%	3.2%
食行動の問題：	頻度	14	20	34
食べ物への固執・過食・拒食	カテゴリ別の%	0.7%	1.2%	1.0%
飲酒や覚せい剤など薬物乱用	頻度	3	5	8
	カテゴリ別の%	0.2%	0.3%	0.2%
ゲームやインターネットへの	頻度	70	32	102
依存	カテゴリ別の%	3.7%	1.9%	2.9%
原因のない身体症状	頻度	25	35	60
（吐き気・腹痛・下痢・痛み等）	カテゴリ別の%	1.3%	2.1%	1.7%
その他	頻度	63	53	116
	カテゴリ別の%	3.3%	3.2%	3.3%
ないと思われる	頻度	1010	936	1946
	カテゴリ別の%	52.9%	56.6%	54.6%
不明	頻度	117	123	240
	カテゴリ別の%	6.1%	7.4%	6.7%
	全体	1908	1655	3563

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と年齢カテゴリのクロス表

Q26-2 被虐待児の精神的問題（就学）と被虐待児の性別のクロス集計表

		6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
虐待者や特定の状況・	頻度	138	76	44	258
人におびえる	カテゴリ別の%	6.6%	8.1%	8.3%	7.2%
虐待を思い出させる場所・	頻度	<u>25</u>	21	18	64
人・物を避ける	カテゴリ別の%	1.2%	2.3%	3.4%	1.8%
感情表現が少ない・	頻度	72	34	28	134
無反応・フリーズ	カテゴリ別の%	3.4%	3.6%	5.3%	3.8%
気持ちの動揺・	頻度	<u>17</u>	21	19	57
過呼吸や動悸	カテゴリ別の%	0.8%	2.3%	3.6%	1.6%
怒りが抑えられず、	頻度	134	83	32	249
人や物にあたる	カテゴリ別の%	6.4%	8.9%	6.0%	7.0%
寝付けない・中途覚醒・	頻度	<u>43</u>	33	23	99
朝起きられない	カテゴリ別の%	2.0%	3.5%	4.3%	2.8%
大人への反抗的態度・	頻度	<u>89</u>	77	41	207
他児への威圧的態度	カテゴリ別の%	4.2%	8.3%	7.7%	5.8%
何事にも自信が持てない	頻度	68	36	25	129
	カテゴリ別の%	3.2%	3.9%	4.7%	3.6%
落ち込み・意欲低下	頻度	<u>64</u>	48	44	156
	カテゴリ別の%	3.0%	5.1%	8.3%	4.4%
自傷行動・リストカット・	頻度	<u>13</u>	36	32	81
希死念慮	カテゴリ別の%	0.6%	3.9%	6.0%	2.3%
落ち着きのなさ・	頻度	311	<u>68</u>	<u>24</u>	403
注意が集中できない	カテゴリ別の%	14.8%	7.3%	4.5%	11.3%
引きこもり・不登校	頻度	<u>85</u>	121	51	257
	カテゴリ別の%	4.0%	13.0%	9.6%	7.2%
不相応な性的関心行動・	頻度	<u>15</u>	21	12	48
性や身体接触避ける	カテゴリ別の%	0.7%	2.3%	2.3%	1.3%
反社会的問題行動・火遊び・	頻度	58	41	15	114
万引き・かつあげ	カテゴリ別の%	2.8%	4.4%	2.8%	3.2%
食行動の問題：	頻度	18	10	6	34
食べ物への固執・過食・拒食	カテゴリ別の%	0.9%	1.1%	1.1%	1.0%
飲酒や覚せい剤など薬物乱用	頻度	<u>0</u>	3	5	8
	カテゴリ別の%	0.0%	0.3%	0.9%	0.2%
ゲームやインターネットへの	頻度	<u>37</u>	46	19	102
依存	カテゴリ別の%	1.8%	4.9%	3.6%	2.9%
原因のない身体症状	頻度	<u>19</u>	25	16	60
（吐き気・腹痛・下痢・痛み等）	カテゴリ別の%	0.9%	2.7%	3.0%	1.7%
その他	頻度	78	23	15	116
	カテゴリ別の%	3.7%	2.5%	2.8%	3.3%
ないと思われる	頻度	1219	<u>471</u>	<u>261</u>	1951
	カテゴリ別の%	57.9%	50.5%	49.1%	54.7%
不明	頻度	132	59	49	240
	カテゴリ別の%	6.3%	6.3%	9.2%	6.7%
	全体	2104	933	532	3569

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。
イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

Q26-2 被虐待児の精神的問題（就学）と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
虐待者や特定の状況・	頻度	108	<u>25</u>	12	12	57	<u>43</u>	257
人におびえる	カテゴリ別の%	10.7%	4.6%	14.3%	20.7%	6.8%	4.2%	7.2%
虐待を思い出させる場所・	頻度	16	10	5	6	17	<u>10</u>	64
人・物を避ける	カテゴリ別の%	1.6%	1.8%	6.0%	10.3%	2.0%	1.0%	1.8%
感情表現が少ない・	頻度	49	27	6	8	36	<u>8</u>	134
無反応・フリーズ	カテゴリ別の%	4.8%	5.0%	7.1%	13.8%	4.3%	0.8%	3.8%
気持ちの動揺・	頻度	21	8	2	4	16	<u>6</u>	57
過呼吸や動悸	カテゴリ別の%	2.1%	1.5%	2.4%	6.9%	1.9%	0.6%	1.6%
怒りが抑えられず、	頻度	119	40	5	2	55	<u>28</u>	249
人や物にあたる	カテゴリ別の%	11.7%	7.4%	6.0%	3.4%	6.5%	2.7%	7.0%
寝付けない・中途覚醒・	頻度	31	18	5	5	27	<u>13</u>	96
朝起きられない	カテゴリ別の%	3.1%	3.3%	6.0%	8.6%	3.2%	1.3%	2.9%
大人への反抗的態度・	頻度	96	36	5	3	43	<u>24</u>	207
他児への威圧的態度	カテゴリ別の%	9.5%	6.6%	6.0%	5.2%	5.1%	2.4%	5.8%
何事にも自信が持てない	頻度	49	26	5	8	27	<u>14</u>	129
	カテゴリ別の%	4.8%	4.8%	6.0%	13.8%	3.2%	1.4%	3.6%
落ち込み・意欲低下	頻度	49	37	5	11	35	<u>19</u>	156
	カテゴリ別の%	4.8%	6.8%	6.0%	19.0%	4.2%	1.9%	4.4%
自傷行動・リストカット・	頻度	31	14	4	6	23	<u>3</u>	81
希死念慮	カテゴリ別の%	3.1%	2.6%	4.8%	10.3%	2.7%	0.3%	2.3%
落ち着きのなさ・	頻度	189	61	8	3	93	<u>49</u>	403
注意が集中できない	カテゴリ別の%	18.6%	11.3%	9.5%	5.2%	11.1%	4.8%	11.3%
引きこもり・不登校	頻度	77	88	9	8	39	<u>36</u>	257
	カテゴリ別の%	7.6%	16.2%	10.7%	13.8%	4.6%	3.5%	7.2%
不相応な性的関心行動・	頻度	13	12	8	2	10	<u>3</u>	48
性や身体接触避ける	カテゴリ別の%	1.3%	2.2%	9.5%	3.4%	1.2%	0.3%	1.3%
反社会的問題行動・火遊び・	頻度	51	25	3	2	24	<u>9</u>	114
万引き・かつあげ	カテゴリ別の%	5.0%	4.6%	3.6%	3.4%	2.9%	0.9%	3.2%
食行動の問題：	頻度	14	6	2	1	8	<u>3</u>	34
食べ物への固執・過食・拒食	カテゴリ別の%	1.4%	1.1%	2.4%	1.7%	1.0%	0.3%	1.0%
飲酒や覚せい剤など薬物乱用	頻度	2	4	1	1	0	0	8
	カテゴリ別の%	0.2%	0.7%	1.2%	1.7%	0.0%	0.0%	0.2%
ゲームやインターネットへの	頻度	45	25	4	1	19	<u>8</u>	102
依存	カテゴリ別の%	4.4%	4.6%	4.8%	1.7%	2.3%	0.8%	2.9%
原因のない身体症状	頻度	28	7	4	7	11	<u>3</u>	60
(吐き気・腹痛・下痢・痛み等)	カテゴリ別の%	2.8%	1.3%	4.8%	12.1%	1.3%	0.3%	1.7%
その他	頻度	38	21	3	1	24	29	116
	カテゴリ別の%	3.7%	3.9%	3.6%	1.7%	2.9%	2.8%	3.3%
ないと思われる	頻度	426	263	40	23	474	722	1948
	カテゴリ別の%	42.0%	48.5%	47.6%	39.7%	56.4%	70.7%	54.7%
不明	頻度	68	<u>20</u>	<u>0</u>	3	58	88	237
	カテゴリ別の%	6.7%	3.7%	0.0%	5.2%	6.9%	8.6%	6.7%
	全体	1014	542	84	58	841	1021	3560

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と虐待重症度のクロス表

Q26-2 被虐待児の精神的問題（就学）と主たる虐待種別のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
虐待者や特定の状況・ 人におびえる	頻度	15	91	110	39	0	3	258
	カテゴリ別の%	2.5%	5.2%	11.9%	26.9%	0.0%	2.7%	7.3%
虐待を思い出させる場所・ 人・物を避ける	頻度	5	13	21	24	0	0	63
	カテゴリ別の%	0.8%	0.7%	2.3%	16.6%	0.0%	0.0%	1.8%
感情表現が少ない・ 無反応・フリーズ	頻度	9	46	58	20	0	1	134
	カテゴリ別の%	1.5%	2.6%	6.3%	13.8%	0.0%	0.9%	3.8%
気持ちの動揺・ 過呼吸や動悸	頻度	5	21	19	10	0	2	57
	カテゴリ別の%	0.8%	1.2%	2.1%	6.9%	0.0%	1.8%	1.6%
怒りが抑えられず、 人や物にあたる	頻度	20	120	81	26	0	1	248
	カテゴリ別の%	3.3%	6.9%	8.7%	17.9%	0.0%	0.9%	7.0%
寝付けない・中途覚醒・ 朝起きられない	頻度	7	30	36	26	0	0	99
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	3.9%	17.9%	0.0%	0.0%	2.8%
大人への反抗的態度・ 他児への威圧的態度	頻度	17	98	67	22	0	3	207
	カテゴリ別の%	2.8%	5.6%	7.2%	15.2%	0.0%	2.7%	5.9%
何事にも自信が持てない	頻度	11	40	57	21	0	0	129
	カテゴリ別の%	1.8%	2.3%	6.2%	14.5%	0.0%	0.0%	3.6%
落ち込み・意欲低下	頻度	17	53	59	27	0	0	156
	カテゴリ別の%	2.8%	3.1%	6.4%	18.6%	0.0%	0.0%	4.4%
自傷行動・リストカット・ 希死念慮	頻度	10	33	25	12	0	0	80
	カテゴリ別の%	1.6%	1.9%	2.7%	8.3%	0.0%	0.0%	2.3%
落ち着きのなさ・ 注意が集中できない	頻度	37	191	135	31	1	5	400
	カテゴリ別の%	6.0%	11.0%	14.6%	21.4%	16.7%	4.5%	11.3%
引きこもり・不登校	頻度	36	113	89	15	0	4	257
	カテゴリ別の%	5.9%	6.5%	9.6%	10.3%	0.0%	3.6%	7.3%
不相応な性的関心行動・ 性や身体接触避ける	頻度	2	20	20	6	0	0	48
	カテゴリ別の%	0.3%	1.2%	2.2%	4.1%	0.0%	0.0%	1.4%
反社会的問題行動・火遊び・ 万引き・かつあげ	頻度	10	45	45	9	1	2	112
	カテゴリ別の%	1.6%	2.6%	4.9%	6.2%	16.7%	1.8%	3.2%
食行動の問題： 食べ物への固執・過食・拒食	頻度	3	8	17	4	1	1	34
	カテゴリ別の%	0.5%	0.5%	1.8%	2.8%	16.7%	0.9%	1.0%
飲酒や覚せい剤など薬物乱用	頻度	1	2	4	1	0	0	8
	カテゴリ別の%	0.2%	0.1%	0.4%	0.7%	0.0%	0.0%	0.2%
ゲームやインターネットへの 依存	頻度	6	52	33	7	2	2	102
	カテゴリ別の%	1.0%	3.0%	3.6%	4.8%	33.3%	1.8%	2.9%
原因のない身体症状 (吐き気・腹痛・下痢・痛み等)	頻度	5	16	20	18	0	1	60
	カテゴリ別の%	0.8%	0.9%	2.2%	12.4%	0.0%	0.9%	1.7%
その他	頻度	11	63	33	7	0	0	114
	カテゴリ別の%	1.8%	3.6%	3.6%	4.8%	0.0%	0.0%	3.2%
ないと思われる	頻度	428	999	428	29	0	49	1948
	カテゴリ別の%	69.9%	57.5%	46.2%	20.0%	0.0%	43.8%	54.7%
不明	頻度	32	101	57	7	1	39	237
	カテゴリ別の%	5.2%	5.8%	6.2%	4.8%	16.7%	34.8%	6.7%
	全体	612	1737	926	145	6	112	3538

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

IV. 児相の対応について

(安全確認について)

Q27. 48 時間以内の安全確認

- 設問：「このケースにおける、48 時間以内の安全確認について」
- 9 割以上のケースで 48 時間以内の安全確認を行っていた。「他機関の協力により行った」が 68.1%と、児童相談所以外の機関の協力にもとづく対応が大半を占めた。

Q27 48時間以内の安全確認

	度数	%	%グラフ
児相が直接行った	1330	21.1	
他機関の協力により行った	4289	68.1	
行っていない	548	8.7	
無回答	133	2.1	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、9 割以上のケースで 48 時間以内の安全確認を行っている点は同じだが、H25 年調査では「他機関の協力により行った」55.8%と「児童相談所が直接行なった」35.7%であり、直接児童相談所が行うケースが 10%程度減っており、他機関の協力により行う割合が増えていた。

48 時間以内の安全確認と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」は児相が直接安全確認を行い、「心理的虐待（特に DV 目撃）」は他機関の協力により確認を行うかもしくは確認を行わない傾向が見て取れる。「他機関の協力により確認を行った」報告が多いのは、「DV 目撃」の通告件数の多さを反映したものと考えられる。

Q27 48時間以内の安全確認と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
		頻度	頻度	頻度	頻度	頻度	頻度	
児相が直接行った	頻度	448	307	54	32	306	177	1324
	カテゴリ別の%	31.9%	30.1%	44.3%	55.2%	21.1%	8.5%	21.6%
他機関の協力により行った	頻度	870	637	59	21	1028	1661	4276
	カテゴリ別の%	62.0%	62.5%	48.4%	36.2%	70.9%	79.5%	69.6%
行っていない	頻度	86	75	9	5	116	250	541
	カテゴリ別の%	6.1%	7.4%	7.4%	8.6%	8.0%	12.0%	8.8%
総数		1404	1019	122	58	1450	2088	6141

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

48 時間以内の安全確認と虐待重症度のクロス表

「虐待の危惧あり」・「軽度虐待」の場合は他機関の協力の下安全確認を行い、「中度虐待以上」の場合は児相が直接安全確認を行う傾向が見て取れる。先の虐待種別と関連付けると、DV 目撃は軽度の問題として扱われる傾向があり、身体的・ネグレクト・性的虐待は中度虐待以上の問題として児相が直接担当することの現れであろう。

Q27 48時間以内の安全確認と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
児相が直接行った	頻度	<u>173</u>	<u>582</u>	<u>400</u>	<u>119</u>	9	<u>30</u>	1313
	カテゴリ別の%	14.9%	19.9%	26.0%	48.4%	33.3%	14.0%	21.5%
他機関の協力により行った	頻度	<u>872</u>	<u>2096</u>	<u>1019</u>	<u>110</u>	17	<u>135</u>	4249
	カテゴリ別の%	75.2%	71.8%	66.2%	44.7%	63.0%	63.1%	69.6%
行っていない	頻度	114	243	120	17	1	<u>49</u>	544
	カテゴリ別の%	9.8%	8.3%	7.8%	6.9%	3.7%	22.9%	8.9%
	総数	1159	2921	1539	246	27	214	6106

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q27-1. 48 時間以内の安全確認を行わなかった理由

(Q27「行っていない」回答 548 ケース限定：複数回答)

- 「48 時間以内の安全確認を行う必要はないと判断した」が 52.6%と最も多く、次いで「調査に時間を要した」15.0%、次いで「子供が特定できなかった・子どもの所在不明」が 8.6%と続いていた。

Q27-1 安全確認できなかった理由 (Q27「行っていない」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	% グラフ
子どもが特定できなかった、子どもの所在不明	47	8.6	
訪問したが不在だった	38	6.9	
調査に時間を要した	82	15.0	
休日・休日前の受理だった	24	4.4	
訪問を拒否された	11	2.0	
受理が集中した	11	2.0	
48時間以内の安全確認は必要ないと判断した	288	52.6	
その他	100	18.2	
該当ケース数	548		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「調査に時間を要した」20.7%、「子供の特定ができなかった、または所在が分からなかった」14.9%と多かったが、「その他」が 43.5%あり、様々な固有の理由があることが推察された。

Q28. リスクアセスメントシートの活用

- ▶ 設問：「このケースに対応する際、リスクアセスメントシートを活用しましたか」
- リスクアセスメントシートの「活用あり」が59.8%に達し、「活用していない」を上回った。

Q28 リスクアセスメントシートの活用

	度数	%	%グラフ
活用した	3767	59.8	
活用していない	2413	38.3	
不明	120	1.9	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「活用」51.5%となっており、より活用率が高まっている。しかし依然として4割近くがシートを用いていないこともまた確かであり、今後さらなる利用が求められると思われる。

リスクアセスメントシートの活用と虐待重症度のクロス表

「虐待の危惧あり」・「中度虐待」・「生命の危機あり」の場合はシート活用の報告が多いのに比して、「軽度虐待」と「不明」の場合でシート活用の頻度が低くなっていた。軽度と判定される虐待対応においては兎相においてシート活用のあり方が異なる可能性等が考えられる。

なお、シート活用の有無と虐待種別についてもクロス表を作成して検定を実施したものの、有意な関連は認められなかった。

Q28 リスクアセスメントシートの活用と虐待重症度のクロス集計表

	虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計	
活用した	頻度 752	<u>1700</u>	1012	154	23	82	3723	
	カテゴリ別の%	65.2%	58.2%	65.0%	63.6%	85.2%	38.3%	60.9%
活用していない	頻度 402	1219	<u>544</u>	88	4	132	2389	
	カテゴリ別の%	16.8%	51.0%	22.8%	3.7%	0.2%	5.5%	100.0%
	総数	1154	2919	1556	242	27	214	6112

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q29. 受理状況

- 「新規受理」が61.1%と最も多く、「前回と今回も虐待として受理」が31.8%とほとんどを占めた。

Q29 受理状況について

	度数	%	%グラフ
新規受理	3852	61.1	
前は別の相談種別、虐待としては今回が初めて	402	6.4	
前回虐待で受理、今回も虐待として再受理	2002	31.8	
不明	44	0.7	
合計	6300	100	

受理状況と性別のクロス表

興味深いことに、女兒の場合は「新規受理」が多く、男児の場合は「前回と別の形で相談があるものの、虐待としてははじめて扱われる」ケースが多くなっていた。

Q29 受理状況についてと性別のクロス集計表

		男児	女兒	合計
新規受理	頻度	<u>1986</u>	<u>1845</u>	3831
	カテゴリ別の%	60.3%	62.9%	61.5%
前は別の相談種別、虐待としては今回が初めて	頻度	<u>252</u>	<u>150</u>	402
	カテゴリ別の%	7.6%	5.1%	6.5%
前回虐待で受理、今回も虐待として再受理	頻度	1058	940	1998
	カテゴリ別の%	32.1%	32.0%	32.1%
	総数	3331	2967	6298

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

受理状況と年齢カテゴリのクロス表

1歳未満・1~5歳は「新規受理」が多く、6歳以上は「複数回受理」が多いという傾向が見られた。また興味深いことに、6~11歳に「虐待での再受理」が多く報告され、12~14歳・15歳以上に「今回は虐待相談、以前は虐待以外の問題で相談」ケースが多く報告されていた。

Q29 受理状況についてと年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
新規受理	頻度	<u>553</u>	<u>1366</u>	<u>1212</u>	<u>467</u>	227	3825
	カテゴリ別の%	76.0%	63.7%	56.7%	57.0%	59.4%	61.6%
前は別の相談種別、虐待としては今回が初めて	頻度	<u>28</u>	<u>106</u>	154	<u>77</u>	<u>34</u>	399
	カテゴリ別の%	3.8%	4.9%	7.2%	9.4%	8.9%	6.4%
前回虐待で受理、今回も虐待として再受理	頻度	<u>147</u>	673	<u>770</u>	276	121	1987
	カテゴリ別の%	20.2%	31.4%	36.0%	33.7%	31.7%	32.0%
	総数	728	2145	2136	820	382	6211

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

受理状況と虐待種別のクロス表

「心理的虐待（DV目撃）」は「新規受理」としての報告が多かった。一方「身体的虐待」と「ネグレクト」は「前は別の相談、今回は虐待で受理」の報告頻度が高く、特にネグレクトについては、虐待としての再受理の報告頻度も高くなっていた。

Q29 受理状況についてと虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV目撃）	合計
新規受理	頻度	<u>819</u>	<u>521</u>	68	42	934	1450	3834
	カテゴリ別の%	57.5%	50.4%	54.8%	70.0%	62.9%	68.9%	61.5%
前は別の相談種別、虐待としては今回が初めて	頻度	138	89	15	4	<u>69</u>	<u>86</u>	401
	カテゴリ別の%	9.7%	8.6%	12.1%	6.7%	4.6%	4.1%	6.4%
前回虐待で受理、今回も虐待として再受理	頻度	468	423	41	14	482	<u>567</u>	1995
	カテゴリ別の%	32.8%	40.9%	33.1%	23.3%	32.5%	27.0%	32.0%
	総数	1425	1033	124	60	1485	2103	6230

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したもの。

Q29-1. 前回受理の中での一時保護の有無

(Q29「前回も受理」回答 2404 ケース限定)

- 本項の集計には「Q29 受理状況」に、「前は別件、虐待としては今回が初めての受理」「前回も虐待、今回も虐待で受理」と回答した計 2,404 ケースを対象とした。
- 「一時保護していない」が 72.9%と過半数を占め、一時保護したケースでは、「一時保護し、家庭復帰した」ケースが 11.3%で最も多くなっていた。

Q29-1 前回受理における一時保護について (Q29「前回も受理」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
一時保護し、施設入所した	94	3.9	■
一時保護し、里親委託した	12	0.5	
一時保護し、家庭復帰した	271	11.3	■
一時保護し、家庭以外のところに帰った	7	0.3	
一時保護していない	1753	72.9	■
無回答	267	11.1	■
合計	2404	100	

***平成 25 年度調査との比較**

平成 25 年度調査では、再受理のケースについて回答を求めており、再受理ケースのうち 1/4 強を前回受理の中で一時保護しており、そのうち 1/3 が施設入所、2/3 が家庭復帰していた。

(面接状況について)

Q30. 子どもとの面接回数

- 設問：「子どもとの面接回数（父母などを別々に面接した場合でも、同一の時間帯であれば1回としてカウント）」
- 「なし」が49.8%と半数を占め、面会したケースでは「1～2回」が33.6%と最も多かった。16回以上というケースも2%弱見られた。

Q30 子どもとの面接回数について

	度数	%	% グラフ
なし	3140	49.8	
1～2回	2116	33.6	
3～5回	473	7.5	
6～10回	297	4.7	
11～15回	105	1.7	
16回以上	117	1.9	
無回答	52	0.8	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「なし」が37.8%と最も多く、面会したケースでは「1～2回」が31.4%最も高い割合を示した。

子どもとの面接回数と虐待種別のクロス表

全体として「心理的虐待」・「DV 目撃」は面接回数が少なく、「身体的虐待」・「ネグレクト」・「性的虐待」は面接回数が多い。特に「身体的虐待」と「性的虐待」は実施される面接回数が多い傾向があった。

Q30 子どもとの面接回数と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
		なし	頻度	558	415	33	9	
	カテゴリ別の%	17.9%	13.3%	1.1%	0.3%	26.3%	41.1%	100.0%
1～2回	頻度	494	347	45	10	477	739	2112
	カテゴリ別の%	23.4%	16.4%	2.1%	0.5%	22.6%	35.0%	100.0%
3～5回	頻度	166	137	18	7	94	49	471
	カテゴリ別の%	35.2%	29.1%	3.8%	1.5%	20.0%	10.4%	100.0%
6～10回	頻度	104	94	22	12	50	15	297
	カテゴリ別の%	35.0%	31.6%	7.4%	4.0%	16.8%	5.1%	100.0%
11～15回	頻度	48	21	3	8	18	7	105
	カテゴリ別の%	45.7%	20.0%	2.9%	7.6%	17.1%	6.7%	100.0%
16回以上	頻度	54	23	4	14	20	2	117
	カテゴリ別の%	46.2%	19.7%	3.4%	12.0%	17.1%	1.7%	100.0%
	総数	1424	1037	125	60	1481	2096	6223

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q31. 児童心理司による面接

▶ 設問：「このケースの相談受理後に、児童心理司による子どもへの面接を行いましたか」

- 「児童心理司による面接」を行ったケースは 18.9%であった。

Q31 児童心理司による面接

	度数	%	%グラフ
行った	1192	18.9	
行っていない	5060	80.3	
無回答	48	0.8	
合計	6300	100	

児童心理司との面接と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」は児童心理司との面接を行っている報告が相対的に多かった。一方、「心理的虐待」「DV 目撃」は逆に、児童心理司による面接を行っていないケースが多かった。

Q31 児童心理司による面接と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
行った	頻度	420	256	48	42	232	193	1191
	カテゴリ別の%	29.5%	24.7%	38.4%	70.0%	15.7%	9.2%	19.1%
行っていない	頻度	1002	781	77	18	1246	1912	5036
	カテゴリ別の%	70.5%	75.3%	61.6%	30.0%	84.3%	90.8%	80.9%
総数		1422	1037	125	60	1478	2105	6227

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q32. 主たる虐待者との面接

➤ 設問：「このケースの相談受理後に、主たる虐待者に面接しましたか」

- 「主たる虐待者に会っていない」というケースが 34.3% に上っている。会えている割合は 55.0% であるが、「主たる虐待者」には会えず「従たる虐待者」のみとの面接である場合も 10% 程度に達した。

Q32 主たる虐待者との面接

	度数	%	% グラフ
会った	3465	55.0	
従たる虐待者には会ったが、主たる虐待者には会っていない	628	10.0	
会っていない	2164	34.3	
無回答	43	0.7	
合計	6300	100	

主たる虐待者との面接と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」「ネグレクト」「心理的虐待」は主たる虐待者と会っているケースが多い。一方「DV 目撃」は主たる虐待者とそもそも会っていないか、従たる虐待者にのみ会っているケースが多い傾向がある。「性的虐待」も、主たる虐待者と会っていないが、従たる虐待者とは会っているケースが多いのも特徴的である。DV や性的虐待を行う男性加害者との接触の難しさが浮き彫りになっていると思われる。

Q32 主たる虐待者との面接と虐待種別のクロス集計表

	身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計
主たる虐待者に会った	頻度 897	738	94	29	904	797	3459
	カテゴリ別の% 62.9%	71.0%	75.2%	48.3%	61.2%	37.9%	55.5%
従たる虐待者には会ったが、主たる虐待者には会っていない	頻度 90	31	8	11	96	391	627
	カテゴリ別の% 6.3%	3.0%	6.4%	18.3%	6.5%	18.6%	10.1%
会っていない	頻度 440	270	23	20	478	915	2146
	カテゴリ別の% 30.8%	26.0%	18.4%	33.3%	32.3%	43.5%	34.4%
	総数 1427	1039	125	60	1478	2103	6232

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q33. 保護者との面接回数

- ▶ 設問注：「※一時保護となった場合は、一時保護所職員を除く児童相談所職員とします」
- 「なし」と回答したケースが約3割認められた。7割以上のケースでは少なくとも1回以上面接を行っていたが、回数は1~2回程度にとどまっている者が多く、3回以上会っているケースは2割である。

Q33 保護者との面接回数について

	度数	%	%グラフ
なし	1808	28.7	
1~2回	2989	47.4	
3~5回	851	13.5	
6~10回	440	7.0	
11~15回	99	1.6	
16回以上	53	0.8	
無回答	60	1.0	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「なし」が 26.0%で、7 割以上で少なくとも 1 回以上面会しており、今回の調査結果と同様であった。

保護者との面接回数と虐待種別のクロス表

子どもとの面接回数 (Q30) の時と同様の傾向が認められた。すなわち、全体として「心理的虐待」は面接回数が少なく、「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」は面接回数が多い傾向が見られた。特に「性的虐待」「身体的虐待」は実施される面接回数が多い傾向があった。

Q33 保護者との面接回数と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
なし	頻度	<u>360</u>	<u>263</u>	<u>22</u>	11	422	<u>713</u>	1791
	カテゴリ別の%	25.3%	25.4%	17.5%	18.3%	28.4%	34.2%	28.8%
1~2回	頻度	<u>615</u>	<u>396</u>	<u>47</u>	<u>10</u>	728	<u>1187</u>	2983
	カテゴリ別の%	43.2%	38.2%	37.3%	16.7%	49.1%	56.9%	48.0%
3~5回	頻度	<u>239</u>	<u>226</u>	<u>31</u>	11	203	<u>139</u>	849
	カテゴリ別の%	16.8%	21.8%	24.6%	18.3%	13.7%	6.7%	13.7%
6~10回	頻度	<u>148</u>	<u>123</u>	<u>21</u>	<u>22</u>	91	<u>35</u>	440
	カテゴリ別の%	10.4%	11.9%	16.7%	36.7%	6.1%	1.7%	7.1%
11~15回	頻度	<u>42</u>	19	5	<u>3</u>	22	<u>8</u>	99
	カテゴリ別の%	3.0%	1.8%	4.0%	5.0%	1.5%	0.4%	1.6%
16回以上	頻度	18	9	0	<u>3</u>	18	<u>5</u>	53
	カテゴリ別の%	1.3%	0.9%	0.0%	5.0%	1.2%	0.2%	0.9%
総数		1422	1036	126	60	1484	2087	6215

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものを。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものを。

Q34. 要保護児童対策地域協議会（要対協）の個別ケース検討会の開催

- 要対協の個別ケース検討会を開催したケースは 15.0%にとどまっており、8 割以上のケースでは検討会を開催していなかった。

Q34 要対協の個別ケース検討会について

	度数	%	%グラフ
開催した	942	15.0	
開催していない	5267	83.6	
無回答	91	1.4	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「開催した」21.2%、「開催していない」が 77.3%であり、今回の調査のほうが実施率は低くなっていた。

要対協の個別ケース検討会と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」は要対協のケース検討会が相対的に開かれる頻度が高く、「DV 目撃」は開催されない傾向が認められた。

Q34 要対協の個別ケース検討会の有無と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
開催した	頻度	252	274	24	17	220	152	939
	カテゴリ別の%	17.8%	26.7%	19.0%	28.8%	14.9%	7.3%	15.2%
開催していない	頻度	1162	752	102	42	1252	1934	5244
	カテゴリ別の%	82.2%	73.3%	81.0%	71.2%	85.1%	92.7%	84.8%
総数		1414	1026	126	59	1472	2086	6183

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

(援助およびその結果について)

Q35. 保護者・子どもに対して導入された具体的なサービス（複数回答）

- サービスを導入しているケースは、対象となる 6,300 件の 24.4%にあたる 1,541 件であった。
- サービスを導入したケース 1,541 件を全体として見たとき、「その他」を除いて最も多かったのは「保護者の医療機関受診（精神科）（12.1%）」であった。次いで「DV 被害者支援機関等（9.9%）」、「生活保護受給（8.6%）」、「保育所（8.0%）」と続いていた。

Q35 保護者・子どもに導入されたサービス（複数回答）

	度数	全体の%	サービス導入ケースの%	サービス導入ケースの%グラフ
ヘルパー利用・ヘルパー派遣	75	1.2	4.9	
生活保護受給	133	2.1	8.6	
保護者の医療機関受診（精神科）	186	3.0	12.1	
保護者の医療機関受診（精神科以外）	25	0.4	1.6	
保護者の依存症治療・相談	33	0.5	2.1	
DV被害者支援機関やサービス	153	2.4	9.9	
性暴力被害者支援機関やサービス	2	0.0	0.1	
母子生活支援	64	1.0	4.2	
ファミリーサポート	23	0.4	1.5	
保育所	123	2.0	8.0	
学童保育	17	0.3	1.1	
児童館	40	0.6	2.6	
トワイライトステイ・ショートステイ	43	0.7	2.8	
児童扶養手当	52	0.8	3.4	
就学援助金	4	0.1	0.3	
短期入所	7	0.1	0.5	
子どもの医療機関の受診（精神科）	120	1.9	7.8	
子どもの医療機関の受診（精神科以外）	72	1.1	4.7	
児童発達支援センター	45	0.7	2.9	
放課後等デイサービス	64	1.0	4.2	
その他	260	4.1	16.9	
サービス導入したケースの合計	1541			
サービスを導入していない	5120	81.3		
該当ケース数	6300			

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「サービスを導入していない」71.0%を除いたケースでは、「保育所利用」が 4.1%と最も多く、次に「生活保護受給」「保護者の医療機関受診」が続いた。

導入されたサービス（複数回答）と年齢カテゴリ（5段階）のクロス表

まず各導入サービスの割合が総じて低いことに留意しつつ特徴を列挙すると、1歳未満では「保育所」「医療機関受診（精神科）」「子どもの医療機関受診（精神科以外）」「児童館」「児童扶養手当」が、1-5歳では「保育所」「母子生活支援」「児童発達支援センター」「ファミリーサポート」が、6-11歳では「放課後等デイサービス」「学童保育」が、12-14歳では「子どもの医療機関受診（精神科）」が、15歳以上では「DV被害者支援」「保護者の依存症治療」の導入頻度がそれぞれ高い傾向が認められた。

導入されたサービス（複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

導入サービスの割合が低いので慎重な議論が必要だが、他虐待種との比較から特徴を記述する。

まず「ネグレクト」は「ヘルパー利用・派遣」「生活保護」「医療機関受診（精神科以外）」「子どもの医療機関受診（精神科以外）」のサービスが提供されていた。「身体的虐待」は「子どもの医療機関受診（精神科・精神科以外）」「放課後デイサービス」「トワイライトステイ・ショートステイ」が提供される傾向があった。心理的虐待は「生活保護」が、DV目撃には「DV被害者支援・サービス」や「母子生活支援」サービスが提供される頻度が高かったものの、「サービス導入なし」の報告も多かった。

導入されたサービス（複数回答）と虐待重症度のクロス表

同様に、導入サービスの割合が低いので慎重な議論が必要だが、他虐待種との比較から特徴を記述する。

虐待の危惧あり・軽度虐待では「サービス導入なし」の報告が多かった。中度虐待では「子どもの医療機関受診」「放課後デイサービス」「保育所」「医療機関受診（精神科）」が多かった。重度虐待・生命の危機では「ヘルパー利用」「生活保護」「医療機関受診（精神科）」「保護者の依存症治療」「DV被害者支援」「母子生活支援」「保育所」「児童扶養手当」「子どもの医療機関受診（精神科・精神科以外）」「ヘルパー利用」等、様々なサービスが提供されていた。

導入されたサービス（複数回答）と年齢カテゴリ（5段階）のクロス表

Q35 導入されたサービスと年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
ヘルパー利用・派遣	頻度	7	28	20	12	8	75
	カテゴリ別の%	1.7%	1.3%	0.9%	1.3%	1.5%	1.2%
生活保護受給	頻度	11	53	41	<u>14</u>	12	131
	カテゴリ別の%	2.7%	2.4%	1.9%	1.5%	2.3%	2.1%
医療機関受診 （精神科）	頻度	19	69	56	26	16	186
	カテゴリ別の%	4.7%	3.1%	2.6%	2.8%	3.0%	3.0%
医療機関受診 （精神科以外）	頻度	4	9	10	2	0	25
	カテゴリ別の%	1.0%	0.4%	0.5%	0.2%	0.0%	0.4%
保護者の依存症 治療・相談	頻度	3	7	12	3	8	33
	カテゴリ別の%	0.7%	0.3%	0.6%	0.3%	1.5%	0.5%
DV被害者支援機関や サービス	頻度	8	56	54	<u>13</u>	20	151
	カテゴリ別の%	2.0%	2.5%	2.5%	1.4%	3.8%	2.4%
性暴力被害者 支援機関やサービス	頻度	0	0	1	0	1	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%
母子生活支援	頻度	6	31	19	4	1	61
	カテゴリ別の%	1.5%	1.4%	0.9%	0.4%	0.2%	1.0%
ファミリーサポート	頻度	3	15	<u>4</u>	<u>0</u>	0	22
	カテゴリ別の%	0.7%	0.7%	0.2%	0.0%	0.0%	0.4%
保育所	頻度	20	88	<u>13</u>	<u>2</u>	<u>0</u>	123
	カテゴリ別の%	5.0%	4.0%	0.6%	0.2%	0.0%	2.0%
学童保育	頻度	0	<u>1</u>	15	0	1	17
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.2%	0.3%
児童館	頻度	8	14	14	2	2	40
	カテゴリ別の%	2.0%	0.6%	0.6%	0.2%	0.4%	0.6%
トワイライトステイ・ ショートステイ	頻度	3	22	13	3	2	43
	カテゴリ別の%	0.7%	1.0%	0.6%	0.3%	0.4%	0.7%
児童扶養手当	頻度	8	17	16	5	5	51
	カテゴリ別の%	2.0%	0.8%	0.7%	0.5%	0.9%	0.8%
就学補助金	頻度	0	0	4	0	0	4
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.1%
短期入所	頻度	0	1	3	1	2	7
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.4%	0.1%
子供の医療機関受診 （精神科）	頻度	<u>0</u>	9	50	46	13	118
	カテゴリ別の%	0.0%	0.4%	2.3%	4.9%	2.4%	1.9%
子供の医療機関受診 （精神科以外）	頻度	10	25	19	12	<u>6</u>	72
	カテゴリ別の%	2.5%	1.1%	0.9%	1.3%	1.1%	1.2%
児童発達支援 センター	頻度	0	22	18	3	1	44
	カテゴリ別の%	0.0%	1.0%	0.8%	0.3%	0.2%	0.7%
放課後等 デイサービス	頻度	1	<u>10</u>	38	11	4	64
	カテゴリ別の%	0.2%	0.5%	1.7%	1.2%	0.8%	1.0%
その他	頻度	21	90	85	35	25	256
	カテゴリ別の%	5.2%	4.1%	3.9%	3.8%	4.7%	4.1%
サービスを導入 していない	頻度	<u>300</u>	1772	1805	766	445	5088
	カテゴリ別の%	74.8%	80.4%	82.8%	82.2%	83.6%	81.4%
全体		401	2203	2179	932	532	6247

***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

導入されたサービス（複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

Q35 導入されたサービスと主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計
			ネグレクト	(同居人の虐待放置)				
ヘルパー利用・派遣	頻度	30	35	6	1	23	36	131
	カテゴリ別の%	2.1%	3.4%	4.8%	1.6%	1.5%	1.7%	2.1%
生活保護受給	頻度	45	51	6	3	61	19	185
	カテゴリ別の%	3.1%	4.9%	4.8%	4.9%	4.1%	0.9%	3.0%
医療機関受診 (精神科)	頻度	32	63	63	57	23	12	187
	カテゴリ別の%	4.4%	2.9%	2.9%	2.7%	2.8%	3.1%	3.0%
医療機関受診 (精神科以外)	頻度	5	12	0	0	4	4	25
	カテゴリ別の%	0.3%	1.2%	0.0%	0.0%	0.3%	0.2%	0.4%
保護者の依存症 治療・相談	頻度	12	7	0	2	5	7	33
	カテゴリ別の%	0.8%	0.7%	0.0%	3.3%	0.3%	0.3%	0.5%
DV被害者支援機関や サービス	頻度	19	6	0	1	29	98	153
	カテゴリ別の%	1.3%	0.6%	0.0%	1.6%	1.9%	4.6%	2.4%
性暴力被害者 支援機関やサービス	頻度	1	0	0	1	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%
母子生活支援	頻度	12	3	0	0	8	41	64
	カテゴリ別の%	0.8%	0.3%	0.0%	0.0%	0.5%	1.9%	1.0%
ファミリーサポート	頻度	12	3	1	0	6	1	23
	カテゴリ別の%	0.8%	0.3%	0.8%	0.0%	0.4%	0.0%	0.4%
保育所	頻度	30	31	2	1	26	33	123
	カテゴリ別の%	2.1%	3.0%	1.6%	1.6%	1.7%	1.6%	2.0%
学童保育	頻度	9	4	1	0	0	3	17
	カテゴリ別の%	0.6%	0.4%	0.8%	0.0%	0.0%	0.1%	0.3%
児童館	頻度	7	6	1	0	13	13	40
	カテゴリ別の%	0.5%	0.6%	0.8%	0.0%	0.9%	0.6%	0.6%
トワイライトステイ・ ショートステイ	頻度	20	12	0	0	10	1	43
	カテゴリ別の%	1.4%	1.2%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.7%
児童扶養手当	頻度	7	9	4	1	9	22	52
	カテゴリ別の%	0.5%	0.9%	3.2%	1.6%	0.6%	1.0%	0.8%
就学補助金	頻度	1	0	0	0	0	3	4
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%
短期入所	頻度	4	2	0	0	1	0	7
	カテゴリ別の%	0.3%	0.2%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%
子供の医療機関受診 (精神科)	頻度	59	17	10	3	22	9	120
	カテゴリ別の%	4.1%	1.6%	7.9%	4.9%	1.5%	0.4%	1.9%
子供の医療機関受診 (精神科以外)	頻度	25	33	4	2	5	3	72
	カテゴリ別の%	1.7%	3.2%	3.2%	3.3%	0.3%	0.1%	1.1%
児童発達支援 センター	頻度	18	10	1	0	9	7	45
	カテゴリ別の%	1.3%	1.0%	0.8%	0.0%	0.6%	0.3%	0.7%
放課後等 デイサービス	頻度	26	14	4	1	15	4	64
	カテゴリ別の%	1.8%	1.3%	3.2%	1.6%	1.0%	0.2%	1.0%
その他	頻度	76	64	5	5	46	60	256
	カテゴリ別の%	5.3%	6.1%	4.0%	8.2%	3.1%	2.8%	4.1%
サービスを導入 していない	頻度	1122	771	97	37	1268	1806	5101
	カテゴリ別の%	78.3%	73.9%	77.0%	61.7%	84.9%	85.6%	81.4%
	全体	734	2163	2163	2168	835	387	6287

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

導入されたサービス（複数回答）と虐待重症度のクロス表

Q35 導入されたサービスと虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
ヘルパー利用・派遣	頻度	8	<u>21</u>	31	11	1	1	73
	カテゴリ別の%	0.7%	0.7%	2.0%	4.5%	3.7%	0.4%	1.2%
生活保護受給	頻度	17	59	31	23	0	3	133
	カテゴリ別の%	1.4%	2.0%	2.0%	9.3%	0.0%	1.3%	2.1%
医療機関受診 (精神科)	頻度	32	<u>52</u>	79	18	5	0	186
	カテゴリ別の%	2.7%	1.7%	5.0%	7.3%	18.5%	0.0%	3.0%
医療機関受診 (精神科以外)	頻度	4	10	9	2	0	0	25
	カテゴリ別の%	0.3%	0.3%	0.6%	0.8%	0.0%	0.0%	0.4%
保護者の依存症 治療・相談	頻度	6	15	7	4	1	0	33
	カテゴリ別の%	0.5%	0.5%	0.4%	1.6%	3.7%	0.0%	0.5%
DV被害者支援機関や サービス	頻度	28	<u>61</u>	46	18	0	0	153
	カテゴリ別の%	2.4%	2.1%	2.9%	7.3%	0.0%	0.0%	2.5%
性暴力被害者 支援機関やサービス	頻度	0	0	1	1	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.1%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%
母子生活支援	頻度	<u>6</u>	28	16	11	0	3	64
	カテゴリ別の%	0.5%	0.9%	1.0%	4.5%	0.0%	1.3%	1.0%
ファミリーサポート	頻度	3	12	5	2	0	0	22
	カテゴリ別の%	0.3%	0.4%	0.3%	0.8%	0.0%	0.0%	0.4%
保育所	頻度	22	<u>44</u>	43	9	0	1	119
	カテゴリ別の%	1.9%	1.5%	2.7%	3.6%	0.0%	0.4%	1.9%
学童保育	頻度	1	8	7	1	0	0	17
	カテゴリ別の%	0.1%	0.3%	0.4%	0.4%	0.0%	0.0%	0.3%
児童館	頻度	7	15	16	1	0	0	39
	カテゴリ別の%	0.6%	0.5%	1.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.6%
トワイライトステイ・ ショートステイ	頻度	4	24	13	1	0	1	43
	カテゴリ別の%	0.3%	0.8%	0.8%	0.4%	0.0%	0.4%	0.7%
児童扶養手当	頻度	5	<u>15</u>	16	13	1	2	52
	カテゴリ別の%	0.4%	0.5%	1.0%	5.3%	3.7%	0.9%	0.8%
就学補助金	頻度	0	3	1	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
短期入所	頻度	0	1	5	1	0	0	7
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.3%	0.4%	0.0%	0.0%	0.1%
子供の医療機関受診 (精神科)	頻度	<u>9</u>	52	48	9	0	0	118
	カテゴリ別の%	0.8%	1.7%	3.1%	3.6%	0.0%	0.0%	1.9%
子供の医療機関受診 (精神科以外)	頻度	8	12	24	20	5	2	71
	カテゴリ別の%	0.7%	0.4%	1.5%	8.1%	18.5%	0.9%	1.1%
児童発達支援 センター	頻度	5	25	15	0	0	0	45
	カテゴリ別の%	0.4%	0.8%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%
放課後等 デイサービス	頻度	<u>4</u>	26	24	8	1	1	64
	カテゴリ別の%	0.3%	0.9%	1.5%	3.2%	3.7%	0.4%	1.0%
その他	頻度	42	<u>101</u>	73	24	6	12	258
	カテゴリ別の%	3.5%	3.4%	4.6%	9.7%	22.2%	5.3%	4.1%
サービスを導入 していない	頻度	1006	2519	1193	141	11	190	5060
	カテゴリ別の%	85.0%	84.8%	76.0%	57.1%	40.7%	84.4%	81.3%
総数		1184	2972	1570	247	27	225	6225

*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q36. 現在の虐待の状況

- 設問：「現在の状況（相談終結であればその時点）における、虐待の状況についてお答えください」
- 約半分の 47.1%が「虐待は止まり再発可能性低い」と報告された一方、「不明」を含めた残りの半数では、「再発可能性あり（41.1%）」「危ない状態（1.6%）」など、リスクのある状態が続いていた。

Q36 現在の虐待の状況

	度数	%	%グラフ
虐待は止まり再発可能性も低い	2962	47.0	
虐待はある程度止まっているが、再発可能性ある	2589	41.1	
虐待行為が生じ、危ない状況が続く	100	1.6	
不明	600	9.5	
無回答	49	0.8	
合計	6300	100	

現在の虐待の状況と年齢カテゴリのクロス表

虐待の状況と年齢の関係を見ると、6~11歳・12~14歳においては他の年齢よりも、「虐待は止まっているが再発の可能性がある」として報告されていた。一方で1~5歳・15歳以上は「虐待が止まり再発可能性低い」と報告される傾向があった。虐待の継続や再発が相対的に懸念されるのは小学校・中学校の学童期年齢であることを示す結果である。

Q36 現在の虐待の状況と年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
虐待は止まり	頻度	202	1079	<u>968</u>	417	276	2942
再発可能性低い	カテゴリ別の%	50.9%	49.4%	44.7%	44.9%	52.2%	47.4%
虐待はある程度止まるが、	頻度	147	<u>859</u>	961	414	<u>196</u>	2577
再発可能性ある	カテゴリ別の%	37.0%	39.3%	44.3%	44.6%	37.1%	41.5%
虐待行為が生じ、	頻度	6	27	37	19	9	98
危ない状況が続く	カテゴリ別の%	1.5%	1.2%	1.7%	2.0%	1.7%	1.6%
不明	頻度	42	218	201	78	48	587
	カテゴリ別の%	10.6%	10.0%	9.3%	8.4%	9.1%	9.5%
	総数	727	2134	2139	823	381	6204

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したもの。

現在の虐待の状況と虐待種別のクロス表

DV 目撃・同居人の虐待放置・性的虐待については「虐待が止まり再発可能性低い」報告が多い。ネグレクトは「再発可能性あり」「危ない状況」の報告が多い。心理的虐待は「再発可能性あり」「不明」の報告が多い。身体的虐待にはっきりとした傾向は認められない。

Q36 現在の虐待の状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
虐待は止まり 再発可能性低い	頻度	691	<u>378</u>	70	38	<u>604</u>	1177	2958
	カテゴリ別の%	48.5%	36.6%	56.0%	63.3%	40.7%	56.1%	47.5%
虐待はある程度止まるが、 再発可能性ある	頻度	601	506	45	<u>14</u>	681	<u>733</u>	2580
	カテゴリ別の%	42.2%	48.9%	36.0%	23.3%	45.9%	34.9%	41.5%
虐待行為が生じ、 危ない状況が続く	頻度	25	44	0	0	19	<u>12</u>	100
	カテゴリ別の%	1.8%	4.3%	0.0%	0.0%	1.3%	0.6%	1.6%
不明	頻度	<u>107</u>	106	10	8	179	<u>176</u>	586
	カテゴリ別の%	7.5%	10.3%	8.0%	13.3%	12.1%	8.4%	9.4%
	総数	1424	1034	125	60	1483	2098	6224

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

現在の虐待の状況と虐待重症度のクロス表

「虐待の危惧あり」群では、「虐待は止まり、再発の可能性が低い」58.2%で他の群と比して最も高い。「軽度虐待」では虐待が継続している事例は1%に過ぎず、「虐待は止まり、再発の可能性が低い」が48.5%で最も高いが、「虐待はある程度止まるが再発の可能性はある」も43.1%に達し、再発可能性も残る。「中度虐待」「重度虐待」では、虐待が継続している事例は各々2.4%、8.5%であり、介入してもその継続を止められない場合があることが示されている。また「中度虐待」「重度虐待」では、「一旦止まっても再発の可能性はある」報告が「再発可能性が低い」報告より多かった。特に「中度虐待」は重度より切迫性はないものの再発の可能性は重度虐待群以上にあり、子どもを保護しない場合には再発防止のための対応が工夫される必要がある事例が多いと思われた。

Q36 現在の虐待の状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
虐待は止まり 再発可能性低い	頻度	683	1431	<u>642</u>	106	11	<u>63</u>	2936
	カテゴリ別の%	58.2%	48.4%	41.2%	43.6%	40.7%	28.8%	47.5%
虐待はある程度止まるが、 再発可能性ある	頻度	<u>390</u>	1279	759	103	10	<u>22</u>	2563
	カテゴリ別の%	33.2%	43.2%	48.7%	42.4%	37.0%	10.0%	41.5%
虐待行為が生じ、 危ない状況が続く	頻度	<u>11</u>	<u>31</u>	36	20	1	1	100
	カテゴリ別の%	0.9%	1.0%	2.3%	8.2%	3.7%	0.5%	1.6%
不明	頻度	<u>90</u>	<u>218</u>	<u>123</u>	<u>14</u>	5	133	583
	カテゴリ別の%	7.7%	7.4%	7.9%	5.8%	18.5%	60.7%	9.4%
	総数	1174	2959	1560	243	27	219	6182

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q37. 支援後の保護者の状況について

- 設問：「調査時点の支援後の保護者の状況について、受理時と比較してお答えください」
- 「養育の状況は変わらない」「むしろ悪化」が2割強あるが、多くのケースでは改善が認められた。

Q37 調査時点の支援後の保護者の状況

	度数	%	%グラフ
養育行動や状況が改善	2147	34.1	
養育行動や状況がある程度改善	2687	42.7	
養育行動や状況は変わらない	1269	20.1	
養育行動や状況はむしろ悪化	29	0.5	
無回答	168	2.7	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「変わらない」が 41.4%、改善のあったものが 53.3%であり、この 5 年間で、支援による保護者の状況が大幅に変化したといえよう。

支援後の保護者の状況と年齢カテゴリーのクロス表

「1 歳未満」「1-5 歳」では「改善された」という報告頻度が高い。一方「6-11 歳」「12-14 歳」では「ある程度改善された」とする報告が多かった。

Q37 支援後の保護者の状況と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
養育行動や状況が改善	頻度	161	801	714	289	170	2135
	カテゴリ別の%	40.7%	37.5%	33.5%	31.7%	32.6%	35.0%
養育行動や状況がある程度改善	頻度	150	891	970	432	227	2670
	カテゴリ別の%	37.9%	41.7%	45.6%	47.3%	43.5%	43.8%
養育状況は変わらない	頻度	83	432	435	188	123	1261
	カテゴリ別の%	21.0%	20.2%	20.4%	20.6%	23.6%	20.7%
養育行動や状況はむしろ悪化	頻度	2	11	10	4	2	29
	カテゴリ別の%	0.5%	0.5%	0.5%	0.4%	0.4%	0.5%
	総数	396	2135	2129	913	522	6095

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

調査 2

支援後の保護者の状況と虐待種別のクロス表

身体的虐待では「ある程度改善」の報告頻度が高い。ネグレクトは「養育状況は変わらない」報告が多い。心理的虐待は「ある程度改善」「変わらない」報告頻度が高くなっている。DV 目撃は「改善」の報告頻度が高い。

Q37 支援後の保護者の状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
養育行動や状況が改善	頻度	<u>455</u>	<u>288</u>	51	28	<u>430</u>	<u>892</u>	2144
	カテゴリ別の%	32.3%	28.3%	41.1%	47.5%	29.9%	43.2%	35.1%
養育行動や状況がある程度改善	頻度	670	454	<u>44</u>	24	679	<u>809</u>	2680
	カテゴリ別の%	47.6%	44.6%	35.5%	40.7%	47.3%	39.2%	43.9%
養育状況は変わらない	頻度	279	261	28	7	321	<u>361</u>	1257
	カテゴリ別の%	19.8%	25.7%	22.6%	11.9%	22.3%	17.5%	20.6%
養育行動や状況はむしろ悪化	頻度	4	14	1	0	7	<u>3</u>	29
	カテゴリ別の%	0.3%	1.4%	0.8%	0.0%	0.5%	0.1%	0.5%
	総数	1408	1017	124	59	1437	2065	6110

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

支援後の保護者の状況と虐待重症度のクロス表

虐待重症度とそのまま比例するような結果であり、「虐待の危惧あり」では「改善」の報告頻度が高く、「軽度虐待」「中度虐待」では「ある程度改善」の頻度が高かった。「中度虐待」「生命の危機」では「変わらない」頻度が高い。重度虐待では「むしろ悪化した」という報告も高くなっていた。

Q37 支援後の保護者の状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
養育行動や状況が改善	頻度	499	1039	<u>457</u>	82	8	<u>45</u>	2130
	カテゴリ別の%	43.3%	35.8%	29.4%	33.9%	30.8%	23.8%	35.1%
養育行動や状況がある程度改善	頻度	478	1316	726	<u>91</u>	8	<u>38</u>	2657
	カテゴリ別の%	41.5%	45.3%	46.7%	37.6%	30.8%	20.1%	43.8%
養育状況は変わらない	頻度	<u>174</u>	<u>540</u>	366	57	10	104	1251
	カテゴリ別の%	15.1%	18.6%	23.6%	23.6%	38.5%	55.0%	20.6%
養育行動や状況はむしろ悪化	頻度	2	<u>9</u>	4	12	0	2	29
	カテゴリ別の%	0.2%	0.3%	0.3%	5.0%	0.0%	1.1%	0.5%
	総数	1153	2904	1553	242	26	189	6067

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q38. 子どもの心身のダメージについて

- ▶ 設問：「調査時点での支援後の子どもの心身のダメージについて、受理時と比較してお答えください」
- 「受理時に元々ダメージがなかった」が44.1%と半数を占めた。ダメージがあった者の中では、改善を認めるものが計22.7%と多かったが、一方5.9%が「改善があまりない／むしろ悪化した」という報告であった。

Q38 支援後の子どもの心身のダメージ

	度数	%	%グラフ
受理時にダメージあったが、改善がはっきり認められる	316	5.0	
受理時にダメージあったが、ある程度改善した	1115	17.7	
受理時にダメージあったが、改善がない又はあまりない	360	5.7	
受理時にダメージあったが、悪化した	14	0.2	
受理時に元々ダメージなかった	2781	44.1	
不明	1661	26.4	
無回答	53	0.8	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「変わらない」が47.4%と最も多かったが、「改善した」「やや改善した」というケースが48%であり、今回の結果と単純に比較できないが、支援による効果を反映していると考えられる。

子どもの心身のダメージと年齢別カテゴリのクロス表

「受理時にダメージがない」報告は1歳未満・1~5歳で多く見られ、「ダメージを負った」報告は総じて6歳以上に多く見られた。6歳以上においては、「ある程度改善」に加えて「改善あまりなし」の報告も多くなり、年長の子どもの心身のダメージの残りやすさ・観察しやすさの双方を反映する可能性が考えられた。

Q38 子どもの心身のダメージと年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
受理時ダメージの改善が はっきり認められる	頻度	28	<u>85</u>	99	64	36	312
	カテゴリ別の%	7.0%	3.9%	4.6%	6.9%	6.8%	5.0%
受理時ダメージが ある程度改善した	頻度	<u>24</u>	<u>238</u>	448	254	147	1111
	カテゴリ別の%	6.0%	10.9%	20.7%	27.4%	27.7%	17.9%
受理時ダメージの改善が ないまたはあまりない	頻度	<u>4</u>	<u>89</u>	136	83	43	355
	カテゴリ別の%	1.0%	4.1%	6.3%	9.0%	8.1%	5.7%
受理時ダメージが 悪化した	頻度	0	5	3	3	3	14
	カテゴリ別の%	0.0%	0.2%	0.1%	0.3%	0.6%	0.2%
受理時にもともと ダメージがなかった	頻度	230	1107	<u>918</u>	<u>336</u>	<u>173</u>	2764
	カテゴリ別の%	57.8%	50.8%	42.4%	36.2%	32.6%	44.6%
不明	頻度	112	655	563	<u>187</u>	129	1646
	カテゴリ別の%	28.1%	30.1%	26.0%	20.2%	24.3%	26.5%
総数		398	2179	2167	927	531	6202

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したもの。

調査 2

子どもの心身のダメージと虐待種別のクロス表

DV 目撃は「もともとダメージがない」と報告される頻度が高い。身体的虐待はダメージは負っていて、結果として改善したもの・していないもの双方の報告頻度が高い。ネグレクトは「ダメージの改善がない」もしくは「もともとダメージがない」双方の割合が高いのが特徴である。性的虐待は「改善あまりない」「ある程度改善した」という報告が多い。

Q38 子どもの心身のダメージと虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計	
受理時ダメージの改善がはっきり認められる	頻度	127	52	12	6	47	69	313
	カテゴリ別の%	8.9%	5.0%	9.5%	10.2%	3.2%	3.3%	5.0%
受理時ダメージがある程度改善した	頻度	433	168	39	25	226	222	1113
	カテゴリ別の%	30.5%	16.2%	31.0%	42.4%	15.2%	10.6%	17.9%
受理時ダメージの改善がないまたはあまりない	頻度	105	84	10	10	81	70	360
	カテゴリ別の%	7.4%	8.1%	7.9%	16.9%	5.5%	3.3%	5.8%
受理時ダメージが悪化した	頻度	7	2	2	0	2	1	14
	カテゴリ別の%	0.5%	0.2%	1.6%	0.0%	0.1%	0.0%	0.2%
受理時にもともとダメージがなかった	頻度	418	513	43	6	668	1127	2775
	カテゴリ別の%	29.4%	49.5%	34.1%	10.2%	45.1%	53.7%	44.6%
不明	頻度	332	217	20	12	458	608	1647
	カテゴリ別の%	23.3%	20.9%	15.9%	20.3%	30.9%	29.0%	26.5%
	総数	1422	1036	126	59	1482	2097	6222

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

子どもの心身のダメージと虐待重症度のクロス表

軽度虐待は「もともとダメージがない」報告が多く、中度虐待以上に何らかのダメージを負っているものが集中している。重度虐待の方が改善しない回答の割合が中度虐待に比して高くなっている。

Q38 子どもの心身のダメージと虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
受理時ダメージの改善がはっきり認められる	頻度	38	133	96	30	3	9	309
	カテゴリ別の%	3.2%	4.5%	6.1%	12.2%	11.1%	4.1%	5.0%
受理時ダメージがある程度改善した	頻度	132	544	326	92	6	6	1106
	カテゴリ別の%	11.3%	18.4%	20.9%	37.4%	22.2%	2.8%	17.9%
受理時ダメージの改善がないまたはあまりない	頻度	32	131	162	30	1	1	357
	カテゴリ別の%	2.7%	4.4%	10.4%	12.2%	3.7%	0.5%	5.8%
受理時ダメージが悪化した	頻度	0	3	6	5	0	0	14
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.4%	2.0%	0.0%	0.0%	0.2%
受理時にもともとダメージがなかった	頻度	699	1364	589	43	8	54	2757
	カテゴリ別の%	59.6%	46.1%	37.7%	17.5%	29.6%	24.9%	44.6%
不明	頻度	271	782	382	46	9	147	1637
	カテゴリ別の%	23.1%	26.4%	24.5%	18.7%	33.3%	67.7%	26.5%
	総数	1172	2957	1561	246	27	217	6180

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q39. ケースの取り扱い状況

- ▶ 設問：「調査時点でのケースの取り扱い状況について、受理時と比較してお答えください」
- 「援助方針を決定し終結している」ケースが 68.9%と 7 割近くを占め、「援助中」22.0%と合わせると多くのケースで援助方針のもとに取り組みがなされていることがわかる。

Q39 調査時点でのケースの取り扱い状況

	度数	%	% グラフ
援助方針を決定していない（調査中）	417	6.6	
援助方針を決定し児童相談所として援助中	1387	22.0	
援助方針を決定し終結している	4343	68.9	
その他	113	1.8	
無回答	40	0.6	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査とは、状況の区分が異なるため単純に比較できないが、児童相談所として終結したケースが 43.9%でそのうち半数が市町村に引き継いだ形で終結していた。

調査時点でのケースの取り扱い状況と虐待種別のクロス表

心理的虐待・DV 目撃は「援助方針を決定し終結」の報告頻度が多く、身体的虐待・ネグレクト・性的虐待は「援助方針を決定し援助中」の報告頻度が相対的に多くなっていた。それぞれ前者は軽度の虐待として、後者は中度以上の虐待として扱われる機会の多さがこの結果に反映していると考えられる。

Q39 調査時点でのケースの取り扱い状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
援助方針を決定	頻度	104	71	8	8	100	122	413
していない（調査中）	カテゴリ別の%	7.3%	6.8%	6.4%	13.3%	6.8%	5.8%	6.6%
援助方針を決定し	頻度	446	383	47	33	284	191	1384
児童相談所として援助中	カテゴリ別の%	31.3%	36.8%	37.6%	55.0%	19.2%	9.1%	22.2%
援助方針を決定し	頻度	848	564	66	18	1071	1759	4326
終結している	カテゴリ別の%	59.4%	54.2%	52.8%	30.0%	72.4%	83.6%	69.4%
その他	頻度	29	22	4	1	25	31	112
	カテゴリ別の%	2.0%	2.1%	3.2%	1.7%	1.7%	1.5%	1.8%
	総数	1427	1040	125	60	1480	2103	6235

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したのもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したのもの。

Q39-1. 現時点での援助 (Q39「援助中」回答 1387 ケース限定：複数回答)

- ▶ 設問：「現時点でどのような援助を行っていますか」
- 現時点で援助を行っているケースでは「継続指導中」68.6%、「児童福祉施設入所措置等」15.0%、「児童福祉司指導中」13.3%と続いた。

Q39-1 現時点での援助 (Q39「援助中」を選択したケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
継続指導	951	68.6	
児童福祉司指導	184	13.3	
児童委員指導	1	0.1	
市町村指導	4	0.3	
児童家庭支援センター指導	3	0.2	
知的障害者福祉司指導、社会福祉主事指導	0	0.0	
障害者等支援事業を行う者の指導	0	0.0	
厚生労働省令で定めるものへの指導	0	0.0	
児童福祉施設入所措置、指定発達支援医療機関	208	15.0	
里親、小規模住宅型児童養育事業委託	36	2.6	
自立援助ホームへの入所	7	0.5	
その他	37	2.7	
該当ケース数	1387		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、ケースの取り扱い状況と合わせた形の設問となっていたが、「継続指導中」が 24.7%と最も多くなっていた。

Q39-2. 相談が終結した理由（Q39「終結」回答 4343 ケース限定：複数回答）

➤ 設問：「相談が終結した理由をお答えください」

- 「問題が解決して相談の必要がなくなったと判断した」ケースが 60.6%と最も多く、次いで「他機関に引き継いだ」が 27.1%となっていた。

Q39-2 相談が終結した理由（Q39「援助終結」を選択したケース限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
他機関に引き継いだため	1176	27.1	
問題が解決して相談の必要がなくなったと判断	2630	60.6	
相談に来なくなり、関係が切れてしまったため	49	1.1	
転居等により、担当地区が変わったため	132	3.0	
その他	393	9.0	
該当ケース数	4343		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

終結理由（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

1歳未満では「転居による担当者変更」、1~5歳では「他機関に引き継ぎ」「転居による担当者変更」、12~14歳では「相談に来なくなり関係が切れた」により終結したとするケースの頻度がそれぞれ相対的に高くなっていた。

Q39-2 終結理由と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
他機関に引き継いだため	頻度	89	471	389	161	<u>76</u>	1186
	カテゴリ別の%	32.0%	29.9%	26.1%	27.1%	19.4%	27.4%
問題が解決して相談の必要がなくなったため	頻度	165	921	927	377	247	2637
	カテゴリ別の%	60.2%	58.5%	61.9%	63.1%	63.0%	60.8%
相談に来なくなり、関係が切れてしまったため	頻度	2	12	15	14	5	48
	カテゴリ別の%	0.7%	0.8%	1.0%	2.4%	1.3%	1.1%
転居等により、担当地区が変わったため	頻度	15	60	40	16	<u>3</u>	134
	カテゴリ別の%	5.5%	3.8%	2.7%	2.7%	0.8%	3.1%
その他	頻度	<u>13</u>	128	136	49	59	385
	カテゴリ別の%	4.7%	8.2%	9.1%	8.3%	15.1%	8.9%
	総数	274	1567	1493	592	391	4317

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

終結理由（複数回答）と虐待種別のクロス表

ネグレクトでは「他機関に引き継いだ」「転居等による担当者の変更」により終結しているケースの割合が他の虐待に比べて多かった。また DV 目撃は「問題解決による相談必要性の消失」による終結報告が多く認められた。

Q39-2 終結理由と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV目撃）	合計
			ネグレクト	（同居人の虐待放置）				
他機関に引き継いだため	頻度	237	241	11	3	255	426	1173
	カテゴリ別の%	27.9%	42.7%	16.7%	16.7%	23.8%	24.2%	27.1%
問題が解決して相談の必要がなくなったため	頻度	507	253	51	10	619	1182	2622
	カテゴリ別の%	59.8%	44.9%	77.3%	55.6%	57.8%	67.2%	60.6%
相談に来なくなり、関係が切れてしまったため	頻度	15	6	4	1	8	15	49
	カテゴリ別の%	1.8%	1.1%	6.1%	5.6%	0.7%	0.9%	1.1%
転居等により、担当地区が変わったため	頻度	26	28	0	0	24	54	132
	カテゴリ別の%	3.1%	5.0%	0.0%	0.0%	2.2%	3.1%	3.1%
その他	頻度	92	38	2	3	122	131	388
	カテゴリ別の%	10.8%	6.7%	3.0%	16.7%	11.4%	7.4%	9.0%
	総数	848	564	66	18	1071	1759	4326

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

終結理由（複数回答）と虐待重症度のクロス表

「虐待の危惧」では「問題解決による相談必要性の消失」の報告頻度が高くなっていった。一方中度虐待で「他機関に引き継いだ」、重度虐待で「転居等により担当者の変更があった」理由による終結の報告頻度が高くなっていることは注目すべきである。機関や地区の変更により引き継ぐケースは、重篤なものが多くなる傾向があることを示唆しており、引き継ぎ体制を充実させる必要性を裏付ける結果ともいえよう。

Q39-2 終結理由と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり				生命の危機あり	不明	合計
		軽度虐待	中度虐待	重度虐待				
他機関に引き継いだため	頻度	205	602	300	25	3	25	1160
	カテゴリ別の%	21.9%	27.7%	31.8%	32.9%	42.9%	17.1%	27.1%
問題が解決して相談の必要がなくなったため	頻度	661	1343	532	34	1	37	2608
	カテゴリ別の%	70.5%	61.7%	56.5%	44.7%	14.3%	25.3%	60.9%
相談に来なくなり、関係が切れてしまったため	頻度	7	31	8	0	0	2	48
	カテゴリ別の%	0.7%	1.4%	0.8%	0.0%	0.0%	1.4%	1.1%
転居等により、担当地区が変わったため	頻度	24	52	37	14	0	5	132
	カテゴリ別の%	2.6%	2.4%	3.9%	18.4%	0.0%	3.4%	3.1%
その他	頻度	53	170	81	8	3	67	382
	カテゴリ別の%	5.7%	7.8%	8.6%	10.5%	42.9%	45.9%	8.9%
	総数	848	564	66	18	1071	1759	4326

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q39-3. 終結の形 (Q39「終結」回答 4343 ケース限定)

➤ 設問：「どのような形で集結しましたか」

- 「助言指導」82.4%、「継続指導終結」10.5%で大半を占めた。

Q39-3 終結の形 (Q39「援助終結」を選択したケース限定)

	度数	%	%グラフ
助言指導	3577	82.4	
継続指導終結	454	10.5	
他機関あっせん	93	2.1	
訓戒、誓約措置	3	0.1	
2号措置解除	10	0.2	
3号措置解除、27条2項措置解除	1	0.0	
市町村への事案送致	110	2.5	
その他	57	1.3	
無回答	38	0.9	
合計	4343	100	

これ以降の設問は Q39-3 で「助言指導」を選び一時保護を行わなかったケースの回答は求めていない。
したがって全数 = 6300 として計算しているが、無回答数とその分増加していることに留意する。

Q40. 一時保護の有無

- 「一時保護を行った」「一時保護中」のケースは計 13.4%であった。

	度数	%	% グラフ
一時保護を行った	798	12.7	
一時保護中である	43	0.7	
一時保護は行っていない	1726	27.4	
無回答もしくは非該当	3733	59.3	
合計	6300	100	

*「非該当」にはQ39-3で「助言指導」を選び一時保護を行わず終了したケースが含まれる。

*平成 25 年度調査との比較

「一時保護を行った」20.5%、「一時保護中」1.1%であり、この5年間で「一時保護」のケースが減少したと考えられる。

一時保護の有無と年齢カテゴリーのクロス表

12~14歳で「一時保護を行った」報告頻度が他年代と比べて相対的に高くなっていた。また1~5歳では「一時保護は行っていない」頻度が高くなっていた。

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
一時保護を行った	頻度	44	<u>229</u>	272	178	70	793
	カテゴリ別の%	28.9%	26.8%	30.4%	40.1%	33.5%	31.0%
一時保護中である	頻度	2	<u>8</u>	18	10	4	42
	カテゴリ別の%	1.3%	0.9%	2.0%	2.3%	1.9%	1.6%
一時保護は行っていない	頻度	106	618	604	<u>256</u>	135	1719
	カテゴリ別の%	69.7%	72.3%	67.6%	57.7%	64.6%	67.3%
総数		152	855	894	444	209	2554

***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは有意に低い頻度を示したもの。

一時保護の有無とケースの取り扱いのクロス表

通告者（Q4）を区市町村の児相部門に限定したうえで、ケースの取扱と一時保護の有無の関連を見たところ、「送致」は一時保護が行われている頻度が高く、「通知」は一時保護が行われる頻度が低くなっていた。

Q40 一時保護の有無とケースの取り扱いのクロス集計表
(Q4通告者=市町村の児相部門に限定)

		送致	援助要請	通知	合計
一時保護を行った	頻度	61	46	<u>15</u>	122
	カテゴリ別の%	62.9%	46.5%	27.8%	48.8%
一時保護中である	頻度	4	1	1	6
	カテゴリ別の%	4.1%	1.0%	1.9%	2.4%
一時保護は行っていない	頻度	<u>32</u>	52	38	122
	カテゴリ別の%	33.0%	52.5%	70.4%	48.8%
総数		97	99	54	250

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

一時保護の有無と児童共通ダイヤルのクロス表

児童共通ダイヤル（189）を使用したケースと一時保護の有無の関係においては、189 を使用したケースのほうが「一時保護は行っていない」頻度が高くなっていた。

Q40 一時保護の有無と児童共通ダイヤル（189）の使用のクロス集計表

		189使用	189不使用	不明	合計
一時保護を行った	頻度	<u>17</u>	696	13	726
	カテゴリ別の%	17.9%	30.6%	41.9%	30.3%
一時保護中である	頻度	1	39	0	40
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	0.0%	1.7%
一時保護は行っていない	頻度	77	1539	18	1634
	カテゴリ別の%	81.1%	67.7%	58.1%	68.1%
総数		95	2285	31	2411

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

一時保護の有無と虐待種別のクロス表

虐待種別と一時保護の関連については、「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」については「一時保護を行った」報告頻度が高く、一方「心理的虐待」「DV目撃」については低くなっていた。また「ネグレクト」では「現在一時保護中である」とする報告頻度も高く、ネグレクトの一時保護が比較的長期に渡ることが伺えた。

Q40 一時保護の有無と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
一時保護を行った	頻度	329	218	40	31	129	796
	カテゴリ別の%	46.3%	39.6%	58.0%	64.6%	22.1%	31.1%
一時保護中である	頻度	14	22	1	2	1	43
	カテゴリ別の%	2.0%	4.0%	1.4%	4.2%	0.2%	1.7%
一時保護は行っていない	頻度	367	310	28	15	455	1721
	カテゴリ別の%	51.7%	56.4%	40.6%	31.3%	77.8%	67.2%
	総数	710	550	69	48	585	2560

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

一時保護の有無と虐待重症度のクロス表

虐待重症度と一時保護の関連については、「虐待の危惧あり」「軽度虐待」については「一時保護を行っていない」頻度が高いのに比して、「中度虐待」「重度虐待」「生命の危機あり」では一時保護を行っている頻度が高くなっていた。

「保護を行った」「保護中である」を合計すると、中度虐待では 50.3%、重度虐待では 75.8%、生命の危機ありでは 72.7%が一時保護を実施していた（※%の評価においては、Q39-3で「助言指導」を行い終結したケースはこの計算に含まれない点に留意する必要がある）。

Q40 一時保護の有無と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
一時保護を行った	頻度	40	265	345	117	16	13	796
	カテゴリ別の%	9.9%	23.3%	47.7%	65.7%	72.7%	17.1%	31.4%
一時保護中である	頻度	2	4	19	18	0	0	43
	カテゴリ別の%	0.5%	0.4%	2.6%	10.1%	0.0%	0.0%	1.7%
一時保護は行っていない	頻度	363	866	359	43	6	63	1700
	カテゴリ別の%	89.6%	76.3%	49.7%	24.2%	27.3%	82.9%	67.0%
	総数	405	1135	723	178	22	76	2539

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q40-1. どこで一時保護を行ったか

(Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定)

➤ 設問：「どこで一時保護を行いましたか」

- 「所内」64.8%、「委託」31.6%であり、「所内」での保護が大半を占めた。

Q40-1 どこで一時保護を行ったか
(Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
所内	545	64.8	
委託	266	31.6	
無回答	30	3.6	
合計	841	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「所内」71.1%、「委託」28.1%であり、今回の調査結果とほぼ同様であった。

一時保護の場所と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」と「ネグレクト（同居人虐待放置）は所内、「ネグレクト」は委託の報告頻度が高かった。

Q40-1 一時保護の場所と虐待種別のクロス集計表 (Q40「保護した/保護中」回答ケース限定)

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計	
		頻度	241	130	35	26		84
所内	カテゴリ別の%	71.9%	55.8%	85.4%	86.7%	69.4%	58.0%	67.3%
委託	頻度	94	103	6	4	37	21	265
	カテゴリ別の%	28.1%	44.2%	14.6%	13.3%	30.6%	42.0%	32.7%
総数		335	233	41	30	121	50	810

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

一時保護の場所と虐待重症度のクロス表

「中度虐待」で所内、「生命の危機あり」で委託の報告頻度が高くなっていった。

Q40-1 一時保護の場所と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危機あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
		頻度	23	175	256	79	2	
所内	カテゴリ別の%	62.2%	68.4%	71.9%	60.3%	12.5%	61.5%	67.1%
委託	頻度	14	81	100	52	14	5	266
	カテゴリ別の%	37.8%	31.6%	28.1%	39.7%	87.5%	38.5%	32.9%
総数		37	256	356	131	16	13	809

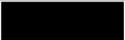
***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q40-1 追加. 一時保護所を変更した事例における最後の一時保護場所

(Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定)

- 設問：「一時保護所を変更した事例についてお答えください。最後の一時保護所（又は現在の一時保護場所）はどちらですか」
- 「委託」が 22.2%、「所内」19.1%で大きな差はみられなかった。

Q40-1追加 一時保護書を変更した事例における、最後の一時保護場所
(Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定)

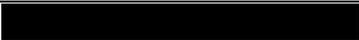
	度数	%	%グラフ
所内	161	19.1	
委託	187	22.2	
無回答	493	58.6	
合計	841	100	

※本設問は質問紙上では Q40-2 と表記され「Q40-2 保護期間」と問題番号が被っていた。意味を考慮し結果においては「Q40-1 追加」として命名、区別して整理した。

Q40-2. 保護期間 (Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定：日数回答)

- 設問注：「調査時点での保護期間（日）を回答してください」
- 一時保護期間の平均値は 47.8 日（標準偏差 36.0）、最小値 0、最大値 790 であった。30 日換算でまとめたヒストグラムを以下に示す。30 日未満でほぼ半数、60 日未満で 7 割を占める結果となった。

Q40-2 一時保護期間カテゴリ (Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定)

	度数	%	% グラフ
30日未満	357	42.4	
30-60日	197	23.4	
60-90日	97	11.5	
90-120日	55	6.5	
120日以上	55	6.5	
無回答	80	9.5	
合計	841	100	

虐待種別による保護期間の差

保護期間（日数）の虐待種別による違いを検討した結果、「性的虐待」は「ネグレクト」「DV 目撃」「心理的虐待」よりも平均保護日数が長くなっていることが示された。

Q40-2 虐待種別による保護期間（日数）の差

	平均日数	グループ	SD	度数
身体的虐待	49.2	AB	61.7	323
ネグレクト	52.3	AB	49.6	209
ネグレクト（同居人虐待放置）	36.9	A	36.1	39
性的虐待	67.7	B	48.5	25
心理的虐待	39.3	A	38.4	118
心理的虐待（DV目撃）	35.1	A	35.7	46

*一元配置分散分析および多重比較にはTukeyのb法を用いた。異なるアルファベットのグループ間には $p < .05$ で有意な差が認められることを示す。

虐待重症度別による保護期間の差

保護期間（日数）の虐待重症度による違いを検討した結果、重症なほど保護日数が伸びるように見えるものの、各グループ内での日数のばらつきの大きさもあり統計的に意味のある差としては見出されなかった。

Q40-2 虐待重症度による保護期間（日数）の差

	平均日数	グループ	SD	度数
虐待の危惧あり	35.9	A	37.2	36
軽度虐待	32.7	A	33.6	247
中度虐待	52.7	A	62.0	325
重度虐待	67.2	A	54.3	124
生命の危機あり	44.1	A	36.1	14
不明	51.4	A	56.1	13

*一元配置分散分析および多重比較にはTukeyのb法を用いた。異なるアルファベットのグループ間には $p < .05$ で有意な差が認められることを示す。

Q40-3. 身柄を確保した場所（Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定）

- 「警察からの身柄付き」が 28.8%と最も多く、次いで「学校」23.7%、「児童相談所」14.7%であった。

Q40-3 子どもの身柄を確保した場所
(Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
児童相談所	124	14.7	
自宅	86	10.2	
学校	199	23.7	
保育所・幼稚園	58	6.9	
病院	43	5.1	
警察からの身柄付き	242	28.8	
その他	57	6.8	
無回答	32	3.8	
合計	841	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「児童相談所」が 27.3%ともっとも多く、次いで 18.4%、「警察」18.4%であった。今回の調査では「警察からの身柄付き」の割合が高く、DV 法により警察が介入するケースが増えたことが影響していると思われる。

子どもの身柄を確保した場所と虐待種別のクロス表

身体的虐待は「学校」「保育所・幼稚園」が、ネグレクトは「自宅」が、同居人の虐待放置と性的虐待は「学校」が、心理的虐待は「児童相談所」が、それぞれ高い報告頻度を示した。

Q40-3 子供の身柄を確保した場所と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
児童相談所	頻度	47	32	4	5	28	8	124
	カテゴリ別の%	14.2%	14.1%	9.8%	15.2%	22.4%	16.0%	15.4%
自宅	頻度	25	37	3	1	12	8	86
	カテゴリ別の%	7.6%	16.3%	7.3%	3.0%	9.6%	16.0%	10.7%
学校	頻度	102	30	18	21	25	3	199
	カテゴリ別の%	30.8%	13.2%	43.9%	63.6%	20.0%	6.0%	24.7%
保育所・幼稚園	頻度	32	16	2	0	8	<u>0</u>	58
	カテゴリ別の%	9.7%	7.0%	4.9%	0.0%	6.4%	0.0%	7.2%
病院	頻度	19	18	1	2	<u>1</u>	2	43
	カテゴリ別の%	5.7%	7.9%	2.4%	6.1%	0.8%	4.0%	5.3%
警察からの身柄付き	頻度	90	71	12	<u>2</u>	41	24	240
	カテゴリ別の%	27.2%	31.3%	29.3%	6.1%	32.8%	48.0%	29.7%
その他	頻度	<u>16</u>	23	1	2	10	5	57
	カテゴリ別の%	4.8%	10.1%	2.4%	6.1%	8.0%	10.0%	7.1%
	総数	331	227	41	33	125	50	807

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

子どもの身柄を確保した場所と虐待重症度のクロス表

自宅は「虐待の危惧あり」の報告頻度が高い。学校は「中度・重度虐待」のような重症例の頻度が多い。病院は「重度虐待・生命の危機」の頻度が高く、特に生命の危機があり一時保護されたケースの81.3%が病院で身柄を確保されている。警察からの身柄つきには、「軽度虐待」のケースが多く報告された。

Q40-3 子供の身柄を確保した場所と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
児童相談所	頻度	5	48	53	16	1	1	124
	カテゴリ別の%	12.8%	18.4%	15.0%	12.8%	6.3%	7.7%	15.4%
自宅	頻度	9	29	38	7	0	3	86
	カテゴリ別の%	23.1%	11.1%	10.8%	5.6%	0.0%	23.1%	10.7%
学校	頻度	7	38	102	47	0	4	198
	カテゴリ別の%	17.9%	14.6%	28.9%	37.6%	0.0%	30.8%	24.5%
保育所・幼稚園	頻度	2	19	25	12	0	0	58
	カテゴリ別の%	5.1%	7.3%	7.1%	9.6%	0.0%	0.0%	7.2%
病院	頻度	1	4	11	14	13	0	43
	カテゴリ別の%	2.6%	1.5%	3.1%	11.2%	81.3%	0.0%	5.3%
警察からの身柄付き	頻度	12	108	95	20	1	5	241
	カテゴリ別の%	30.8%	41.4%	26.9%	16.0%	6.3%	38.5%	29.9%
その他	頻度	3	15	29	9	1	0	57
	カテゴリ別の%	7.7%	5.7%	8.2%	7.2%	6.3%	0.0%	7.1%
	総数	42	272	382	136	18	15	865

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q40-4. 保護者の同意の有無（Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定）

- 「最初から同意」が66.1%、「その後同意」15.9%と同意が得られたケースが大半を占めた。

Q40-4 保護者の一時保護への同意の有無
(Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
最初から同意	556	66.1	
最初から不同意	89	10.6	
最初は同意でその後不同意	15	1.8	
最初は不同意でその後同意	134	15.9	
同意・不同意の意向が変わる	6	0.7	
不明	20	2.4	
無回答	21	2.5	
合計	841	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「最初から同意」58.5%、「途中から同意」17.0%が大半を占め、今回と同様の結果であった。

保護者の同意の有無と虐待種別のクロス表

検定の結果明確な関連は認められなかった ($p=.059$) 点に注意が必要だが、ネグレクトが「最初が同意でも後に不同意」、性的虐待が「最初は不同意で後に同意」の報告頻度が相対的に多かったことが特徴的だった。

Q40-4 保護者の同意の有無と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計
最初から同意	頻度	229	152	32	<u>15</u>	87	39	554
	カテゴリ別の%	67.8%	66.1%	78.0%	45.5%	69.6%	76.5%	67.7%
最初から不同意	頻度	33	25	2	7	15	7	89
	カテゴリ別の%	9.8%	10.9%	4.9%	21.2%	12.0%	13.7%	10.9%
最初は同意でもその後不同意	頻度	3	<u>9</u>	1	0	2	0	15
	カテゴリ別の%	0.9%	3.9%	2.4%	0.0%	1.6%	0.0%	1.8%
最初は不同意でその後同意	頻度	59	37	5	<u>11</u>	19	<u>3</u>	134
	カテゴリ別の%	17.5%	16.1%	12.2%	33.3%	15.2%	5.9%	16.4%
同意・不同意の意向が変わる	頻度	2	1	0	0	2	1	6
	カテゴリ別の%	0.6%	0.4%	0.0%	0.0%	1.6%	2.0%	0.7%
不明	頻度	12	6	1	0	<u>0</u>	1	20
	カテゴリ別の%	3.6%	2.6%	2.4%	0.0%	0.0%	2.0%	2.4%
	総数	338	230	41	33	125	51	818

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

保護者の同意の有無と虐待重症度のクロス表

軽度虐待では「最初から同意」が、生命の危機ありでは「最初は不同意でその後同意」の報告頻度が高くなっていた。

Q40-4 保護者の同意の有無と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危機あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
最初から同意	頻度	29	<u>204</u>	230	81	<u>5</u>	5	554
	カテゴリ別の%	74.4%	77.3%	64.8%	61.4%	31.3%	41.7%	67.7%
最初から不同意	頻度	5	<u>18</u>	38	<u>21</u>	3	<u>4</u>	89
	カテゴリ別の%	12.8%	6.8%	10.7%	15.9%	18.8%	33.3%	10.9%
最初は同意でもその後不同意	頻度	0	3	8	4	0	0	15
	カテゴリ別の%	0.0%	1.1%	2.3%	3.0%	0.0%	0.0%	1.8%
最初は不同意でその後同意	頻度	4	<u>33</u>	68	23	<u>6</u>	0	134
	カテゴリ別の%	10.3%	12.5%	19.2%	17.4%	37.5%	0.0%	16.4%
同意・不同意の意向が変わる	頻度	0	1	2	<u>3</u>	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.0%	0.4%	0.6%	2.3%	0.0%	0.0%	0.7%
不明	頻度	1	5	9	<u>0</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	20
	カテゴリ別の%	2.6%	1.9%	2.5%	0.0%	12.5%	25.0%	2.4%
	総数	39	264	355	132	16	12	818

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q40-5. 一時保護を行った理由

(Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定：複数回答)

- 「子どもの安全確保」が86.1%と最も高く、次いで「調査を必要としたため」が45.4%と続いた。

	度数	%	%グラフ
子どもの安全確保のため	724	86.1	
調査を必要としたため	382	45.4	
行動観察のため	129	15.3	
短期入所指導のため	6	0.7	
その他	44	5.2	
該当ケース数	841		

*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「子供の安全のため」が 8 割を超え、「調査を必要としたため」も 3 割を超えていた。

保護理由と虐待種別のクロス表

全体の 86.1%を占める「子どもの安全確保のため」は虐待種別による偏りは見られなかった。性的虐待が、「調査を必要としたため」を保護理由として上げる頻度が相対的に高かった。

Q40-5 保護理由と主たる虐待種別のクロス集計表（複数回答）

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計
			ネグレクト					
子どもの安全確保のため	頻度	288	210	38	32	115	<u>39</u>	722
	カテゴリ別の%	84.0%	87.5%	92.7%	97.0%	88.5%	75.0%	86.1%
調査を必要としたため	頻度	166	116	14	<u>22</u>	<u>39</u>	24	381
	カテゴリ別の%	48.4%	48.3%	34.1%	66.7%	30.0%	46.2%	45.4%
行動観察のため	頻度	60	44	3	3	<u>10</u>	9	129
	カテゴリ別の%	17.5%	18.3%	7.3%	9.1%	7.7%	17.3%	15.4%
短期入所指導のため	頻度	4	2	0	0	0	0	6
	カテゴリ別の%	1.2%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%
その他	頻度	16	15	2	1	7	3	44
	カテゴリ別の%	4.7%	6.3%	4.9%	3.0%	5.4%	5.8%	5.2%
総数		343	240	41	33	130	52	839

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

保護理由と虐待重症度のクロス表

同様に全数の8割以上を占める「子どもの安全確保のため」に重症度による偏りは見られなかった。重度虐待のケースで、「調査を必要としたため」を保護理由として上げる頻度が高かった。

Q40-5 保護理由と主たる虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり			生命の 危機あり	不明	合計
		軽度虐待	中度虐待	重度虐待			
子どもの安全確保のため	頻度	34	220	319	124	13	722
	カテゴリ別の%	81.0%	81.8%	87.6%	91.9%	81.3%	92.3%
調査を必要としたため	頻度	<u>11</u>	111	172	<u>73</u>	7	382
	カテゴリ別の%	26.2%	41.3%	47.3%	54.1%	43.8%	61.5%
行動観察のため	頻度	7	45	59	18	0	129
	カテゴリ別の%	16.7%	16.7%	16.2%	13.3%	0.0%	0.0%
短期入所指導のため	頻度	0	3	3	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.0%	1.1%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%
その他	頻度	5	21	10	7	1	44
	カテゴリ別の%	11.9%	7.8%	2.7%	5.2%	6.3%	0.0%
	総数	42	269	364	135	16	839

*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q40-6. 一時保護終了時の解除理由 (Q40「一時保護した」回答 798 ケース限定)

- 「保護者への引き取り」が62.3%と最も高く、次いで「施設入所」21.7%となっていた。

Q40-6 一時保護解除の理由 (Q40「保護した」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
保護者への引き取り	497	62.3	
保護者以外の親族への引き取り	39	4.9	
里親等委託	26	3.3	
施設入所	173	21.7	
他の児童相談所へ	14	1.8	
家裁送致	1	0.1	
その他	23	2.9	
無回答	25	3.1	
合計	798	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「保護者へ引き取り」は56.0%であり、今回の調査のほうが高くなっている一方で、「施設入所」は33.6%と今回のほうがその割合は低くなっている。

一時保護解除の理由と虐待種別のクロス表

検定の結果明確な関連は認められなかった ($p=.069$) 点に注意が必要だが、ネグレクトは「施設入所」「里親等委託」が、同居人虐待放置は「保護者への引き取り」が保護解除理由として報告頻度が高かった。

Q40-6 一時保護解除の理由と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計	
			ネグレクト	(同居人の虐待放置)				
保護者への引き取り	頻度	212	114	32	20	81	37	496
	カテゴリ別の%	65.4%	55.3%	80.0%	64.5%	66.4%	77.1%	64.3%
保護者以外の親族への引き取り	頻度	12	10	2	2	10	3	39
	カテゴリ別の%	3.7%	4.9%	5.0%	6.5%	8.2%	6.3%	5.1%
里親等委託	頻度	7	13	1	2	3	0	26
	カテゴリ別の%	2.2%	6.3%	2.5%	6.5%	2.5%	0.0%	3.4%
施設入所	頻度	76	59	4	6	22	5	172
	カテゴリ別の%	23.5%	28.6%	10.0%	19.4%	18.0%	10.4%	22.3%
他の児童相談所へ	頻度	6	3	0	1	1	3	14
	カテゴリ別の%	1.9%	1.5%	0.0%	3.2%	0.8%	6.3%	1.8%
家裁送致	頻度	0	1	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
その他	頻度	11	6	1	0	5	0	23
	カテゴリ別の%	3.4%	2.9%	2.5%	0.0%	4.1%	0.0%	3.0%
総数		324	206	40	31	122	48	771

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

一時保護解除の理由と虐待種別のクロス表

回答数が少ない項目が多く明確なことは言えないが、軽度虐待は「保護者への引き取り」、中度虐待は「保護者以外の親族への引き取り」、重度虐待・生命の危機ありは「施設入所」を理由とする報告がそれぞれ多かった。

Q40-6 一時保護解除の理由と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の重症度				生命の危機あり	不明	合計
		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待			
保護者への引き取り	頻度	29	204	202	52	<u>4</u>	<u>4</u>	495
	カテゴリ別の%	76.3%	79.1%	60.3%	46.8%	25.0%	30.8%	64.2%
保護者以外の親族への引き取り	頻度	0	8	23	6	2	0	39
	カテゴリ別の%	0.0%	3.1%	6.9%	5.4%	12.5%	0.0%	5.1%
里親等委託	頻度	0	5	14	5	1	1	26
	カテゴリ別の%	0.0%	1.9%	4.2%	4.5%	6.3%	7.7%	3.4%
施設入所	頻度	7	<u>31</u>	81	42	8	4	173
	カテゴリ別の%	18.4%	12.0%	24.2%	37.8%	50.0%	30.8%	22.4%
他の児童相談所へ	頻度	1	5	1	3	0	4	14
	カテゴリ別の%	2.6%	1.9%	0.3%	2.7%	0.0%	30.8%	1.8%
家裁送致	頻度	0	0	1	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
その他	頻度	1	5	13	3	1	0	23
	カテゴリ別の%	2.6%	1.9%	3.9%	2.7%	6.3%	0.0%	3.0%
総数		38	258	335	111	16	13	771

***太字**とイタリックお表記の解釈は他の表に準ずるが、本解析は期待度数5未満のセルが20%を越えており参考程度に見る必要がある。

Q41. 一時保護を行わなかった理由

(Q40「一時保護を行わなかった」回答 1726 ケース限定)

- 「虐待はあったが、一時保護が必要なほど重篤でない」が 49.7%と最も高い割合を示した。また「虐待あったが、問題が解消した」ため一時保護を行わなかった事例は 7.1%、「虐待があったが、保護者が認め、支援や安全確認を行っていく合意がとれた」事例は 9.2%であり、計 66.0%は大きな問題はないといえる。
- 一方残りには、「子どもが一時保護に同意しなかった (1.2%)」や「接触がとれない (0.7%)」場合など深刻な事例が含まれており、こうした困難事例をどうするかは課題となる。「調査中である (4.3%)」は問題というわけではないが、調査中に虐待の継続やトラブルが生じる可能性も踏まえ、事態が明確でない過程における危機管理について議論を深めていく必要もあろう。
- また、「支援や安全確認を行っていく合意がとれた (9.2%)」は、基本的には良い経過を望めるケースであるが、リスクが変動していく可能性のあるケースとも言える。だれがどのように継続的な関わりをししていくかを明確にして、必要があれば保護も検討することやそうした枠組みの中での虐待者のやりとりを含むケースワークに高度なスキルが必要となるだろう。

Q41 一時保護を行わなかった理由 (Q40「一時保護行わなかった」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
虐待あったが、一時保護が必要なほど重篤ではない	858	49.7	
虐待あったが、問題が解消した	122	7.1	
虐待あったが、保護者が認め、支援や安全確認を行っていく合意が取れた	158	9.2	
子どもが一時保護に同意しなかった	20	1.2	
調査中である	75	4.3	
接触が取れない、あるいは行方不明	12	0.7	
その他	104	6.0	
無回答	377	21.8	
合計	1726	100	

一時保護を行わなかった理由と虐待種別のクロス表

回答数が少ない項目が多く明確なことは言えないが、心理的虐待・DV 目撃は「重篤ではない」、身体的虐待・ネグレクトは「支援の合意が取れた」、同居人虐待放置・性的虐待は「調査中」が一時保護を行わない理由としてそれぞれ報告頻度が高かった。

Q41 一時保護を行わなかった理由と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計	
虐待はあったが重篤でない	頻度	<u>164</u>	<u>147</u>	<u>8</u>	<u>0</u>	<u>247</u>	<u>292</u>	858
	カテゴリ別の%	58.2%	57.9%	40.0%	0.0%	72.2%	67.1%	63.7%
虐待はあったが問題が解消した	頻度	23	<u>17</u>	2	<u>5</u>	29	46	122
	カテゴリ別の%	8.2%	6.7%	10.0%	38.5%	8.5%	10.6%	9.1%
虐待はあったが支援の合意が取れた	頻度	<u>42</u>	<u>46</u>	2	0	<u>25</u>	<u>43</u>	158
	カテゴリ別の%	14.9%	18.1%	10.0%	0.0%	7.3%	9.9%	11.7%
子供が一時保護に同意しなかった	頻度	4	6	<u>3</u>	0	4	<u>2</u>	19
	カテゴリ別の%	1.4%	2.4%	15.0%	0.0%	1.2%	0.5%	1.4%
調査中である	頻度	18	12	<u>4</u>	<u>5</u>	18	18	75
	カテゴリ別の%	6.4%	4.7%	20.0%	38.5%	5.3%	4.1%	5.6%
接触が取れない	頻度	2	0	0	0	3	7	12
	カテゴリ別の%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%	1.6%	0.9%
あるいは行方不明	頻度	29	26	1	<u>3</u>	<u>16</u>	27	102
	カテゴリ別の%	10.3%	10.2%	5.0%	23.1%	4.7%	6.2%	7.6%
その他	頻度	29	26	1	<u>3</u>	<u>16</u>	27	102
	カテゴリ別の%	10.3%	10.2%	5.0%	23.1%	4.7%	6.2%	7.6%
	総数	282	254	20	13	342	435	1346

*太字とイタリックお表記の解釈は他の表に準ずるが、本解析は期待度数5未満のセルが20%を越えており参考程度に見る必要がある。

一時保護を行わなかった理由と虐待重症度のクロス表

回答数が少ない項目が多く明確なことは言えないが、虐待の危惧あり・軽度虐待では「重篤ではない」、中度虐待・重度虐待では「支援の合意が取れた」が一時保護を行わない理由としてそれぞれ報告頻度が高かった。

Q41 一時保護を行わなかった理由と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
虐待はあったが重篤でない	頻度	<u>207</u>	<u>453</u>	<u>178</u>	<u>3</u>	<u>0</u>	<u>11</u>	852
	カテゴリ別の%	73.9%	68.7%	58.2%	7.9%	0.0%	22.9%	63.7%
虐待はあったが問題が解消した	頻度	25	56	29	7	0	5	122
	カテゴリ別の%	8.9%	8.5%	9.5%	18.4%	0.0%	10.4%	9.1%
虐待はあったが支援の合意が取れた	頻度	<u>10</u>	83	<u>46</u>	<u>11</u>	2	<u>0</u>	152
	カテゴリ別の%	3.6%	12.6%	15.0%	28.9%	33.3%	0.0%	11.4%
子供が一時保護に同意しなかった	頻度	<u>0</u>	9	<u>9</u>	2	0	0	20
	カテゴリ別の%	0.0%	1.4%	2.9%	5.3%	0.0%	0.0%	1.5%
調査中である	頻度	14	<u>28</u>	15	1	1	<u>16</u>	75
	カテゴリ別の%	5.0%	4.2%	4.9%	2.6%	16.7%	33.3%	5.6%
接触が取れない	頻度	2	4	5	0	0	<u>1</u>	12
	カテゴリ別の%	0.7%	0.6%	1.6%	0.0%	0.0%	2.1%	0.9%
あるいは行方不明	頻度	22	<u>26</u>	24	<u>14</u>	<u>3</u>	<u>15</u>	104
	カテゴリ別の%	7.9%	3.9%	7.8%	36.8%	50.0%	31.3%	7.8%
その他	頻度	22	<u>26</u>	24	<u>14</u>	<u>3</u>	<u>15</u>	104
	カテゴリ別の%	7.9%	3.9%	7.8%	36.8%	50.0%	31.3%	7.8%
	総数	280	659	306	38	6	48	1337

*太字とイタリックお表記の解釈は他の表に準ずるが、本解析は期待度数5未満のセルが20%を越えており参考程度に見る必要がある。

Q42. 家族の援助プラン

- 「(プランを) 作成している」が 13.1%、「作成していない」が 28.3%となった。
- 家族にどのように対応するのかについて担当者なりの考えのもと援助が行われていると思われるが、援助プランとして明確化し、組織的にその効果の検証を行っていく上では、より多くの事例について計画が作成されることが望ましいといえる。

Q42 家族の援助プラン

	度数	%	% グラフ
作成している	825	13.1	
作成していない	1784	28.3	
無回答	3691	58.6	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「作成している」が 11.5%であり、今回の調査の方が割合が高くなっていた。

家族の援助プランと虐待種別のクロス表

身体的虐待・ネグレクト・同居人虐待放置については家族の援助プランを「作成している」、DV 目撃については「作成していない」報告がそれぞれ多かった。

Q42 家族の援助プランと虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計	
		作成している	頻度 278 カテゴリ別の% 38.5%	243 42.0%	31 46.3%	19 39.6%		180 30.5%
作成していない	頻度 444 カテゴリ別の% 61.5%	335 58.0%	36 53.7%	29 60.4%	410 69.5%	524 87.6%	1778 68.3%	
	総数	722	578	67	48	590	598	2603

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

家族の援助プランと虐待についての考え方のクロス表

「行為認めるが虐待認めない」「虐待認めて援助求める」の場合は家族の援助プランを「作成している」、「虐待認めるが援助求めない」場合は「作成していない」報告がそれぞれ多かった。

Q42 家族の援助プランと虐待についての考え方のクロス集計表

		行為も虐待も認めない	行為は認めるが虐待は認めない	虐待を認めるが援助求めない	虐待を認めるが援助求める	不明	合計
		作成している	頻度 87 カテゴリ別の% 33.6%	165 38.1%	189 26.5%	307 50.0%	
作成していない	頻度 172 カテゴリ別の% 66.4%	268 61.9%	523 73.5%	307 50.0%	490 88.0%	1760 68.3%	
	総数	259	433	712	614	557	2575

***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q43. 児相の援助に対する虐待者の態度

- 「働きかけに応じる」が25.1%（無回答を除くと60.2%）となり、「当初応じなかったものの現在応じる」2.7%（無回答を除くと6.5%）と合わせた場合、27.8%（無回答を除くと66.7%）が応じる態度を示していた。また「働きかけに応じない」ケースが3.8%であることも注目される。こうした態度の虐待者に対して、そのまましておけば子どもに虐待的な行動を変えない可能性が高い。

Q43 児相の援助に対する虐待者の態度

	度数	%	%グラフ
働きかけに応じる	1579	25.1	
当初は働きかけに応じなかったが現在は応じる	171	2.7	
当初は働きかけに応じていたが現在は応じない	138	2.2	
働きかけに応じない	237	3.8	
その他	497	7.9	
無回答	3678	58.4	
合計	6300	100	

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「働きかけに応じる」51.4%、「当初応じなかったものの現在応じる」6%であり、今回の調査の方が働きかけに応じる態度が見られるようになっている。

児相の援助に対する態度と虐待種別のクロス表

心理的虐待は「働きかけに応じる」、身体的虐待は「当初は応じていたが現在は応じない」、ネグレクトは「当初は応じなかったが現在は応じる」「働きかけに応じない」の報告頻度が高くなっていた。

Q43 児相の援助に対する態度と虐待種別のクロス集計表

	身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
働きかけに応じる	頻度 459	350	48	30	373	<u>317</u>	1577
	カテゴリ別の% 62.4%	60.2%	69.6%	61.2%	64.2%	52.7%	60.3%
当初は働きかけに応じなかったが現在は応じる	頻度 57	53	2	2	37	<u>20</u>	171
	カテゴリ別の% 7.8%	9.1%	2.9%	4.1%	6.4%	3.3%	6.5%
当初は働きかけに応じていたが現在は応じない	頻度 49	31	1	1	26	28	136
	カテゴリ別の% 6.7%	5.3%	1.4%	2.0%	4.5%	4.7%	5.2%
働きかけに応じない	頻度 54	79	5	<u>0</u>	44	54	236
	カテゴリ別の% 7.3%	13.6%	7.2%	0.0%	7.6%	9.0%	9.0%
その他	頻度 <u>116</u>	<u>68</u>	13	16	101	182	496
	カテゴリ別の% 15.8%	11.7%	18.8%	32.7%	17.4%	30.3%	19.0%
総数	735	581	69	49	581	601	2616

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

児相の援助に対する態度と虐待についての考え方のクロス表

「虐待認めるが援助求めない」「虐待認め援助求める」態度を示した虐待者は「働きかけに応じる」報告が多く、一方「行為も虐待も認めない」「行為認めるが虐待認めない」態度を示した虐待者は「働きかけに応じない」「当初は応じていたが現在は応じない」「当初は応じていなかったが現在は応じる」の報告頻度が高くなっていた。

Q43 児相の援助に対する態度と虐待についての考え方のクロス集計表

		行為も虐待も認めない	行為は認めるが虐待は認めない	虐待を認めるが援助求めない	虐待を認めるが援助求める	不明	合計
働きかけに応じる	頻度	<u>133</u>	<u>222</u>	501	553	<u>151</u>	1560
	カテゴリ別の%	50.6%	50.7%	70.5%	88.8%	27.3%	60.3%
当初は働きかけに応じなかったが現在は応じる	頻度	32	48	54	<u>25</u>	<u>11</u>	170
	カテゴリ別の%	12.2%	11.0%	7.6%	4.0%	2.0%	6.6%
当初は働きかけに 応じていたが現在は 応じない	頻度	<u>22</u>	46	37	24	<u>9</u>	138
	カテゴリ別の%	8.4%	10.5%	5.2%	3.9%	1.6%	5.3%
働きかけに応じない	頻度	38	61	57	<u>8</u>	66	230
	カテゴリ別の%	14.4%	13.9%	8.0%	1.3%	11.9%	8.9%
その他	頻度	<u>38</u>	<u>61</u>	<u>62</u>	<u>13</u>	316	490
	カテゴリ別の%	14.4%	13.9%	8.7%	2.1%	57.1%	18.9%
	総数	263	438	711	623	553	2588

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

Q44. 援助の状況（複数回答）

- 「保護者に対して援助」22.1%、「子どもに対して援助」10.9%、「保護者と子供に同席での援助」6.2%で援助を実施していた。

Q44 援助の状況について（複数回答）

	度数	%	%グラフ
保護者に対して援助を行っている	1393	22.1	
子どもに対して援助を行っている	686	10.9	
保護者と子どもに対して同席での援助を行っている	390	6.2	
援助は行っていない	883	14.0	
該当ケース数	6300		

*複数回答であること、また各設問の無回答数から度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「保護者に対して援助」24.2%、「子どもに対して援助」22.6%、「保護者と子供に同席での援助」25.3%であり、今回の調査はいずれもその割合を下げているものの、Q39-3で「助言指導」を選び一時保護を行わなかったケースが本設問への回答より外れた影響も大きいと思われる。

援助の状況（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

「子どもに対して援助を行う」頻度は6~11歳、12~14歳、15歳以上で高くなり、それ以下で低くなっていた。それ以外は年齢別に明確な傾向は認められなかった。

Q44 援助と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
保護者に対して 援助を行っている	頻度	90	464	503	241	<u>88</u>	1386
	カテゴリ別の%	57.3%	54.0%	56.5%	58.9%	47.1%	55.4%
	総数	157	859	890	409	187	2502
子どもに対して 援助を行っている	頻度	<u>23</u>	<u>136</u>	252	194	79	684
	カテゴリ別の%	18.5%	18.8%	31.8%	47.7%	42.9%	30.6%
	総数	124	725	793	407	184	2233
保護者と子どもに対して 同席での援助を行っている	頻度	26	113	142	75	31	387
	カテゴリ別の%	22.0%	16.8%	20.8%	23.7%	20.1%	19.9%
	総数	118	674	683	316	154	1945
援助は行ってはいない	頻度	46	314	300	132	83	875
	カテゴリ別の%	40.0%	43.6%	43.1%	44.3%	48.5%	43.8%
	総数	115	720	696	298	171	2000

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

援助の状況（複数回答）と虐待種別のクロス表

身体的虐待・ネグレクト・性的虐待は「保護者への援助」「子どもへの援助」「保護者と子ども同席での援助」の報告頻度が多かった。同居人虐待放置については「子どもへの援助」の報告頻度が相対的に高く、DV目撃は「援助は行ってない」頻度が高くなっていった。

Q44 援助と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
保護者に対して 援助を行っている	頻度	406	327	37	33	338	<u>249</u>	1390
	カテゴリ別の%	63.1%	63.1%	62.7%	76.7%	54.4%	40.0%	55.5%
	総数	643	518	59	43	621	622	2506
子どもに対して 援助を行っている	頻度	271	172	28	31	<u>124</u>	<u>59</u>	685
	カテゴリ別の%	46.6%	39.2%	53.8%	75.6%	22.7%	10.2%	30.6%
	総数	581	439	52	41	547	576	2236
保護者と子どもに対して 同席での援助を行っている	頻度	137	101	8	13	<u>68</u>	<u>62</u>	389
	カテゴリ別の%	29.4%	27.4%	23.5%	52.0%	13.8%	11.0%	19.9%
	総数	466	369	34	25	494	562	1950
援助は行ってはいない	頻度	214	156	16	7	<u>193</u>	300	886
	カテゴリ別の%	46.2%	42.0%	47.1%	38.9%	37.5%	48.2%	43.8%
	総数	463	371	34	18	514	623	2023

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

援助の状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表

援助の対象問わず、行われる頻度が相対的に高くなっているのは中度虐待以上であった。中度・重度虐待は全ての援助パターンの頻度が高かったが、生命の危機ありの場合のみ「同席での援助」が行われない傾向が見られた。

Q44 援助と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危機あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
保護者に対して 援助を行っている	頻度	<u>171</u>	<u>573</u>	477	124	18	<u>22</u>	1385
	カテゴリ別の%	39.5%	50.5%	71.1%	84.4%	85.7%	28.6%	55.8%
	総数	433	1134	671	147	21	77	2483
子どもに対して 援助を行っている	頻度	<u>39</u>	<u>233</u>	293	103	8	<u>10</u>	686
	カテゴリ別の%	10.3%	22.8%	49.4%	75.2%	61.5%	13.9%	31.0%
	総数	380	1021	593	137	13	72	2216
保護者と子どもに対して 同席での援助を行っている	頻度	<u>49</u>	<u>155</u>	146	33	1	<u>4</u>	388
	カテゴリ別の%	12.8%	16.4%	31.8%	49.3%	14.3%	6.1%	20.1%
	総数	382	948	459	67	7	66	1929
援助は行ってはいない	頻度	184	434	174	22	4	56	874
	カテゴリ別の%	45.7%	43.1%	40.4%	38.6%	57.1%	70.9%	44.0%
	総数	403	1008	431	57	7	79	1985

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

援助の状況（複数回答）と虐待に対する考え方のクロス表

「援助を求める」ケースには保護者・子供双方への援助を実施しているのに対して、「援助を求めない」ケースの援助提供率は低めになっており対応の難しさを感じさせる。「行為も虐待も認めない」ケースは実際の援助必要性の高さか、保護者・子供双方への援助の実施頻度が高いものの、援助を行わない選択も多い。

Q44 援助と虐待に対する考え方のクロス集計表

		行為も虐待も認めない	行為は認めるが虐待は認めない	虐待を認めるが援助求めない	虐待を認めるが援助求める	不明	合計
保護者に対して援助を行っている	頻度	137	242	368	425	200	1372
	カテゴリ別の%	64.3%	58.0%	50.7%	75.4%	35.8%	55.4%
	総数	213	417	726	564	558	2478
子どもに対して援助を行っている	頻度	96	146	135	231	67	675
	カテゴリ別の%	49.5%	38.3%	20.8%	49.1%	13.0%	30.6%
	総数	194	381	648	470	515	2208
保護者と子どもに対して同席での援助を行っている	頻度	44	79	89	142	34	388
	カテゴリ別の%	31.9%	25.3%	14.6%	37.9%	6.9%	20.1%
	総数	138	312	610	375	493	1928
援助は行ってはいない	頻度	73	118	263	108	308	870
	カテゴリ別の%	52.1%	38.4%	41.4%	32.0%	54.8%	43.9%
	総数	140	307	636	337	562	1982

***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは有意に低い頻度を示したものの。

Q44-1. 保護者への援助の実施方法（Q44「保護者に援助」回答 1393 ケース限定）

- 「家庭訪問による面接」58.4%、次いで「来所してもらい個別面接」53.3%を実施しているケースが多くみられた。

Q44-1 保護者への援助の実施方法

（Q44「保護者へ援助」回答ケース限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
来所してもらい個別面接	742	53.3	
家庭訪問による面接	814	58.4	
施設に訪問しての面接	76	5.5	
個別心理療法	15	1.1	
グループ療法	5	0.4	
精神科医療	39	2.8	
その他の医療	4	0.3	
その他	107	7.7	
該当ケース数	1393		

*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「家庭訪問による面接（不定期）」48.3%、「来所してもらい個別面接（不定期）」32.5%が多く、定期的面接と合わせても今回の調査と同様の傾向が見られた。

Q44-2. 保護者への援助に関わった機関

(Q44「保護者に援助」回答 1393 ケース限定：複数回答)

- 「児童相談所」89.5%であり、「児童相談所以外」での援助も 33.9%あった。

Q44-2 保護者への援助に関わった機関
(Q44「保護者へ援助」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
児童相談所	1247	89.5	
児童相談所以外	472	33.9	
該当ケース数	1393		

*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「児童相談所」89.3%、「児童相談所以外」34.0%と同様の傾向が見られた。

Q44-2-1. 保護者援助における児童相談所での対応者

(Q44「保護者に援助」かつ Q44-2「児童相談所」回答 1247 ケース限定：複数回答)

- 「児童福祉司」87.7%、「児童心理司」30.2%の 2 つが多くを占めた。医師による対応は 3.9%であった。

Q44-2-1 児相に関わった援助での対応者
(Q44-2「児童相談所」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
児童福祉司	1093	87.7	
児童心理司	377	30.2	
医師	49	3.9	
家族支援のための専任担当者	15	1.2	
その他	57	4.6	
該当ケース数	1247		

*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「児童福祉司」96.8%、「児童心理司」31.5%であり今回と同様の結果であった。

Q44-3. 子どもへの援助の実施方法

(Q44「子どもへ援助」回答 942 ケース限定：複数回答)

- 「家庭訪問による面接」41.3%、次いで「来所してもらい個別面接」37.9%、「施設に訪問しての面接」27.1%となっていた。

Q44-3 子どもへの援助の実施方法
(Q44「子どもへ援助」「子どもと保護者同席で援助」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
来所してもらい個別面接	357	37.9	
家庭訪問による面接	389	41.3	
施設に訪問しての面接	255	27.1	
個別心理療法	54	5.7	
グループ療法	4	0.4	
精神科医療	45	4.8	
その他の医療	11	1.2	
その他	93	9.9	
該当ケース数	942		

*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「家庭訪問による面接（不定期）」27.7%、「来所してもらい個別面接（不定期）」17.7%であり、定期的な援助と合わせると今回の調査と同様の傾向が見られた。

Q44-4. 子どもへの援助に関わった機関

(Q44「子どもへ援助」回答 942 ケース限定：複数回答)

- 「児童相談所」 88.0%であり、「児童相談所以外」も 31.7%あった。

Q44-4 子どもへの援助に関わった機関
(Q44「子どもへ援助」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
児童相談所	829	88.0	
児童相談所以外	299	31.7	
該当ケース数	942		

*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「児童相談所」 85.8%、「児童相談所以外」 26.8%であり今回の調査結果と同様の傾向が見られた。

援助機関（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

多くは「児童相談所」が援助に関わっているが、1歳未満・1~5歳については、「児童相談所以外の機関」も援助に携わる報告が多くなっていた。

Q44-4 援助機関と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

	1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計	
児童相談所	頻度 <u>37</u>	190	307	204	88	826	
	カテゴリ別の%	79.7%	84.1%	90.9%	89.4%	91.3%	88.1%
児童相談所以外	頻度 <u>26</u>	<u>91</u>	<u>92</u>	61	29	299	
	カテゴリ別の%	56.8%	38.4%	25.3%	25.1%	37.7%	31.9%
	総数	47	224	342	227	98	938

***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは低い頻度を示したものの。

援助機関（複数回答）と虐待種別のクロス表

同様に多くは「児童相談所」が援助に関わっているが、ネグレクトにおいては、「児童相談所以外の機関」が援助にかかわる頻度が多かった。

Q44 援助機関と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV目撃）	合計
			ネグレクト	（同居人の虐待放置）				
児童相談所	頻度	312	<u>202</u>	28	35	157	94	828
	カテゴリ別の%	89.9%	83.5%	80.0%	94.6%	92.4%	86.2%	88.1%
児童相談所以外	頻度	100	<u>104</u>	9	11	<u>38</u>	35	297
	カテゴリ別の%	28.8%	43.0%	25.7%	29.7%	22.4%	32.1%	31.6%
	総数	347	242	35	37	170	109	940

*太字はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは低い頻度を示したものの。

Q44-4-1. 子ども援助における児童相談所での対応者

（Q44「子どもに援助」かつ Q44-4「児童相談所」回答 942 ケース限定：複数回答）

- 「児童福祉司」86.0%、「児童心理司」59.3%が多くのケースの対応を行っていた。

Q44-4-1 児相が関わった援助での対応者

（Q44-4「児童相談所」回答ケース限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
児童福祉司	713	86.0	
児童心理司	492	59.3	
医師	64	7.7	
家族支援のための専任担当者	14	1.7	
その他	33	4.0	
該当ケース数	942		

*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「児童福祉司」79.2%、「児童心理司」45.4%であり、今回の調査の方がこれらの 2 職種が対応する割合が高くなっていた。

Q45. 保護者、子ども、保護者と子ども（同席）へ実施したプログラム

- 「プログラムを行っていない」ケースが多数（30.2%程度）を占めていた。実施されたプログラムの中では、「サインズ・オブ・セーフティ」が1.1%と最も多かった。

Q45 保護者・子どもに行われたプログラム（複数回答）

	度数	%	%グラフ
サインズ・オブ・セーフティ	70	1.1	■
パートナーリング・フォー・セイフティ	6	0.1	
精研式ペアレント・トレーニング	14	0.2	
ファミリー・グループカンファレンス	2	0.0	
MyTree ペアレンツプログラム	3	0.0	
PCIT（親子相互交流療法）	2	0.0	
CARE	7	0.1	
CRC	3	0.0	
トリプルP	4	0.1	
Nobody's Perfect	0	0.0	
コモンセンス・ペアレンティング	4	0.1	
旧称「コモンセンス・ペアレンティング」	11	0.2	
AF-CBT	1	0.0	
TF-CBT	0	0.0	
その他の母親グループ	0	0.0	
その他の父親グループ	5	0.1	
その他の親子同時に参加するグループ	0	0.0	
その他	37	0.6	■
プログラムを行っていない	1902	30.2	■
該当ケース数	6300		

*複数回答であること、また各設問の無回答数から度数合計は該当ケース数とは一致しない。

*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「サインズ・オブ・セーフティ」が最も多く、同様の傾向が見られた。

実施したプログラムと虐待種別のクロス表

プログラムを実施した割合が非常に低いので慎重な解釈が必要だが、「同居人の虐待放置」は「サインズ・オブ・セーフティ」が実施されることが相対的に多く、心理的虐待には「精研式ペアレントトレーニング」が実施される頻度が多かった。

実施したプログラム（複数回答）と虐待種別のクロス表

Q45 実施したプログラムと虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV目撃）	合計
				（同居人の虐待放置）				
サインズ・オブ・セーフティ	頻度	22	17	<u>6</u>	1	17	<u>7</u>	70
	カテゴリ別の%	3.1%	3.1%	8.7%	2.1%	2.9%	1.2%	2.7%
	総数	710	550	69	48	593	600	2570
パートナーリング・フォー・セイフティ ^a	頻度	5	1	0	0	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.7%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
精研式ペアレントトレーニング	頻度	6	<u>0</u>	0	0	<u>8</u>	<u>0</u>	14
	カテゴリ別の%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	1.4%	0.0%	0.5%
	総数	711	549	69	48	585	598	2560
ファミリーグループカンファレンス ^a	頻度	<u>2</u>	0	0	0	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
MyTreeペアレンツプログラム ^a	頻度	1	0	0	0	2	0	3
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	0.1%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
PCIT（親子相互交流療法） ^a	頻度	1	0	0	<u>1</u>	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	2.1%	0.0%	0.0%	0.1%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
CARE ^a	頻度	3	1	0	1	2	0	7
	カテゴリ別の%	0.4%	0.2%	0.0%	2.1%	0.3%	0.0%	0.3%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
CRC ^a	頻度	0	3	0	0	0	0	3
	カテゴリ別の%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
トリプルP ^a	頻度	3	0	0	0	1	0	4
	カテゴリ別の%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.2%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
コモンセンス・ペアレンティング ^a	頻度	3	1	0	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	0.4%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
旧称「コモンセンス・ペアレンティング」 ^a	頻度	6	1	0	0	4	0	11
	カテゴリ別の%	0.8%	0.2%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.4%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
AF-CBT ^a	頻度	1	0	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
その他の父親のグループ ^a	頻度	2	0	0	0	3	0	5
	カテゴリ別の%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.2%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
その他	頻度	<u>20</u>	<u>3</u>	2	1	<u>3</u>	8	37
	カテゴリ別の%	2.8%	0.5%	2.9%	2.1%	0.5%	1.3%	1.4%
	総数	711	549	69	48	585	598	2560
プログラムを行っていない	頻度	<u>489</u>	407	44	39	432	<u>487</u>	1898
	カテゴリ別の%	61.8%	66.4%	58.7%	75.0%	65.2%	70.2%	65.7%
	総数	791	613	75	52	663	694	2888

***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したもの。a期待度数5未満のため検定としては十分なものではないが参考として示す。またNobody's Perfect、TF-CBT、その他の母親のグループ、その他の親子同時に参加するグループは導入ケースが0であったため結果表示からは外した。

8. 考察

以上の所見をもとにテーマごとの考察を以下に加える。

1. 通告される虐待事例の変化特に DV 目撃による心理的虐待事例について

通告される虐待事例の変化を表す所見として以下が注目された。

- ① 通告した者（機関）では、H25 年度に比べ「警察」の通告等が 2.5 倍以上に増加していた。
- ② 虐待種別について回答のあった 6300 ケースにおいて、「心理的虐待 (DV 目撃)」が 2111 人 (33.5%) と最も多く、「心理的虐待」1493 人 (23.7%)、「身体的虐待」1433 人 (22.7%)、「ネグレクト（同居人等による虐待の放置以外）」1043 人 (16.6%) であった。平成 25 年調査では、「身体的虐待」が 2,434 人 (32.7%) と最も多く、「ネグレクト（虐待放置以外）」が 1,921 人 (25.8%) 「心理的虐待 (DV 目撃除く)」が 1,363 人 (18.3%)、「心理的虐待 (DV 目撃)」が 1,245 人 (16.7%) であり、今回の調査では、心理的虐待 (DV 目撃) が急増していることが確認された。
- ③ 主たる虐待者は、最多が「実母」が 2904 件 (46.1%) で次が「実父」2569 件 (40.8%) であった。平成 25 年調査では、「実母」が 3,828 件 (51.1%) と最も多く、次いで「実父」2,556 件 (34.4%) であったので比較すると、実母の割合が 1 割低下し、実父が 1 割増加していた。

以上のように、今回の調査で現在の児童相談所で扱っている虐待事例の全体的な特徴として、警察からの通告とくに DV 事例における心理的虐待の割合が急激に増え、主な虐待者が実父である事例が増えていることが明示された。これは、最近の虐待事例自体の特徴も含まれている可能性があるが、警察が以前よりも子どもが同居している DV 家庭の事例を児童相談所に通告する方針が明確になったことでの変化が大きいと思われる。これまで実母が主要な虐待者として示されることが多かったが、それは子どもを直接世話しているのが母親であることを反映しているので、母親のみが問題なのではなくて父親の問題もその裏にある場合が多いと以前から指摘されてきたことを考えると、DV という視点を通して暴力的な側面をもつ父親の問題が事例として顕在化してきたといえるだろう。

こうして最近増加している心理的虐待 (DV 目撃) 虐待の事例について検討するために今回のデータから得られた所見を以下に示した。

- ④ 心理的虐待 (DV 目撃) の事例では、虐待通算期間が 1 か月未満と評価される事例が 3 割を占め、他の虐待の種類と群よりも、この一番短い期間のカテゴリーに入る割合が有意に多いという結果であった。
- ⑤ 虐待重症度をみると、心理的虐待 (DV 目撃) 虐待の事例では「虐待の危惧あり」という最も重症度を低く評価された群で 40.5% を占めるが、重症度が深刻である「中度虐待」の 43.4%、「重度虐待」の 23.5% を占めていた。
- ⑥ 心理的虐待 (DV 目撃) の事例の主たる虐待者は多い順に、実父 65.2%、実母 21.3%、母の内縁の夫 4.7%、普通養子縁組の養父 4.4%、継父 2.3% などであり、他の虐待の種類と比べた場合、実父、母の内縁の夫、普通養子縁組の夫の割合が有意に高く、実母の割合が有意に低いという結果であった。

- ⑦ 主たる虐待者との面接において、心理的虐待（DV）では、「主たる虐待者に会った」37.3%、「従たる虐待者に会ったが、主たる虐待者には会っていない」18.6%、「会っていない」43.5%であり、他の虐待の種類と比べて、「従たる虐待者に会ったが、主たる虐待者には会っていない」「会っていない」の割合が有意に高かった。保護者との面接回数が「なし」の割合（34.1%）が他の虐待よりも多いことが示された。
- ⑧ 保護者や子どもへのサービス導入を聞く質問で、「DV 被害者支援支援機関等」への紹介をおこなった事例は9.9%であった。
- ⑨ 要保護対策協議会の個別ケース検討会開催の開催してない割合（92.5%）は、虐待の種類別の群で最も高かった。

④の所見は、本来の DV 問題が長期的な性質を持つことと反するようだが、児童との関連で見ると別居や離婚をした場合だと直接的には虐待と判断しにくい状況になるので、虐待の通算期間としては1か月以内という短いカテゴリーに入れられる事例が多いと思われる。これが⑤の所見で虐待重症度における「虐待の危惧あり」という重症度としては低い判断に迷うという回答の事例が他の虐待に比べて、多かったことと呼応していると思われる。一方で DV 事例では重症度としては、中等度以上の深刻な虐待であると評価された事例も多く、暴力そのものは深刻である事例は少なくないといえる。⑥のように。加害者は実父や養父や妻の交際相手が他の虐待よりも多いため、子どものことで接触をとることが、実母の場合よりも難しいということも評価や対応を難しくしていると考えられる。實際上、⑦に示すように主な虐待者の面接にこぎつけることができない場合が他の虐待よりも割合が多く、保護者全体への面接回数がゼロである割合も最多である。DV 加害者と面接が難しいこともあるし、また現に子どもと住んでいないような場合には面接までの必要性がないと判断されている可能性がある。しかし、DV 問題のある家庭では加害的でない親も SOS が出しにくく、状況を知ることが困難であり、被害を受けた配偶者と子が家をでて、裁判や面会交流などの関係が継続したり、再同居する場合もまれではなく、理想的には長期的な評価や支援が必要であると思われるが、虐待事例の通告が激増している中でこうした事例に継続的な対応をすることは容易ではないといえる。その分、DV 被害者支援機関や区市町村、警察などとの連携が重要になると思われる。これについては⑧にみるとおり DV 被害者支援機関へのつながりが全体の1割程度行われているが、多い割合とは言えない。また⑨の所見のように、DV 目撃事例は要保護対策協議会での事例検討会が他の虐待に比べて開催の割合が少なかったが、DV 事例の評価や対応の難しさを考えれば、区市町村や DV 被害者支援機関などとの連携を高めていくことが有効であるといえる。

2. 189の使用の状況と効果

189の使用について今回の調査結果から以下のような所見を得た。

- ① 児童相談所全国共通ダイヤル（189）を使用したのは515件（6.7%）であった。
- ② 通告者別に189使用の割合を比べた場合に、189使用が多かったのは、通告者が「虐待者本人」（189使用割合17.9%）、「児童本人」（189使用割合22.0%）、「その他の家族・親族」（189使用割合11.7%）、「近隣知人」（189使用割合27.7%）であった。
- ③ 虐待重症度と189の使用の関連について検討した結果、「虐待の危惧」では189使用した事例の割合が高く、中度・重度虐待では189使用頻度が低くなっていた。

調査 2

- ④ 主たる虐待種別と 189 使用との関連について検討した結果、「身体的虐待」と「心理的虐待」は 189 を使用したケースが多く、「ネグレクト」「DV 目撃」は 189 を使用しないケースの頻度が多かった。

以上より、児童相談所への通告された虐待事例の中で、1189 が用いられていた事例は、515 件（6.7%）であり、まだ使用率は高いとは言えないものの、「近隣知人」「児童本人」「その他の家族・親族」では比較的高い割合で用いられていた。虐待通告は前よりも全体的に敷居が下がり、多くの通告がなされるようになったが、虐待者本人や児童本人など訴えが難しいと思われ、これらの人々の通告で 189 を使った割合が 2 割前後であったことは一定の効果がみられているといえる。虐待の重症度では虐待の危惧ありのレベルの者が多かったことも 189 の役割の位置づけからうなずけるものであった。虐待種別では、身体的虐待のみでなく心理的虐待が比較的多かったことも周囲からわかりにくい事例の訴えに役立っていることをうかがわせる。DV や性的虐待など訴えにくい虐待では期待ほどは用いられていなかったが、これは虐待者がいる家庭では電話をすることの難しさがあるためかもしれない。

3. 虐待者のリスク要因

虐待者のもつリスク要因として以下の所見が注目された。

- ① 乳幼児健診で受診したというものは、3～6 か月健診 50.1%、1 歳 6 か月 44.9%、3 歳児健診 38.2%であり、平成 25 年調査の 3～6 か月健診 37.9%、1 歳 6 か月 34.1%、3 歳児健診 28.9%と比べると全ての段階で上がっていた。「不明」が 4 割程度を占め、これらの値がそのまま受診率ではないが、一般の受診率が 8 割を超えていることと比較すると、高いとはいえない。3～6 か月健診を「受診した」という所見と虐待重症度の一番低い「虐待の危惧あり」段階であることが関係しており、また「受診していない」と中度虐待が関係しており、健診の受診状況が、虐待の重症度の指標になり得ることを示している所見であった。
- ② 経済状況としては、「生活保護世帯」10.0%、「非課税世帯」6.5%。「課税世帯」49.4%であり、平成 25 年度調査における「生活保護世帯」16.5%、「非課税世帯」8.9%「課税世帯」が 40.7%と比べるとやや今回の方が良い傾向があるが、一般に比べると今回の事例では生活保護の率など高く、経済的問題を有することが子育てを難しくしていると思われる。
- ③ 虐待者の就労状況としては正規就労 45.2%、非正規就労 17.1%、内職 0.3%、家事専念 10.0%、無職 10.9%であり、無職であることは、虐待の重症度で、中度虐待や重度虐待と関連していた。また虐待種別では、ネグレクト及びネグレクト（同居人の虐待の放置）と関連していた。
- ④ 虐待者自身の生育時の状況は、「ひとり親家庭」6.9%が最も多く、「親からの身体的虐待」「両親の別居・離婚」がともに 4.3%であり、圧倒的に多いのは「不明」67.1%であった。背景を知ることの難しさを感じさせる結果であったが、一方で生育家庭の状況と虐待種別を調べると虐待者自身が生育時に体験した虐待と行った虐待に関連が明確に認められた。すなわち、ネグレクトの虐待者は「ひとり親家庭」「両親の別居・離婚」「生活保護受給」「親からの物理的・心理的ネグレクト」の報告頻度が高くなっており、身体的虐待の虐待者は「親からの身体的虐待」「ひとり親家庭」の報告頻度が高く、心理的虐待の虐待者は「親からの心理的虐待」の報告頻度が高かった。これらはいわゆる虐待の世代間連鎖を色濃く物語る結果となった。また虐待の重症度、特に中度虐待以上の深刻な虐待と生育期の逆境的体验（「ひとり親家庭」「親からの虐待（身体的・ネグレクト・心理的）」「両親の別居や離婚」「生育環境での DV」等）があることが関

係していた。特に「親からの身体的虐待」「ひとり親家庭」「親からの情緒的ネグレクト」は重度虐待や生命の危機のような重篤例での報告頻度が高くなっていた。

- ⑤ 虐待者の精神障害又はその疑いについては約半数(53.9%)が「精神障害はないと思われる」であったが、1193名(18.9%)で「精神障害又はその疑いがある」と報告された、虐待重症度が高くなるほど(中度虐待以上)精神障害が報告される頻度が高く、比較的重症度が軽度であるほど(危惧あり・軽度虐待)精神障害はないと報告される頻度が高くなっていた。虐待種別との関係では、精神障害が報告される頻度が多い虐待種別として「ネグレクト」、精神障害はない報告される虐待種としては「身体的虐待」がそれぞれ該当していた。精神障害またはその疑いがあるとされた1193名を対象として、精神障害に対する治療・相談について尋ねると、496件(41.6%)が治療・相談に行っていたが、「不明」を含む「治療不十分」「治療していない」と思われるケースが半数以上を占めていた。治療相談の有無と虐待重症度の関連を検討したところ、中度虐待において「治療していない」との報告が多く見られた。また重度虐待においては「治療に行ったが不十分なもの」との報告が多かった。主な虐待者の精神障害の種類としては、感情障害が39.6%、パーソナリティ障害13.2%、発達障害13.2%、アルコール使用障害11.1%知的障害10.5%、不安障害10.6%、統合失調症7.5%であった。「感情障害」はすべての虐待種別で4～5割を占め、実母に多いことが示された。また「ネグレクト」において「知的障害」「発達障害」「アルコール使用障害」が多いこと、「DV目撃」において、「アルコール使用障害」が多い傾向がみられた。

以上のまとめると虐待者のもつリスク要因として、乳幼児健診の受診が確認されないこと、精神的問題(精神障害や知的障害や発達障害など)やその疑いがあること、経済的困難、不安定な就労、夫婦間不和、育児疲れ、ひとり親家庭、DV、養育者の別居、孤立、劣悪な住環境、頻繁な転居、アルコール等の乱用者、親自身の被虐待体験などが存在し、虐待重症度や虐待の種別とも関係していた。精神的な問題への治療を行っているかどうかは虐待の重症度と関係していることが確かめられ、こうしたリスク要因への対応することで虐待の重症化や再発を予防できる可能性がある。

4. 被虐待児童の状態やリスク要因

- ① 子どもが経験する生育時の問題としては、「ないと思われる」43.4%、「不明」25.5%であるが、「発達障害疑い」が11.4%と最も多く、「精神発達の遅れ等」6.6%、「問題行動あり」6.9%、「分離体験」5.1%が続いていた。虐待重症度別の生育状況の特徴は、虐待の危惧ありと軽度虐待は「問題がない」と報告される頻度が高い。中度虐待は「発達障害疑い」「問題行動あり」「精神発達の遅れ」「分離体験」などの問題が報告される頻度が高かった。重度虐待も同様の傾向であった。また重度虐待と生命の危機ありにおいて、「予期しない妊娠」の報告頻度が高くなっていた。虐待種別の生育状況の特徴は、身体的虐待には「発達障害疑い」「問題行動あり」「精神発達の遅れ」の頻度が多い。ネグレクトは「予期しない妊娠」「分離体験」「精神発達の遅れ」「分離体験」「未熟児」が多かった。性的虐待は頻度そのものが少ないが、「発達障害の疑い」「精神発達の遅れ」が多かった。
- ② 被虐待児が生育時に経験した家庭・家族状況としては、「夫婦間不和」が33.0%と最も多く、次いで「ひとり親家庭」26.0%、「DV」24.0%、「養育者の別居」19.9%などが高い割合を示していた。家庭状況と虐待重症度の特徴としては、全般的に虐待の危惧ありと軽度虐待は問題の報告が少ないのに対し、中度虐待・重度虐待以上になると「夫婦間不和」「DV」「養育者の別居」「経済的困難」「精神障害のある家族」

調査 2

「ステップファミリー」「不安定な就労」などを代表とする様々な問題の報告頻度が高くなることである。

- ③ 被虐待児の調査時の身体状況としては、「ないと思われる」が8割以上を占めていた。該当のある身体状況では、「打撲傷・あざ」が7.5%と最も高く、次いで「不衛生」3.0%となっていた。身体的虐待の反映と見られる「打撲傷あざ」「頭部外傷」は重度虐待以上での報告例が多い。またネグレクトの反映と考えられる「不衛生」「栄養不良」「身体発達の遅れ」も重度虐待以上での報告が多くなる。逆に「ないと思われる」は軽度虐待や虐待の危惧ありのケースでの報告が多い。
- ④ 被虐待児の精神症状としては、未就学児童では「遊びに集中できず落ち着かない」「ぐずることやかんしゃくを起こすことが多い」が多く、就学以降の年代では「落ち着きのなさ」、「虐待者や特定の状況・人に怯える」、「引きこもり・不登校」、「怒りを抑えられず、人や物にあたる」が多かった。
- ⑤ 未就学児童の虐待重症度と精神症状の関係では、虐待の危惧あり・軽度虐待では「ないと思われる」が多く報告され、中度虐待では「おびえる・不安」「表情乏しい」「寝付けない・夜泣き激しい」が多く報告されていた。重度虐待は加えて「ぐずる・かんしゃく」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」「表情乏しい」が多く報告されていた。生命の危機ありは報告頻度が全体に少ないが、精神的問題については不明であるという報告が多かった。精神症状と虐待種別の関係では、身体的虐待とネグレクトにおいて多くの精神的問題が報告された。身体的虐待は「おびえる・不安」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」「ぐずる・かんしゃく」「感情の起伏激しい」「寝付けない・夜泣き」「表情乏しい」などの報告頻度が高かった。ネグレクトは「表情乏しい」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」の報告頻度が高かった。心理的虐待では多くの精神的な問題が報告されることはなかった。
- ⑥ 就学時以降の被虐待児の精神症状と虐待の重症度との関係をみると、全体の傾向として、精神的問題は多様なものが中度・重度虐待などの重篤例で頻繁に報告され、虐待の危惧あり・軽度虐待では問題の報告頻度が少なかった。被虐待児の精神的問題（就学）と虐待種別の関係をみると、身体的虐待は「虐待者等におびえる」「感情表現少ない」「怒りが抑えられない」「大人への反抗的態度」「何事にも自信持てない」「自傷行動」「落ち着きの無さ」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」の報告頻度が高くなっていた。ネグレクトは「引きこもり・不登校」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」への報告頻度が高かった。性的虐待は「虐待者におびえる」「虐待を思い出させる場所を避ける」「感情表現少ない」「気持ちの動揺」「自信持てない」「落ち込み」「自傷行動」「引きこもり」など様々な問題の報告頻度が高かった。心理的虐待、特にDV目撃は精神的な問題の報告頻度は全体に低く、「問題ない」とする報告頻度が相対的に多かった。

以上の被虐待児の心身の状態は全体としては、不明やないとされる場合が多く、その評価の難しさがあると思われた。しかし、心身の症状があることと虐待の有無や重症度や種別および生育期の状況の有無と関係しており、子どもの心身の状態をもとに虐待の発見や支援計画を立てることが重要であることが改めて確認された。

5. 対応・援助とその効果

今回の調査で行われていた対応や援助やその結果は以下の通りである。

- ① 今回の事例における新規受理ケースは61.1%であった。他には、前回にも虐待で受理して今回繰り返してあった事例31.8%と、前は別の相談できて、虐待としては今回初めてという事例6.4%であった。
- ② 9割以上のケースで48時間以内の安全確認が行われていた。
- ③ 児童福祉司が、児童と面接しているのは約半数で、主な虐待者と面接は65%で行われていた。児童心理

司については、子どもとの面接は 18.9%であり、虐待者の中で主な虐待者と会っている場合が 55.0%、従たる虐待者のみの場合は 10.0%、虐待者に会えていない場合が 34.3%であった。

- ④ 保護者や子どもに対して、医療機関、生活保護、DV 被害者支援機関、保育所などへつなぐサービスが 24.8%におこなわれていた。要保護対策協議会のケース検討会は 15%に行われていた。
- ⑤ 保護者や子どもにあるいは両者に対してのプログラムとしては、サインズ・オブ・セーフティが 1.1%で最も多く、次に精研式ペアレンティング 0.2%であり、プログラムは行っていないという回答が 3 割を占めており、プログラムへの導入ということはまだ一部の事例に限られていた。
- ⑥ 調査時点では「援助方針を決定し終結している」68.9%、「援助中」22.0%と合わせると多くのケースで援助方針のもとに取り組みがなされていた。援助中のケースでは「継続指導中」68.6%、「児童福祉施設入所措置等」15.0%、「児童福祉司指導中」13.3%と続いた。
- ⑦ 虐待者の受け入れは、「働きかけに応じる」が 60.3%を占め、「当初応じなかったものの現在応じる」6.5%と合わせると 7 割近くが応じる態度を示していたが、十分応じない事例も数%みられた。また、支援後の保護者の状況として、「養育行動や状況が改善」34.1%、「養育行動や状況がある程度改善」42.7%、「養育の状況は変わらない」20.1%、「むしろ悪化」0.5%、「不明」2.7%で、改善する場合は 4 分の 3 であるが残りは十分な変化が確認できていないといえた。
- ⑧ 現在の虐待状況としては、「虐待は止まり、再発可能性が低い」47.0%、「虐待は止まっているが、再発の恐れがある」41.1%と 8 割以上で虐待が停止している。「虐待行為を生じ、危ない状況が続く」が 1.6%で、「不明」が 9.5%であった。この虐待状況について、虐待重症度が関係しており、中度虐待、重度虐待では、虐待が継続している事例は各々 2.4%、8.5%であり、介入してもその継続を止められない場合があることが示されていた。

以上、全体としては、6 割はある程度働きかけに応じ、最初は抵抗していても次第に受け入れ、虐待の停止にいたっている事例が 7 割以上であるとされた。しかし一方で、一旦は虐待が止まっても再発の恐れがある事例が 4 割や、虐待の自覚がなく、介入や支援を受け入れない一群は 1 割程度存在することになる。安全な状況が確保されない場合や調査を更に必要とする場合は一時保護 13%が行われていた。2 割は継続指導や施設入所という形での支援を継続していた。もともと虐待重症度が中度あるいは重度の事例の場合は介入しても虐待が止まらないままである場合が 2.4%、8.5%存在していた。働きかけを受け入れない事例等困難な事例への介入方法の開発が必要であるが、改善が難しかったり再発の可能性のある事例を的確に評価し、虐待的な行動の継続や再発から子どもを保護する体制を組めるようになることが重要であると考えられた。

9. 調査 2 のまとめ

H30 年度のケース分析では、警察などによる心理的虐待（DV 目撃）の通告が増え、主な虐待者が実父である事例が増えるなどの変化があることがわかった。また、189 が始まったことで、虐待者や児童本人などからの通告も増えて、より多様なケースが事例として顕在化していることが確かめられた。さらに調査では、虐待者のリスク要因（乳幼児健診の受診が確認されないこと、精神的問題、経済的困難、不安定な就労、夫婦間不和、育児疲れ、ひとり親家庭、DV、養育者の別居、孤立、劣悪な住環境、頻繁な転居など）や子どものリスク要因（発達障害疑い、問題行動あり、精神発達の遅れ、分離体験予期しない妊娠など）が虐待の重症度や種別などと関係することが改めて確かめられ、これらを的確に評価、支援していくことで虐待の停止や再発防止の可能性が高められると考えられた。現時点での児童相談所での働きかけにより、虐待者の 6 割はある程度これに応じており、虐待の停止に到っているいと判断される事例が 7 割以上であった。しかし一方で、一旦は虐待が止まっても再発の恐れがある事例が 4 割あり、虐待の自覚がなく、介入や支援を受け入れない事例も 1 割程度存在していた。DV 加害者や男性事例の増加は、育児ストレスで抑うつ的になる母親の虐待に対する働きかけの手法とは異なる手法が必要になってくると思われる。こうした困難な事例への行動変容をはかる介入方法の開発とともに、改善が難しかったり再発の可能性のある事例を的確に評価し、虐待的な行動の継続や再発から子どもを保護する体制を組めるようになることが重要であると考えられた。

調査3 一時保護の長期化の実態および要因
に関する調査研究

本調査の概要

【方法】

平成 30 年 6 月 1 日から 9 月 30 日の 4 ヶ月の間に全国の 211 の児童相談所で一時保護が解除された事例のうち一時保護期間が二ヶ月を超えた事例（1 児相あたり最大 5 事例）及び同数の一時保護期間が二ヶ月以内であった事例（解除事例のみ）について、事例の記録に関する調査を依頼した。原則的に、ケース記録の内容を調査票の質問事項に沿ってケースの担当児童福祉司が転記するよう依頼した。調査期間は平成 30 年 11 月～平成 31 年 1 月 25 日であった。こうして得られたデータを、2 つの方法で長期化の要因を分析した。

1) 一時保護期間二ヶ月を基準にアンケート結果を分類して比較（統計的検定を用いる方法）

一時保護期間が二ヶ月を超えたケース（以下、2 ヶ月超過群）と二ヶ月を超えていないケース（以下、2 ヶ月以下群）を比較して、その違いを調べた。その違いが確かなものであるのかどうかについて、統計的検定という方法を用いた（統計的検定については以下の込みを参照下さい）。

2) 自由記述内容の質的分析

「一時保護期間が一ヶ月を超えた理由」および「同二ヶ月を超えた理由」に関する自由記述について、「質的分析」という方法を用いた。

【結果と考察】

2 ヶ月超過群と 2 ヶ月以下群の違いを調べた結果、確実な違い（統計的検討で有意差があった所見）は以下のものであった。

質問項目	違いによる検証の結果
男女	差はない
年齢	2ヶ月超過群<2ヶ月以下群
過去の一時保護歴	差はない
一時保護時に行われた相談	男児：差はない 女児：「養護相談（虐待相談）」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護期間	2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護の経緯	男児：差はない 女児：「警察からの身柄付き通告」で2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 「児童相談所長の判断による一時保護」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「その他」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護理由	男児：「子どもの安全確保のため」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「調査を必要としたため」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 女児：「子どもの安全確保のため」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「調査を必要としたため」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「短期入所指導のため」で2ヶ月超過群<2ヶ月以下群
最初の一時保護場所	差はない
一時保護委託先	「医療機関」への委託：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護の場所の変更	変更のあった事例の割合：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
最後に一時保護されていた場所	差はない
保護者の同意	保護者が一時保護に同意している場合：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 保護者が当初同意しなかったが途中で同意した場合：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群

一時保護解除後の援助方針	「助言指導」・「継続指導」となったケース：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 施設入所措置・医療へ委託となったケース：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
児童の疾患・障害等の状況	「未熟児、低出生体重児」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「知的障害」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「身体疾患（定期通院が必要なもの）」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護開始時の学校や地域における児童の行動、状況	差はない
一時保護前の生活場所	差はない
家族構成	差はない
主たる養育者の心身の状況	主たる養育者に統合失調症があること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 女兒の場合、主たる養育者に感情障害があること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
保護者の虐待の有無	「ネグレクト（同居人による虐待の放置以外のもの）」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 女兒の場合：「性的虐待」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護開始時の家族の状況	「経済的困難」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「ステップファミリー」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「親族・近隣・友人等からの孤立」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「狭いまたは劣悪な住居環境」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「頻繁な転居」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「現在・過去に被虐待児のきょうだいが虐待を受けている」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「精神障害またはその疑いのある家族がいた」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「家族に自殺（未遂）者がいた」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
里親等・施設から保護された事例の状況	差はない

一時保護後の対応経過の比較で、確実な違い（統計的検討で有意差があった所見）は以下のものであった。

項目	違いによる検証の結果
一時保護の相談を受けてから一時保護するまでの日数	差はない
一時保護後、担当児童福祉司による当該児童との最初の面接までの日数	3日以内のもの：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上のもの：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護中の担当福祉司との当該児童の面接回数	2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護後、担当児童福祉司による保護者との最初の面接までの日数	差はない
一時保護中の担当福祉司との保護者との面接回数	2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護後、担当児童心理司による当該児童との最初の面接までの日数	3日以内のもの：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上のもの：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護中の担当心理司との当該児童の面接回数	2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護から援助方針会議で方針を決定するまでの日数	1ヶ月未満であること：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上となること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
援助方針に対する児童の同意	差はない
援助方針に対する児童の同意に要した期間	1ヶ月未満であること：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上となること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
保護者の同意	保護者の同意があること：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群
援助方針に対する保護者の同意に要した期間	1ヶ月未満であること：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上となること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群

一時保護解除後の生活場所を巡る状況で、確実な違い（統計的検討で有意差があった所見）は以下のものであった。

項目	違いによる検証の結果
一時保護解除後の生活場所の変化	変化あり：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
家庭復帰した事例におけるカンファレンス実施	実施した割合：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 実施回数：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
家庭復帰した事例における関係機関への説明	説明があった：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 関係機関の理解：差はなし
里親等委託および施設入所した事例	里親等への委託打診家庭数：差はなし 複数施設に入所を打診：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群

長期化した理由について、自由記載をもとに内容分析をしてわかったのは以下であった。

- ・ 援助方針の決定までの時間、保護者の環境整備にかける時間、施設入所に保護者の同意得るための時間、施設入所の施設側の事由によって必要となる時間、同意を得るための時間の5つの時間が一時保護期間の長期化に関与していると考えられている。
- ・ 2ヶ月超過群では、施設入所等の生活場所の変化に纏わる理由が多く挙げられていた。児童が今後の進路・生活についての不安・戸惑いを感じていること（例：転校、保護者が施設入所を拒否していること等）や児童の疾患や障害に関連した理由（例：児童の入院・通院等の加療に時間を要する等）。
- ・ 保護者が面接や面会を受け入れることに対する困難

以上のように二ヶ月を超える長期化には児童や養育者の特徴や対応プロセスの違いなどが複雑に関係していることが明らかになった。長期化する場合には、虐待状況（ネグレクトや性虐待等の割合が多く、虐待相談をしている）、子どもや親に心身の問題がある、深刻な家族状況（不安定な就労、ステップファミリー、社会的孤立、悪い住環境、頻回な転居、他のきょうだいの虐待被害、家族に精神障害や自殺行動のある人がいる）など子育てに不利な状況を生じていた。保護の開始や対応でも保護者の同意が難しいことが多く、そうしたプロセスも影響して、長期化してしまうことが示唆された。子どものリスク要因の解決をはかり、安全を確実に はかることや、決定プロセスを丁寧に行うという意味では、慎重な判断をすることに意味があり、長期することがすべて問題とは言えないと思われた。その一方で一時保護は本来の安定した生活環境ではないので、一時保護所から次につなぐ環境へのつなぎを行うソーシャルワークの機能を強化すること、時間のかかるリスク要因の改善をはかる長期プランと、とりあえず少しでもよい生活環境を提供する短期プランについて早期にバランスよく判断できるような仕組みが必要であると思われた。

調査 3：一時保護の長期化の実態および要因に関する調査研究

1. 調査の目的

全国児童相談所では児童虐待などの理由で一時保護を行い、児童の安全を確保したり、状況を調査したりして、その後に家庭復帰や児童福祉施設や里親などの社会的養護に橋渡しをする。その橋渡しをする機能を果たす機関として長くても二ヶ月程度の一時保護期間が想定されているが、実際にはそれ以上長い期間の利用が行われる事例があることが知られている。それぞれの事例の状況があり、単純に長期化がよくないと断ずることはできないと思われるが、本来目指す機能とはことになっており、一時保護という仮の養育環境で長期に過ごすことは児童にとって良くない影響を及ぼす可能性があるといえる。そこで本調査では、一時保護された事例の中で二ヶ月を超えた長期化した群と、二ヶ月以内の本来の保護期間の群を比較して、長期間に保護されることに影響する要因（一時保護時の親子の個体要因及び環境要因）を明らかにすることを目的とする。それによって長期化を防ぎ、一時保護を適切に運用するための指針を得ることを目指す。

2. 調査の方法

1.1. 調査実施機関

本調査は、平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業の国庫補助協議の助成を受け、筑波大学医学医療系社会精神保健学准教授森田展彰が実施する。なお、調査内容の検討、調査結果の分析、まとめについては、調査検討委員会を設置して行った。

2.1. 調査対象

全国 211 の児童相談所

2.2. 調査期間

平成 30 年 11 月 22 日～平成 31 年 1 月 25 日

2.3. 調査内容

一時保護ケースやその対応の現状、特に長期化の実態や要因の調査

2.4. 調査項目

別添した、「調査票 3-A（一時保護解除件数調査）」および「調査票 3-B（一時保護の長期化の実態調査）」を用いた。

2.5. 調査方法

平成 30 年 6 月 1 日から 9 月 30 日の 4 ヶ月の間に全国の児童相談所で一時保護が解除された事例のうち一時保護期間が二ヶ月を超えた事例（1 児相あたり最大 5 事例）及び同数の一時保護期間が二ヶ月以下であった

事例（解除事例のみ）について、事例の記録に関する調査を依頼した。原則的に、ケース記録の内容を調査票の質問事項に沿ってケースの担当児童福祉司が転記するよう依頼した。

2.6. 分析方法

(1) 群間比較による分析

一時保護期間が二ヶ月を超えたケース（以下、2ヶ月超過群）と二ヶ月を超えていないケース（以下、2ヶ月以下群）を比較して、その違いを調べた。その違いが確かなものであるのかどうかについて、統計的検定という方法を用いた（統計的検定については以下の込みを参照下さい）。

★統計的検定の意味や必要性【補足説明】

統計的検定になじみのない方いると思いますので、その意味や必要性を説明します。例えば、AさんとBさんの2人がじゃんけんをして、Aさんが10回中6回勝ったとすると、Aさんの勝率は6割で、Bさんの勝率は4割になる。その場合AさんはBさんよりじゃんけんが強いとっていいかどうかを考えると、10回程度やって2勝多いというようなことは偶然におきることもあるのではっきりしないということになります。しかし、100回じゃんけんをしてAさんが60勝、Bさんが40勝すればAさんの方が勝つということは10回の時よりは確かになります。このような比較を行うときに、その違いが確かかどうかは、単純にその勝率のような割合の数字だけで決まらず、それを行った回数などの条件でも変わっていくものです。統計的検定というのは統計の手法を用いてその違いの確からしさを調べる方法です。「統計的に有意」というのは比較している2つの群の違いが統計のやり方である程度確実であることを示されたということの意味をしています。今回は2ヶ月超過群と2ヶ月以下群の2つの群でいろいろな質問への回答の違い、例えば男女比や年齢などを統計的検定とで確かめるわけです。統計的検定にもいくつかの方法があり、2つの群の割合(%)などを比べる場合には「 χ^2 乗検定（カイ2ジョウケンテイとよみます）」を使うことが多いです。そして、平均値を比べる時には「t検定（ティーケンテイとよみます）」をつかいます。聞きなれないでしょうが、あくまで統計的検定という違いの確かさを明確にする方法だと考えていただき、「有意」と確かめられた場合は確実な差があったという意味だと考えていただければと思います。」

(2) 自由記述内容の質的分析

「児童および保護者の同意を得るのに一ヶ月以上を要した理由」および「一時保護期間が二ヶ月を超えた理由」に関する自由記述について、「質的分析」という方法を用いた。質的分析は、自由に書かれた記述や発話などの内容についてまとめる方法で、「はい—いいえ」などの決まった回答を書かせてその数を数え上げる量を中心とした「量的分析」と対比されるものである。その内容について類似したテーマや内容を含むものをまとめるなどして、分類を行い、それぞれのまとまったものに名前を付けていく。具体的には、まず各記載内容を対象者・場面・状況など、記載内容のもっとも中心となる語句をとりだしそれを中心に内容を分類した。分類した内容についてもっとも適切と思われる内容づけでラベル付けした。この結果を類似するラベル同志でカ

テグリーとしてとりまとめ、それぞれに名称をつけた。この生成された各カテゴリーについて、さらに類似するカテゴリーごとにカテゴリーグループを作りだした。

3. 調査結果

回収数

調査票 3-A は 200 児相より回答を得た（回収率 94.8%）。調査票 3-B は 181 児相より回答を得た（回収率 85.8%）。回収されたケースは 1326 件であった。1 児相あたりの平均ケース数は 7.3（標準偏差 3.3）だった。

3.1. 全国児童相談所の一時保護解除件数 調査票 3-A

平成 30 年 6 月 1 日から 9 月 30 日までの間に、各児童相談所が一時保護を解除した事例数を尋ねた。

一時保護解除数	12,400 件
そのうち、一時保護期間が 2 ヶ月を超えた事例数	1,652 件

表 1 に全国における平均値を示し、表 3 に自治体ごとの全体の解除件数と二ヶ月を超えた解除件数を示した。自治体名は示さず二ヶ月を超えた解除件数の割合が高いものから順に番号で示した。

表 1 全国児童相談所における 4 ヶ月間の一時保護解除件数の平均値 (n = 200)

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	合計
一時保護解除件数 (全体)	60.2	51.9	1	328	12040
一時保護解除件数 (二ヶ月超)	8.3	10.9	0	73	1652

全国の児童相談所が、調査対象となった 4 か月間に一時保護を解除した件数のうち、二ヶ月を超えて解除した件数の割合は 13.3% だった。児童相談所設置自治体ごとに集計してみると、一時保護解除数、二ヶ月を超えた解除数ともに、自治体間格差が大きい。また、一時保護解除数に対する二ヶ月を超えて解除した件数の割合も、0% から 41.5% までと大きな開きがあった。必ずしも、一時保護解除件数が多い自治体で二ヶ月を超えて解除した件数割合が高いとも、逆に一時保護解除件数が少ない自治体で二ヶ月を超えて解除した件数割合が小さいとも言えなかった。

3.2. 対象となった児童の特徴

(1) 性別 Q1

性別についての無回答が 8 件あったため、有効回答数は 1318 件であった。性別ごとの人数を表 2 に示した。性別にみると、男子が女子を上回った。国勢調査による 2018 年 8 月 1 日現在の 20 歳未満人口に占める男子の人口割合は 51.2% であり、ほぼ人口構成の男女比に近いと言えよう。

表 2 性別の人数

性別	人数	%
男	685	52.0
女	633	48.0
合計	1318	100.0

調査 3

表 3 各自治体における一時保護解除件数に占める二ヶ月超えの解除件数の割合

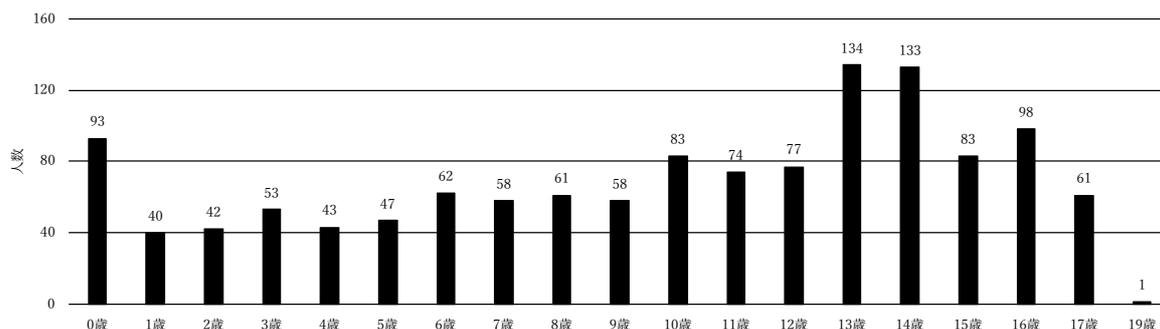
自治体	解除件数	二ヶ月超解除件数	割合	自治体	解除件数	二ヶ月超解除件数	割合
1	41	17	41.50%	31	152	16	10.50%
2	136	42	30.90%	32	108	10	9.30%
3	572	172	30.10%	33	360	33	9.20%
4	26	7	26.90%	34	262	23	8.80%
5	67	17	25.40%	35	112	9	8.00%
6	412	104	25.20%	36	25	2	8.00%
7	814	202	24.80%	37	121	9	7.40%
8	49	11	22.40%	38	298	22	7.40%
9	59	12	20.30%	39	117	8	6.80%
10	328	64	19.50%	40	60	4	6.70%
11	487	91	18.70%	41	289	17	5.90%
12	102	19	18.60%	42	247	14	5.70%
13	153	28	18.30%	43	75	4	5.30%
14	11	2	18.20%	44	346	18	5.20%
15	82	14	17.10%	45	103	5	4.90%
16	65	11	16.90%	46	124	6	4.80%
17	722	120	16.60%	47	106	5	4.70%
18	805	131	16.30%	48	128	6	4.70%
19	157	25	15.90%	49	188	8	4.30%
20	98	14	14.30%	50	72	3	4.20%
21	42	6	14.30%	51	149	6	4.00%
22	140	20	14.30%	52	119	4	3.40%
23	81	11	13.60%	53	94	3	3.20%
24	889	116	13.00%	54	161	5	3.10%
25	323	38	11.80%	55	278	4	1.40%
26	130	15	11.50%	56	84	1	1.20%
27	158	18	11.40%	57	159	0	0.00%
28	118	13	11.00%	58	9	0	0.00%
29	467	50	10.70%				
30	160	17	10.60%	全体	12040	1652	13.70%

(2) 年齢 Q2

年齢についての無回答が 25 件あったため、有効回答数は 1301 件であった。

図 2 に各年齢にあたる子どもの人数の分布を示した。平均年齢は 9.6（標準偏差 5.16）歳であり、一番年少の者は 0 歳、一番年長の者は 19 歳であった。年齢分布では、13、14 歳がほぼ同数で最も多く、次に 16 歳、0 歳の順であった。中学生年齢が多く、さまざまな行動上の問題が表れているのではないと思われる。16 歳は中卒後に本人自身の課題や家庭環境上の不適応が増加しているのかもしれない。また、0 歳は家庭が養育上の課題を抱えやすく多くなるものと思われる。

図 1 対象となった児童全体の年齢分布



(3) 対象となった児童の2群への割り当て **Q6 Q1**

回収されたケースを一時保護期間が「二ヶ月を超える」2ヶ月超過群と「二ヶ月を超えない」2ヶ月以下群に分類した。分類は、以下に手順に従った。①一時保護日数62日以上は2ヶ月超過群として群分け、59日以下は2ヶ月以下群として群分け、②60～61日については、各群同数の指示に従ってケースが回答されていると仮定して群分け、③日数が不明な場合は②とQ33への記入の有無を参照した。その結果、一時保護日数が60日であった11ケースのうち2ヶ月超過群となったのが6件、2ヶ月以下群となったのが5件、61日であった14ケースのうち2ヶ月超過群8件、2ヶ月以下群6件となった。表4に群と性別のクロス表を示した。2ヶ月超過群と2ヶ月以下群の間で男女の割合に差はないという結果であった (χ^2 検定による結果)。

表4 群と性別のクロス表

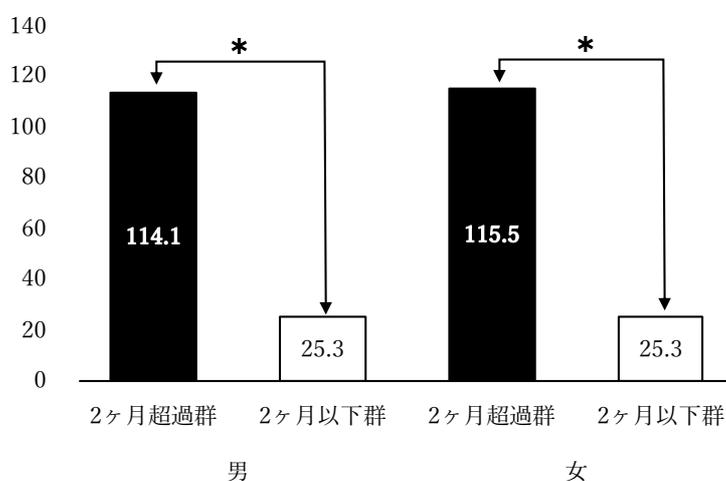
		男	女	不明	合計
2ヶ月超過群	n	340	304	6	650
	%	52.3	46.8	0.9	100.0
2ヶ月以下群	n	345	329	2	676
	%	51.0	48.7	0.3	100.0
合計	n	685	633	8	1326
	%	51.7	47.7	0.6	100.0

割り当てた2ヶ月超過群と2ヶ月以下群の一時保護期間に差があるかを検証した。一時保護期間の平均値と標準偏差を表5に示した。群間で確かに一時保護期間が異なることが確かめられた(図2)。

表5 群ごとの平均一時保護期間と標準偏差

	人数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
2ヶ月超過群	629	114.3	75.3	60	616
2ヶ月以下群	663	25.3	17.4	1	61

図2 一時保護期間の差



*は、t検定で有意差(「統計的検定の意味や必要性」278ページ参照)が見られた項目

(4) 性別および群の2要因による年齢の比較 **Q1 Q2**

性別、群別の年齢分布を図3に示した。表6は性別と群別に平均年齢と標準偏差を示したものである。女兒は男児よりも年齢が高く、2ヶ月超過群は2ヶ月以下群よりも年齢が低かった(図4)。

表 6 性別および群ごとの平均年齢と標準偏差

群分け		平均値	標準偏差	人数
2ヶ月超過群	男	8.7	5.23	335
	女	10.1	5.17	298
	全体	9.3	5.25	633
2ヶ月以下群	男	9.3	4.94	340
	女	10.5	5.13	322
	全体	9.9	5.07	662
全体	男	9.0	5.10	675
	女	10.3	5.15	620
	全体	9.6	5.16	1295

図 3.1 群別の年齢分布 (男)

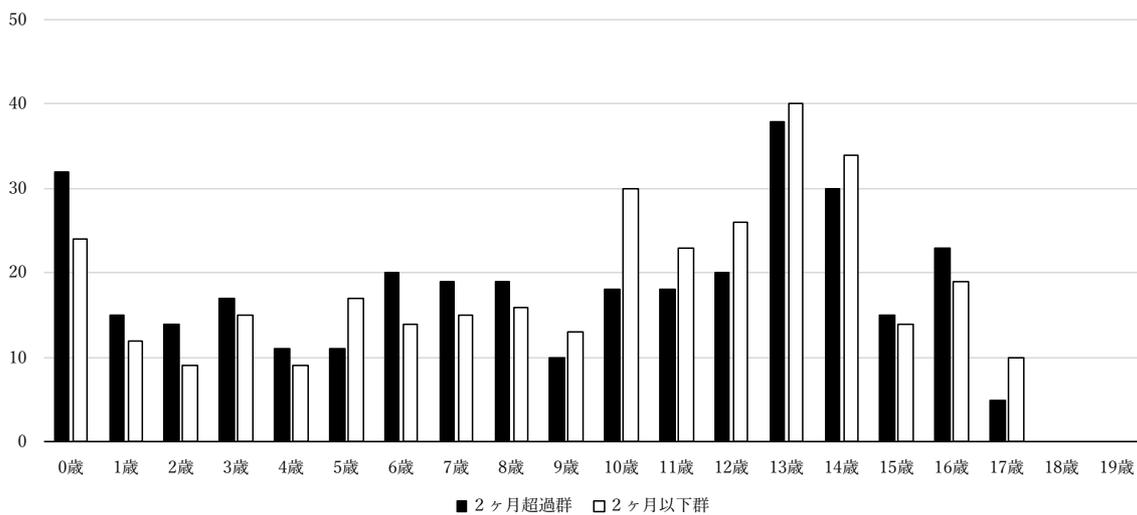
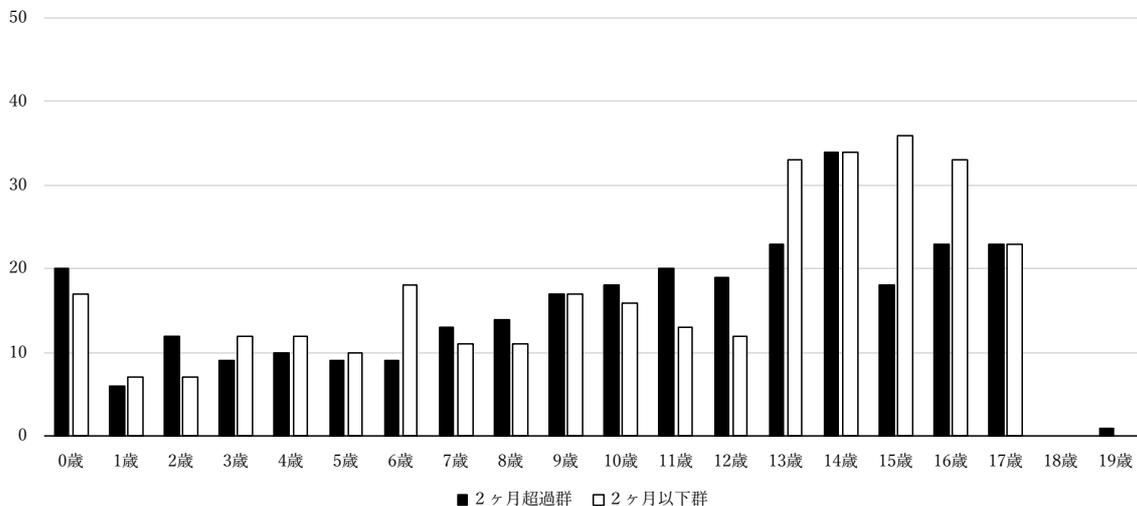


図 3.2 群別の年齢分布 (女)



調査 3

3.3. 群間比較

ここでは一時保護期間が 2 ヶ月超過群の特徴を明らかにするために、質問項目ごとに 2 ヶ月以下群と比較した。「群」と言った場合は、2 ヶ月超過群と 2 ヶ月以下群を指す。性別ごとに検証を行った場合は、() 内に性別を付した。

(A) 2 群における事例の特徴の比較

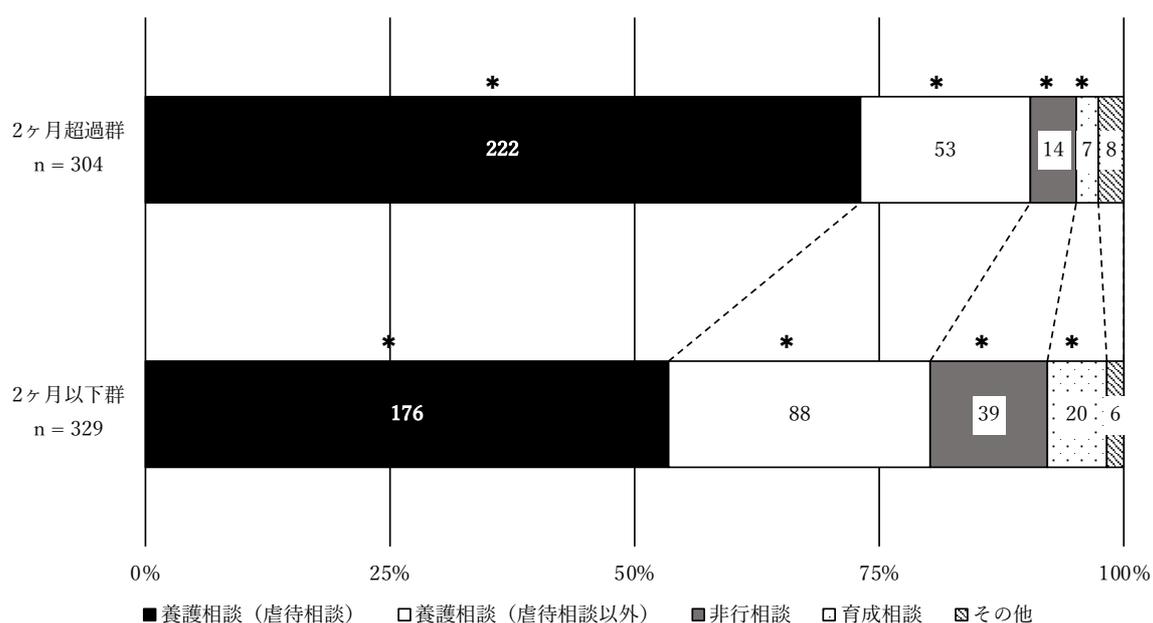
質問項目	違いによる検証の結果
男女	差はない
年齢	2ヶ月超過群<2ヶ月以下群
過去の一時保護歴	差はない
一時保護時に行われた相談	男児：差はない 女児：「養護相談（虐待相談）」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護期間	2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護の経緯	男児：差はない 女児：「警察からの身柄付き通告」で2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 「児童相談所長の判断による一時保護」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「その他」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護理由	男児：「子どもの安全確保のため」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「調査を必要としたため」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 女児：「子どもの安全確保のため」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「調査を必要としたため」で2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「短期入所指導のため」で2ヶ月超過群<2ヶ月以下群
最初の一時的保護場所	差はない
一時保護委託先	「医療機関」への委託：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護の場所の変更	変更のあった事例の割合：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
最後に一時保護されていた場所	差はない
保護者の同意	保護者が一時保護に同意している場合：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 保護者が当初同意してなかったが途中で同意した場合：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護解除後の援助方針	「助言指導」・「継続指導」となったケース：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 施設入所措置・医療へ委託となったケース：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
児童の疾患・障害等の状況	「未熟児、低出生体重児」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「知的障害」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「身体疾患（定期通院が必要なもの）」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護開始時の学校や地域における児童の行動、状況	差はない
一時保護前の生活場所	差はない
家族構成	差はない
主たる養育者の心身の状況	主たる養育者に統合失調症があること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 女児の場合、主たる養育者に感情障害があること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
保護者の虐待の有無	「ネグレクト（同居人による虐待の放置以外のもの）」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 女児の場合：「性的虐待」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護開始時の家族の状況	「経済的困難」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「ステップファミリー」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「親族・近隣・友人等からの孤立」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「狭いまたは劣悪な住居環境」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「頻繁な転居」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「現在・過去に被虐待児のきょうだいが虐待を受けている」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「精神障害またはその疑いのある家族がいた」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 「家族に自殺（未遂）者がいた」：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
里親等・施設から保護された事例の状況	差はない
この表で差があったとしているのは、統計的検定で有意差が確認されたものを意味する。	

以下に有意差を認めた項目について、詳細を示した。有意差を認めなかった項目や統計的な検定ができなかった項目についても適宜示した。

(1) 相談種別 (女) Q4

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で相談種別に差があるか検証したところ明らかな違いが見られた(図5)。女子では一時保護時の相談種別が虐待相談であると一時保護期間が二ヶ月を超える傾向があり、養護相談・育成相談・非行相談では二ヶ月を超えない傾向がある。虐待相談によって一時保護された女兒では長期化が見られていると言える。男子では有意差はなく、こうした傾向は見られなかった。

図5 一時保護時の相談種別 (女)

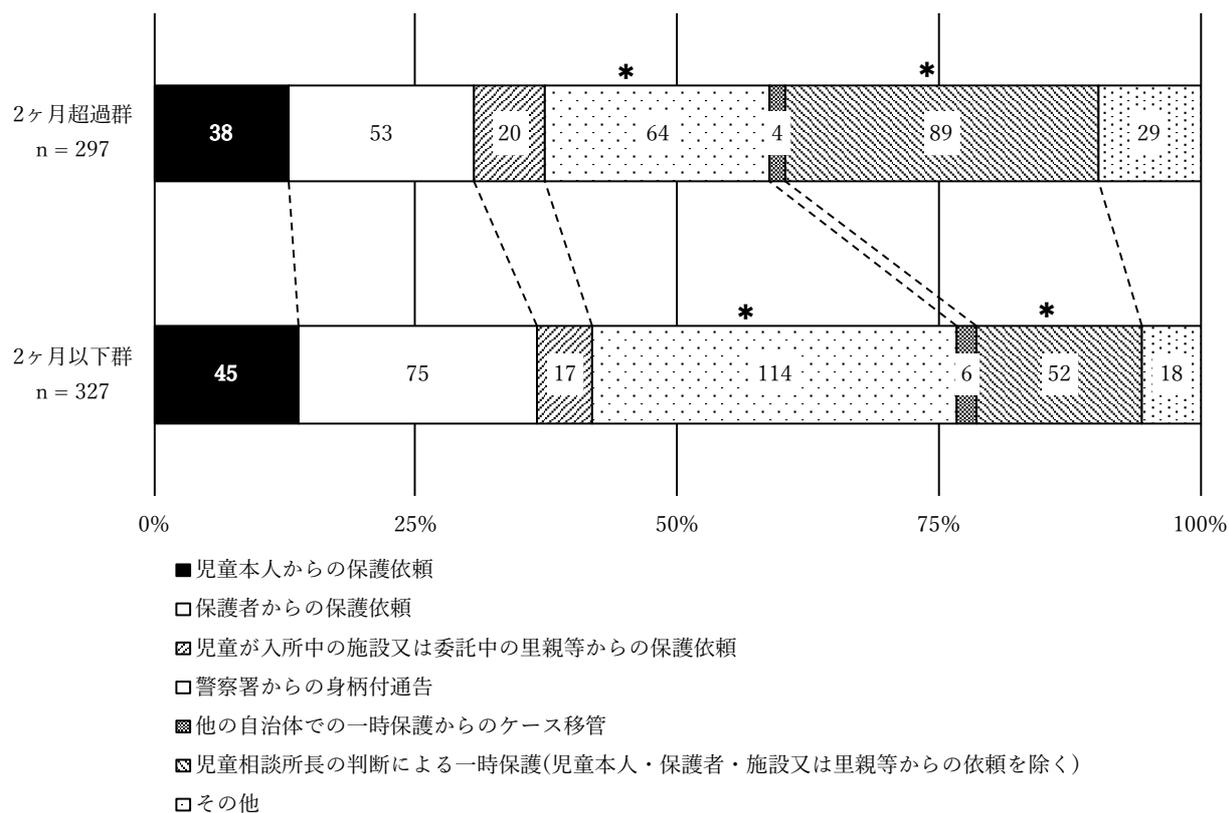


*は、 χ^2 検定で有意差(「統計的検定の意味や必要性」278ページ参照)が見られた項目
 グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(2) 一時保護の経緯 (女) Q7

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護の経緯に差があるか検証したところ明らかな違いが見られた(図6)。警察署からの身柄付通告で保護された女兒ケースでは一時保護期間が2ヶ月を超える傾向にある。また、保護依頼によって一時保護されたケースでは一時保護期間が2ヶ月を超えることと関係は見られなかったが、児童相談所長の判断による一時保護では一時保護期間が2ヶ月を超える傾向にあった。

図6 一時保護の経緯 女



*は、 χ^2 検定で有意差(「統計的検定の意味や必要性」278ページ参照)が見られた項目
グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(3) 一時保護理由 Q8

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護理由に差があるかを検証した。結果を図7に示した。男児の一時保護の理由が「子どもの安全確保のため」や「調査を必要としたため」であると、一時保護期間が2ヶ月を超える傾向がある。女兒は、男児と同様の傾向に加えて、短期入所指導が保護理由であると、保護期間は2ヶ月を超えない傾向も見られた。

図 7.1 一時保護理由（男）

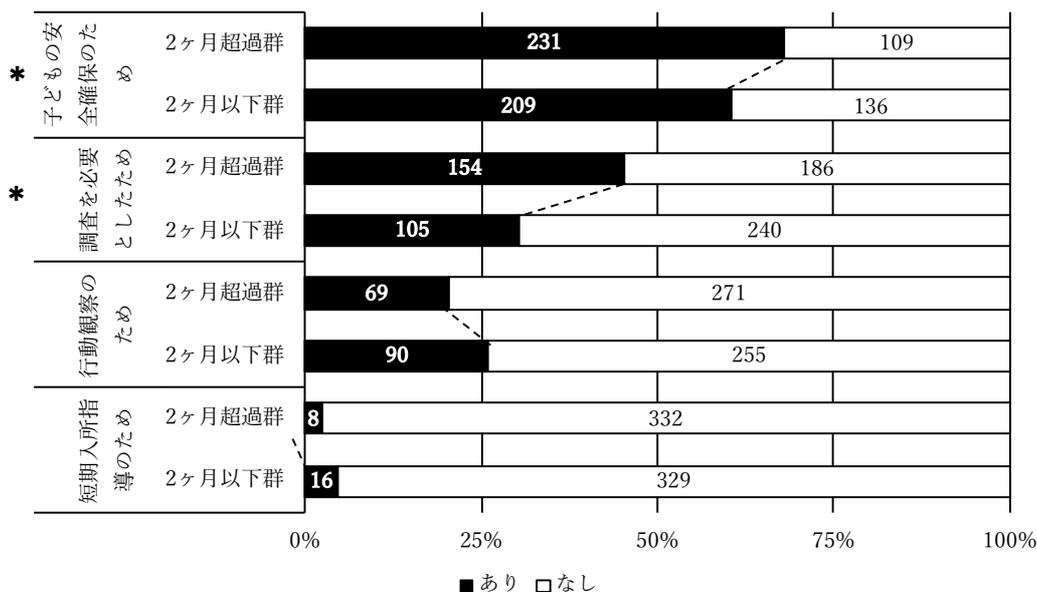
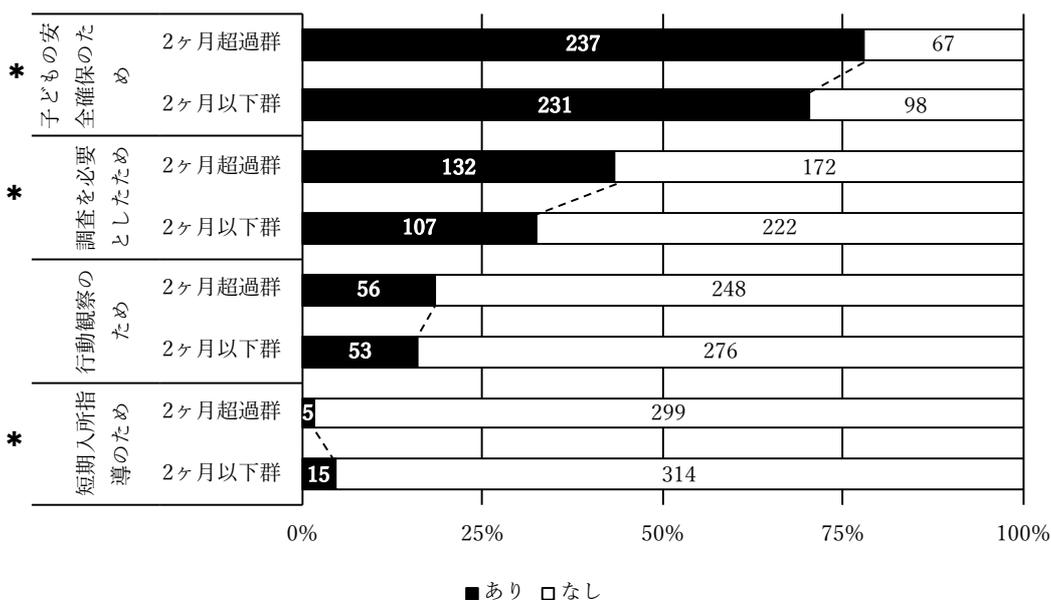


図 7.2 一時保護理由（女）

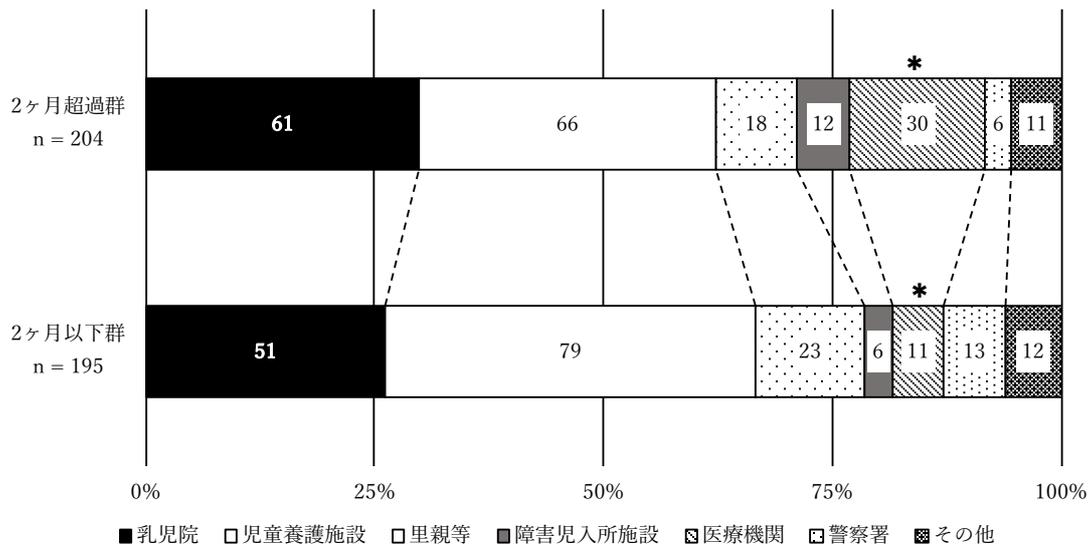


*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目
グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(4) 一時保護委託先 Q9

Q9-1 が「3. 一時保護委託先」であったケースについて検証した。自立支援施設と児童心理治療施設は、セル数が4以下だったためその他と合わせた。有効回答数は、399 ケースだった。2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護委託先に違いがあるか検証した結果を図8に示した。一時保護委託される際に、医療機関が選ばれているケースは、その後の一時保護期間が二ヶ月を超える傾向にある。

図8 一時保護委託先

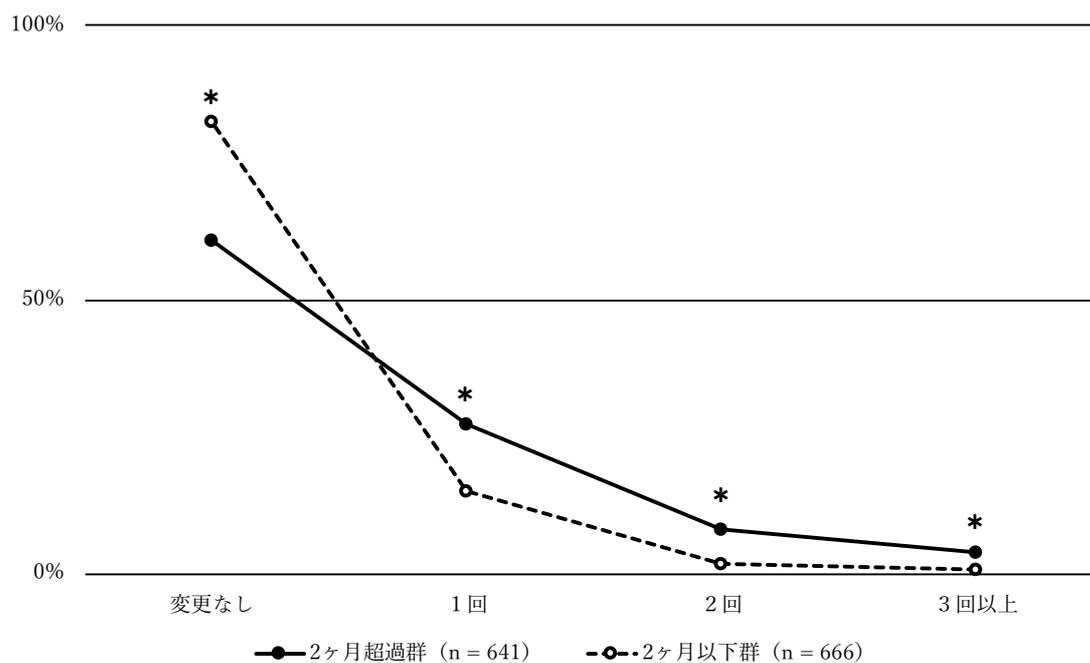


*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目
 グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(5) 保護先の変更回数 Q10

Q10-1 と 10-2 を合わせて分析を行なった。具体的には、10-1 において一時保護先の変更なしと回答した場合、10-2 を「0」として分析した。性差が認められなかったため合わせて分析した。有効回答数は、1301 ケースだった。2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護先の変更回数に違いがあるか検証した結果を図9に示した。一時保護場所が1度以上変更したケースの場合、一時保護期間が二ヶ月を超える傾向にある。

図9 群別の一時保護場所変更回数の割合

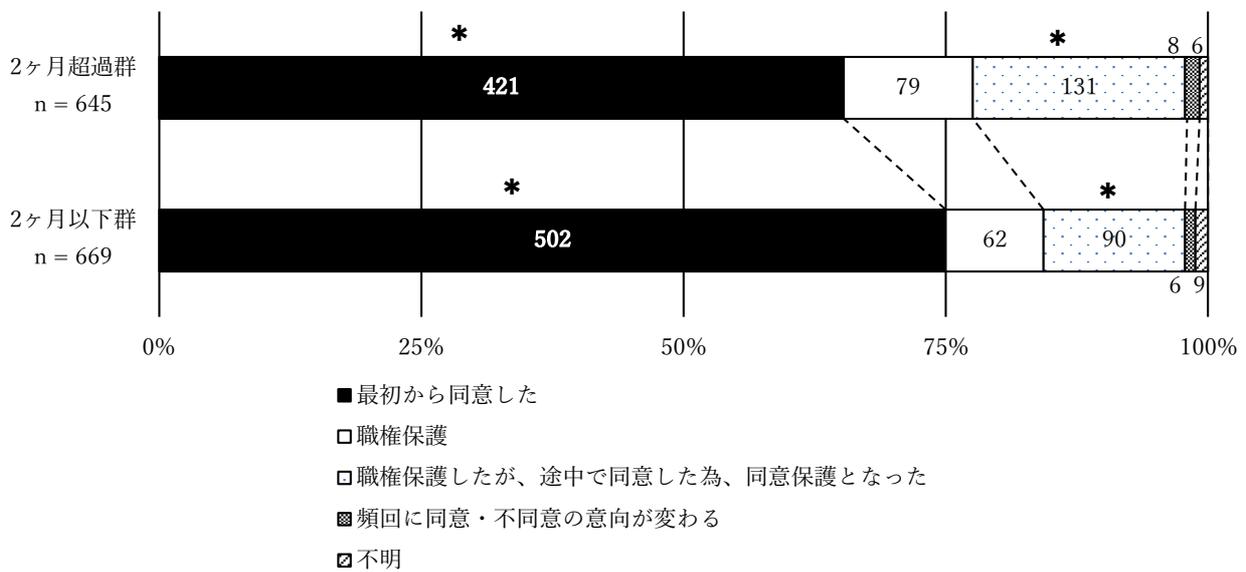


*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目

(6) 保護者の同意 Q11

「同意したが、途中でひるがえした為、職権保護となった」が5サンプルと少なかつたため、「職権保護」へ統合した。性別に有意差がなかつたため合わせて分析した。結果的に有効回答数は、1314 だった。2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で保護者の同意に違いがあるか検証した結果を図10に示した。ケースワークの当初より保護者が一時保護に同意している場合、一時保護期間が二ヶ月を超えない傾向がある。一方で、当初同意していなかつた保護者が途中から同意するようなケースでは、一時保護期間が二ヶ月を超える傾向にある。一貫して不同意のケースでは、一時保護期間の長期化との間に関係は見られなかつた。

図10 一時保護に対する保護者の同意

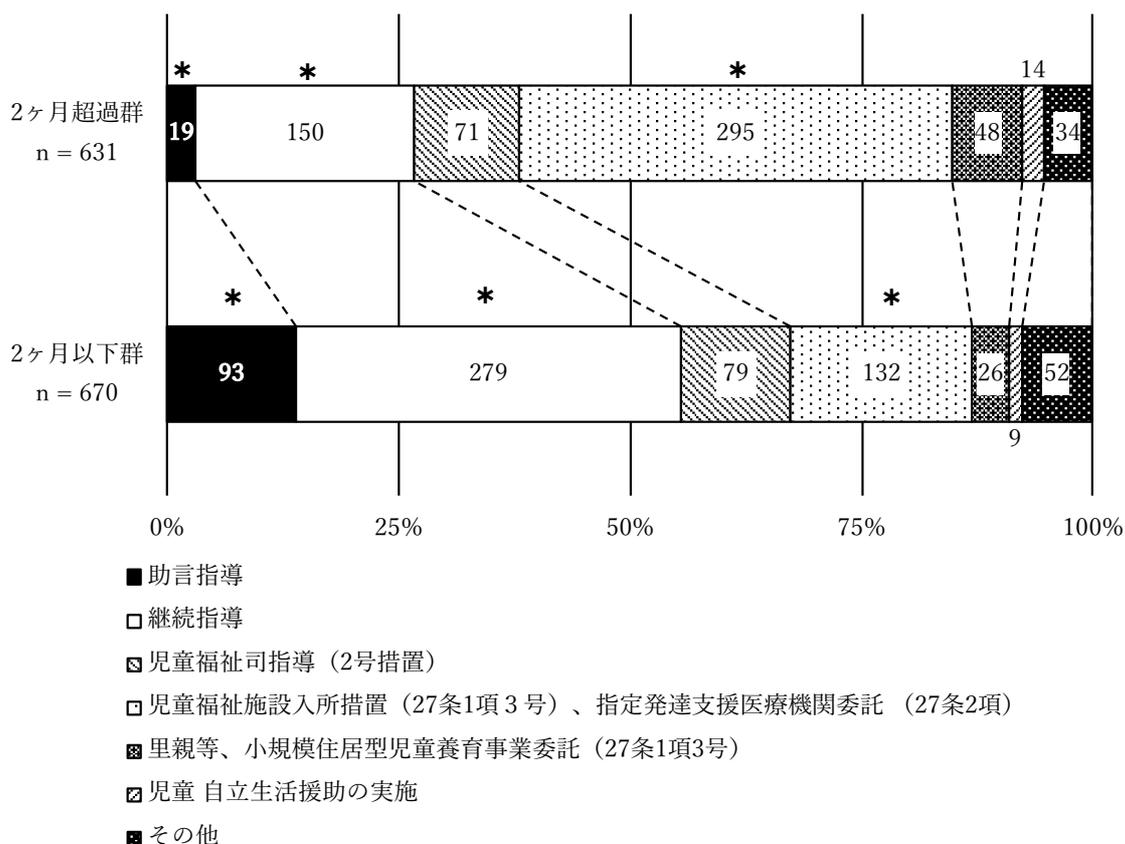


*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目
 グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(7) 一時保護解除後の援助方針 Q12

有効回答数は、1301 ケース（2ヶ月超過群 631、2ヶ月以下群 670）だった。今回の検証では、人数が少なかったため一時保護解除後の援助方針のいくつかを「その他」にまとめている。その上で、2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護委託先に違いがあるか検証した結果を図 11 に示した。助言指導や継続指導となったケースでは一時保護期間が2ヶ月を超えていない傾向があった。一方で、施設入所や医療へと委託したケースでは2ヶ月を超えている傾向があった。

図 11 一時保護解除時の援助方針

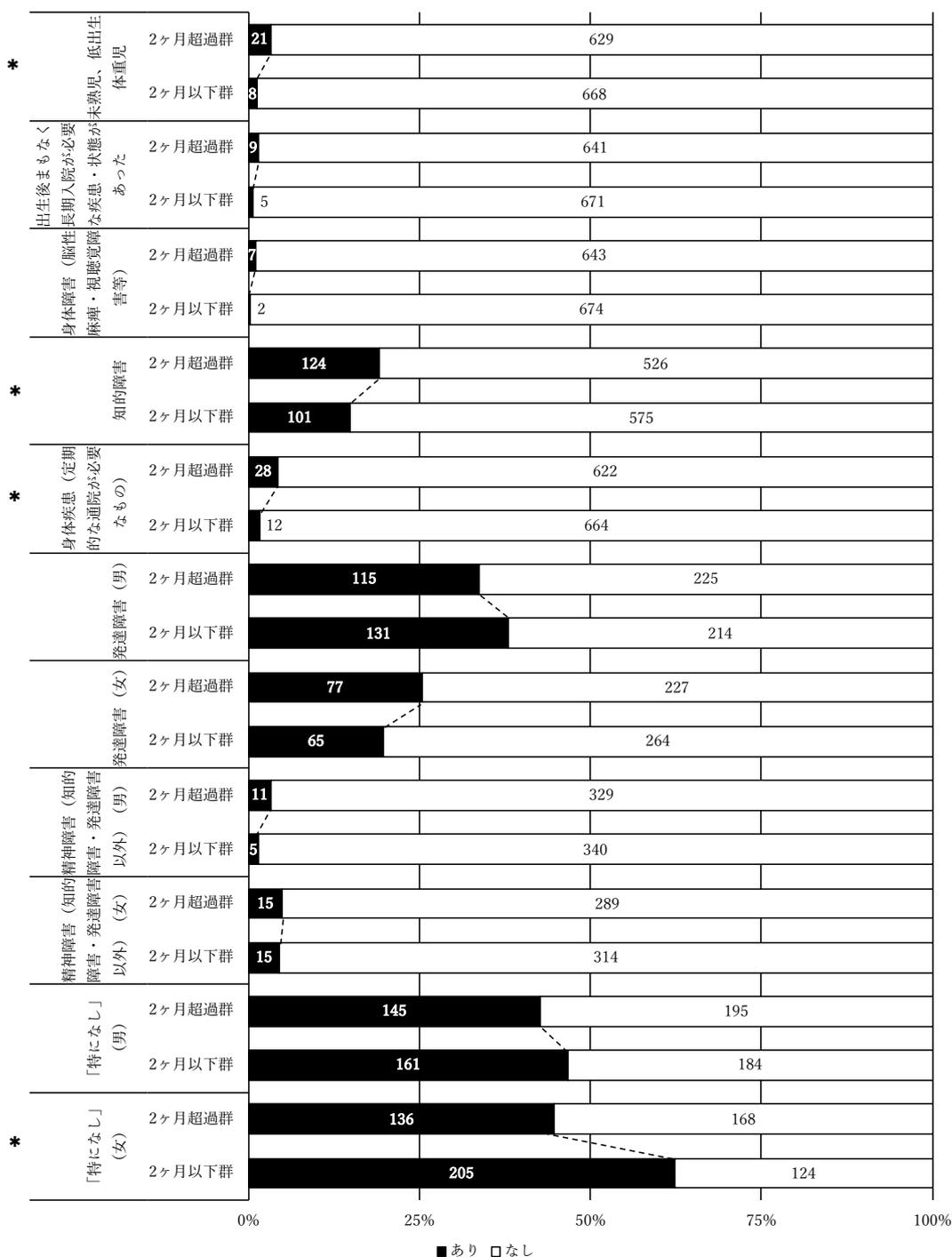


*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目
 グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(8) 一時保護された児童の疾患・障害等の状況 Q13

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護された児童の疾患・障害等の状況に違いがあるか検証した結果を図12に示した。児童の疾患・障害等の状況で、一時保護期間が二ヶ月を超える傾向にあるのは、「未熟児、低出生体重児」「知的障害」「定期通院が必要な身体疾患」であった。こうした疾患・障害が二ヶ月を超える理由については、本調査からはわからなかった。

図12 一時保護された児童の疾患・障害等の状況

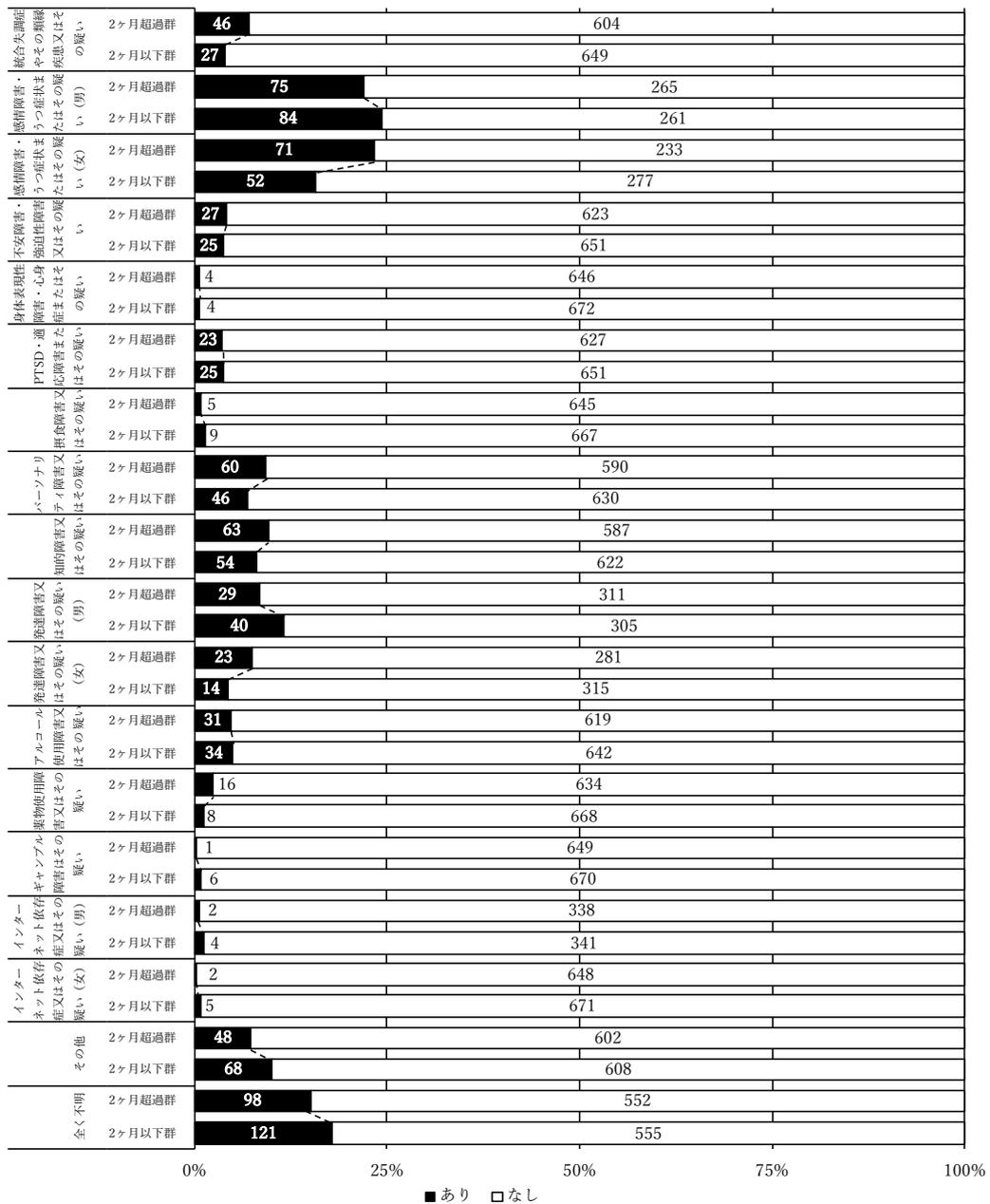


*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目
グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(9) 主たる養育者の心身の状況 Q18

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で主たる養育者の心身の状況に違いがあるか検証した結果を図13に示した。主たる養育者の方に「統合失調症やその類縁疾患又はその疑い」および「感情障害・うつ症状またはその疑い(女)」が見られることは、子どもの一時保護期間が2ヶ月を超えるという状態と関係していることが示された。これは、因果関係があることを意味してはいない。むしろ、こうした精神疾患を持ちながら子育てをする養育者に対する社会的支援の不足や児童福祉を専門とする児相職員による支援の限界が現れているのかもしれない。そうした場合、地域での支援体制の強化、大人の精神疾患を専門とする機関による児相の後方支援が必要であると考えられる。

図13 養育者の心身の状況

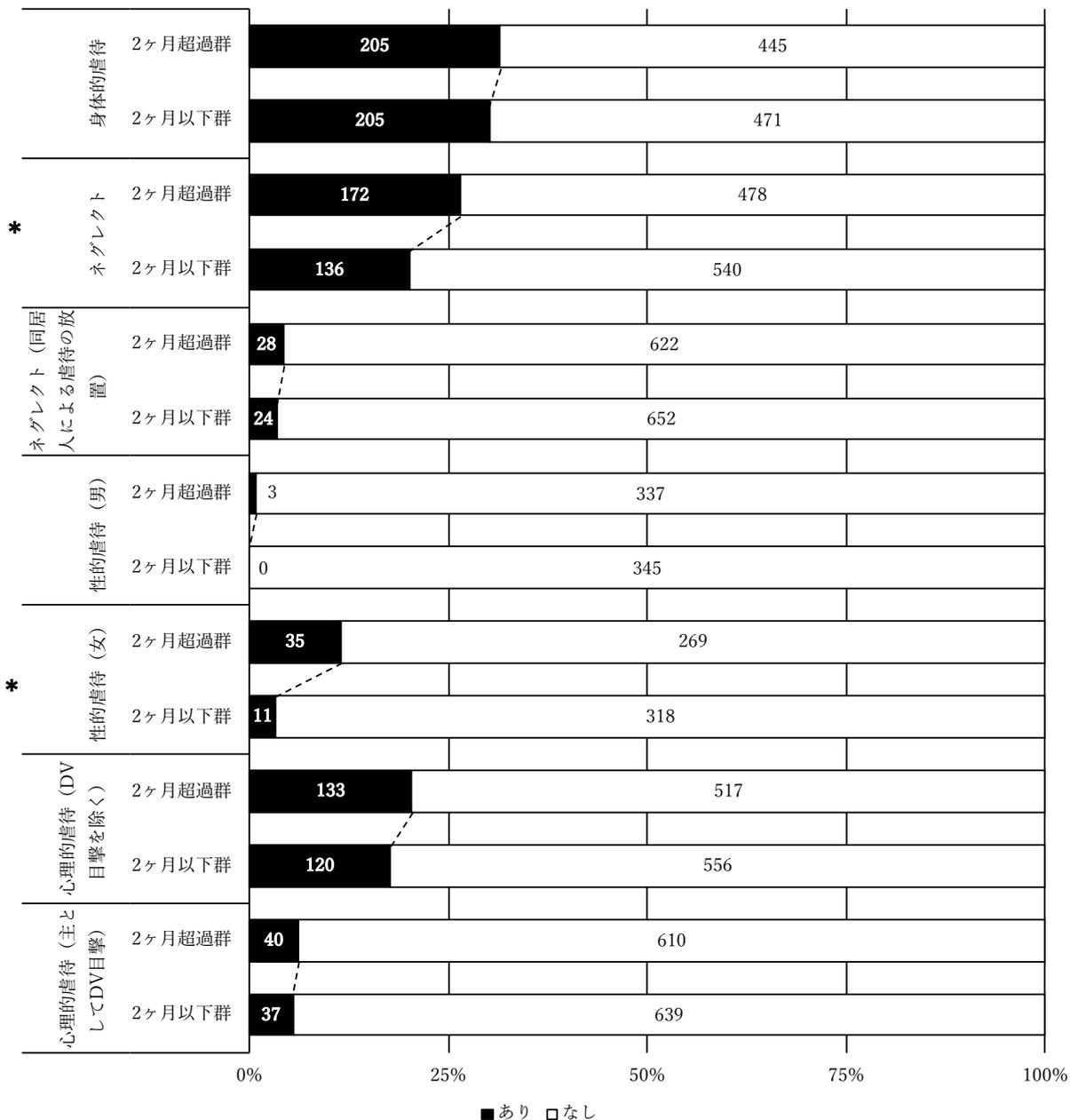


*は、 χ^2 検定で有意差(「統計的検定の意味や必要性」278ページ参照)が見られた項目
グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(10) 保護者から当該児童への行為 Q19

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で保護者から当該児童への行為に違いがあるか検証した結果を図14に示した。経過中にネグレクトや女児における性的虐待が見られるケースは、一時保護期間が二ヶ月を超える傾向がある。

図14 保護者から当該児童への行為

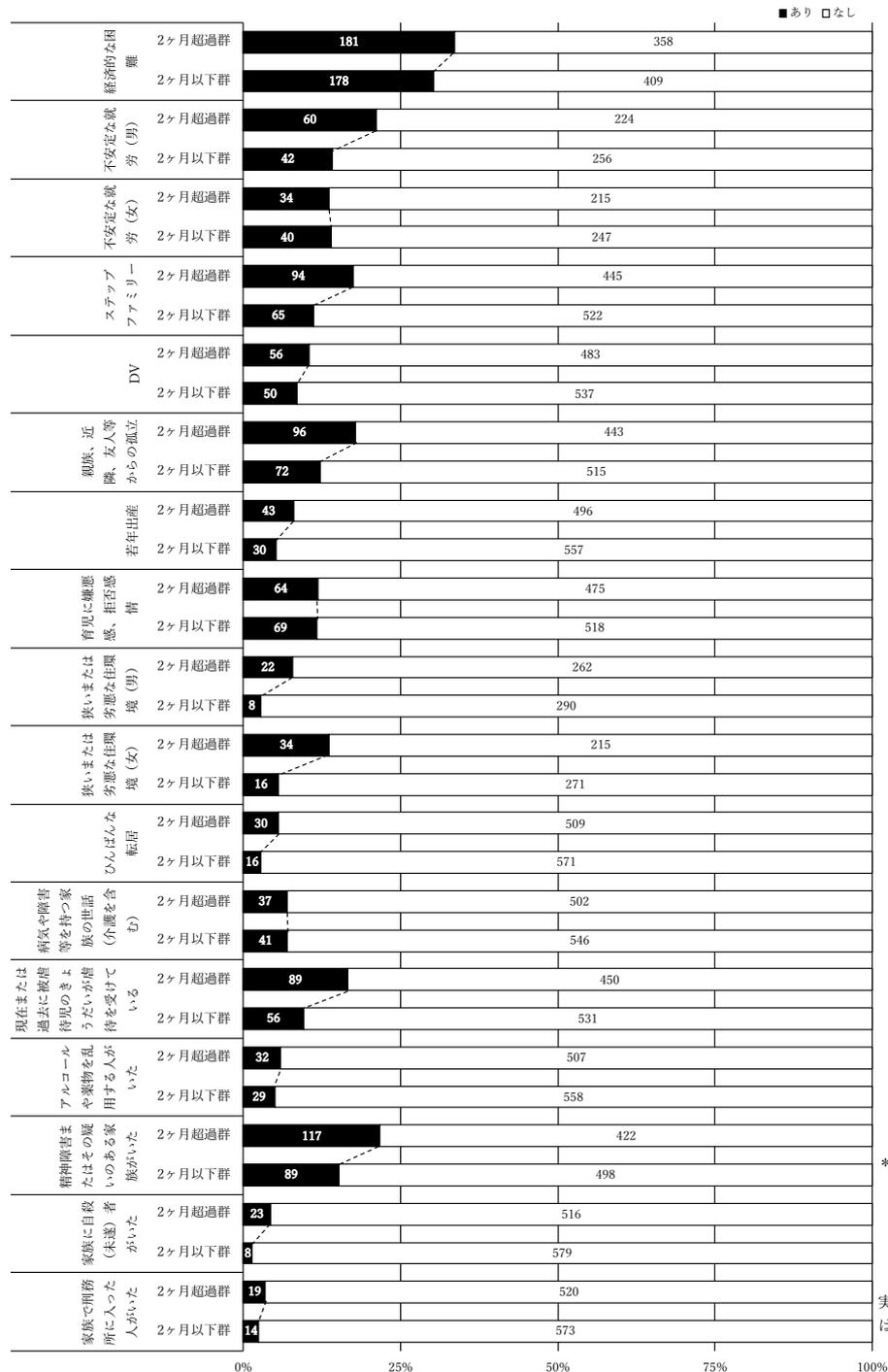


*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278ページ参照）が見られた項目
 グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(11) 一時保護開始時に家庭・家族が抱えていた状況 Q20

有効回答数は、1126 ケース（男 582、女 536）だった。Q15 において、「1.保護者宅」もしくは「2.親族・知人宅」を選択したケースについて分析した。2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護開始時に家庭・家族が抱えていた状況に違いがあるか検証した結果を図 15 に示した（有意差のなかった項目の一部は載せていない）。今回調査を行った家庭・家族が抱えていた状況では、7つの状況が、一時保護の長期化と関係が見られた。7つの状況は統一性があるというよりは多様である。つまり、一時保護期間が二ヶ月を超えるということは、特定の状況ではなく、いくつかの家族状況が複合して関連していることが示唆される。

図 15 一時保護開始時に家庭・家族が抱えていた状況



*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目
グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(B) 2群における一時保護所に入った後の対応の比較

項目	違いによる検証の結果
一時保護の相談を受けてから一時保護するまでの日数	差はない
一時保護後、担当児童福祉司による当該児童との最初の面接までの日数	3日以内のもの：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上のもの：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護中の担当福祉司との当該児童の面接回数	2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護後、担当児童福祉司による保護者との最初の面接までの日数	差はない
一時保護中の担当福祉司との保護者との面接回数	2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護後、担当児童心理司による当該児童との最初の面接までの日数	3日以内のもの：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上のもの：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護中の担当心理司との当該児童の面接回数	2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
一時保護から援助方針会議で方針を決定するまでの日数	1ヶ月未満であること：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上となること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
援助方針に対する児童の同意	差はない
援助方針に対する児童の同意に要した期間	1ヶ月未満であること：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上となること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
保護者の同意	保護者の同意があること：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群
援助方針に対する保護者の同意に要した期間	1ヶ月未満であること：2ヶ月超過群<2ヶ月以下群 1か月以上となること：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群

この表で差があったとしているのは、統計的検定で有意差が確認されたものを意味する。

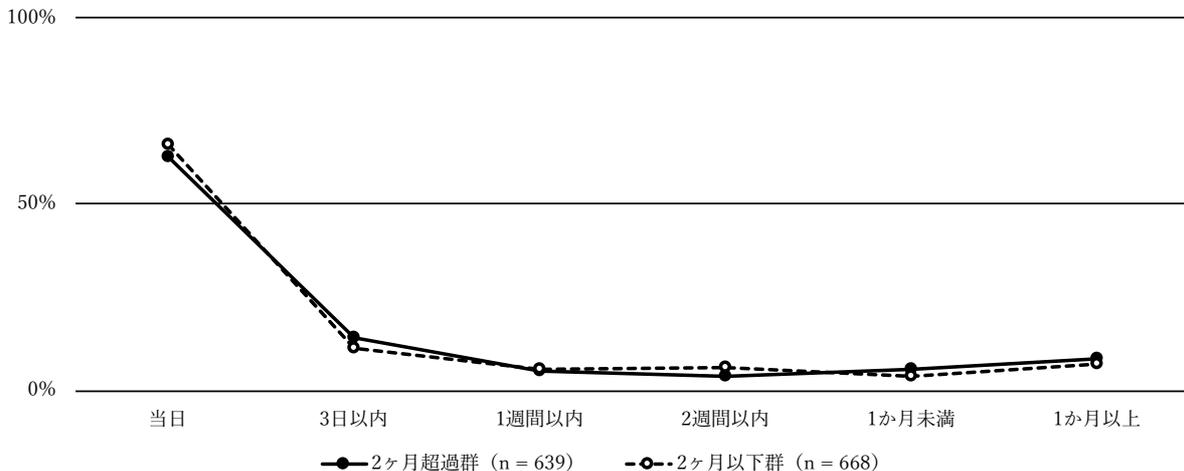
以下に有意差を認めた項目について、詳細を示した。有意差を認めなかった項目や統計的な検定ができなかった項目についても適宜示した。

(12) 一時保護後の対応経過—経過日数と面接回数 Q23

① 一時保護の相談を受理してから一時保護するまでの日数 Q23-1

有効回答数は 1307 だった。2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護の相談を受理してから一時保護するまでの日数に違いがあるか検証した結果を図 16 に示した。群によって一時保護の相談を受理してから一時保護するまでの日数が異なるとは言えなかった。

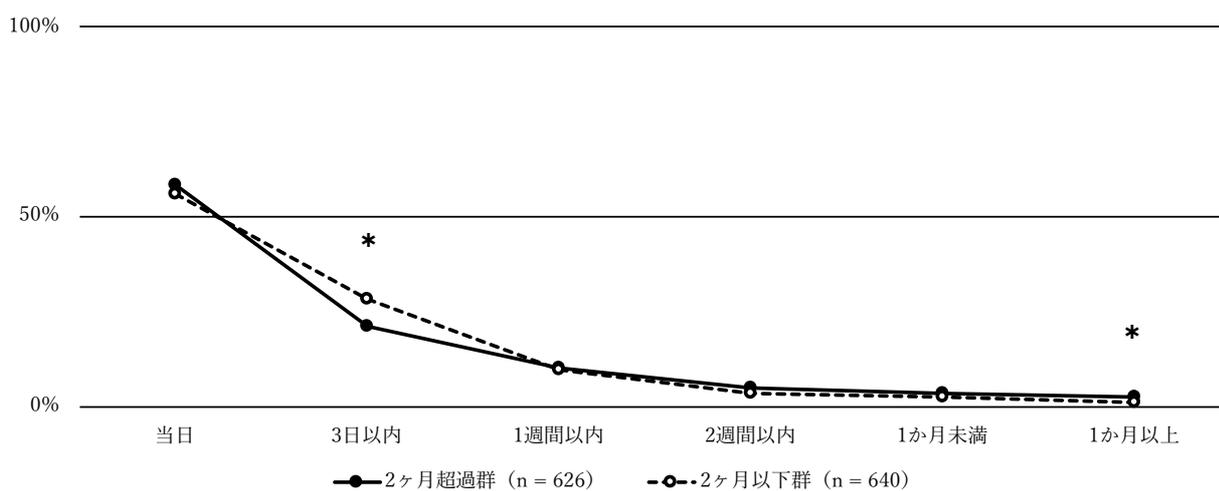
図 16 一時保護の相談を受理してから一時保護するまでの日数



② 一時保護後、担当児童福祉司による当該児童との最初の面接までの日数 Q23-2

有効回答数は、1266 だった。2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護後、担当児童福祉司による当該児童との最初の面接までの日数に違いがあるか検証した結果を図17に示した。2ヶ月以下群よりも2ヶ月超過群の方が一時保護後、担当児童福祉司による当該児童との最初の面接までの日数が「3日以内」であることが少なく、「一ヶ月以上」であることが多くなる傾向が強い。

図17 一時保護後、担当児童福祉司による当該児童との最初の面接までの日数



* は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目

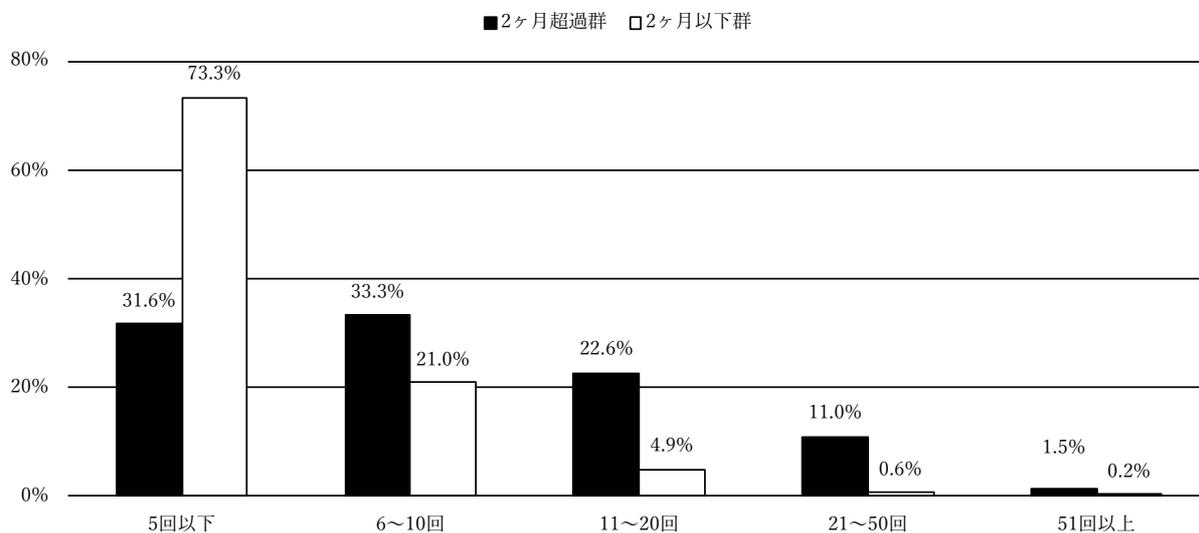
③ 一時保護期間中の担当児童福祉司と当該児童との面接回数 Q23-3

有効回答数は 1259 だった。一時保護期間中の担当児童福祉司と当該児童との面接回数について各群の平均および標準偏差を表 7 に示した。両群の平均面接回数の差は有意であった。回数の分布を図 18 に示した。5 回までは二ヶ月未満の児童の割合が高く、面会が順調に進んでいることが推察できる。二ヶ月を超えるケースは、10 回から 20 回以上、面接を重ねるための時間にあてていることがこの調査では顕著となっていた。

表 7 一時保護期間中の担当児童福祉司と当該児童との面接回数の平均と標準偏差

	人数	平均値	標準偏差
2ヶ月超過群	610	11.76	15.104
2ヶ月以下群	649	4.48	4.539

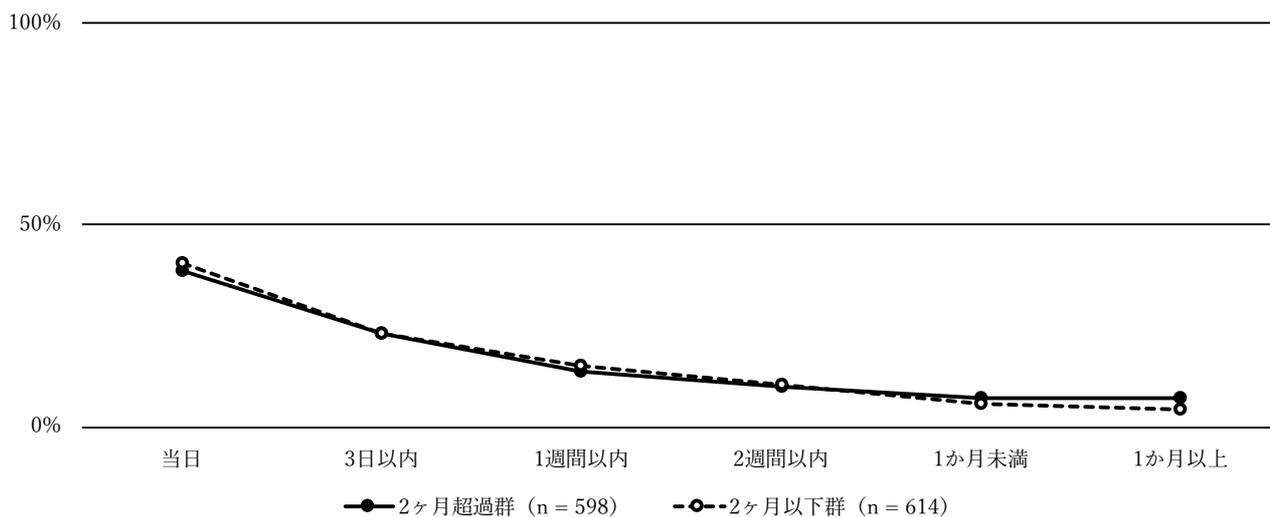
図 18 一時保護期間中の担当児童福祉司と当該児童との面接回数



④ 一時保護後、児童相談所職員による保護者との最初の面接までの日数 Q23-4

有効回答数は、1212 だった。2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護後、児童相談所職員による保護者との最初の面接までの日数に違いがあるか検証した結果を図 19 に示した。群によって一時保護後、児童相談所職員による保護者との最初の面接までの日数が異なるとは言えなかった。

図 19 一時保護後、児童相談所職員による保護者との最初の面接までの日数



⑤ 一時保護期間中の児童相談所職員と保護者との面接回数 Q23-5

有効回答数は、1265 だった。群別の面接回数の分布を図 20 に示した。一時保護期間中の児童相談所職員と保護者との面接回数について各群の平均および標準偏差を表 8 に示した。2 ヶ月以下群より 2 ヶ月超過群で面接回数に差があるか検証してしたところ 2 ヶ月超過群の方が一時保護期間中の児童相談所職員と保護者との面接回数が多かった (図 21)。面接回数 0 回から 3 回までは、二ヶ月未満のケースが多く、5 回を境として二ヶ月超えケースの保護者との接触回数割合が圧倒的に多くなっていた。尚、保護者との初回面接までの日数には有意な差は見られなかった。

表 8 一時保護期間中の児童相談所職員と保護者との面接回数の平均値

	人数	平均値	標準偏差
2 ヶ月超過群	608	6.6	5.09
2 ヶ月以下群	657	3.2	2.47

図 20 一時保護期間中の児童相談所職員と保護者との面接回数

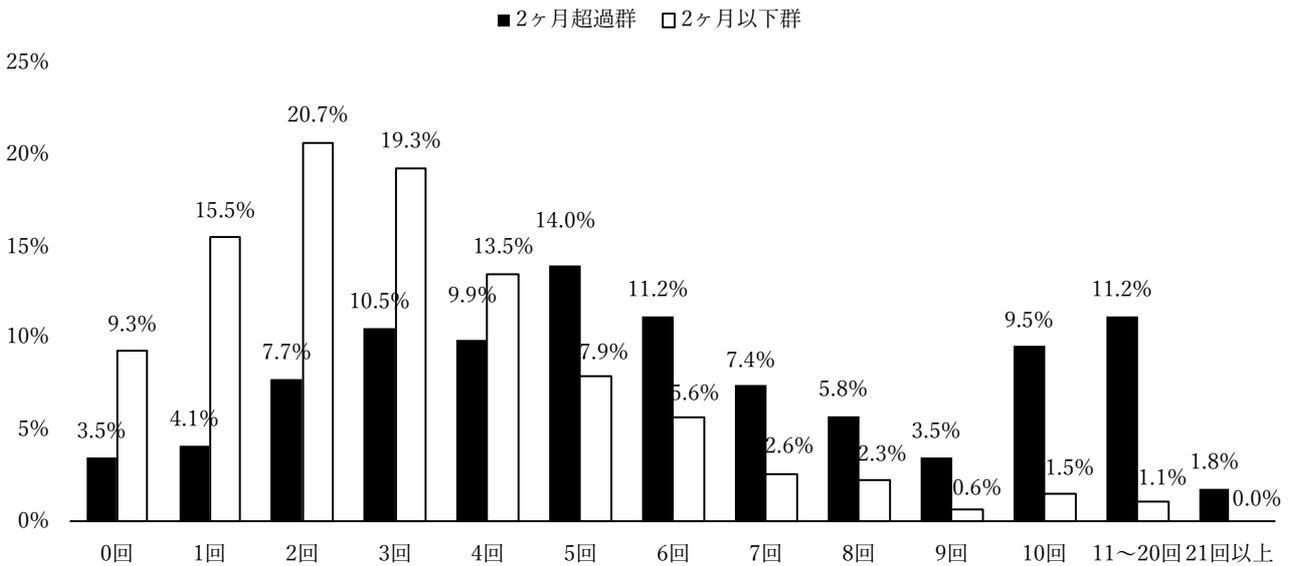
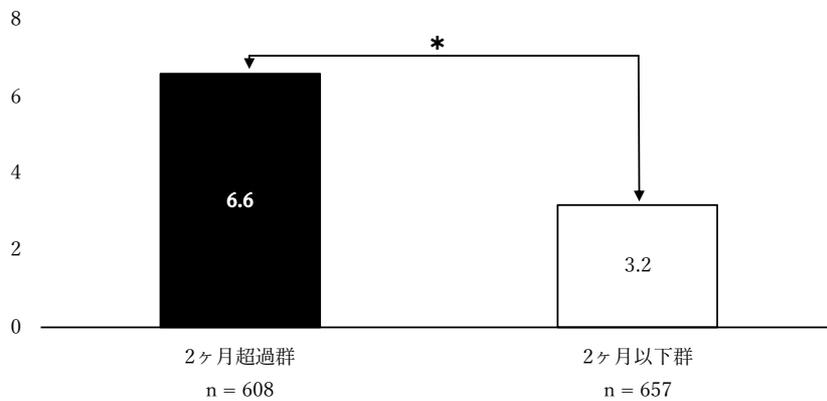


図 21 児童相談所職員と保護者との平均面接回数

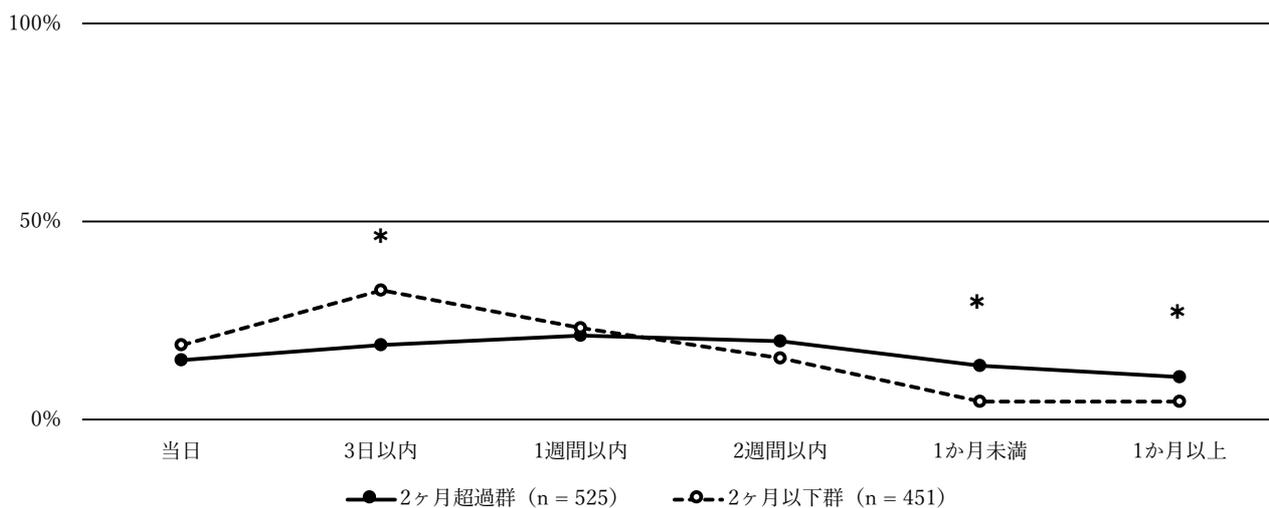


* は、t 検定で有意差 (「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照) が見られた項目

⑥ 一時保護後、児童心理司による当該児童との最初の面接までの日数 Q23-6

有効回答数は、976 だった。2 ヶ月超過群と 2 ヶ月以下群で一時保護後、児童心理司による当該児童との最初の面接までの日数に違いがあるか検証した結果を図 22 に示した。2 ヶ月以下群よりも 2 ヶ月超過群の方が一時保護後、児童心理司による当該児童との最初の面接までの日数が「3 日以内」であることが少なく、「一ヶ月未満」「一ヶ月以上」であることが多くなる傾向が強い。

図 22 一時保護後、児童心理司による当該児童との最初の面接までの日数



* は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目

調査 3

⑦ 一時保護期間中の担当児童心理司と当該児童との面接回数 Q23-7

有効回答数は、1202 だった。図 23 に一時保護期間中の担当児童心理司と当該児童との面接回数の分布を示した。表 9 には各群の平均および標準偏差を示した。両群の一時保護期間平均値には、有意な差があった。従って、2 ヶ月以下群より 2 ヶ月超過群の方が一時保護期間中の担当児童心理司と当該児童との面接回数が多いと言える。

図 23 一時保護期間中の担当児童心理司と当該児童との面接回数

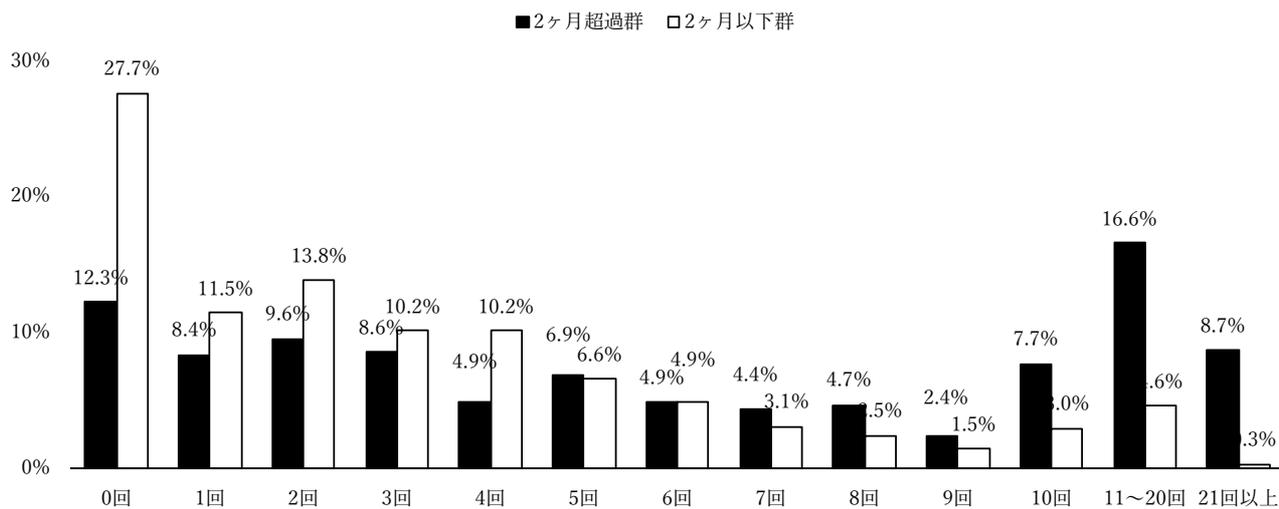


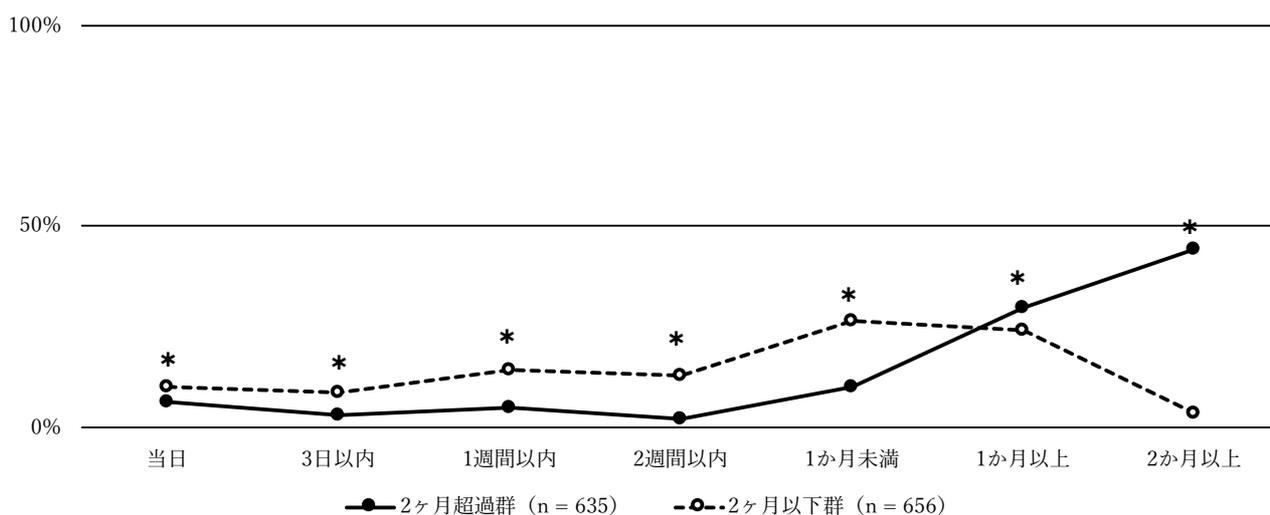
表 9 一時保護期間中の担当児童心理司と当該児童との面接回数のグループ統計量

	人数	平均値	標準偏差
2 ヶ月超過群	595	8.68	11.395
2 ヶ月以下群	607	3.31	3.880

⑧ 一時保護から援助方針会議で方針を決定するまでの日数 Q23-8

有効回答数は、1291 だった。2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護から援助方針会議で方針を決定するまでの日数に違いがあるか検証した結果を図24に示した。2ヶ月以下群よりも2ヶ月超過群の方が一時保護から援助方針会議で方針を決定するまでの日数が一ヶ月未満であることが少なく、一ヶ月以上となることが多くなる傾向が強い。

図24 一時保護から援助方針会議で方針を決定するまでの日数

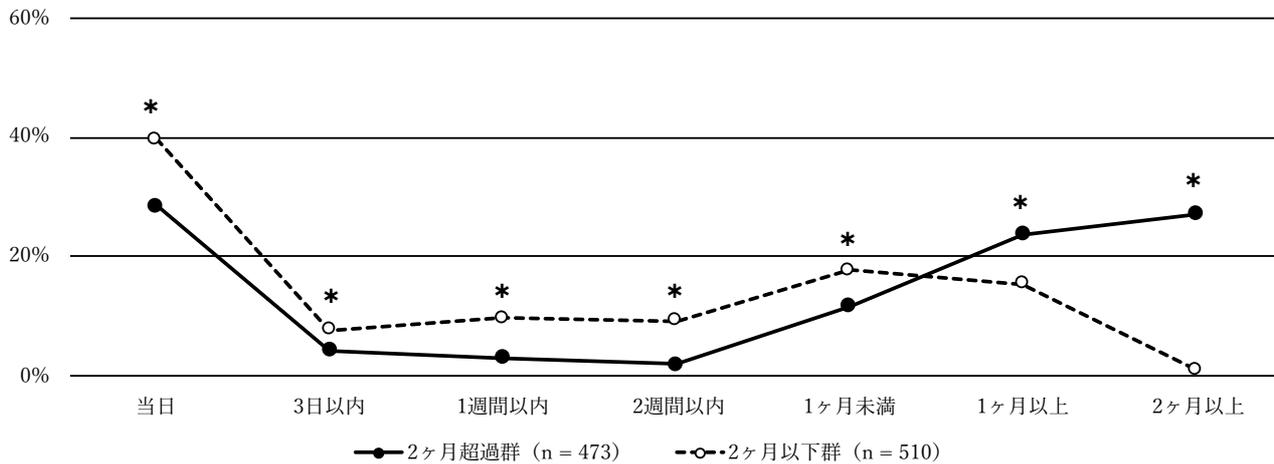


* は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目

(13) 当該児童の同意に要した期間 Q24-2

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で当該児童の同意に要した期間に違いがあるか検証した結果を図25に示した。2ヶ月以下群よりも2ヶ月超過群の方が援助方針に対する当該児童の同意が得られるまでの日数が1ヶ月未満であることが少なく、1ヶ月以上となることが多くなる傾向が強い。

図 25 児童の同意が得られるまでの期間

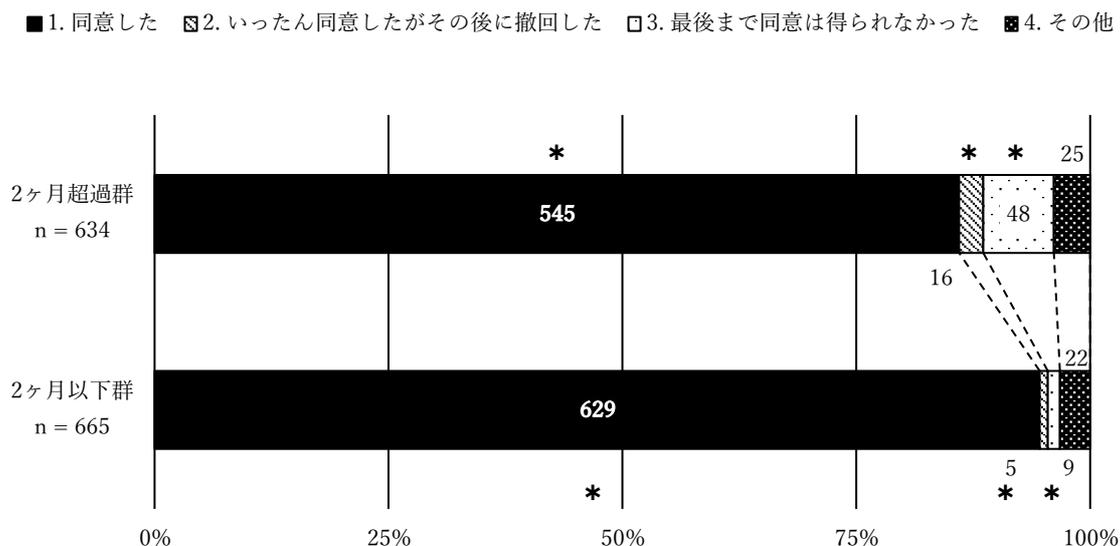


*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目

(14) 保護者の同意 Q25-1

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で保護者の同意に違いがあるか検証した結果を図26に示した。同意が得られていると一時保護期間は長期化しない傾向があり、同意の撤回や不同意は一時保護期間を長期化する傾向があると言える。

図26 保護者の同意について

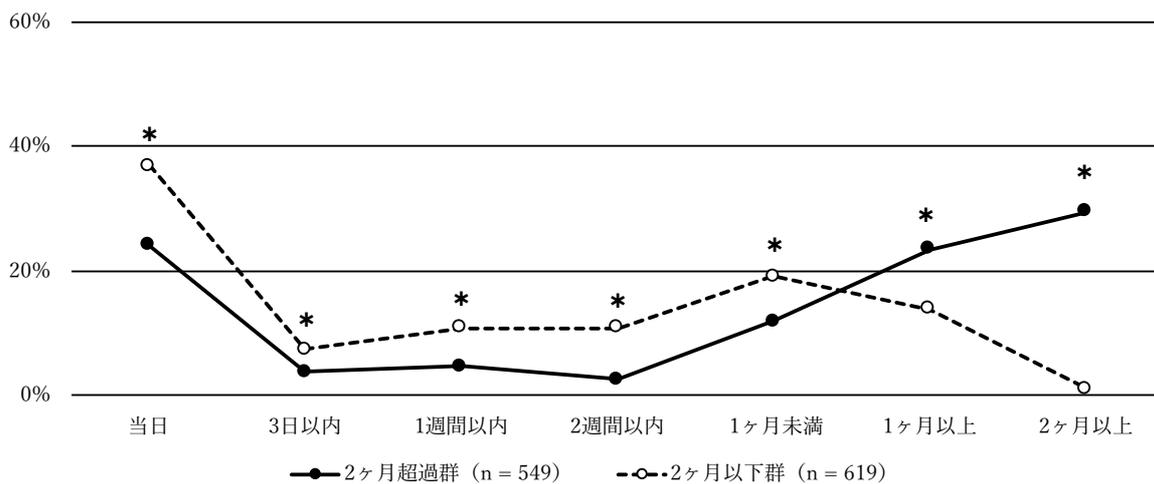


* は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目
 グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

(15) 援助方針に対する保護者の同意に要した期間 Q25-2

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で援助方針に対する保護者の同意に要した期間に違いがあるか検証した結果を図27に示した。2ヶ月以下群よりも2ヶ月超過群の方が援助方針に対する当該児童の同意が得られるまでの日数が1ヶ月未満であることが少なく、1ヶ月以上となることが多くなる傾向が強い。

図 27 保護者の同意が得られるまでの期間



*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278ページ参照）が見られた項目

(C) 2群における一時保護解除後の生活場所をめぐる状況の比較

項目	違いによる検証の結果
一時保護解除後の生活場所の変化	変化あり：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
家庭復帰した事例におけるカンファレンス実施	実施した割合：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 実施回数：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群
家庭復帰した事例における関係機関への説明	説明があった：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群 関係機関の理解：差はなし
里親等委託および施設入所した事例	里親等への委託打診家庭数：差はなし 複数施設に入所を打診：2ヶ月超過群>2ヶ月以下群

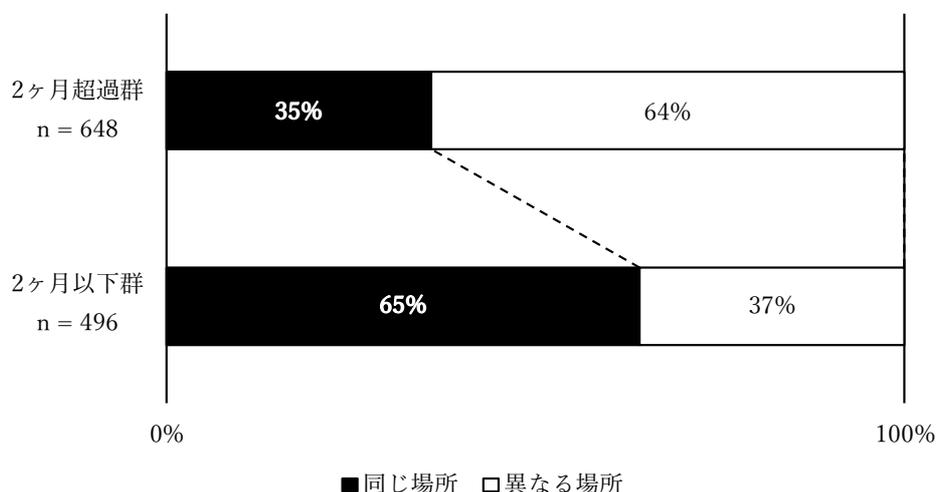
この表で差があったとしているのは、統計的検定で有意差が確認されたものを意味する。

以下に有意差を認めた項目について、詳細を示した。有意差を認めなかった項目や統計的な検定ができなかった項目についても適宜示した。

(16) 一時保護解除後の生活場所 Q26

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群で一時保護解除後の生活場所が保護前と変化したか検証した結果を図28に示した。2ヶ月超過群の方が、生活場所が変わる傾向がある。

図 28 一時保護解除後の生活場所の変化

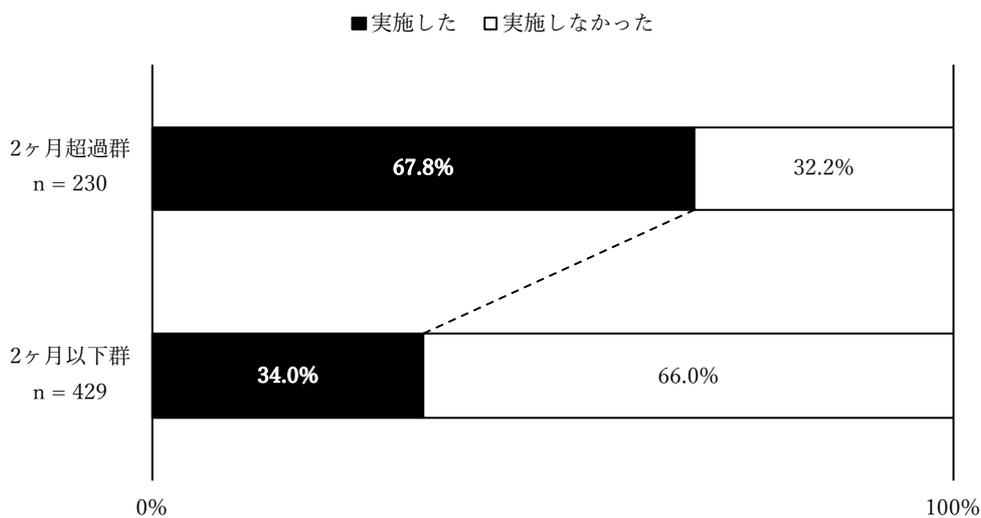


調査 3

(17) カンファレンスの実施 Q27

2ヶ月超過群と2ヶ月以下群とでカンファレンスの実施の有無について偏りがあるかどうかを検証したところ有意であった(図29)。二ヶ月を超えるケースではより関係機関とのカンファレンスが実施されている。

図 29 関係機関とのカンファレンスの実施



(18) 家庭復帰に対する関係機関の理解 Q28

表 10 に関係機関の理解の状況と群のクロス表を示した。「全く理解されず」の項目は両群とも 0 であった。そこで、説明の有無による人数の偏りを検証したところ有意であった。したがって、2 ヶ月超過群は 2 ヶ月以下群と比べて説明を行なっていると言える。説明がなされた上で理解が「十分に得られた」「理解は不十分なままだった」と回答した人数の偏りを検証したところ有意傾向であった。2 ヶ月超過群の方が 2 ヶ月以下群よりも理解が不十分であるかは明らかにならなかった。二ヶ月を超えてであっても、関係機関の理解は十分得られたとする割合は 80%を超えている。二ヶ月を超えていない群で説明がなされていないのは、ケース進行上必要性が生じなかったとも理解することもできる。そう考えると、逆に、2 ヶ月超過群では関係機関の了解を得るために二ヶ月を要したとも推察される。

表 10 家庭復帰に対する関係機関の理解と群のクロス表

	2 ヶ月超過群		2 ヶ月以下群		全体	
	n	%	n	%	n	%
十分	197	87.6	353	85.1	550	85.9
不十分	22	9.8	27	6.5	49	7.7
全く理解されず	0	0.0	0	0.0	0	0.0
説明せず	3	1.3	30	7.2	33	5.2
その他	3	1.3	5	1.2	8	1.2
全体	225	100.0	415	100.0	640	100.0

(19) 里親等委託等を打診した家庭数と委託の理解を得られなかった理由 Q30-1,2

里親家庭への受け入れ打診家庭数を 0 家庭、1 家庭、2 家庭以上に分け、2 ヶ月超過群と 2 ヶ月以下群で差があるか検証結果を図 30 に示した。両群の間に差は見られなかった。

委託の理解を得られなかった理由は、35 ケース (2 ヶ月超過群 27、2 ヶ月以下群 8) に記述が見られた (1 家庭以上打診した 78 ケースのうちの 44.9 %)。表 11 に結果を示した。表 12 には「その他」の自由記述回答を載せた。二ヶ月超えのケースでは、二ヶ月未満のケースと比較して児童の特性で里親宅への委託が困難と判断したケースが多かった。また、実子との兼ね合いで委託をあきらめたケースも 4 件あった。

図 30 里親家庭への委託打診家庭数

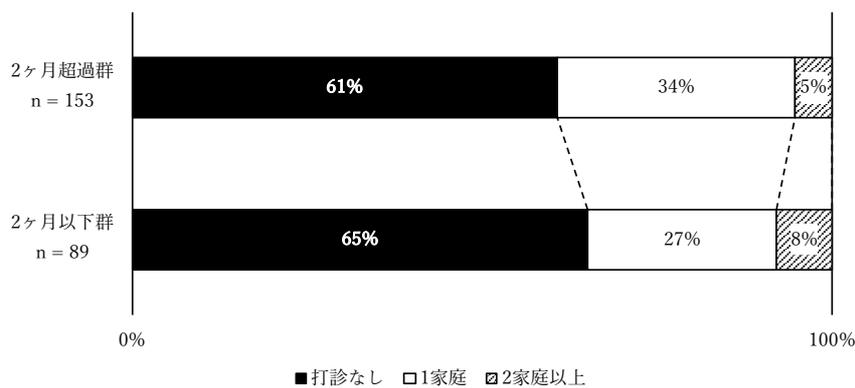


表 11 委託の理解を得られなかった理由

	2 ヶ月超過群		2 ヶ月以下群		全体	
	n	%	n	%	n	%
実子との関係で受け入れ困難	4	19.0	0	0.0	4	14.8
他の委託児童が落ち着いていないため	0	0.0	1	16.7	1	3.7
他の委託児童と当該児童との兼ね合いで受け入れ困難	4	19.0	2	33.3	6	22.2
当該児童への対応が困難	7	33.3	2	33.3	9	33.3
学校等地域との関係で受け入れ困難	1	4.8	0	0.0	1	3.7
その他	11	52.4	3	50.0	14	51.9

表 12 委託の理解を得られなかったその他の理由

・里母が多忙な為。
・里親宅の地域が本児の生活圏と重なり、他児との交遊が心配されたため。③、⑥とも検討段階での所内意見、里親委託依頼はピンポイントで行ったため、ことわられなかった。
・里親家庭の状況により、受け入れが困難。
・里親の親族に介護の必要な方が出た。
・里親が年少児を希望していたため。
・養子縁組希望でなかったため。
・保護者が里親委託を反対したため。
・年長児の受け入れ困難。
・乳児を委託できる里親が見つからなかったため。
・当該児童が入居を拒否。
・措置変更に緊急性があり里親との調整に時間を要したため。
・全て理解を得られている。
・受入日程の都合。
・高校までの通学が困難。
・近隣とのトラブルがあったため。
・委託の理解は得たが、交流の中で児童が委託を拒否した。
・きょうだいに医療行為を必要とする児童がおり、対応困難なため。

(20) 入所を打診した施設数と入所の了解を得られなかった理由 Q32-3,4

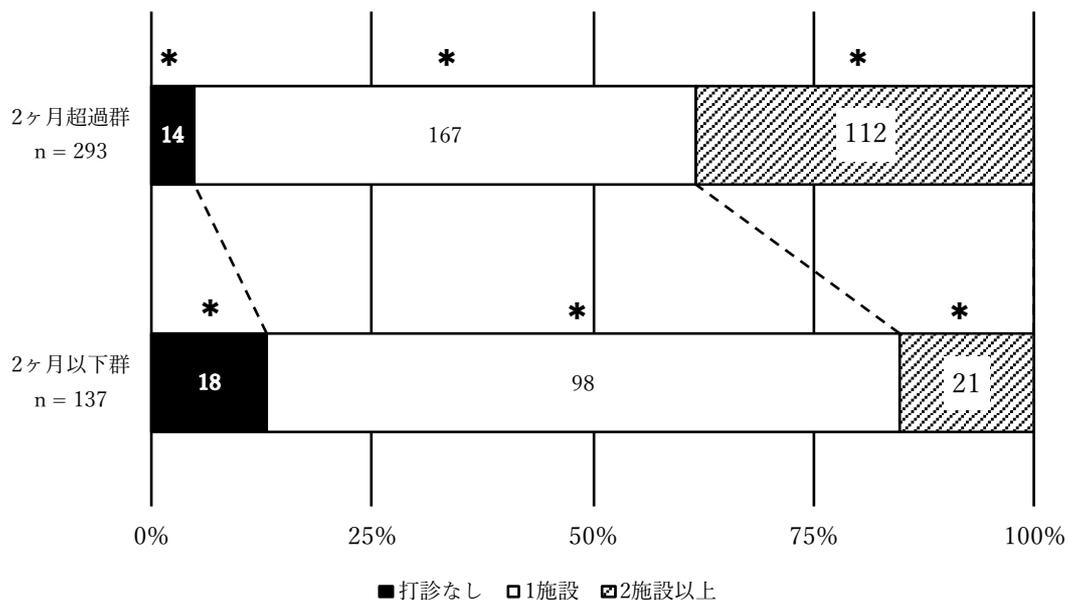
有効回答数は全体で 360 ケース (71.9%)、2 ヶ月超過群で 252 ケース (73.5%)、2 ヶ月以下群で 108 ケース (68.4%) だった。1 施設以上打診したケース数は、全体で 347 (96.4%) だった。入所を打診した施設数の分布を表 13 に示した。両群の施設数の分布に差があるかどうかを明らかにするために施設への打診数を 0 施設、1 施設、2 施設以上に分けて 2 群間に差があるか検証した結果を図 31 に示した。2 ヶ月超過群の方が、明らかに多くの施設に入所の打診をしている。2 ヶ月以下群の 80%以上が一つの施設で決定しているのとは対照的に、2 ヶ月超過群のほうでは 2 施設以上に入所交渉していた (表 11)。

入所の了解を得られなかった理由について 114 ケース (2 ヶ月超過群 97、2 ヶ月以下群 17) に記述が見られた (1 施設以上打診した 347 ケースのうちの 32.9%)。施設から了解を得られなかった理由として「入所の空きがない」という割合が両群ともに最も多かった (図 32)。

表 13 入所を打診した施設数の分布

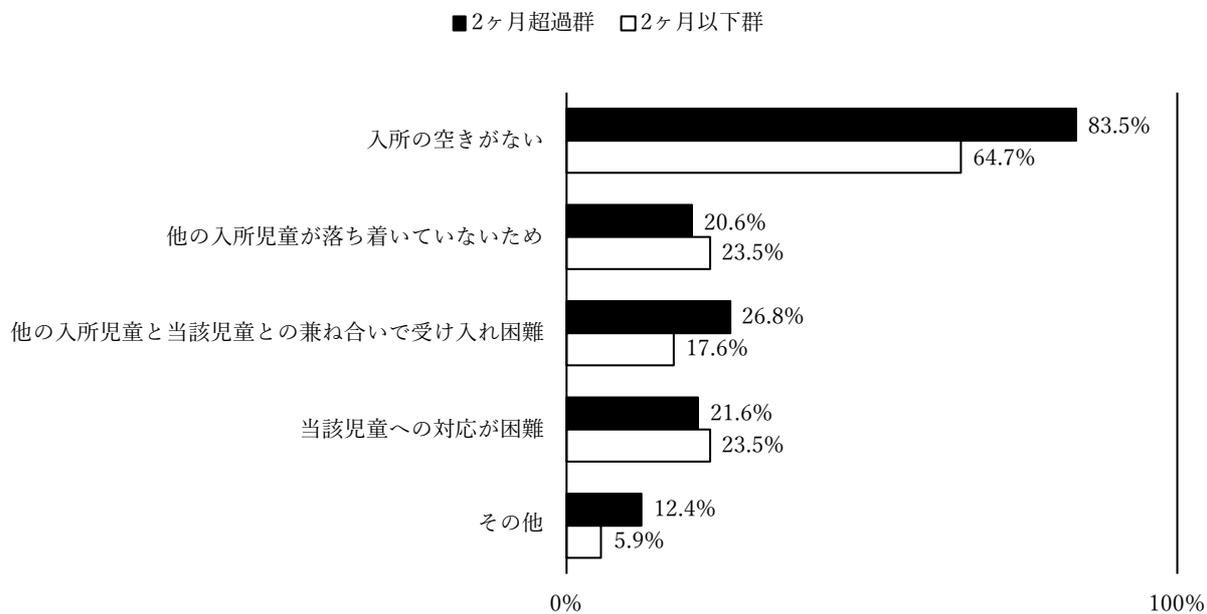
施設数	2 ヶ月超過群 N = 252		2 ヶ月以下群 N = 108		全体 N = 360	
	人数	%	人数	%	人数	%
0	8	3.2	5	4.6	13	3.6
1	147	58.3	87	80.6	234	65.0
2	36	14.3	4	3.7	40	11.1
3	20	7.9	4	3.7	24	6.7
4	6	2.4	3	2.8	9	2.5
5	12	4.8	1	0.9	13	3.6
6	6	2.4	2	1.9	8	2.2
7	3	1.2	0	0.0	3	0.8
8	2	0.8	0	0.0	2	0.6
10	4	1.6	1	0.9	5	1.4
11	2	0.8	0	0.0	2	0.6
18	0	0.0	1	0.9	1	0.3
19	1	0.4	0	0.0	1	0.3
22	1	0.4	0	0.0	1	0.3
25	1	0.4	0	0.0	1	0.3
30	1	0.4	0	0.0	1	0.3
35	1	0.4	0	0.0	1	0.3
66	1	0.4	0	0.0	1	0.3

図 31 施設入所措置を打診した施設数



*は、 χ^2 検定で有意差（「統計的検定の意味や必要性」278 ページ参照）が見られた項目
 グラフ中の数値は、実数を示し、バーの幅は割合を示している。

図 32 施設入所の了解を得られなかった理由（複数回答）



(21) 児童福祉法第 28 条申立て、親権停止申立てもしくは親権喪失申立てをした事例 Q31

有効回答数は、46 件（2 ヶ月超過群 46、2 ヶ月以下群 0）であった。

① 申し立ての種類と申し立てに至るまでの親権者との関係 Q31-1

今回の調査では、2 ヶ月超過群のみが家庭裁判所に申し立てをしている結果となった。46 件中 44 件は児童福祉法第 28 条による家庭裁判所への施設入所の申し立てであった。残り 2 件は親権停止申し立てだった。

親権者が児相の方針に反対し、虐待事実を認めないという対立関係の比率が高かった。保護者が不服申し立てを行うなど、本来業務のケース対応のほかに、法的対応など時間を要することが推察される。表 14 に集計結果を示した。

表 14 申し立てに至るまでの親権者との関係（複数回答）

	人数	%
親権者にして施設入所等についての説明時間や機会をなかなかとれなかった	5	11
児童相談所の方針に親権者が反対した	39	87
親権者が児童福祉司からの連絡・家庭訪問を拒絶し続けた	12	27
親権者が児相の対応に不服を申し立てた	9	20
親権者が虐待の事実等を認めなかった	21	47
虐待の事実等は認めたが、施設入所（または里親等委託）には同意しなかった	12	27
その他	2	4

② 援助方針会議にて申し立て決定から審判までの期間 Q31-2-4

表 15 に申し立て決定から実際の申し立てまでの期間の結果を示した。約 7 割のケースが二ヶ月以内に実際の申し立てを行っていた。ほとんどのケースが 3,4 カ月以内に審判が確定している。しかし、6 カ月以上かかっているケースも 5 件あった。

表 16 に実際の申し立てから審判までの期間を示した。申し立ての内容と家庭裁判所の実務次第ではあるが、約 1 割は 1 か月後に、約半数は 2 から 3 か月を要していることがわかった。

表 15 援助方針会議にて申し立て決定から実際の申し立てまでの期間（2 ヶ月超過群のみ）

	0 か月後	1 か月後	2 ヶ月後	3 か月後	4 か月後	5 か月後	全体
人数	1	13	16	5	6	1	42
%	2.4%	31.0%	38.1%	11.9%	14.3%	2.4%	100.0%

表 16 実際の申し立てから審判までの期間（2 ヶ月超過群のみ）

	1 か月後	2 ヶ月後	3 か月後	4 か月後	5 か月後	6 か月後	7 か月後	8 か月後	全体
人数	5	13	8	7	1	2	2	1	39
%	12.8	33.3	20.5	17.9	2.6	5.1	5.1	2.6	100.0

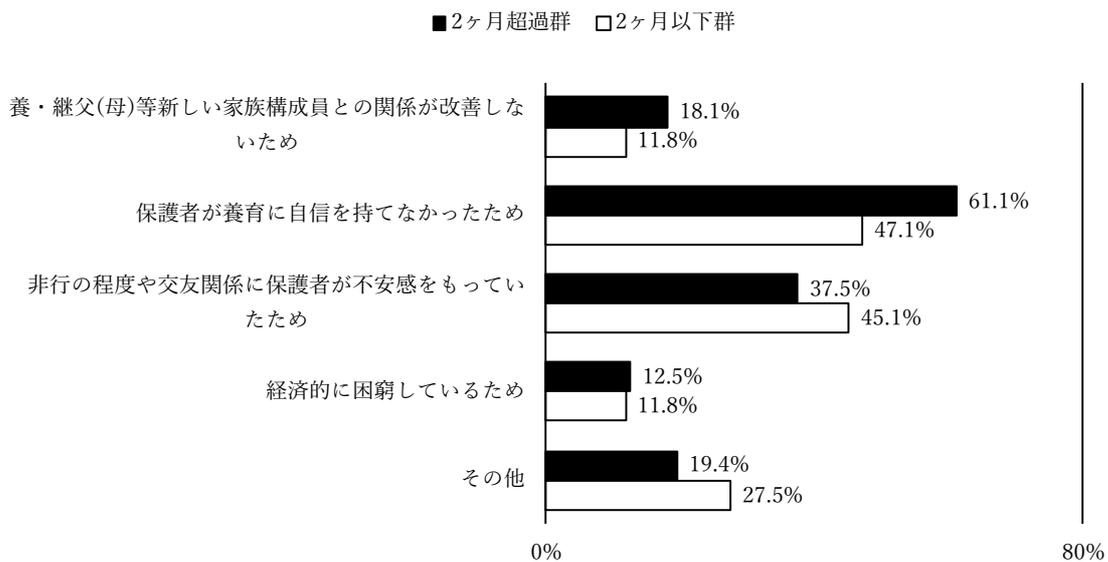
(22) 保護者が家庭復帰を拒んだ事例 Q32

有効回答数は 123 件（2ヶ月超過群 72、2ヶ月以下群 51）であった。両群ともに、「保護者が養育に自信を持てなかったため」という理由が最も高かった。1 から 17 までの選択肢のうち、重複回答しているものとして多かったのは「2. 保護者側の理由(面接等の拒否)」と「8. 施設入所に保護者の同意を得るのに時間を要した」(13 件)、「2. 保護者側の理由(面接等の拒否)」と「9. 施設入所に保護者の同意を得られなかった」(10 件)などであった（表 17・図 33）。

表 17 保護者が家庭復帰を拒んだ理由

	2ヶ月超過群 n = 72		2ヶ月以下群 n = 51		全体 n = 123	
	人数	%	人数	%	人数	%
養・継父(母)等新しい家族構成員との関係が改善しないため	13	18.1	6	11.8	19	15.4
保護者が養育に自信を持てなかったため	44	61.1	24	47.1	68	55.3
非行の程度や交友関係に保護者が不安感をもっていたため	27	37.5	23	45.1	50	40.7
経済的に困窮しているため	9	12.5	6	11.8	15	12.2
その他	14	19.4	14	27.5	28	22.8

図 33 保護者が家庭復帰を拒んだ理由（複数回答）



3.4. 入所長期化の理由についての質的分析

(1) 児童の同意に1ヶ月以上を要した理由 Q24-3

Q24-2 で回答があり、児童の同意を得るのに1ヶ月以上を要した理由を群ごとにカテゴリー化した。2ヶ月超過群の結果を表18に、2ヶ月以下群の結果を表19に示した。

表 18 児童の同意に1ヶ月以上を要した理由(2ヶ月超過群) n = 189

カテゴリーグループ	カテゴリー	数	具体的内容例
児童の事情	児童自身が施設入所拒否	5	本児が入所を拒否していたため
	児童自身が家庭復帰拒否	2	保護者への不信任
	障害等の児童の行動特性による	9	本児の愛着(障害)による問題行動を見定めることが必要であった
	入院・通院など疾病事情	6	①入院中のため ②高度な食物アレルギーがあり、専門医療機関への委託を検討していたが不調に
	転校への不安	3	施設入所にもなう転校への不安感が強かった
	家庭復帰への不安	2	保護者への不信任
	今後の進路・生活についての不安・とまどい	15	①一人で家から離れ生活することへの不安 ②本児が頻繁に意向を変えたため
その他	3	①一時保護所の生活が楽しいと訴えていたため ②一時保護所(での生活)に安心感があり、場面が変わるのを嫌ったため	
保護者の事情	保護者が施設入所拒否	5	親権者が施設入所に反対していたため方針を決定できなかった
	保護者が家庭復帰拒否	4	①(保護者が)夏休み中の家庭復帰に不安 ②家族が当面の本児引き取りに難色
	保護者の面会・面接拒否等	5	保護者が調査に応じなかった
	保護者との合意形成に時間がかかった	11	①家庭復帰にあたって父母とルールのすりあわせに時間を要した ②本児と保護者・児相の意見がなかなかあわなかった ③家庭引き取りの際に取り決める約束事を受け入れられなかったため
	保護者の傷病等	7	①母の退院までの日数が必要であったため ②保護者が入院中だったため
	保護者の生活環境調整等	13	①親族を含めた調整の可能性があった ②家族環境が二転三転した ③実母が当該児童の義兄への暴力により拘留されていた
今後の環境調整等	受け入れ施設が見つからない	6	適切な施設の空きがみつからなかった
	受け入れ施設との調整に時間	6	①受け入れ施設との調整に時間を要し、児童に伝えるまでに時間がかかった ②行先(施設)の空き状況確認に時間を要した
	家庭復帰後の社会資源探し	3	家庭復帰先での(保育所の)入園の可否があった
	生活環境の調査に時間	2	生活場所の調整に時間を要した
	警察との関係調整	6	①他のきょうだいへの傷害容疑で父が逮捕されたため ②母の薬物使用について警察の調査が継続していてその後連絡が取りづらい状況が続いた
	司法との関係調整	4	司法関係の調査等に時間を要した
	転居	1	転居するかどうかと、転居先の決定に時間がかかった
仕事の進行管理	援助方針決定までに時間がかかった	61	①所内で援助方針の決定に時間を要したため ②援助方針を決定した日が一か月以上経過していたため ③未処理として対応しており、解除後に方針が会議で決定されるため ④センターの方針がでるまで一か月かかったため
	担当児童福祉司の迷い	2	①迷っていた。何回か(児相の提案を)投げかけ、メリットデメリットを伝えながら一緒に考えた ②保護者と面接を行う中、迷いがあった
その他	その他	5	一時保護が長かったため

表 19 児童の同意に1ヶ月以上を要した理由(2ヶ月以下群) n = 53

カテゴリーグループ	カテゴリー	数	具 体 的 内 容 例
児童の事情	児童自身が施設入所拒否	1	(はじめのうち)施設入所に抵抗感
	児童自身が家庭復帰拒否	2	家庭に戻ることを一貫して拒否
	障害等の児童の行動特性による	2	自殺願望が続き、今後の生活への展望が持てなかったため
	入院・通院など疾病事情	0	
	転校への不安	0	
	家庭復帰への不安	2	これまでも同様のことが繰り返されていたことへの抵抗感。
	今後の進路・生活についての不安・とまどい	2	本児が家に帰ることについて悩んでいた
	その他	0	
保護者の事情	保護者が施設入所拒否	0	
	保護者が家庭復帰拒否	0	
	保護者の面会・面接拒否等	1	保護者との面会に拒否感があった
	保護者との合意形成に時間がかかった	3	保護者との面接日程調整が上手くいかず家庭引き取りの合意形成に時間がかかった
	保護者の傷病等	3	①母親の精神不調の入院 ②実母の精神状態不安定
	保護者の生活環境調整等	6	①父親が仕事の都合で海外出張しており初回面接に時間を要した ②生活場所についての見通しがはつきりしなかった
今後の環境調整等	受け入れ施設が見つからない	0	
	受け入れ施設との調整に時間	2	①施設との面談日程調整 ②施設を検討していたが里親に変更
	家庭復帰後の社会資源探し	2	①本人は(地元の)高校に戻って生活したいと希望していたが、高校が再度の受け入れを決定するまで時間がかかった ②高校に戻る決定をする会議を行うのに時間がかかった
	生活環境の調査に時間	3	家庭・地域での調整ができていないため
	警察との関係調整	0	
	司法との関係調整	0	
	転居	0	
	仕事の進行管理	援助方針決定までに時間がかかった	23
担当児童福祉司の迷い		1	援助方針の方向性が定まらなかった
その他	その他	0	

- ・Q24は「児童の同意を得る」際の理由について記述する問であったが、次のQ25にある保護者理由についての記載も多く(2ヶ月超過群=25件/2ヶ月以下群=13件)見受けられた。
 - ・二カ月超えのケースのほうが児童と保護者の説得、そして地域環境との調整事務に時間を要していることが、明らかとなった。
 - ・二カ月超え・二カ月未満いずれの場合も、「仕事の進行管理」というカテゴリーに属する回答割合が最も多かった。この内容の詳細・精査はこの問からは困難であった。
- 「児童福祉司の迷い」の回答数はそれぞれ1,2件であった。

(2) 保護者の同意に1ヶ月以上を要した理由 Q25-3

Q25-2 で回答があり、保護者の同意を得るのに1ヶ月以上を要した理由として掲げられた自由記述を群ごとにカテゴリー化した。2ヶ月超過群の結果を表20に、2ヶ月以下群の結果を表21に示した。

表 20 保護者の同意に1ヶ月以上を要した理由 (2ヶ月超過群) n = 222

カテゴリーグループ	カテゴリー	数	具体的内容例
児童の事情	児童の立場を児相が尊重	7	①児童自身が自分の気持ちを整理するための時間を設けた。 ②本児が自宅を離れることに躊躇を示したため ③母は本児と直接会って、本人の気持ちを確認したいと欲していたが、本児が母と合うことを拒否していたため時間を要した。
	入院・通院など健康事情	8	①入院治療に時間を要した ②本児の健康面でのアセスメントに時間を要した ③児童の身体の回復を待ち、調査を行っていたため
保護者の事情	保護者が施設入所拒否	16	一時保護は同意しても施設入所はさせたくないと同辞
	保護者が家庭復帰拒否	1	家庭内での本児の暴力行為に困り感があり家庭引き取りに消極的
	保護者の面会・面接拒否等	13	①保護者のかたくなな拒否 ②一時保護以降、母と連絡とれず
	保護者との合意形成に時間がかかった	46	①児童相談所への不信任感 ②父母が虐待を認めず ③近所の人や学校にどう説明したらいいかわからないといわれた ④保護者が一時保護の継続(のみを)希望したため ⑤家庭引き取りにあたり強い不安が(保護者に)あったため
	保護者の傷病等	16	①保護者が入院中で面会できなかつたため/面会制限があつた ②保護者が精神的に極めて不安定で、面会・意向確認に時間を要した
	保護者の生活環境調整等	17	①実父が長距離(トラック)運転手であつたため面談回数が少なかつた ②DVを母が父から受けており、父母ともに居所が不明となる時期があつたため ③一時保護中に祖父母と(本児が)養子縁組し、親権者変更があつたため
今後の環境調整等	受け入れ施設が見つからない	6	措置先が見つからなかつた
	受け入れ施設との調整に時間	3	委託を前提に里親交流をしていたが、方針を決定した後に家庭状況・意向がかわってしまった
	家庭復帰後の社会資源探し	2	家庭復帰先での(保育所)に有園の可否があつたため
	生活環境の調査に時間	2	家庭復帰先での環境調整が必要だつたため
	警察との関係調整	10	①一時保護後、警察署の取り調べが終わるのに1か月要した。 ②警察の捜査機関の関係 ③検察の調査に協力 ④司法関係の調査に時間を要したため
	司法との関係調整	1	家裁送致ケースだつたため
	転居	4	①母の県外への転居のため ②母がDV被害で他県へ転居 ③父が転居を繰り返し、面会が困難だつたため
仕事の進行管理	援助方針決定までに時間がかかった	60	①援助方針の決定に時間を要した ②アセスメントに要する時間が当該期間必要だつた ③児相内で援助方針を決定するまでも時間があつた ④保護1か月以内に方針を決定することは困難
	担当児童福祉司の迷い	5	①母子交流の様子を見て伝えるつもりだつた。伝えるタイミングが遅くなつた ②迷っていた。最終的には子どもの意向に沿う形で同意。 ③親権争いの中、父母どちらを窓口にやりとりをしていけばよいかに時間
その他	その他	6	もともと家庭引き取りで考えていたから

調査 3

表 21 保護者の同意に1ヶ月以上を要した理由（2ヶ月以下群） n = 52

カテゴリーグループ	カテゴリー	数	具 体 的 内 容 例
児童の事情	児童の立場を児相が尊重	2	本児との面接で問題・課題を整理するため時間を要したため
	入院・通院など健康事情	1	医療機関へ一時保護委託を経て医師の所見を得る必要があったため
保護者の事情	保護者が施設入所拒否	1	心理治療施設入所の方針の同意が得られず
	保護者が家庭復帰拒否	0	
	保護者の面会・面接拒否等	2	母と連絡がとれず意向確認ができず。
	保護者との合意形成に時間がかかった	10	①保護者との面会日程調整が上手くいかず、家庭引き取りの合意形成に時間がかかった。 ②保護者の方針と児相の方針のおりあいが見つかなかった ③保護者側の児相による施設入所方針提示への決心に時間がかかった
	保護者の傷病等	3	母親の精神不調の入院が当初の見込みより長期化したため
	保護者の生活環境調整等	5	①養父との離婚、別居に手続き等に時間がかかった ②保護者が拘留されていた
今後の環境調整等	受け入れ施設が見つからない	0	
	受け入れ施設との調整に時間	0	
	家庭復帰後の社会資源探し	0	
	生活環境の調査に時間	2	家庭での養育が本当に困難なのか、調査や関係調整に時間を要したため
	警察との関係調整	0	
	司法との関係調整	0	
	転居	1	母の転居による環境調整
仕事の進行管理	援助方針決定までに時間がかかった	22	①児相の援助方針決定までに2カ月を要したため ②プログラムの実施とその評価を踏まえて援助方針会議に提案したため ③援助方針が決定するまでに時間がかかったため
	担当児童福祉司の迷い	1	援助方針の方向性が定まらなかったため
その他	その他	1	施設入所の方針だったため

- ・この項目でも、両群で「仕事の進行管理」のカテゴリーに属する回答が多かった(3.4.(1)の結果参照)。
- ・2ヶ月超過群において「保護者の事情」「今後の環境調整等」のカテゴリーに生成されたラベル数が多かった。
- ・結果には表記できなかったが、家庭復帰や家族再統合に用いる社会資源として、保育所や学校は重要な位置づけであり、こうした関係機関の協力が円滑に得られていないとする回答があった。

(3) ニヶ月を超えた理由 Q33-1,2

Q33-1 で選択率が 20%を超えていたのは「4. 援助方針の決定に時間を要した」、「5. 在宅支援の方針になったものの、保護者が引き取るための環境整備に時間を要した」であった (図 34)。1つのみ選択された場合もこの2つが多かった (図 35)。複数回答されていた場合では、「2. 保護者側の理由から面接の設定に時間を要した」と「5. 在宅支援の方針になったものの、保護者が引き取るための環境整備に時間を要した」を含んだ回答が多かった (図 36)。

図 34 2ヶ月を超えた理由 (複数回答全て含む)

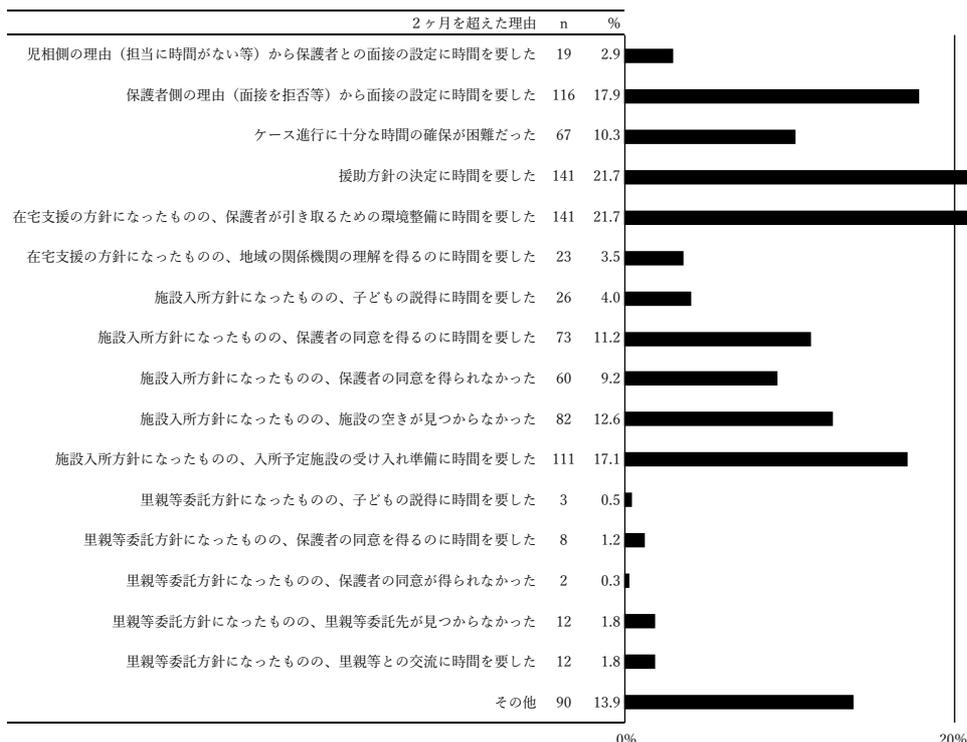


図 35 2ヶ月を超えた理由 (1つのみ選択回答)

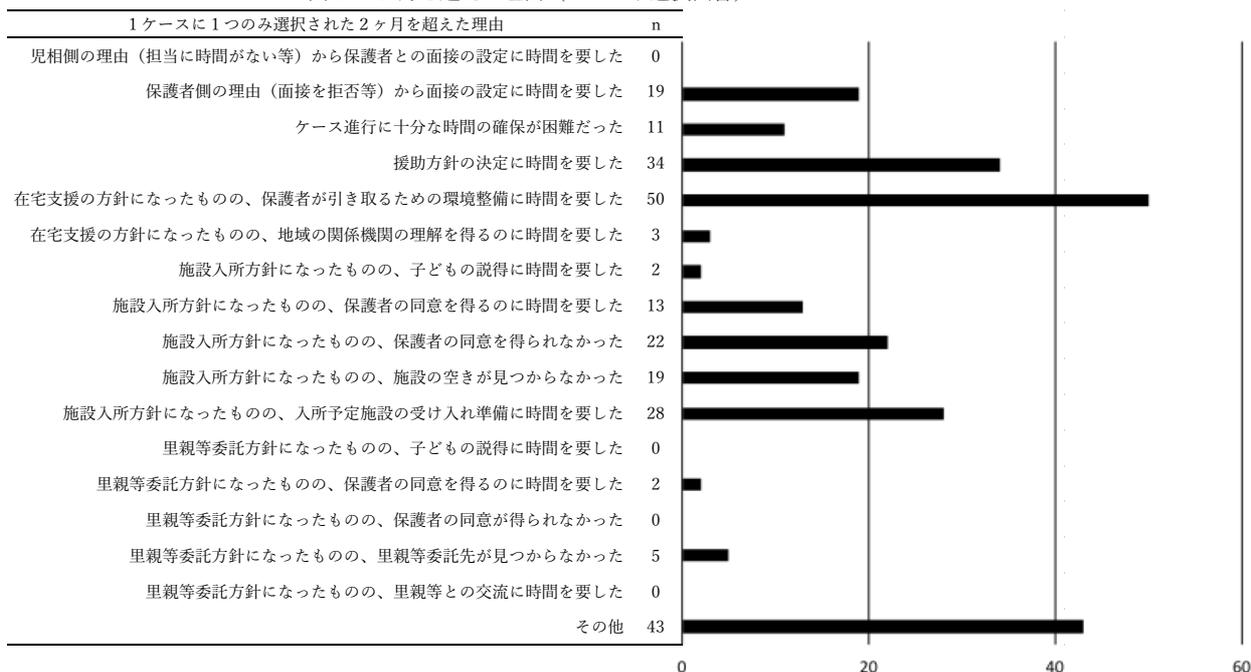
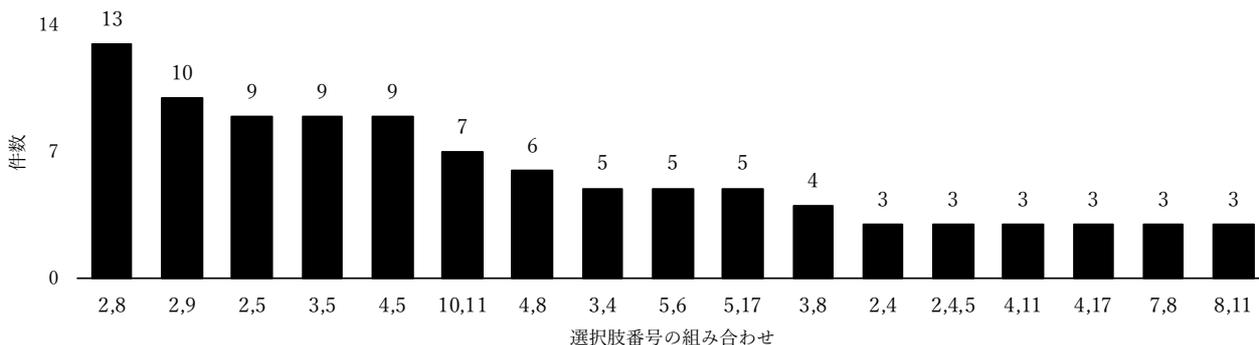


図 36 複数回答された選択肢の組み合わせ別件数（3件以上回答された組合せ）



以上の結果をもとに記載された各意見について質的分析を行った。分析は選択肢単位で実施した。以下には、単一選択で 20 件以上の選択があった選択肢に対して分析した結果を表 22～26 に示す。

表 22 Q33-2 選択肢「4. 援助方針の決定に時間を要した」の二ヶ月超え具体的事由 n = 34

カテゴリーグループ	カテゴリー	件数	記 載 内 容 の 一 例(一部を抜粋)
児童本人の特性	障害・疾病等のため	4	保護者から施設に有所の同意はとれていたが児童が通院中だった
	健康管理	2	体重不良の精査・改善のため入院を要し、その経過観察のため
児童の意向確認	意向確認に時間がかかった	1	児童本人が今後の身の振り方を考えることができず、気持ちの安定に時間がかかった
保護者の同意形成	保護者の意向確認	4	別居中の父が一時保護の同意を翻すなどがあったため
転居	県外への転居	1	継父との離婚や県外への転居など保護者の考えが二転三転していた
施設・里親等の受け入れ事情	受け入れ施設がみつからず	2	本人が希望する施設では、対応が困難であったりしたため
地域の社会資源	家庭復帰先の保育所入園	2	家庭復帰先の入園の可否を待っていたため
方針決定までの調査	社会調査に時間がかかった	3	里親委託か施設かの協議に時間がかかった
	家族間調整に時間がかかった	7	家庭内の問題把握に時間がかかった
地域関係機関との調整	警察	3	性的虐待の立件調査のため
	家庭裁判所	1	父の行為に対する裁判確定までに時間がかかったため
	地域の支援の可否	1	保護者に地域の支援を導入できるかを見極めるため
	生活保護申請	1	生活保護申請のための市と母の相談が長期化したため
	地域での施設・学校の受け入れ拒否	1	障害施設・特別支援学校を利用しての家庭復帰が他の児童の安全のために理由として拒否されたため
	他自治体への養子縁組	1	他県里親に養子縁組の適合性の判断に時間がかかったため

《考察》

Q24-3 と Q25-3 で最も回答として多かった「仕事の進行管理」についての詳細内容の一端が選択肢 4 の回答の中から読み取れる部分がある。援助方針を決定していく過程で、家族関係の調査に苦慮している回答が 7 件あった。回答の中には親権争いに決着がつかないことや、頼れる親族がいるのか、など不安定な家庭環境の調査に時間を要している理由が多かった。

他機関との調整では、所管警察署や家庭裁判所の動向を見ながらケースワークを進める必要があり、方針決定まで時間がかかったと回答があった。また、家庭復帰にあたって地域の保育所の受け入れ可否が出ないことと回答しているケースもあった。

その他として他自治体との養子縁組成立に向けた動きに時間を要しているケースが一件あった。養子縁組は同一都道府県内だけで行われているものではなく、家庭養護推進の今、特に今後の民間事業者と児相の連携・協働の在り方を検討する時期に来ていることを示唆した回答であった。

表 23 Q33-2 選択肢「5. 保護者の環境整備」の二ヶ月超え具体的事由 n = 53

カテゴリーグループ	カテゴリー	件数	記載内容の一例(一部を抜粋)
保護者への方針説明の難航等	児童の障害等を保護者が受容できず	1	発達障害の支援につながることをかたくなに実母が拒否
	児相の方針と折り合いがつかず	5	里親委託の方針で進めていたが児童・保護者ともに家庭復帰を希望
保護者の生活状況	保護者の健康事情	12	①母出産。②母うつ病で長期入院。
	保護者の転居等	11	①他都市への転居。②国外に居住する保護者状での受け入れに時間がかかった。
家庭環境調整	離婚・親権争い	4	一時保護中に父母が離婚訴訟に発展。本児童の親権についても争われた。
	不安定な家庭状況の改善・調査に時間	12	本児の家庭引き取り後の(非行の)再犯を保護者が強く心配
	保護者勾留	1	父拘留中だったため
関係機関調整	警察・司法	2	内縁関係の男性からの虐待について、警察側の事情で〔児童を〕留め置く事情があったため
施設側の事情	施設の入所調整	1	母子生活支援施設の入所に時間がかかったため
その他	民間養子縁組の不調	1	養子縁組交流が進む中で、養親候補から養子候補の養育困難の申し立てあり。
	その他	3	戸籍の作成、保険証の作成等を保護者に指導する方針だったため

《考察》

最も選択が多かった項目である。この選択肢では、保護者の生活状況が安定していないため、児相の方針決定に影響を及ぼしている結果が生成された。保護者がうつ病や統合失調症で長期の入院となったケースや、出産後の体調回復を待たねばならない事情が多かった。

保護者の県外転居やDV母子分離後の住居が定まらないことを理由に挙げるケースも11件と多かった。

家庭環境の調整・整備に時間を要するケースも多かった。虐待者を家庭から分離させることや、非行児を家庭復帰させることに保護者が難色を示しているために一時保護が長期化したケースもあった。内縁関係の男性が虐待で警察署に拘留された後、警察署の対応との兼ね合いでケースワークが長引いていると回答したケースもあった。

表 24 Q33-2 選択肢「9. 施設入所に保護者の同意得られず」の二ヶ月超え具体的事由 n = 22

カテゴリーグループ	カテゴリー	件数	記載内容の一例(一部を抜粋)
児相の援助方針への説得に苦慮	面会等に消極的・拒否的	4	保護者が児相からの連絡に応答しない
	連絡がとりづらかったため	3	保護者の仕事などの都合と合わず、二カ月を超えてしまった
	虐待の事実等の否定	3	保護者が虐待の事実を否定していた
家庭環境調整	母の傷病・出産等のため	2	実母の出産・中絶
	DVからの母の離婚へのためらい等	3	実母が性的加害を行った継父との別離を決断できず速やかな家庭引き取りができなかった
	保護者の拘留	1	母の長期拘留のため時間がかかった
転居	保護者の転居のため	2	保護者が転居を繰り返し、面接の設定に時間を要した
経済事情	救貧	1	措置入所に係る保護者負担金支払いが困難であったため

《考察》

保護者の同意が得られない理由には、面会等に消極的・拒否的という保護者側の意図が反映されたものだけでなく、傷病・出産等といった保護者が入所についての判断ができない状況等も含まれており、一括りにはできない。

表 25 Q33-2 選択肢「11. 施設入所の施設側の事由による」の二ヶ月超え具体的事由 n = 28

カテゴリーグループ	カテゴリー	件数	記 載 内 容 の 一 例(一部を抜粋)
施設側の事情	希望する施設の定員に空きなし	6	①入所予定施設の退所ケースがでないと部屋が空かなかった。 ②入所に空きがなく検討期間が長期にわたった。
	施設側の都合・入所方針	9	①受け入れ施設の行事予定の関係で受け入れが先延ばしとなった。 ②(施設側の)月初めでの措置入所希望のため。
	施設に入所中の児童との兼ね合い	6	①入所予定施設に不適応児童があり、その児童の対応を理由に入所が制限。 ②他児相から入所した児童があり、一定期間を開けてからでないと入所はできないといわれた。
児相側の事務手続きに時間	家裁の審判を入所の動機付けに	1	児童自立支援施設への入所の動機付けのため家裁の判断を仰ぐ必要があった
	各関係機関との調整に時間	5	方針も施設も決まっていたが、受け入れのカンファ、見学、面接に時間を要した
他機関関係	警察・司法	1	志保江関係の操作等に時間を要したため

《考察》

希望する施設に空きがない、という理由の他、施設側からどのような理由で受け入れの連絡を受けているかについての詳細である。その中でも、施設側の都合や入所にあたっての方針を理由として一時保護の期間が長引いているケースが 15 件あった。受け入れ施設内の同室に施設不調児童が今いるなど、施設としても苦しい事情の中で一時保護が長期化している事情が明らかとなっている。一方では、児相側の方針は決定しているのだが、施設側の会議日程や見学日程等の調整に時間を要しているケースもあった。

表 26 Q33-2 選択肢「17. その他」の二ヶ月超え具体的事由 n = 43

カテゴリーグループ	カテゴリー	件数	記 載 内 容 の 一 例(一部を抜粋)
健康・疾病によるもの	児童側	7	医療機関での入院に2カ月を要したため
	保護者側	6	実母が精神不安定で医療保護入院となったため
施設・里親等の受け入れ事情	受け入れ先探しに児相が苦慮	1	施設・里親ともに児童の受け入れ先として適当な場所がなかった
	施設側の受け入れ事情	1	他の入所児童との兼ね合い(人間関係等)の調整がつかなかった
	里親側の受け入れ事情	2	措置予定の里親が体調不良になったため
	施設不調後の対応のいきづまり	2	当初は一時保護後、施設への復帰方針も、児童の非行行動悪化により断念
	本人の特性(障害等)	1	障害等により施設(一時保護委託)先が限定されていたため
児相の援助方針への説得に苦慮	保護者	3	当初の方針に保護者の気持ちが途中で変わってしまったため
	児童本人	4	家庭復帰の方針を児童が拒否したため
地域関係機関との調整	警察	3	警察の捜査に対する見通しが得られなかった。捜査協力に時間を要した。
	家庭裁判所	4	家裁の調査官調査時に父母の主張が全く異なり長期化
	地域側からの受け入れ拒否	1	里親委託の交流が進んだ中で、里親沢の地域が受け入れに難色
家庭事情	転居	2	加害者との分離による県外転居を進めていたため。
	親族を含めた受け入れ体制	2	親族里親の援助方針に沿い、研修を受講してもらった必要があったため
その他	児童の行方不明	1	当該児童が行方不明になってしまった
	その他	3	援助方針は早く決定していたが、夏休み明けの家庭復帰方針だったため。

《考察》

選択肢 5 に続いて回答の多かったのが「その他」項目である。

結果は、上記のように択 1～16 までの選択肢に類似するものもあるが(たとえば児童や保護者の児相の方針への拒否等)、特に 1 から 16 までの選択肢では含有できない内容についていくつか簡潔に記載しておきたい。

まず、児童と保護者の健康・疾病を理由とする回答が 13 件あった。保護者の健康・疾病 6 ケースの中では入院中がもっとも多かった。これを明らかに退院後、児童が家庭復帰をするための条件整備の一つとしているケースが 4 ケースあったが、予定していたよりも長期の入院が必要となり、その時点で施設入所を検討はじめていたため一時保護が長期化する結果となっていた。児童側の健康・疾病は 7 ケース。一時保護中に発熱してしまったケースや、家庭復帰した後も希死念慮の懸念が消えず、病院側のベッドの空き状況も見ながらケースワークをすすめるを得ないケースもあった。担当児童福祉司による精神疾患や疾病による入退院の見極めも視野に入れたケースワークの困難性がここでも明らかとなっており、医療優先か福祉対応か、一時保護期間中の所内でのスーパーバイズ体制の重要性を示唆している回答であった。

里親委託の方針が決定していたが里親が体調不良となってしまう、その感に児童自身が不適切な行動を行い病院に入院となったため援助方針の変更となったケースがあった。

施設不調により一時保護した後、同施設に復帰した後、すぐに無断外泊・飲酒をして警察に保護され、あらためて児童の対応を一から検討するために一時保護が長期化しているケースもあった。こうした施設・里親の受け入れ不調等のケースが 7 件あった。

順調に里親交流を進めていた過程で、里親が生活している地域から児童の受け入れに反対が起こって苦慮したケースがあった。このケースの場合は同時に親族からの引き取りの意向が出されたため、改めての親族交流開始などに手間取り、一時保護が長期化していた。一方では、親族里親を条件として一時保護を解除する予定だったケースが親族里親になるための研修を受講して登録が完了するのを待つために一時保護が長期化したと回答したケースもあった。その他、転居等に伴う一時保護の長期化も 2 件あった。

4. 考察

4.1. 全国の長期化の現状

平成 30 年 6 月 1 日から 9 月 30 日の 4 ヶ月の間に、アンケート調査の回答のあった全国の児童相談所 200 箇所における一時保護解除件数は 12400 件で、そのうちの 1 割強に当たる 1652 件が二ヶ月を超えていた。児相単位でみると平均解除件数は 60.2 件、二ヶ月を超えた解除件数は 8.3 件であった。

4.2. 一時保護の長期化と育児を不利にする要因との関係―群間比較からの考察―

本調査は、一時保護された事例の中で二ヶ月を超えた 2 ヶ月超過群と、2 ヶ月以内の本来の保護期間の 2 ヶ月以下群を比較することで長期間に保護されることに影響する要因（一時保護時の親子・家庭の状況）を明らかにすることを目的として実施された。結果的に、一時保護期間が長期化するケースには、育児を不利にする複数の要因が関係していることが明らかとなった。

(1) 2 群における事例の特徴の比較

本調査で尋ねた要因というのは、個人の疾病や障害、家族の孤立といった育児を不利にする要因であり、社会からの支援が必要となる。以下、本調査で明らかとなった育児を不利にする要因と二ヶ月を超える一時保護期間との関係から考察する。

虐待は、虐待行為そのものが子どもに被害を与えるとともに、虐待行為が生じる家庭状況は、子どもの発達保障や子育て困難に対する問題解決といった機能が低下した状態にあると考えられる。検証の結果、一時保護時の相談理由では、女兒において「養護相談（虐待相談）」と関係があり、保護者の行為では、「ネグレクト」や女兒における「性的虐待」が関係している。

子どもの疾患や障害は、子育て困難と関係することが知られている。疾患や障害があることがそのまま子育て困難と結びつくわけではないが、リスク要因となる。検証の結果、二ヶ月を超えるケースでは「未熟児、低出生体重児」等いくつかの疾患・障害の状態は関係が見られている。そして、一時保護委託先が「医療機関」である場合が関連している。さらに、一時保護解除後の援助方針としては施設入所措置がとられている。保護者や家庭の状況はどうであろうか。養育者自身に疾患等があるということと子育てが不適切であるということは直接結びつかない。しかし、子育てを適切に行いたいと願う気持ちはあっても養育が十分にできなくなることがある。そうした場合、他の家族や親類、友人や近隣との付き合いといった公的ではないソーシャルサポートによって支えられることが多いが、そうしたサポートの欠如は、子育てにおけるリスクを高める。検証の結果、主たる養育者に「統合失調症やその疑い」があることや女兒において主たる養育者に「感情障害・うつ症状またはその疑い」があることが関係していた。また、一時保護開始時の家族の状況は、「狭いまたは劣悪な住居環境」・「親族・近隣・友人等からの孤立」といった複数の状況と関係が見られ、子育て困難のリスク要因との関係が強いと推察される。

このように、検証の結果は、二ヶ月超過が子育ての様々なリスク要因と正の関係にあることを示しており、調査対象とした一時保護期間が二ヶ月を超えるケースというのは、家庭状況も含めて不適切な子育てとなるリスクの高い困難ケース、社会支援の要求度が高いケースであるといえそうである。また、要因の性質としては、

児童側の要因、養育者の要因、環境との相互作用と多岐に渡っている。子どもや家族にとって、リスクが高いことや社会支援の要求度が高いということは、より質的に高く量的に多い支援が必要であることを意味する。しかし、こうした多様なリスク要因に対処しながら、子どもたちの利益が最善となるよう家庭を調整し、生活場所を確保し、生活支援を整えていくことは、容易ではないだろう。

(2) 2群における一時保護所に入った後の対応の比較

ケース進行には様々な経過があるが、二ヶ月を超える際には、どこで滞るのであろうか。今回の調査では、①一時保護の相談を受けてから一時保護するまでの期間、②児童福祉司もしくは児童相談所職員と保護者もしくは児童との初回面接までの期間、③保護者と児童の同意の取得、そして④援助方針の決定の時点を取り上げ、ケース進行の指標とした。また、補足情報として児童および保護者の同意の有無と二ヶ月超過との関係および面接回数を調べた。

検証の結果から考察する。まず保護者の同意の有無は二ヶ月超過と関連していたが、児童の同意の有無は関係なかった。そのため、③は保護者の同意取得を指標とした。①および②、つまりケースワークの初動は長期化の有無とは関係が見られなかった。差が見られたのは、③と④の指標であった。④の援助方針の決定については、図24に示したように少なくとも(a)比較的早い時期に援助方針が決まりながらも二ヶ月超過するケースと(b)援助方針の決定に二ヶ月以上を要するケースとが見られている。この2パターンにおいては、ケース進行における援助方針の決定の意味が異なると考えられる。こうしたことから、④援助方針の決定という指標は、複数の意味合いを持ち、ケース進行のタイムラインを考えたときにもケースによって位置づけが異なることから指標としてそのまま使用することは適切ではないと考えられた。次に③についてであるが、補足情報である保護者との面接回数は、2ヶ月超過群の方が明らかに多く行われていた。このことから、少なくとも保護者との接触そのものが行われていなかったために同意が得られなかったわけではないと推察される。結果的には、今回の調査においては、保護者の同意を得ることがケース進行の進度を左右する要因の一つとして考えられた。また面接そのものは通常以上に実施されていることも明らかとなり、解決のためには頻度以外の要因についての調査が必要である。

本調査ではケース進行の停滞を招くポイントを明らかにしようとした調査は計画されたが、ケース進行には異なるパターンがあることが推察された。今後の調査ではケース進行パターンを分けることのできる調査計画やそれに基づく分析が有効かもしれない。

(3) 2群における一時保護解除後の生活場所をめぐるケース進行の状況

一時保護解除後の生活場所は、その後の子どもたちの適応や発達保障をする上で重要である。選択肢があることは、多様な状態像を示す子どもや家庭へのより適切な支援へとつながる。本調査では、そうした解除後の生活場所へとつなぐケースワークの一端について明らかにしようとした。

一時保護解除後の生活場所として、今回は同一か否かについて検証した。同じである場合には、保護理由を解消するためのケースワークが必要であり、異なる場合にはその子どもや家族の状況に適した生活場所となる社会資源の選択が必要といったように、ケースワークのあり方が異なってくると考えられたからである。結果

としては、2ヶ月超過群では2ヶ月以下群と比べて生活場所を変えるケースの割合が多いことが明らかとなった。2ヶ月超過群のケースワークに要する期間がより短くなるためには、生活場所となる社会資源が必要である。(A)で明らかとなったように、2ヶ月超過群は育児のリスクが高い。生活場所となる場ではそうした状態に対して支援が可能となる必要がある。

次に生活場所となる社会資源である里親と施設の活用状況について、里親家庭の委託を打診した数と施設入所を打診した数を2ヶ月超過群と2ヶ月以下群間で比較して検討する。先に施設入所の打診数から検討する。3.3-(8)で一時保護解除後の援助方針として、2ヶ月超過群では施設入所措置の割合が高いことが示されている。施設入所の打診では、少なくとも10回以上の打診が複数ケースに見られている。また、里親と同様に0回、1回、複数回で分けて比較したところ打診回数は2ヶ月超過群の方が多かった。2ヶ月超過群では、施設入所措置が多く、かつ、入所のための施設を探すために2ヶ月以下群より多くの時間を要している実態が明らかになった。一方の里親家庭への打診では、5回が最大であり、0回、1回、複数回で分けて比較したが差はなかった。施設と比較したとき、里親が選択されないと言えるだろうか。もし里親が適切であると判断されているならば、施設と同様の打診回数のあるケースがあってもおかしくない。しかし、施設と比べて最大回数が少なく頭打ちであるように見える。ところで施設と比べて里親を社会的養育の資源として積極的に活用を始めてからまだ日は浅く、委託児童数も5190人（福祉行政報告例平成29年3月現在）と施設種別の1つである児童養護施設の17137人（同）と比べても少ない。こうした事実も合わせて考えるならば、今回群間で差が生じなかったのは、里親を活用していないのではなく、活用するだけの十分な数がない、体制そのものがまだ未成熟の段階にあると考える方が妥当ではないだろうか。

最後に家庭復帰したケースについて検討する。関係機関との連携状況を検討した。里親や施設のように生活場所を探すことはないため、地域への説明・調整の回数に着目した。検証の結果、2ヶ月超過群ではカンファレンスの開催そのものが多く、また回数もより多く行われていた。内容としても、関係機関にケースのことを説明することが多く、ケースワークとして多くの時間を要していることが明らかとなった。

4.3. 児童福祉司の視点から見た長期化の理由の検討—自由記述回答の質的分析からの考察—

質的分析の考察は、3.4.で行っているため、ここではそのポイントを抜粋して述べるに止める。

本調査では、2つの質的分析を行っている。一つは、①児童および保護者の同意を得るのに1ヶ月以上を要したカテゴリー分類し、2ヶ月超過群と2ヶ月以下群の違いを検証したものである。もう一つは、②一時保護期間が二ヶ月を超えた理由をカテゴリー分類して検証したもので、2ヶ月超過群のみで行っている。いずれも、ケースを担当した児童福祉司による回答をまとめている。

②においては、次の内容に関する記述が多く挙げられた。援助方針の決定までの時間、保護者の環境整備にかかる時間、施設入所に保護者の同意を得るための時間、入所予定施設側の事情によって必要となる時間の4つである。これに①で着目している、同意を得るための時間を加えて、大きく5つのポイントが一時保護期間の長期化に関与していると考えられている。

さらに特徴を分析したところ、2ヶ月超過群では、施設入所等の生活場所の変化に纏わる理由が多く挙げられていた。児童が今後の進路・生活についての不安・戸惑いを感じていること、転校、保護者が施設入所を拒

否していることといったことである。また、児童の疾患や障害に関連した理由も多く見られ、児童の入院・通院等の加療に時間を要している状況がある。また、保護者の面会・面接拒否等が、2ヶ月超過群では多く見られており、一時保護期間の長期化に影響すると考えられている。

4.4. 総合考察

本調査における検証の結果、二ヶ月を超える長期化には児童や養育者の特徴や対応プロセスの違いなどが複雑に関係していることが明らかになった。長期化する場合には、虐待状況（ネグレクトや性虐待等の割合が多く、虐待相談をしている）、子どもや親に心身の問題がある、深刻な家族状況（不安定な就労、ステップファミリー、社会的孤立、悪い住環境、頻回な転居、他のきょうだいの虐待被害、家族に精神障害や自殺行動のある人がいる）など子育てに不利な状況を生じていた。保護の開始や対応でも保護者の同意が難しいことが多く、そうしたプロセスも影響して、長期化してしまうことが示唆された。子どものリスク要因の解決をはかり、安全を確実にすることは、決定プロセスを丁寧に行うという意味では、慎重な判断をすることに意味があり、長期することがすべて問題とは言えないと思われた。その一方で一時保護は本来の安定した生活環境ではないので、一時保護所から次につなぐ環境へのつながりを行うソーシャルワークの機能を強化すること、時間のかかるリスク要因の改善をはかる長期プランと、とりあえず少しでもよい生活環境を提供する短期プランについて早期にバランスよく判断できるような仕組みが必要であると思われた。

4.5. まとめ

本調査からは、まず一時保護期間が二ヶ月を超過するケースは、育児に不利な要素をもつ困難ケースであることが明らかとなった。次に、ケース進行管理において、援助方針に対する保護者の同意が影響を与えていることが明確となった。最後に、二ヶ月を超過するケースでは生活場所の変更が必要なことも多く、施設入所など保護前と生活場所を変えることに関連する要因が長期化に影響を与えていた。

III. 研究メンバー一覧

調査研究メンバー一覧

森田 展彰 筑波大学医学医療系 准教授
笹井 敬子 全国児童相談所長会 会長 東京都児童相談センター 所長
川崎 二三彦 子どもの虹情報研修センター長
川松 亮 子どもの虹情報研修センター 研究部長
犬塚 峰子 大正大学 客員教授
大谷 保和 筑波大学医学医療系 助教
奥田 晃久 明星大学教育学部 特任教授
土橋 俊彦 世田谷区副参事 前神奈川県小田原児童相談所長
丹羽 健太郎 川口短期大学 専任講師
山口 玲子 筑波大学 研究員
大橋 洋綱 坂総合病院
田崎 みどり 横浜市中心児童相談所
鈴木 浩之 神奈川県中央児童相談所 虐待対策課長

オブザーバー

西尾 寿一 東京都児童相談センター 次長 全国児童相談所長会事務局長

研究協力者

田中 裕子 筑波大学 研究員
川井田 恭子 筑波大学 研究員
楊 楽 筑波大学 技術補佐員
パントー フランチェスコ 筑波大学 技術補佐員

平成30年度子ども・子育て支援推進調査研究事業の国庫補助協議

児童相談所の実態に関する調査

「職員の配置および人材育成体制の実態、通告された
ケースの実態および長期化した一時保護ケースの実態」

平成31年 3月

子ども・子育て支援推進調査研究事業国庫補助事業

主任研究者：筑波大学医学医療系
社会精神保健学准教授 森田 展彰

連絡先：筑波大学 TEL 029-853-3099
主任研究者 nobu-mori@umin.ac.jp